慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵天文十五年宗訊奥書「古今和歌集聞書<古聞>」並びに校勘記：本文篇
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro) 川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro) 石神, 秀美(Ishigami, Hidemi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1987
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.22 (1987.) ,p.264- 529
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000022-0264

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

財団法人 前田育徳会尊経閣文庫蔵 天文十五年宗訊奥書「古今和歌集聞書〈古聞〉」並びに校勘記 本文篇

平澤五郎
川上新一郎
石神秀美

目次

本文篇
凡例
底本
尊経閣文庫蔵「古今和歌集聞書」（外題） 13—35—書 天文十五年宗訊自筆加証奥書本 三冊 略称 底

（補一）京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞序」（外題）　中

（補二）九州大学文学部国語学国文学研究室蔵〔古今和歌集聞書〕付載御師説抄出　九

校異篇

凡例

校本

京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞」（外題）　中院VI69〔近世初〕写　三冊　中

東北大学附属図書館蔵「古今抄」（外題）　丁B124—16〔江戸前期〕写　三冊　東

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵〔古今和歌集聞書〕　国文別置79〔江戸中期〕写　三冊　九

国立公文書館内閣文庫蔵「古聞抄」（外題）　200—21〔江戸中期〕写　三冊　古

国立公文書館内閣文庫蔵「延五秘抄」（外題）　200—16〔江戸後期〕写　存仮名序・巻一～十五注　三冊　延

国立国会図書館蔵「古聞」（外題）　WA16—131〔江戸初期〕写　六冊　国

解題

＊校異篇は第二十三輯に掲載する。

凡例　本文篇

一、右記、底本併びに補編一・二の翻印は各原本の再現を期したが、以下に誌すごとき若干の補・改を施したところがある。

(イ)原本に見る旧体・異体字は現通行字体を以て統一することを原則としたが、一部異体字については全巻通じて略一貫性ある使用例を見出される場合にかぎり該字体をとどめることとした。即ち、

　　烋・哥・鴈・舩・珎・庸・軈・帋

　　等である。

(ロ)底本又補篇二の本文中にまま散見する見消ち補訂は両本に於ける単純な本文誤写の訂正として、その補正するところに準拠した。

　　但し、補篇一については次輯解題中に述べるごとくに、前者と同一視すべき見消ちとは想定されず、本文の改删経過の一端を提示するものとして該原本のままに再現することを期し、〻を傍記した。細字双行部分には当該部末尾に（ミセケチ）と表示した。

(ハ)底本又補篇一・二に付すところの声点は全て朱書するが、その旨は省略した。同時に、底本以下すべて転写本であり、その当該位置の確認・弁別は期しがたく、いわばその概ねを示唆すべく移点し再現したものにすぎない。

(ニ)猶、細註部分は略原本に従い、各小字一行又双行に掲示したが、此期の聞書類に多見する助辞・活用語尾の細字表記は稍〻もすれば統一を欠く処が尠くなく、従って極く一部を除き本文表記に準じた。

(ホ)底本に見る朱墨の付訓・音は屢〻本文同筆か否かの疑点が存し且つ誤読・誤訓等をも混ずる処が所見されるが、

既に識別も困難であり、繁辱な紙面となるのを惧れ其儘とした。

(ヘ)特に、本書播閲の便宜をはかり、敢て本文中に読点を多く施した。且つ、改行についても編者の意図的に更改する処がある。御諒恕されたい。又、原本に纔か散見する汚損箇所、明瞭な脱字等には、その相当字数を空格□符を以て示した。

(ト)各歌頭に付したのは、本集の国歌大観番号である。

二、校異篇凡例は次輯にあらため掲げるが、本篇の本文中にその校合箇所を示す三種の簽を傍記した。

(イ)、(1)・(2)の符印は対校諸本との間に於ける文脈中の叙述次第の異同を印すものである。

(ロ)、＊簽は同じく対校諸本に所見する本文異同箇処を示すものである。

(ハ)、※簽は底本本文中に存せず、他本中に看取される補入本文箇所である。

三、以上、本文篇凡例に於ける補・改の概要であるが、その他細部に関しては適宜なる御判断を願いたい。

猶補篇一・二の併載については次輯付載の解題を参照されたい。

本書翻印に当り、貴重なる御蔵書の載録につき御清諾賜った財団法人前田育徳会尊経閣文庫をはじめ京都大学附属図書館・九州大学文学部国語学国文学研究室に深謝の意を表する。

古今和哥集序聞書

やまとうたは人の心をたねとしてよろつのことの葉とそなれりける。※1

此一段和哥の大意也

和は此国の名也、哥は此国の風也、此国をやまとゝ名つくる事、伊弉諾伊弉冉尊天くたり給て、山海草木人倫等を生出給し後、此国なをあらひて水土未乾しかは、人は山にのみ住て、山を道とする故に、山の迹といふ義にて号する也、やまあとのあ文字を略したる也、まの字にあのひゝきあり、をのつから阿の字こもるへし、よむ時も山あと哥といふやうに心をもつへし、又山止とも書り、山にとゝまる心也、山迹の義通せり、抑、山は至誠の義也、志の厚く高きを云、是一切成就の根元也、哥は志のゆく所をのふる也、よろつのことわさの根元也

（一行空白）

又云、やまと哥といふに、大和く義あり、大は小対する大あらす、古より今に及ふ和を大と称す、遠く及ふ心也、二神陰陽の和、今*1にをよほす義也、尽乾坤一切万物及和也、和哥是也、又云、大は三国及ふ大也、其故は天竺の梵字を漢字うつし、漢字を和字にてのふる也、和字の哥をもて、陀羅尼の心、漢字の詩をもしる、四十七字の和字をもて其心をのへしる事、此道の奥意也、やまとの事、山迹の義を本とす、大和の義も通すへし、当流通し用る也

人の心をたねとして*2

詩在レ心為レ志云々、心にあるとは、心にうこく也、世界弥論*3したる事、心に動也、世界と我身と相対す、世界ある哥、心にうこく也、心に動く所を言いつる

を、哥といへる也、たとへは、天地の寒温を身心にうくるかことし、又云、人の心を種とするといふは、天地開したちまちに一気起て、葦芽のことしといへる所也、天神七代以前をいふへし、一切万物の根元也、こゝをさして、人の心をたねとすといふ也、根本[*1]の一念より出来て、無始より今日いたり終劫に及へき也、是人の心也

よろつのことの葉とそなれりける[*2]

物々に託してなる心也、一二を生し三万物を生の心也世中にある人〻いひ出せる也　一段也

真名序、人之在レ世不レ能二無為一思慮易レ遷云々、此心也、無為は大道也、人の世となりて、味をなめ、黒白分別出来より、君臣父子朋友の道まて、ことわさならすといふ事なし、行住坐臥みなおなしことわさあれは心に思ふ事あり、されは見聞につけていひいたす也

花に鳴うくひす水にすむ蛙の〻よまさりける　一段也

物に託し、事にふれて哥を詠する事、人倫のみにあらす、花中の鶯、水底の蛙もみな此理あり

詩正義曰、哀楽之起宜二於自然一、喜怒之端非レ由二人事一、故燕雀表二啁噍之感一、鸞鳳在二歌舞之容一云々

喜怒哀楽の性ある物はみな如此、天地の気に応して春花に鶯鳴、春水に蛙の声するも自然の理也、一切の禽獣も同かるへし、又花も水も詠哥の理ありといふへし、花の心は色にいて、水の心はこゑにあらはるゝ也、時に感して色を変し声をあらたむる心あり、鶯蛙をとり分て云出事は、春色をえて其心をしる事、此二をさきとする故也

ちからをもいれすして〻なくさむるは哥也　此一段は哥の徳也

此心に事理の両義あり、動天地事、能因法師、苗代水にせきくたせとよみて、雨のくたりしなとは事の義也、天は地に対してあり、地は天によてあり、人は天地に対す同様[*4]の理也、天地我を開き、我天地をひら

く、天地人の三は別にあらす、故[*1]心に動く処、すなはち天地をうこかす也、一首の哥を詠するも、天地を胸中にうこかす也、是理也

めにみえぬ鬼神をも

鬼神とは賢聖のたましゐ也、惣ては人々のたましゐ也、神は心也、哥を詠するに、心の感動する、すなはち鬼神をあはれと思はする也、此道に入て、邪をすて正に帰し、仁をもつはらとする所をさゝへて、鬼神を感せしむるといへり、是理の義也、天照太神住吉玉津嶋等の擁護ある道なれは、感応あるへき事勿論也、両神も日神の化現にておはします也、又諸神も心の外に出へからす、畢竟一心の上をはなるへからす、伊賀国に鬼の人を損する事有し時、土(草イ)も木もわか大君の国なれは、いつくか鬼のすみかなるへき、とよみて其事やみたりといへる事もあり[※1]

おとこをんなの中をも

二神のことわさよりはしめて、其ためしおほかるへし、又事理の両義まてもなしと云々

たけきものゝふの

かつらきの大君のいかりを、うねめの一首にてやはらけたる事なとなるへし、是事也、ものゝふとは干戈を帯する者にかきらす、心の強情なるを云り、和哥は胸中のものゝふをやはらくる也、笑裏に刀をかくすといふ類、みな心のものゝふなるへし、是理也、以上哥の徳也

このうたあめつちの、〳〵いてきにけり　一段也

言にあらはるゝ哥のおこり也、天地開闢二神の和よりはしまる事也、其哥末に注す

あまのうきはしのしたにて

天浮橋とは道の通する処を云り、此古注につきて説々あり、二条家には貫之注すと用也、くはしくいはむために此注を書て、女の内侍にあたへたると云々、抑六義の注に、山桜あくまて色をみつる哉の哥、貫之[*2]時代相違すといふ説あり、此哥は平兼盛作也、後撰作者也、

然而貫之承平[*1]まて有し人にて此哥を注せるなるへし、此時兼盛若年なるへけれとも、道にかなふ哥なる故ニ用之也、又云、山桜の哥清慎公の作也、古注は公任卿筆云々、此哥は清慎公の家にて兼盛よめる也、続古今ニみゆ、二条家のをしへは貫之を別して仰く故ニ、公任卿の書加といふ事をはゝかりて不用之也、為家卿明疑キ抄にも貫之古注也、山桜哥兼盛云々、此定なるへし、此注を古注と号する事、此注よりさきに古今の注なかりし故にやと云々、又は小注とも用る也

めかみおかみと

二神はしめてよみまします哥也

憙哉遇ニ可美少男ニ焉[*2]、陽神先唱テ曰、憙哉遇ヌ可美少ヲトメニ焉[*3]　日本記(ママ)

しかあれとも世につたはることは、〳〵おこりける[*4]　一段也

しかあれともとは、二神の御哥はあれとも、大道にして人の心及かたけれは、下てる姫の哥をのせたる也

久かたのあめにしては

神代の事なれとも、すこしちかきをもて下照姫の哥を出す也

したてる姫の哥、あもなるや　をと織女の　うなかせる　玉のみすまるの　あなたまはやみ　たにふたわたらす　あちすきたかひこね

したてるひめとは

天照御神の皇孫を下して此国の主とせんとて、天稚彦を使として下給しに、下照姫と契をなして、天ニ帰給はす、つゐに矢にあたりてうせ給ぬ、其後下照姫と味アヂ耜高ヒコネと天稚彦の喪の時、天ニのぼりての哥也、味耜のかたちをほめ給也、天稚彦下照姫味耜〳〵みな素戔烏尊の御孫也

をかたにゝうつりて

其かたち丘谷にうつりてかゝやくとは、みめかたちのよき心也、をか谷とは高下の義也、いたらぬかたもなき心也

えひす哥

夷曲也、ひなうたといふ心也、日神の天の宮に対すれは、此界はえひす[*1]とよめる[*2]也、天上にての哥なれとも、地祇神なれは夷曲といへり

これらはもしのかすも定らす

下照姫の哥も、猶以文字も不定哥のやうにもなしと也

あらかねのつち[*3]にしては

地祇神の哥のはしめをいふ、八雲たつの哥の事也

ちはやふる神世には〻一もしはよみける　一段也

二神詠、下照姫哥等の事也、文字のさたまらぬ事、古注ニ見えたりといへとも重説にはあらす、注は後に書る故也

すなほにして〻[*4]

すくにして理[※1]あきらかならさる心也

人の世となりて

人の世といひてすさ[*5]のをのみことゝ書る心は、此尊の卅一字の詠をはしめとして、人の世の哥はこれにもとつくといふ義也

（一行空白）

又八雲[*6]たつの哥よりさきにも卅一字の哥ありし、といふ説あり、但不分明にや

すさのをのみことは

このかみとは一女三男にて、すさのをは弟にてましませとも、男を上とする故に、系図にも女を後にする也、古語拾貴[*7]并日本記(ママ)日神月神最後生ニ素戔烏一云〻

又云、素戔烏尊つゐに天照太神にしたかひ給て後、日神を思給ふ心このかみ心とて、兄のことくおほしめしける心也[*8]云〻

女とすみ給はんとて

此国をたいらけて後、出雲国にして稲田姫と住給はんとて宮つくりし給へる也、此国に鎮座有し時をいへり

時にその所に八色の雲の

此時瑞雲のたちけるを御覧しての詠也、其人に感して瑞雲のたつ事有例、此雲は元来此国にたちたる也、さ

れは世のことわさに出雲と号たり、時に其所にといへる相違するやう也、所詮素戔烏尊の此所に住給はんとする時も、又此瑞雲のたちけるなるへし、八色は色々なる雲也[*1]

八雲たつ

第一第二句はかさね詞也、此所のさまをおほやうにいひいたす也、つまこめは稲田姫をすへんために宮を経営の心也[*2]

やへかきつくる

ねん比にする心也

そのやへかきを

とは、又ねんころにいへる也、をろそかにすなとをしへたるやうなる心也、又、古哥には如此かへしていへるあり[*3]、さくや此花の哥、あし引の山のしつくに君まつとの哥なとのことし、八色の雲は、八識にたとふる也、五句なるは五行也、八識五行成就したるは、一身をとゝのへ世を興隆する義也、出雲国ニ蛇の人を損する事ありて、人も住かたかりしをみことたいらけ給て、人民やすき事をえたり、日本記[ママ]の説に、此哥に四妙をたてたり、字妙、句妙、意妙、始終妙也、字妙とは卅一字にして、末代までの哥の根元となる妙也、句妙は神代の哥なから五句にして五行にかなへる也、意妙は上古の哥といへとも其心もあきらかなる也、始終妙は此哥を始として万代不窮に不可断絶之義也、此哥に清濁の口伝あり、はしめにある八重垣のかもしをはすみ、下句のかもしをは、二なから濁へし、天地上下の清濁にかたとる也、素戔烏尊は此国に配し奉り給て地神たりといへとも、日神の御弟なれは天地かけたる神にてまします也、日神と和し給て後の事なれは、よろこひの哥なるへし、卅一字を用来る事も此義也、此哥神道家に有口伝云々、京極黄門も伝受給也、此哥斗を注したるは、神世の哥は其心分かたしといへる義也、かくてそ花をめて〻〻なりにける　一段也

すさのをのみことの卅一字詠より、哥の道万端さま

〳〵になれるよし也、又は天地の開しよりをいふと云〻

鳥をうらみや　愛したる也

霞をあはれひ　興したる心也※1

露をかなしふ　感したる也、露はことに哀なる物也

以上人の心のさま〳〵なる情也※2

遠き所も、〻如此なるへし　一段也

千里の行*2も足下よりはしまり、高山も微塵*3よりおこる、哥の道最初より次第に興感*4のたとへ也、ちりは六塵也、一気をうけて人身となる心あり、ちりいんちとよむへしと云〻※3

（一行空白）

難波津の哥は　さくやこの花の哥の事也

おほさゝきのみかと*5

仁徳御事也、さゝきとは小鳥の名也、此御門御たけちいさくおはしましけるにやと云〻

東宮をたかひにゆつりて*6

応神天皇崩御の時、宇治*7のわかいつ（ママ）らこと申みこに御世をゆつり給けるに、仁徳は兄にてましましけれは、それにをそれて宇治のみこ辞し給き、仁徳は又御ゆつりにあらねはつき*8給はて、三年までになりぬ、国のさゝけ物もくちうせて民のうれへたり、こゝに宇治のみこ神変をもてかくれ給ぬ、其後仁徳猶即位なかりき、時に王仁といふ高麗人の仁徳をいさめ*9たてまつる哥也、王仁は日本の文道の師のためにわたれり、応神御時来朝せしにや、仁徳の御師たる歟云〻、異国の人和哥をもていさめ申事殊勝の理也、此国にしたかひたる心也、此国に来りときたるもの国の風にしたかふ義也、かた岡山のこと葉も此類なるへし

いふかりおもつて　心もとなく思也、かくてはいかゝなとの心なるへし

この花は、〻

此花はといへり、木の花といふ説あり、異説也、明疑抄にも此説あり、如何、此時の哥、難波津に、〻難波津とはよろつ（万民）*10のあつまる所の心*11、第一第二句はまつ大

やうにいひいたす句也、此時のさま也、冬こもりとは、仁徳の難波にこもりましくて位につき給はぬ心也、冬は空劫也、宇治のみこをは冬にたとへ奉る、今は春へと、冬去て春の主となる理也、仁徳の世を知給へき時也、さくやこの花とは、世をたもち給てなみ風をおさめ百性(ママ)のうれへをやめ、もえ出る春になして、民心のきさしをふくむをめくみ給へと也

あさか山のことはゝ　よみて、よんてとよむへし

かつらきのおほきみを　橘諸兄事也

陸奥に国司ありけれと、猶おたやかならぬ事あるゆへに、かさねておほきみをくたされけるに、国司をろそかにありけれは、王のすさましく思ける時、うねめのかはらけとり銚子に水を入て、おほきみのひさをたゝきて、この哥をよみてなためける也、万葉にみゆ※1

あさか山かけさへみゆる

此哥をよみける也、かけさへみゆるとは、高山の影もうつる程深き水といへる也、あさき水には物の影のうつる事なし、されはあさくは思ひたてまつらすといはむために影さへみゆるとよめる也、大*1かた山の井はあさき物也、此山井は深きなるへし、うちみるにあさきやうなれとも、まことは深き水なるを、国司の心にたとへてよめり、君をゝろそかには思たてまつらねとも、都遠きさかひのならひなれは、自然にさもやみゆらんなとなためたる心也

此哥嘉禄冷泉家伝本にはこゝに書入たり、貞応二条家本には無之、嘉禄の本の心は、此二哥之内、難波津の哥は六義の所にみえたり、此哥あらはれさる故に注之義也、貞応本の心は、此二哥をはいつれもあらはさす、世にあまねくしれる故也、難波津の哥六義の所に出せるを、こゝに兼用む事無其理、しかれはあさか山の哥はかりを書あらはすへきにあらすと也、又云、嘉禄本にもはしめはなかりしを為相卿被書加云々、或は京極黄門書入給云々、又は彼筆をにせたりともいへり

後光厳院御代、冷泉家此哥を追書入之由、為明被二訴(ウタヘ)

申ニ事あり云々

このふた哥は、〳〵

*1 此哥父母と云事定れる義なき故ニ、やうにてとかける也、昔は手ならひなとにも此二哥を書てならはせけるとみゆ、哥の父母とは神代の哥なとをいふへけれとも、徳あらはれし哥をもて此両首を出せる也、難波津の哥は仁徳未即位天下難義なりしを、此哥にて王道をたすけたる事、尤大徳なれは出之也、浅香山哥も此一首にて、彼大君の心を和*2する徳あり、両首徳の至りたる哥也、男女の両首父母といへるに縁あり、哥の父母と云につきて、父母の子を思心の浅深に相当す、父の思は尤ふかし、其子の身をたて家を保へき事までを思也、母は時にあたりたる愛のみにて深く思ふやうなれとも、其(ママ)*3深の理に及はす、仍王仁の詠は天下のためとなる、采女の作はかりのいかりをやはらく、一国の事也、以上人の心を種としてといふより、次第ニ道ひろく徳のいたる事をいへる也※1

*4 そも〳〵哥のさま六也、〳〵

品を定るは法度也、六義を出して詩を類にひける也、天然和哥に六義の理あり、詩を借ていふにあらす、是義勢也

そのむくさのひとつにはそへうた

そへ哥はおもてにあらはれす、風の物にふれてみゆることく、物によそへてよめる心をみする也、*5そへうたと声をいへり、それもよそふる心はおなしきにや

一曰風也、風也教也、風以動レ之教以化レ之云々、*6詩序*7ノニ曰、上以風化レ下、下以風刺レ上、〳〵注云、風化風刺皆謂ニ譬喩ニ不レ斥レ言也云々、譬喩とは諷する事をあらはにいはぬ也、風化風刺共ニ風に草木のなひくたとへあり

おほさゝきの御門をそへたてまつれる哥　よそへ奉る也

難波津にさくや此花　前に注す

此哥風によくかなへる故に、注にも子細なき也、周詩

ノ六義には種々義ありて、或は経漳[*1]といひ或は躰用と分[*2]なとせり、風にして興を具するもあり、其様すこし本朝に異あり、又義通する説あり

ふたつにはかそへうた

あり事をたゝちにかそへいふ也、たとふるにあらす、

二曰賦也、量也、称也、又は舗也、をきならへたるやうにいふ心也、量はかそへいふ心同之、称も量の心と同にや、又云称とははかる心と云々、とちむるやう也、凡政のよきあしきをいふ也、草木禽獣の事をかそへいふ事もあり

詩第一国風詩曰、蔽芾甘棠勿レ剪　勿レ伐　召伯所レ茇　茇草舎也、是風詩にして賦也

さく花におもひつく身の

花と身とをかそへあけてよめる也、身にいたつきのとは、いたましき事の身にいるをもしらすと也、花に貪して時日をうつし、身にいたつかはしき事のあるをも、亡したる事をかへりみたる心也、如此事花のみにもかきるへからす、此心称字の義也云々、此哥事をすくめにいふ所賦にあたれり、或説、つくみといふ鳥をたち入てよめると云々、六義の用にたゝさる説也

これはたゝ事にいひて、〻此詞はかそへ哥の様を注する也

此哥いかにいへるにか、〻

さく花の哥、賦に十分にあたらぬかのよし也、注者の心はかりかたし、さく花の哥も賦にあたれりとみゆと云々

いつゝにたゝこと哥といへるなむ、〻

雅に出せる、いつはりのなき世なりせはの哥、賦にかなふへしと也、人の事わか心をいひ人のことはの詞のいつはりをかそへいふ、量字の心也、いかはかり人のことのはうれしからましといへるもはかる心、称字の義にや、此両首を相ならふるに、哥のさまにおひては、さく花の哥匂ひありて、偽の哥よりはまさるへしとそ

みつにはなすらへ哥

比也、彼物をもて此物にたとふる也、あやまりをさしていはすして比類をとりていふ也、比は方也、并也、類也、類を取て失を言、似レ有レ所レ懼、云々

君にけさ朝の霜の

霜のをくと起るとをなすらへて、消やわたらんといふ詞も相兼たり、霜のきゆる事に我心を比したる也、比のおもむきさま〳〵なるへし、此哥取レ類言レ失之心にはあたらす、*1ならふる心は相当すへし

これは物にもなすらへて、

比の哥の注也、此注の詞を物にもなすらへすしての心に用て、君にけさの哥の心を注したるといふ説あり、此哥取レ類言*2レ失いふ心にかなはさる故ニ此義をいへるにや、当流不用之、所詮物にもなすらへてそれかやうにあるとやうにいふ也とは、比の哥のおもむきを注する詞也、*3さるにとりて物にもなすらへてとある、もの字、心えかたきやう也、それは前の賦の哥の注に物にたとへなともせぬ物也、とかきたるをうけて、物にもなすらへてとかける也、これはとある詞五段にあり、いつれも賦比興等の注也、哥を批判したる所なし

この哥よくかなへりともみえす

たらちめのおやのかふこの

此哥取類によくあたれり、たらちめのおやはかふこといはんため也、かひこのまゆにこもりたるさまは、中のゆかしくおほつかなき心あり、そのことくいもにあはすしておほつかなきよし也、又は養在深窓なといへる人を思ふ心にたとへよめると云々、君にけさの哥も比にはあたれる也

詩第三碩*4人段曰、碩人其傾、〻手如ニ柔茅一膚如ニ凝脂一領如ニ蝤蠐一歯如レ瓠犀一螓首蛾眉、〻是風にして比也

よつにはたとへ哥

興也、比はあらはに、興はかくるとなり、みるところの興をおもてにいひ出して懐はかくれたる也、ほむへき事なとをあらはにいはすして、たとへをとりていふ

也、嫌ニ於媚諛一也云々、人を直ニほむる事へつらへるにたるをはゝかる心也、漢の先儒はみな興字を側声とす、たとふる心也、宋儒は平声とす、起と用也、所詮心をおこすといふも、たとふる心あるよりの事なれは畢竟同意也、抑興は風に似たり、然而風は風化風刺するをもつはらとす、興には其心なし、又興詩にも政をほめそしる心もあるへけれとも、まつおもてにたてたる所差別ありと云々、興と風と相似たりといへとも、風はふかくかくれ、興はすこしかくるゝ也、風比興の三は皆物に託する也

我か恋はよむともつきし

此哥たとへたる所は興にあたれり、興に乗する躰はなきにや

これはよろつの草木鳥獣に、〳〵興の心を注する也

此哥はかくれたる所なむなき

興はかくるゝ躰あり、しかるに此哥かくれたる所なしと也

されとはしめのそへ哥と、〳〵

我恋の哥を出したる心の注也、風も興も共にかくれたる躰也、風と興との差別あらんために、わか恋の哥を出したる也

すこしさまをかへたる

とは、我恋の哥も興にあたるへけれとも、猶未十分を入たる心也

すまのあまのしほやく煙

わか思ふ人の外へなるさまをたとへたる也、かくれたるたとへ也、そへ哥よりは又すこしあらはに心得らるゝ哥也、興によくあたれり、おもしろき方もありと云々、風は外物に託す、興も外物による、比は類をとる也、風はいたりて深心也、興は風よりは浅し、比は興よりはあらはも也、此差別猶可思惟云々

第一関雎詩ニ関々雎鳩在ニ于河洲一

第五淇奥詩ニ瞻ニ彼淇奥一緑竹猗々

是風にして興なり

いつゝにはたゝこと哥　雅也

雅は正也、素也、正はたゝしき也、政をたゝしくいふ也、素はあきらかなる也、淳素の心もあり、雅は賦ニ相似たるやうなれとも、賦は政の善悪をかそへいふ也、雅はまつりことをたゝしくありめにいふ也

いつはりのなき世なりせは　此哥は雅ニあたらさる也

これはことのとゝのほり、〻雅の躰を注する詞也

とめ哥とやいふへからん

正にあらぬよし也、たゝことにいふのみにて雅にあたらすとなり、とめ哥とは墨なとのうすきを筆にてとむるやうの心也、家注同

山さくらあくまて色を

雅の哥の正中也、よく相当す、此哥の作者の事、前に注す

詩には正雅、変雅なといへり、変雅は政の廃たる処也、又大雅小雅あり

第十六大雅詩、文王在レ上於昭ニ于天一在レ上在ニ民上一也

周雖ニ旧邦一其命維新　是大雅躰也

第九小雅詩、呦〻鹿鳴食ニ野之苹一

是雅にして風躰を兼たり

むつにはいはひ哥　頌也

頌は容也、誦也、容とは王者の盛徳をかたとり出してほむる也、誦は歌ひあくる也、ひろめてほむる心也、頌の詩は宗廟にて誦して神に告也、世をほめて神につくる也といへる此心也

此とのはむへもとみけり

此哥も頌ニあたると用る也、さきくさは檜木の異名也、又は家の惣名と云説あり、三は四はとは棟なとのおほきさま也、さきくさの縁にて三は四はとよめり[*1]

これは世をほめて、〻頌の心を注する詞也

かすか野にわかなつみつゝ

此哥よく相当也、頌の心勿論也、又此殿の哥も頌ニかなふへし、祝の心つよけれは、神に告る心もをのつから有へしとそ

第十九周頌[*1]清廟詩　清廟祀ニ文王ヲ也

於穆清廟肅雍顯相

おほよそむくさにわかれん事は、

いつれの哥も六義ニはなれたるはあるへからすと也、貫之注之、当流義也、又説、六義ニよく分別せむ事ありかたき事也云々、小注の作者の心にや、此義貫之をもとくやうなれは有憚、ゆへに不用之也、尤貫之を仰きたとふる故也、又たとへ後人の注なりとも、難分別之由は卑下の心なるへけれは、はゝかりあるへからす、然而二条家には猶以先哲をもとく理にみる人もあるへき所をはゝかりて、不用之也、但貫之も謙してかける詞たるへしと云々、又、本に出せる六義の哥も、貫之あやまりたるにはあるへからす、聖人作して賢人述すといふ事あれは、先大躰を出すのみなるへし、後生にても相当したる哥を注せん事、貫之の心にもそむくへからさる理也、凡六義いつれも政のためならすといふ事なし、哥の道上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目におつるのみにはあるへからす、尤世をおさめ[*2]身をたもつへき道也、六義之中、雅を執する事あり、正しき道を本とする理也、周詩ニ思无邪を用る同心也、畢竟此義を肝心とす、当流の心也、詩六義ニ次第をたつる理あり、和哥ニ異なり、

いまの世中色につき、

なりにたり

なりんたりとよむ[*3]也、人の心もおとろへ来たりて、教誡の道とも用ぬ時よりの事をいへり、此段古の事をいはむために、今の世の事をいふ也、抑哥の道、此国の風俗として世々にたえす、殊ニ持統文武御時、人丸合躰にして盛なりしより以来、理世撫民の道たりしに、今の世は色につき花にのみ成て古のことく用る事なしと也、巧言令色鮮矣仁の心也、しかるに当代の又道をおこしまし[ます]心をいはむため也

色[*4]につきとは

あたなる哥　とは実ならぬ也

はかなき事のみ　思慮もなき心也、されは哥もはかな

き也

色このみの家に[*1]、〻

埋木は人しれぬといはむ枕言也、しる人なしと也、好色の家には、此道の実ある事をしらすなりぬと也

まめなる所には

実ある所には又実のみにて和したるかたなしと也、此道花実いつれもかけてはよろしからす、質勝文則野、〻といふかことし、花すゝきはほにいたすへきといはんため也、又説、まめなる所[*2]には実なる人あれとも、此時は用にたちかたき心にて、巻て懐にする義也

（一行空白）

そのはしめを思へは

上古以来代々の御門此道を用給事、今の世のことくはなかりしと也、いにしへの代々の御門といふうちに、当代延喜の事をこめたり、又むかしのことくましますかゝるへくなむあらぬ

いにしへの代々の御門とつゝけてよむ也、又かゝるへくなむあらぬ、とよみきるともいへり

秋の月の夜ことに

殊也、当流用之、但(1)をき字のやうに心うへし、よみやうに故実あり、こと(2)にとは近臣なと也、毎夜と用る説ありと云々、不用之

あるは花をそふとて、〻

花をそふとは尋る心也、此段上古有道之躰也

さかしをろかなりと

臣の心をはかりしろしめす事かたき故也、哥をたてまつる人々のさま〳〵をいへり、よろつさしむきたる趣を本とすへし、諸人又如此なるへし、花を尋るにも思よらぬ所をおもひ、入月[*3]を賞するにも明石さらしなの外をとのみ思よれるは、よこ入たる性也、道の心にかなはす、詠哥にも此理あるへし、是をもて人の賢愚をしろしめすと也、道ある御代の様を云り

（二行空白）

歌人の心は情欲をはなれて執をとゝめす、花月に対しても、当一念〳〵の景を愛すへき也、もろこしにも、国〻より学士のほりて詩賦を試事有て、官職にあつかる也

しかあるのみにあらす、〳〵

君の臣の性をしろしめすのみならす、臣も又此理あり、物〻にことの心をわきまへしるよし也、以下みな哥人のさま也、つくは山、はの字すみてよむ也、此処にかきると云〻

さゝれ石に、〳〵

以下みな此集の哥に此心あり、かならすその哥の事をいふにはあらす

君をねかひ　とは千年万代をねかふ心也

よろこひ身にすき　君の代をねかふ徳にて、悦の身にあまる理あり

たのしひ　たのしみとよむ也

ふしの煙によそへて

人をこふるには、をよひなき高山によそへても思ふ事をいへり

松虫のねに

富士煙、松虫のね、大小を対する詞也、友を忍ふには松虫のこゑなとにも思をそふる也、あれたる宿なとのさまなるへし

高砂すみの江の松も

山海の名所を対す、あひをひとは相遂也、たかひにをひすかひなるやうにと也、平等に思ふ理也、名木を愛する心也、哥人の心物によせておもひをのふるよし也、以下可工夫云〻、師説

おとこ山のむかしを、〳〵

男山の女郎花墓の上より生る事あり、と云説をは嫌道也、我もむかしはとよみ、あなこと〳〵しなとある哥の心をもて云り、しかれとも自面は惣しての理也、男山のむかしを思ふとはおとことといふのみ也、おとことは人〻むかしを思ひいつれは、何事も昨日の夢になり

ぬ、此理を思ふ也、女郎花の一時をくねるとは、をみなへしを弄する心也、仮令あなかしかまし花も一時なといふも、弄したる心也、くねるとは違する心あり、そむく心もあり、一時そなといひおとすはたかふ心也、女によそへていへり、又説、おとこ山女郎花といへるは文章の対也、男女の心也、むかしを思出てとは、夫婦のかたらひも一時のさかり過昔と成ぬれは、いたつらなるよしを観し思ふ心也、古哥をもおもひ新哥をも詠して、此理をなくさむる也、是哥人の徳なるへし、さゝれ石にたとへ、つくは山にかけてといへるより、みな哥人のさま也、畢竟して一時をくねるにもとかける也

又春のあしたに

又とは、前の事に対して、世のことわさを巨細にいへる也、花のちるを見といふより、よしの川をひきてとあるまては、みな此集の中の哥をもてかけり、しかも自面は世のことわさをいふ也、飛花落葉をみては誰か常住の思をなさむと観する也

年ごと[*1]に鏡のかけに、〜

はなやかなりしかたちもおとろへゆけはたのむへき方なき身を観する也

草の露水のあはを、〜きえをまつまの程なき事をよそへ思ふ也

きのふはさかへをこりて[*2]、〜

盛者必衰の理を思ふには、したしかりしかうとくなるをも必歎へきにもあらぬ心也

松山[*3]の浪をかけ　此世後世と契れる中も、はやくうつろへる事を思なり

野中の水をくみ　もとの心をしる人そくむの心也、うとかりし人の、又むつましくなる事も世間のならひ也、みな世中のさま也

秋萩の下葉をなかめ　うつろふ草葉[*4]につけてひとりある人の物思へるなとを、さこそと思やりて、あはれをかくる心也

暁の鳴の　こぬ夜のかすのつもりゆくも、たゝ我から
の事[*1]と思て、人をうらむへき世もなき心也
くれ竹[*2]の　世のうきふしをしる人なとにかたりて、思
をのふる心也
よしの川をひきて
はねをならへ枝をかはす契と云も、みなおとろふるは
てを、よしや世の中と恨すてたるなるへし、又説、う
らみきつるといふも、なくさめきつるといふも同心[*3]
也、うらむるも心をなくさむる也
いまはふしの山も
煙たゝすとは煙不断也当流義、富士の煙むかしは立時
もあり、たゝぬおりもありしにや、其を世の人の思あ
る時はたち、思のなき時はたゝぬやうによそへ思し
也、今は彼煙の不断にあれは、人の思にくらへんさま
ならすと也、人の思は不断なる事ならねは也、されは
なくさめかたきよし也、思のたくひに成かたき心也
なからの橋も
つくるは造也、なからの橋も今は作るなれは、古ぬる
身のたとへにもならぬ心也、誹諧部にては尽ル也、前
に注す
哥にのみそ
煙も橋も思をなくさめかたき故ニ哥をもて心をなくさ
むるよし也、恨きつるとはなくさめぬる也、しかれと
も煙橋のさま、世中の思をなくさめかたきには、哥を
もてなくさむると也、哥はさらになき物を胸中につく
り出す物なれは、よろつの思をなくさむる便也
一説云、上の詞にうらみきつるとは実にうらむる也、
煙不断なるとは、彼山の煙のおもしろき興[*4]也、なから
の橋の古ぬると[*5]思しも、又造なれは道ある世となる心
也、うらみきつる心も今はなくさむへきと也、哥にの
みといへるも煙橋を翫ふ心也、おもしろき説也と云ヘ、
当流にも用之也
抑、不立不断両説、二条冷泉家各別也、冷家には不立
の義を用、煙のたゝされは思をなくさめかたき心也、

橋を作ル事は両家同義也、不立不断につきて口伝等ありと云々、凡富士の煙のたえたりとよめる哥は、万葉にもみえさるにや、先此集にも思をつねにするかなるとよみ、神たにけたぬなとあり、序には大略哥の心をもてかけり、尤支証たるへきにや

※1 いにしへよりかくつたはる〻

ならの御時、文武天皇京極黄門注也、此ならの御門事、古来難義とす、或は平城大同天子の御門と申、是は醍醐まて十代と勘合する説なるへし、顕昭等用此義云々、人丸合躰の時に相違す、又万葉被撰之代にあらす、或人云、顕昭なと此説を用事不審也、所存別に有けるにやと云々、真名序ニ平城天子と書るをは当流にはならのみかとゝよむ也、或はならのみかとゝは、聖武の御事と云、万葉をえらひ給し御門なれはにや、大方聖武の御事と心得侍り、奈良七代は元明和銅三年ニ和州平ノ城ニうつり給しより光仁まて七代也、桓武ニ此京ニ遷都ありき、聖武をならの御門と申は、七代の中にも他にことなる御門にて仏法をも興隆ましく、東大寺等御建立あり、哥道又盛也し故に、とりわき称し奉り来る也、万葉集えらはれし時のやうにみえたれは、聖武の御事をならの御門と書たるとみゆ、しかれ共当流不用之、此事口伝あるへしと云々、当流にならの御門を文武と用るは元明の前一代なれは准しての義也、是一説也

*2 文武開テニ奈良宮ノニ而帰リニ藤原宮ノニ給、重用テニ奈良宮ノニ云々、

後常(ママ)恩寺殿注

又ふりにし事をならと号する理也、仮令とをき事をは神代ならねとも、神世なといふ類也当流用之

かのおほん時に〻

おほきみつの位、正三位也、柿本は性(ママ)也*3

(一行空白)

人丸は文武の帝師として君臣合躰の哥聖なり、聖武の御時と申かたし、故ニ定家卿文武天皇と被注早※2、龍田河の行幸時、おなし心の哥を人丸つかふまつりし事もあり、人丸は持統より聖武まて五代つかへし人といへ

り、しかれとも、帝師として尤哥道盛なりし事は、文武の御宇なるへし、ならの御門を俊成卿古来風躰抄に、聖武御事也、大仏つくり給御門と云々、此事定家卿の心に相違せり、仍三品の作にてなきよし被申き、定家所存あるへし、すへて父子なから心のかはる事あり、三品はおほやうにして、黄門はねん比なる事ありき、猿沢池にて、わきもこかねくたれかみを、と人丸のよみしといふ事、万葉[*1]にみえす、如何と云々

秋の夕たつた川に　文武龍田川行幸時の御製也

春のあしたよし野ゝ、同行幸の時、人丸みむろの山に時雨ふるらしの哥を詠す、しかれとも、其哥の事をはいはすして吉野[*2]の桜を出せり、其故は秋夕龍田川と書るに対して、春の朝よしの山[*3]といへり、文躰のかさり也、人丸の哥にはなき事也、此哥の事、切帋ありと云々、猶以文章の対にかける心おもしろくよろしき義也

又山のへのあか人と

ならの御門人丸赤人三人の事を書[*4]也、赤人[*5]人丸同時也、赤人はすこし末の人にや、万葉集[*6]の末には人丸の哥みえす、赤人のは末まてあり

あやしくたへなりけり

とは、奇妙也、赤人の作は自然にしてしかもめつらしき所あり、人丸の詠は環のはしなきかことしとそ

人丸は赤人か〻〻

畢竟等同のよし也当流用之、或説、人丸は赤人よりはすこしまさるといふ心歟云々、只等同の義なるへし、かさねていへるは文章のかさり也

たつた川もみちみたれてなかる　秋哥[*7]に注す

梅花それともみえす　冬部にあり

ほの〳〵とあかしの[*8]　旅[*9]に注す

春の野に堇つみにと　野遊の心也、春の野を愛する心にて、不慮に何となく一夜ねたるよし也、奇妙の作云々

和哥[*11]の浦に塩みちくれは

潟をなみとは、塩のみちて潟のなくなると也、又は方と用る説あり、当流方をなみと用る也、其中に潟の心

もあるへし、方をなみとはいつくともなく葦へへ鳴行さま也、作意によろしと也

此人々をゝきて、〳〵

ならの御門の御事にはあるへからす、人丸赤人両人の外にもといへり

これよりさきの哥を、〳〵

さき不審未決云々、定注[*1]也、さきとは古今集よりさきの心にや、万葉[*2]あつめられし事也、万葉[*3]撰は聖武疑なし、当流にも其分なり

こゝにいにしへの事をも

人丸赤人等の比ほひの人を云にや、次詞に、かの御時より此かたとあり、其比の人々の事とみゆ、又遍昭等の六人の事と云々

えたる所えぬ所　各すこしの徳失ありしと也

かの御時より此かた

貫之か心、文武天皇御宇よりとかけるなるへし、万葉撰られし御時よりのやうにみえたれと、しかるへからす、自文武至醍醐延喜五年十九代二百余年也、然而大数をいへる斗也、文の躰なるへし、当流用之、大同天[*4]子よりは十代百年にあたれり、此時人丸あるへからす、聖武よりは十六代百七十年也、冷泉家には継躰の次第を勘て十代と用也、注別帋、此事猶以可有口決乎

いにしへの事をも、〳〵

此段又上の詞、万葉の事につゝくへからすとみゆ

今此事をいふに

貫之批判する所を今といへり、されともちかき世にといふは、貫之より前の遍昭等の事也

つかさくらゐたかき人をは

高位等[*5]の哥を批判酌酌[*6]ある心、殊勝の義也、貫之猶以有遠慮、思へき事とそ

その外にちかき世に

僧正遍昭は、〳〵[*7]すこし実なる所なしといへとも詞心とゝのほりたる哥なるへし、後鳥羽上皇、定家に此六人の事を御尋ありしに遍昭を挙し申されき、其時まことの

なからんにはと被仰しに、定家卿それを哥とは申侍、と奏せられけりと云々、哥道の故実なるへしとそ

ゑにかけるをうなをみて

露を玉そとみたる心、ゑにかきたる女に心をうこかすことくのさまなるへし

あさみとり　はちす葉の　前に注す

浅みとりの哥、露を玉とあさむくなといへるしたて上手なるへし、たしかなる所なき歟、すかたを本[*1]とみゆさか野にて馬よりおちて

かゝる時まて哥道を忘さる心、殊勝の理也、哥には落馬の心はあるへからす、哥の心は秋部ニあり

在原のなりひらは

哥をふかく案し給へるに、詞のたらぬ処ある也、つねの余情よりもふかゝるへし

しほめる花の

詞のすこしたらぬ所のたとへ也、句残れるとは心のあまりあるよし也、智者堪能なとのことはすくなき類なるへし、心ふかくいひきらすして、残おほかるかことく也、こと葉おほきものゝしなすくなきともいへり、言を巧にして仁[*2]すくなきなといふかことし、哥道の肝心なり、可思[*3]とそ

月やあらぬ　前に注了

大かたはの哥も、中将の哥に殊ニ執する詠也

文屋のやすひては

詞のたくみに面白き所を、よきぬにたとへたり、心にすこしいやしき所のあるを、あき人にたとふる[*4]也

吹からに　秋部には秋の草木とあり、本は野へとよめるなるへし

御国忌[ミコキ]　おほんこきともよむと云々[*5]

草深き　たくみにして余情ありと也、此序ニ出したる哥は、こと〳〵く批判のことくならさるもあるへし

宇治山の

わか庵はみやこのたつみ

此末の句、人はいへともとあるへきを、いふなりとよ

める処、すこし物のたかへるやう也、始終たしかならぬさま也、晴天の月に暁かた一点の雲のさへきるにたとへたり、又云、此哥のさま、かすかにおほつかなき心を、暁月を雲まにみたるにたとふる也、両説其心かよふへし

よめる哥、一首のみあれともおほくきこえすとかける文章也

をのゝ小町は流也（ママ）

其流といふ心也、又たくひとよむ説あり、なかれとはよむへからす、其なかれにはあらす、六人の中に小町は難なき也、つよからぬは女の哥なれはといへり

思つゝぬれはや　哥心前に注す

そとほりひめの哥

わかせこかくへきよひ也

哥のさまの支証に出せり、此哥古風のやうなれとも、やさしくよはき処もあるにや[*1]

大伴のくろぬしは　哥のさますかたはいやしく、心はやさしき也

思出て恋しき時は

人はしらすやといへる処さまのいやしき也[*2]、恋部には人しるらめやとあらためて入たり

かゝみ山いさ立よりて

心はあはれなる哥なるへし、いさ立よりてみてゆかんとよめる処、姿のいやしきとなむ[*3]、抑六人の哥の失をいふに、いつれの哥を本としていふとならは人丸のを本として失を定へき也、人丸の作は第一其心限なく景気又殊勝也、詞のつゝきとゝのほり建立たくみ也、環のことくにしてはしなし、故ニ本とするなるへし

此ほかの人々

前にいへる六人の比ほひより以来の人々也、哥人おほしといへとも、哥をよむとのみ思て教誡の道たる心をしらぬ也、上の詞に今の世中色につきといへるに相当れり

かゝるに今すへらきの

すへらきのき文字、爰にてはすみてよむへし、つねにはたゝにこりても用云々、寛平九年受禅ましく〳〵けるより延喜五年まて九ケ年也、当朝に道をおこし給ふ心也、前の詞ニ古の代々御門の御事を書る中に、延喜の御代の心こもると注しき、此段のさまに見えたり

あまねき、〵つくは山、は文字の声清へし

よろつの政をきこしめすいとま

難云、万機の余暇諸事のあまりとあり、しからは哥道は教誡のはしといへるにかなはすや、答云、哥道をかならす政とのみいふにあらす、政の助業也、政道無為の時にいたりては、哥を教のためといふに及ふへからさる也、行有ニ余力一則以学レ文といふかことくなるへし、此問答一往の理也、此序の心は、君よろつの事をすてましまさぬ故ニ、哥道をもおこし給ふと云義也、又云、哥は諸道の源也、詩は政の名也といふかことし、さしあたりておこなふ事をのみ政といふへきにあらす、仁徳の心を政を行ふといふへし、しからは政といへる中に哥道あるへし、余暇に此集をあつめ給へき事をおほしめすよしなるへし、此集えらはるへき事をいふ起也

古の事をも忘し

神代より以来、文武人丸等の道を忘給はしの心也

ふりにし事をも　万葉をうけて撰集ある心也

いまもみそなはし　当代御覧のみならす後代までのためと也

延喜五年、〵奏覧の時にはあらす、事のはしめを記せり御書の所のあつかり

前のかひのさうくわん　さくわんとよむ

万葉集にいらぬ、〵

此集に万葉の哥の入たるもあり、それは家集をもて撰入られたるなるへし、延喜比までは万葉にくはしからさりしにや、村上御時、源順点を加しより世にも学けるとなむ

みつからのをも

撰者四人の自哥を奉る事也、貫之哥はみつから撰入る
にあらす、みな勅定也と云々
それか中に、〻此集の部立のやう也
雪をみるにいたる　以上四季也
又つるかめに　賀也
秋萩夏草を　恋也
相坂山に　離別旅等也
春夏秋冬にもいらぬ　雑哥以下雑躰等部類也
古今和哥集といふ
真名序ニ続万葉集云々、撰集の時は先ッ集の号をかりに
名つくる事あり、其義にや云々、首尾して古今、〻と号
せしなるへし、古今の二字の事第一巻に注了
かく此たひあつめ、〻
山下水のたえす　次第ニつもりて行末も不可絶之理也、
濫觴（ランシヤウ）よりおこる心也
はまのまさこの　此集の千余首とゝのほり成就の心也
いまはあすか川の　世の変化はありとも、此集不変に
〻して限あるへからすと也
さゝれ石の、〻
転変もなく次第増長して万代不窮なるへき理也、是可
喜之処也、聖代ニ貫之此道の聖として合躰の撰集なれ
は也
それまくら　臣等也、貫之か我等といへる詞也
詞春花、〻詞の匂すくなきよしの卑下也、春花*1は縁也
むなしき名のみ秋の夜の、〻
はかなき名を行すゑなかくとゝめむ事を歎也
かつは人のみゝにをそり、〻
未練の身を卑下し、又此集を撰をく事を道の心にはち
たる義也
たなひく雲の
起居動静（キコトウシヤウ）　此事をよろこふ也、聖代にむまれあひて撰*2
此集事也
人丸なくなりにたれと
なりんとよむへし、文王已没（トモ）文不（ヤ）レ在ニ于茲（ニ）の心をも

て書り、当代をほめたる心あり、それも人丸の余慶余風なるへし、人丸をなをさりに云心にあらす、既ニ先師柿本云々

とゝまれる哉　かなと云詞に心あるへし、喜ふ心みゆ

たとひ時うつり

世の哀楽変化ありとも此哥の文字たえすあるへしと也

とゝまれらは

*1たのしみ悲み行かふとも、此哥風とゝまりなはの心也、鳥の跡とは此集にしるしをく処也

*2哥のさまをしり

哥道の花実等*3相具し、正風正路等をしるへき人の事也

ことの心を　此道を教のためなる理と心えん人はと也

大空の月を

哥道は人の心のやみをてらす事也、おほ空の月をみるたとへ也、人々したひみて和する心あるへき也、与ニ日文選序月一倶懸、注トモニカケテ明コトハ如ニ日月ノ一深コトハシ如ニ鬼神ノ一云々、鬼神*4アラソフ争レ奥アフヲ

いにしへをあふきて、

天地未分以来二神素戔烏尊等文武天皇人丸よりの道をあふくへし、今とは当代をいへり、延喜御門貫之の時をこひしたはさらめやと也、帝師として撰置所の集なれはなるへし、此詞古今の二字をもて書終也

※1

所一見存分無相違尤以無比類者歟　　宗祇判

文明十四春正月日

文明十三　九月下旬之聞書也

同十九未年六月重聞此説加筆早

延徳弐庚戌年三月又聞彼説矣

此一冊依友弘懇望所許書写也

必可禁外見者乎

永正三年初冬日　　夢庵判

此冊依竹田治房懇望所許書
写也必可禁外見者乎
天文十五年二月八日　　宗訊（花押）

古今和歌集巻第一 文明十三辛丑八月十八日於種玉庵受之 宗祇禅師 *1

○古今二字事

(朱)古とは、文武御宇人丸之時をいふへし、今とは、醍醐御門貫之此集之時なるへし、和哥道は聖武御宇尤被レ寅といへとも、文武御代、人丸合躰之臣として盛*2なりし時なる故*3に、古を文武人丸之時といへり、其以来代々の中に延喜御時にいたりて、此道を興しまし*4ます故に、酉々(醍醐)貫之の時を今とさす也、序曰先師柿本大夫云々、貫之か心は、人丸を師とすとみえたり、時代はるかにへたゝるといへとも、此心あり、文武と人丸との道を模*5して、延喜*6に貫之此集を撰*7しめ給也、万葉集は集の最初*8たりといへとも、其以前の文武をもて根本と用也、其証(1)追而可レ伝也(2)万葉ハ聖武之時撰之也

(朱)裏説又云、古者、大易天地未分之処也、今者、太初以来国常立之延喜御宇貫之之時、又は今日に至へし、凡混沌未分*9為に太易一々未レ見*10レ世気一、即空劫也、於レ季者為レ冬*11、其次為に太初一、太初気始*12也*13、即成却*14也、其次為に太始一々形*15始也、即住劫也、其次大素々々質*16始也、即壊劫也、象レ秋也、日本記如に鶏卵一云々、空劫にあたれり、鶏卵は円形にして、破てみれはたゝ水のみ也、水は気形色分別なき処也、故に未分を鶏卵のことしといへり、葦芽ことしといへるは、太初にあたるへし、即開闢の処也、※1混沌未分之処教禅之二法を不レ借して知事は此集之徳也、尤大切之理也

(朱)裏*17又云古今二字者正直也、正は自性言語所レ及にあらす、中而不レ中*18、日正中*19者无レ極之称也、曲而不レ曲、日直*20正は天照太神の御心也、彼御心を学ふは即直也、是我朝之風也、直は正よりい

つる也、(1)此集は正直をすかたとせり、天下も正直にて治へし*1、哥も正直を可*2レ守也、尤哥人用心也、以上三説也、此外説有といへとも相伝之次第あるへし、(朱)又万事ニ古今の理有、事々過ぬるは古也、当*3信は今也、刹那も如レ此、(2)天地人ヲ正直ニトル、天地は正也、人は直也

○和歌事

和は和国也、哥は風也、たとへは松竹等のことし、松竹といへるは、松竹の本躰也、屈曲清立は松竹の風也、彼屈曲を自然とみれは直風也、造作の心をもて愛しみれは異風となる、哥の道はすこしの心えにて異風となる物也、直而不レ直之心肝要*5*6也、治レ世守レ家之道同レ之、(朱)和はやはらく也、天地之和する処に、五大おこり人も生する也、君臣之道も和を貴ふる也、*7此道以レ和為レ詮、人の心の和く時述出すを哥といへり、胸中无事にして和平なる時、まことの哥もいてくへき也、人の心をたねとすといへれは、尤直道をまもるへき也、我心は是神明也、我身は是仏也、(朱)集はあつむる也、内外の道をあつめ、古今の宜哥を集する也、論語ニ記ニ諸善言ニと云かことし、又此題号毛詩ヨリ出タル事あり、序ニ載レ之

(朱)巻第一　定ニ法度ニ之心也、是肝要也、法をまもる事、此集の肝心也、古の人の心はをのつから道ニかなへり、末代ことに可レ思レ之処也

春哥上

(朱)春の内を上下とわかつ事、をよそ二月廿日あまりの比までを、春の上と心うへし、又は年による事もあるへし

ふるとしに、

在原元方　*8(ママ)ありはらとはよます、はらとよむ也、

第一ニ入事名誉也

*9 1としのうちに春はきにけり

此哥はすこしも心を別にやるへからす、ことかきのうへを、そのまゝみるへし、ふるとしに春立日とある分也、よろつの事やすらかなるを本とす、巻頭は一部の根元なれは此義肝要也、造作の理は、大道の廃て仁義おこる、といへるかことくなるへし、

(朱)此集を集の根本とす、万葉は上にあれ共、それは別段にて此集を執する義あり、又、いつれの集の巻頭も、無事なるを用*1る心みえたり、此集の哥はいつれも大かたやすらかなるを用とみゆ、又貫之哥の躰もかくのことし*2、(朱)こそとやいはむことしとやいはむ、といへる下句はさるからあたらしくまうけたる作也、又、此下句の二句を古今の二字にあてて、しかも古今*3一致之理あり、可レ受二師説一*4、(朱)此集聖代の勅撰也、巻頭に元日の哥を入すして、年中立春を用る事不審あり、しかれとも春は万物を生する恵あり、そのきさしの早くもよほす時、万象これをよろこふ心あるによて、聖代の恩に比して此哥を用たる也、仁徳末遠くおこり、民の心も楽へきをみする也、此哥、こそともおもふことしとも思ふとありしを、貫之なをして如此となんはるたちける日、

元日の哥也、(1)此哥朔日*5の心也、巻頭にもあたるへく歟

2 袖(朱)ひちてむすひし水の

(2)ひちての詞等僻案抄にみえたり、水(朱)は夏の程むつましくなれつるか、氷れるおりはすこし冷しく成ぬれとも、それもおもしろき心あるを、又東風に打とけたる水*7のさま、たちかへりめつらしくむつましく成ぬる心也、或説、此哥は四季をよみ入*8たる云、此義はきらひ道也、但光陰*9のうつり来るを思ふ心はあるへし

(朱)裏説云、むつましかりし人のすこしたかふ事なとありし時も心をやりて過しかは、又はたしてむつましき中となる事あり、そのたとへなり、心を安すん

する理也、僻案[*1]の義も此心[*2]こもれり、此説は重て受へき事なれとも、師説の時も如此ありしかは今伝レ之云々

題しらす

説々ある事也、時にのそみてよむ哥の題なとなくてよめるを題しらすといふ也、又は、あまたの物をよみて、いつれを題とわきかたき哥なとをもいふ、又は、会所なとさしもあらぬ所にてよみたる哥をは、題なとありしをも、題しらすとしるす事あり

よみ人しらす[※1]

(朱)いにしへの作者を執して名をあらはさぬ事あり、仏神等の作を秘して読人不レ知と書るもあるへし、又勅撰の人をはゝかりて如此、又作者をもとより不レ知もあり、(朱)近来勅撰に初参の人を読人不知と入るよしは、上古に沙汰なき事也、道のすたれたるさまにや云々

3 春霞[*3]たてるやいつこ

(朱)かすみ　片伝[*4](朱)、此哥大かたはうちきこえたる分也、春の色をは、先みよしのゝ山にこそみるへきと思ふに、さもなくて[*5]雪のみふりぬると云へる心也、霞をも思ふ心あるへし、遠白き哥也、(朱)又はたてるやいつことはかすみを尋る心也、霞をしたひ愛する心あり、霞をしたふは則花を思ふ也、又花を思ふまて有へからす[*6]、(朱)俊成卿は、たゝるやいつことといふを面白きよし、古来風躰にもあり、然而、定家卿はたてるやを用給ふ也[*7]、此集の奥書ニ、且任ニ師説ニ又加ニ了見一云々、其心みえたり、(朱)此哥の理はさる事にて、風躰尤幽玄也云々、理をさし置て吟味[*8]すへし、雪はふりつゝとある末まて、たくひなき姿[*9]なるへし云々、此作者に口伝あり、貫之か女の内侍也、此時勅撰たるによて、読人不知と入たり、然而此集の第三番ニ入たる事名誉也、聖時之直道もあらはれ、貫之か他に異なる義もみえたり

二条のきさき、后の御哥也

4 雪のうちに春はきにけり

顕注(朱)には、雪の中とは年内といふ心也云々、*1 不用之、*2 密勘云、ふる年の雪いまた消ぬに日数ははや春に成て、涙も氷雪にとられし鶯も、をのか時待出て春に木つたふ心もつきぬらんかし、*3 との由とそ聞侍し云々、こほれる(朱)涙とはなかぬ心也、愁を散する心也、哥はたゝあさはかなる事をもとゝして、人の進退を安するはし也 *4

5 梅かえにきゐる鶯

きゐる(朱)鶯とは梅になれたるさま也、春かけてとは春になりて也、両方かけたる事をかけてとよめる哥もあり、此哥(朱)は隔句にみるへし、梅かえに鶯なけとも、いまた春かけて雪はふりつゝといへる心也、畢竟(朱)は、梅雪鶯の三をいつれも愛したる心あり

6 春たては花とやみらむ

みらむとはみるらん也、みえむといふ説は不レ用レ之、春に(朱)なりてあは雪なとの木にふりかゝるをみて愛する折節、鶯のきて鳴を、我かく思ふ心より花とやみるらむとよめる也、鶯を察する也、僻案(朱)*5 にみらむの詞を、今も時によりては読へきよしあり、しかれともいかゝ侍へきにか

逸者其声楽怨者其吟悲之心也 *6

7 心さしふかくそめてし おりけれは

おりけれは、居也といふ説不用之、折ける(ママ)也、哥の心は、我にても人にても春の雪の枝なから折たるをよめるなり、心さしをふかくそめて折けれは雪と花とみえけるそといふ心なり、*7 らむとあるもうたかへるにはあらす、詞のたすけ也、詞をいたはる故に覧とよめる也、又はおりけれはにや花とみゆらんとよめる云々、きえあへぬとは、春の雪の心也

ある人のいはく、まうちきみ

此哥忠仁公の詠也云々、左の注は作者を賞翫の心也、又いたりて執するをは、如此注せさる事もあり

二条の后の

東宮の母御息所也、みやす所と読へし

正月三日

みかと読也、但、つねのことく読へき歟云々[*1]

文屋のやすひて　康秀か哥の躰は、物を詠する事たくみにして其躰いやしといへり

8 春の日の光にあたる

こと葉にみえたるさま也、春の日とは春宮をよめり、その御息所の御かたにての事なれは也、其身老ぬる時なるへし、かゝる春のめくみにあひぬる身なれとも、老ぬれはなからへて行末のめくみにあひかたき事を歎く哥也、哥のさま、ことからを思へしとそ

9 霞たち木のめも春の

このめもはるとは木の目のめくむ事也、此哥にとりては其理を捨て、只春になる心にて吟すへし、哥躰優になるへし云々、花そ散けるとは、霞立て春の雪なれは花と見なしたる也

裏[*2]春のきたりて花にあへるは、祝言の心也、君徳のあまねき心也[*3]、花なき里も花になる心也、雪なれは自面如此

ことなお　言直

10 春やとき花やをそきと

春と花との遅速の支証に鶯をせむと思ふ心面白云々[*4]、それさへなかぬ事をよめる也、花とはいつれの花とも不レ可決也[※1]

みふのたゝみね　ふの字すみてよむ也

11 春きぬと人はいへとも

鶯を切によめる哥也、以上二首は初春の哥也、鶯の題にては有へからす、鶯は春をつかさとる物なれはかくよめる也、なかぬかきりは、さもあらしと思ふ也

寛平御時后宮　七条の后、昭宣公の女也、哥よみにてまし〳〵けれは、七条の后御事にや、又延喜母后御事にや、可レ勘レ之

まさすみ　当純、近院右大臣男、文徳御子能有、定[*1]
家卿の小書也

12谷風にとくる氷の

毛詩云、谷風東風也、されは、谷風は春風といふ心也、といつれの注にもみえたり、当流には、深谷まてもはや春のいたりて、氷のとけたるをみて、春なれは花とみなしたる心也

13花の香を風のたよりに

梅のうちかほりたるに、鶯もなかなむとおもふ時分、風の過ぬるをみて、しるへにやる心ちする也、鶯のこゑを思ふ心より也、此哥より鶯をよめる哥[*2]也、谷風の哥をへたてゝ見えたり

14鶯の谷よりいつる

春としもおもひわかぬ時分、鶯の時を得て、谷のふるすを出て時節を告たるを、ふかく感したる心よりよめる也、声なくはとよめる、此心也[※1]

在原棟梁　業平朝臣男

15春たてと花もにほはぬ

花もいまたさかぬ山里なむとには、鶯のこゑも物うけなると也

裏説云、花もにほはぬとは、一門の時にあはぬ心也、物うかる音にとは、我涙の事をよめる也、此哥の姿をよく吟味すへし[*3]云々

16野へちかく家ゐしせれは

是も鶯のこゑを愛し思ふ也、哥心はきこえたり、我宿のさまを述懐したる心あり、鶯のこゑを朝なく聞事をもて、なくさめたる心也、詞のつゝき古躰にして、抜群とみゆ云々、余情有と云々

17かすか野はけふはなやきそ

野遊の心也、此哥に異説等あり、不用之、伊勢物語には武蔵野と有、其につきても種々説不用之、かすか野とよめる、ことに面白し、武蔵野は広大にして、野遊の興によろしからす、若草のつまこもるとは、春になりて枯葉なとの下にやうく若葉[*4]のもえ

初たるを、つまこもるとはいへり、我も又野遊にたちなれたれは、かゝる折節には、はやなやきそとよめる也、春の野はやく事なれは也、けふはといへるを、大やうに心うへし[*1]

19 み山には松の雪たに

古注には貞松の寒を不レ知、其木の雪たにもいまた消ぬにといへり、当流にはきらひ道也、松は深山にある物なれはよめり、たゝ深山の雪の消ぬ時分をいへる也、杉ども檜原ともよむへきを、詞のよろしきにつきて松の雪たにとよめるなるへし、心は、都の早く春に成ぬるを感したるなるへし、春の哥は殊にたけたかく其躰を思ふへしとそ、又雪は松にみる興也、眺望あり[*2]

18 かすか野ゝとふ火のゝもり

烽火たてられたる所云々、僻案[*3]にみえたり、野守は其火をまもる人也、野守なれはみよとよめる也[*4]

裏説云、万事其事を知へき人に其職をあたふへき也、其職に不勘の事を仰すへからさる也

20 梓弓をして春雨

をしてとある詞を下へかけて、雨ふるともをしてつまむと心うる説あり、[※1]いかゝとそ、当流には、をしてとは春雨といはむため也、春の雨にはふるたひに若菜もおひゆく物なれは、あすさへふらはつまん、とたよりありて思へる心也

以上初日（朱）　廿首

仁和御門みこにおましくける時、

光孝天皇[*5]御事也、仁和をにんなと聞ゆるやうによむ也、おましくとあるを、おはしましとよむへし、人にわかな給ふとは、さるへき人にや賀をおこなはれし也

21 君かため春のゝに出て

心は明也、自面おもしろき哥也云々、此哥に有心躰あり、余情といへるにはかはりて、別にひとつ心のある事也、君かためにするわさなれとも、雪氷は我袖

にとまる事を思ふ心あり、かゝる雪氷の袖にとまるくるしさをも思はぬ心は、人のためにめくみある也、[*1]是則王道に御心のかよふなるへし、此哥を定家卿も[*2]殊に執し給へりとみゆ、抄物ことに書いたし給へり哥たてまつれとおほせられし

よみてとあるをよんてとよむ也

22かすか野ゝわかなつみにや

ふりはへては、源氏物語なとにはわさとといふ心也、此哥にては、たゝ打はへてなとのやうなるへし、袖ふるともよめは也、さりなから、又若なつむ事なれは、わさとの心も少はふくむへきにや、必わ[*3]さとゝ読るとは用へからす也、如此の分別をよく思ふへし云々、哥の心は明也、野外の春の望の心をもて[*4]みるへしと云々、其さまをよく思案へしと也、人々あ[*5]またとみるへし

23春のきる霞の衣

はるのきるとは、霞は春のつかさとる物なれは也、珍しき五文字也、眺望の心より出来たるへし、うすき霞に山風のいかにもやはらかにうち吹たるをみて思へるなるへし、へらなれとは、みたれつへしき、[*6]といふ心といへり、又さもあらすとも

24ときはなる松のみとりも

自面の理也、春来て松をみるに、時を感する心より[*7]よめる也、造作なくして感ある哥也[*8]

25我せこか衣春雨

わかせこかとは、衣春雨といはむためはかり也、衣は春といはむため也、さるから五文字も面白しと云々、眼前の躰也、此哥晴の哥の躰也云々、色にとらは白き色なるへし

26あをやきのいとよりかくる

心は明也、春しもそとある句に心を付てみれは、こと[*9]に面白と云々、ほころひにけるとよめるを、糸よりかくると有に、つくりあはせたるとはみるへからす、自然にたよりありてはきこゆるにや

（朱）西大寺のほとりの

27浅みとりいとよりかけて

柳かとは柳哉といふ心也、前の哥の躰也、心は明也、此哥はすこし作たてたる作也、しかれ共あしくはあらす、哥のさま奇特也云々、遍昭は姿をえたる哥よみ也云々

（朱）28もゝ千とりさへつる春は

もゝちとりを範兼卿は鶯の事也云々、定家は其説を*1は嫌へり、*3僻案御抄にみえたり、たとへは、郭公*2なくやさ月とよめるかことし、物ことには万物也、あらたまれともとは年々改とも常住なる理也、※1春に成ぬれは、万の物の又去年のことくになりく、年々歳々あるを、あらたまるといへり、其中に我身はかりはあらたまる事なし、老衰行のみ也、とよめる也

29をちこちのたつきもしらぬ

深山幽谷なとの春旅行の心を思ふへし、鳥の声をたよりとすへきに、又そこともなき心也、哀にさひしき躰也とそ、よふと云に便あり

以上二首三鳥の内也、口伝あり云々*4※2

※3○凡河内躬恒*4

30春くれは鴈帰也

（朱）道行ふり、みち行つゐて也、春くれは、春になれはの心也、此哥たくみにして大なる躰也、鴈を聞てかく思よれる也、詞にみえたり、躬恒か哥はたくみにふかくよめる也、幽玄なるは稀なるにや云々

帰鴈をよめる

31春霞たつをみすてゝ

花もいつかは咲へきなと思ふおりふし、鴈の帰るをみてよめるなるへし、下句の心、あたらしくまうけたる心也、伊勢か作は小町よりはまさりたりとなん、花に心をふかく染たるよりよめる也

32折つれは袖こそ匂へ

鶯の梅にふかくしたしむ心をよめる也、此哥ひとへ

に艶なる哥也、余情風情ありと云々

33色よりも香こそあはれと

むかし誰袖をふれそめてより、かゝる句と成けんと也、たくひなき句を愛する心よりよめる也※1

34宿ちかく梅花うへし

此哥は必恋の哥にては有ましきにや、又は恋の心にてもや、是も梅かゝのすくれたるより思よれる心也

35梅花たちよるはかり

明也、立よるはかりと思しに、花に程ふるを忘たる心あり、ふかき句也、兼輔哥也*1

東三条の左、〻源常、嵯峨源氏、左大臣左大将、*2斉衡元年薨、卌四

又説女の所へ立よる事をよめると云々

左の、〻※2

36鶯の笠にぬふてふ

催馬楽の青柳の哥をもてよめる也、笠にぬふとは、鶯の梅の枝の間を行かへるか笠をぬふことく也、と云説あり、不用之、ぬふとは、笠のわさなれはよめる也、衣ほすてふあまのかく山、とあるも、ほすは衣をはほす物なれはよめるはかり也、此たくひなるへし、梅花のかさにゝたる物なれは、老のかくしたくおほゆるを、笠のえんにてかくよめる也、鶯の梅にしたしきさま也

37よ所にのみあはれとそみし

心明也、梅を愛す、ちかまさりしたる心也

38君ならて誰にか見せむ

※3人を賞して君ならてとよめる也、色は大躰也、香はくはしき也、万の事に知人肝要なる事也

裏、〻大事小事共ニ人に云あはせむ事は、人によりて其機をみていふへき事也、人の程をしらすしては、我思事とてもそゝろにいふへからす、といふ心あり、和哥はすへて此国の教誡となる物なれは、如此之理、肝要也

くらふ山にて

物にくらふる方に用る時は、ふの字を濁り、たゝよむには清といふ説あり、※1〳〵(朱)くらふ　片(朱)※2

39梅花匂ふ春へは

心明也、夜のさまをよめると見えたり

40月夜にはそれともみえす

白梅とみえたり、月もしろく花も白き心也、香を尋てそゝりといへる心は、折てといひし人に香をしるへにてもなとか尋ねぬ、といふ心をふくめり、躬恒か作は此たくひおほし云〳〵

41春のよのやみはあやなし〳〵(朱)

心明也、御抄ニハ、あやなしとはかひなき事をあちきなくなといふ詞也云〳〵、色はみえすして匂ひはかくれす、あちきなしと思ふ心也

裏〻〻人の性ニ此類あり、やすかるへき事なとを、一方にもつかすしてやうかましきは、みるにもあちきなき也、よろしからぬ性也、思ふへき事にや

はつせにまうつることに

貫之は初瀬を信して常にまいりける也、※3 *4 又かくさたかに〻〻やとりはかはらす有といへると也

42人はいさ心もしらす

花の匂ひのみかはらぬとよめり、※4をし返し人はいさとよめる也、故郷とはひさしく見し宿也

43春ことになかるゝ川を

梅花のうつろへるかけゆへに、流をも花とみておらはや、と思ふ心ある也、春ことにとは、毎春かくのことくわか心のありきたるよし也、はかなきさま也、花を思ふ故にまことなき事をよめる、是哥の作也

裏〻〻世中のことわさは、毎事おられぬ水也

44年をへて花の鏡と

花の陰の水は鏡のことくなるに、ちり敷たるをくもるといへる也、年をへてとは、年々歳々花の陰の水は、鏡となりて花もむかひきたりぬれは、花と水との中は思ふこともなかるへきに、散ぬる時にいた

りて、此一事[*1]のみ思事となる心也、うつろふ事のはやきをいはんため也

45くるとあくとめかれぬ物を

心明也、家にありける梅とかけるにかなへり

46梅かゝを袖にうつして

明也、花に執心ふかき哥也

47ちるとみてあるへき物を

うたてとはうたゝ也、転字也、此哥にては、はなはたしきといふやうなる詞也、哥心は、ちりなは忘なんする物をとよめり、愛する心のふかきによりてかくよめる也、うたゝ、あまりになとの心にや

裏〻なに事も過ぬることに執をとむる心はよろしからす、一念にはたさすして相続するより、此世のみならすあしき事とはなりぬる也、是を思ふへしとそ

48ちりぬともかをたにのこせ

明也、※1おもひいてに也、思てとはよむへからす

49ことしより春しりそむる

明也、心も詞も殊勝の哥也云〻、人のいへに、といへる心をよめる也、此哥治レ世姿也となむ、王昇ニ宝殿ニ野老謳歌と云句の心にかなへりとそ、たゝしき哥の躰也云〻、治世乱世の姿あるへし、思ふへき事也云〻

50山たかみ人もすさめぬ

又里[*2]とをみ〻心はおなしき也、里とをみといへるも山たかみの心也、山高みはまさるへきとみえたり、是は一本[*3]ある桜とみるへし、花さきぬれとさひしけなる花の心を思てよめるなるへし、いたくなわひそとよめる、哥道の命也とそ

以上第二日[*4](朱)卅首

51山桜わか見にくれは

霞は自然にたてるを、花をへたつる事のあやにくなりとみるゆへに、我ために立かくすかと思ふ也、五文字に山桜とをける、よくかなへり、肝心也と云〻

そめとのゝきさきの
本の小書ニみえたり、清和母（ノ太皇大后宮、忠仁公女）*1 后明子、昌泰三年
正月一日崩、*2 七十二

52年ふれはよはひは老ぬ
*3 摂政大政大臣（彼母后の摂政大政大臣本ニハ爰ニあり）栄花の心をよみ給へる也、※1 哥のさまことからをみるへし云々

53世中にたえて桜の
花に執心ふかきによてかく思へる也、開落に心をつくし跡まて忍ふ心の、春の間のとかならねはかくいへり、是も哥のさまをよくくみるへしとそ

54石はしる滝なくもかな
或説ニ此滝は落花をいへると云々、*4 此哥猿丸か也、彼家集にも山川に、※2 当流は滝をへたてゝ花をみたる也、哥の次第落花の部にあらす、哥の心は明也、古来風躰に此哥をまことに優にも侍哉とあり、吟味すへき事也

55みてのみや人にかたらん
哥は義なし、ことから面白云々、*5 ことに春の哥の躰に似合たりと云々、*6

56見渡せは柳桜を
春秋の野山をこそ錦といひたれと、此時都をみて、都そ錦なりけるとよめる也、都をほめたる心也、*7 遍昭素性父子たりといへとも、素性か哥はさまくの躰をよめり、遍昭ニまさりたる詠とみゆ云々

57色も香もおなし昔に
花は年にかはらす昔の色香にさくらめとも、我身老ぬるみるめにあらたまりて、昔のことくもあらすと也、年ふる人の、めにそあらたまりけると也 *8 （朱）

58誰しかもとめて折つる
顕昭は誰然（タレシカ）もと注せり、密勘（ミツカン）ニ誰かとめて折つるの心也、文字のたらねは誰しかもとそへたる也、三わ山をしかもかくすかの類にはあらす、と注給へり、哥の心は明也、おれる桜の妙なるをみて、愛する心よりかく読る也

59さくら花さきにけらしも

山のかひとは山のあひた也、此哥晴(ハレ)の哥の躰也、幽(ユウ)玄(ケン)躰也云々、貫之作にもたくひなしとなん、百人一首には、花そむかしの哥を入られき、それは又有子細云々、ゆへ(朱)ある哥と云々、ことかきにも口決有へし

60み吉野ゝ山へにさける

明也、吉野山には雪をよむ所なれは、ことによせあり、山辺にさけるといへるは、山の辺は勿論(モチロン)なれとも、此句面白し云々[*1]

61桜花春くはゝれる

御抄にみえたり、此五文字は桜花とよひ出したる也、桜花さきにけらしも、なとよめるにはかはれり云々、あかれやはせぬといふも、満足せさせよの心也、此哥三月に閏月有ける年云々、閏三月によめる哥ならは暮春に入へきに、春部上に入たる事不審也、閏月有ける年とあれは、其年いつの程にてもよめるにや、又こと書を必用る事もあり、大やうにみる所も有へし、よく弁へしとそ

62あたなりと名にこそたてれ

明也、花ゆへに待つけたれは、人も待けりとよめり、伊勢物語には恋の心の哥也、爰にては花のうへのみ也、あたにはあらすといへる也[*3][*4]

63けふこすはあすは雪とそ

けふきたれはこそとよめる也、散なは雪とみるとも、けふの花とはいかゝみむと也、此哥返哥の本也とそ

64ちりぬれはこふれとしるし

無義、是はすこしうつろひかたなる花をみてよめるなるへし、花に執心の作也

65おりとらはおしけにも

一木ある花の陰に立よりて、愛する心のあまりにおらはやと思ふ時、又思へは、花もおしけなるへしと心をやりたる也、おしけにもといふは、あるしなとある花にはあらす、花の心をおもへるなるへし、宿

かりてとは、花にやとりて也

66桜色に衣はふかく

明也、花に執心ふかきよりおもへる也

67わかやとの花みかてらに[*1]

明也、有心躰哥也云々、花ゆへにこそとはれぬるうちより後の事を思やりたる也、其心をいはすして、散なん後そとよめる、有心也[*2]

68みる人もなき山里の

明也、伊勢述懐の心あり、亭子院(テイジイン)めしける人なれは[*3]思をふくめる也、外の散なん後ならは、山里の花も人にもしられぬへし、人めもみる事あるへしと也、余情おほき哥也云々、桜に対していひをしふるやうの心也[*4]

古今和歌集巻第二　春哥下

春下は二月末つかたよりの注也[*5]

69春霞たなひく山の

うつろはむとはちらんといふ事也、といふ説あり、不用也[*6]、やう〳〵色かはりそむる比なるへし、上句は、郭公鳴や五月なとのことくつゝきたる也、但哥の縁とはなるへきにや、霞に映したるさまもあるへし、うつろふと色かはるとも[*7]、浅深(センシン)あるへきにや、花欲(トス)レ散(チラ)なとの心なるへし

70(朱)まてといふにちらてしとまる

まてとはちるなといはん也[*8]、ちらてあらは、なにを桜におもはんそ、といふ説あり、当流ちる事の程なきを感にて、花をは思ふ也、しかるに、ちらてとまらは花を思ます事有まし、といふ心也[*9]

71のこりなくちるそめてたき

めてたきとは愛したき心也、めやすきなんとの心也、万事此理也、寿長者多レ恥(イノチナカキモノハヲ、シハチ)といへる心にかなへり[*10][*11]

72此里に旅ねしぬへし

此里にとは、花のある所をさしていへり、ちりのま

かひにとは、花のちるに家路をまかへて也、殊に風流なる哥也云々[*1]

73うつせみの世にもにたるか

花桜といふ桜あり、といふ説不用之、にたるかとは、哉也、花さくらとは、桜花といふにおなし、しかれ共、世にもにたる花[*2]といはむために、花とつゝけてよめる也

これたかのみこ　惟喬、文徳第一、母従五位上紀静[*3]種ノ子名虎女

74桜花ちらはちらなん

故郷人とは知音[*4]の心なるへし、明也、花もたゝむつましき人のためゆへにこそおもへ、かゝる身一にはせむなし、なと思[*5]へる心也、古来風[*6]、此みこのいかに思給てか、かゝる哥をよみ給けんなんとあり、殊勝なるへきにこそ

雲林院　うりんゐんとよむ云々、或説、堯孝転伝説[*7]うんりんいん、うりんと仮名にあるをもうんりんと云々

そうくほうし　承均と注せり、しかるをくと読事不審也、或説、文字書たるをは、きんと読へし云々、又云、字を誤て注たるかと云々[*8]、(1)所詮かんなを本としてよむへき也、然者承均と書たるをも、そうくとよむへし云々[*9]、文字猶可レ尋レ之、(2)私云(朱)均垢同此字歟[*10]

75桜ちる花の所は

明也、更冬の心ちする躰也

76花ちらす風のやとりは

明也、句々奇特也、心なき物に心をあらせたる作、これを哥といふへきにこそと云々[*11]

うりん院にて　仮名に書たる時は勿論也、雲林院と書たるをは、うんりんと字のことく読へし、と云説あり、常光院此分也云々、当家には、いつれをもうりん院とよむ也

77いさ桜我もちりなむ　(朱)

明也、一さかりを、いとさかりといふ説あるにつきて密勘くはしく注給へり、最説[*12]不可用之也、此哥、

有て世中はてのうけれはのおなし作意也

78 一めみし君もやくると

けふはとよめるを、大やうに心得へし、あすはちるともなとは心うへからす、しはし待みて、ちらは花にも恨あらしと也

79 春霞なにかくすらん

明也、花を切に思心也、ちるまをたにもといへる詞、尤あたらしく面白し云々、散をたにも也

藤原よるかの朝臣　典侍、貞観寛平延喜

80 たれこめて春の行衛も

尤哀なる哥也、ことかきに思合へし、風にあたらぬ枝もちりぬるをみて、世間の限ののかれかたき事を観する心也、わつらふ人の心にかなへり、たれこめて日数のうつるもしらぬさま、哀なるへし云々

待賢門内北主生東*1
東宮の雅院にて　東宮の楽なとあそはす所と云々、

猶可尋之云々

81 枝よりもあたに散にし

此哥は此集撰して後、廿年許も後に入たる也、貫之か追て入たる心さまくあり云々、貫之、此哥を殊に面白く思ふ故に入たりと*2云々、又は、貫之延喜御門合躰の臣として此集を撰せしより、他に異に思ひ奉るに、崩御の後なれは、此哥の心無常の理有によりて、感心のもよほす故に入たる也、撰集の後に用捨*3*4ある事也、する事也、裏〻枝よりもあたに散といへるも、人の生れ来る心也、落て泡となるとは、死去心也、此理をみれは、生死共にあつかる心なき也、人の生するも、たゝ花の枝より落ぬる*5も、ことならぬにや、生死共にかろくする所、哥人も可思也、枝よりもの、ものしは、やすめ字*6也、此哥の外はみえさるにや、詞つゝまやかにしてむねひろしと云へき也

以上第三日（朱）卅一首*7

82 ことならはさかすやはあらぬ

ことならはとは、かくのことくならはと也、花を待

より、さきぬる時もさま〳〵心を尽しぬれとも、花は思くまもなくとく散ぬれは、さかすもあらなむ、といへる也

83桜花とくちりぬとも

人のいひけるにあたりてよめる也、世上は人の二世三世と契るも、変する事は夢のことく也、此理を思ふ故ニかくよめる也、詞つかひめてたき哥也

84久かたの光のとけき

のとやかなる春の日に、花の時いたりて散行さまいそかはしけなるをみて、かこつ心にてよめる也、いつれも〳〵、哥のさまを思ふへしとそ、猶観すへき心ありと云〻[*2]

85春風は花のあたりを

花の心つからうつろふならは、風に恨もあらしと也、よきてはのそきて也

86雪とのみふるたにあるを

をのつから花の散に、剰へあやにくなる風の吹たるさまをよめる也、常にかやうにある事也、裏〻世中のさま也、人の不運なる事なとありて愁ふる折節、重てくるしき事なとの出来て、いかにともせぬ事あり、身にあたりてさやうの時は、此理を世上のならひそと、心をやすむせよと也

87山高みみつゝ我こし

初五文字、ことにひえにのほりてといへるさまによくかなへり、見つゝとよめる詞に心ありてみえたり、山の花を思ひをきて帰たるさま也、風は心にとは、わか心にもまかせす、花をみすてゝきたる心にてよめり

一本大伴黒主　一本と付たるは、嘉禄貞応の本の前に、まち〳〵なる本ありき、定家卿相伝之本には此作者なくて、或本此名あるをよろしく思給ふ心ありて書て、さるから一本と付給へるなるへし、哥の躰、定家の心に黒主とおほしきにや[*4]

88春雨のふるは涙か

春雨のしめ〳〵と降うちに花の散行をみて、其心より思へるなるへし、春の雨はあまねく降物なれは、世に人のなへておしむ涙に、思よそへたる也

89 桜花ちりぬる風の

花の風にふかれて空に散をみたる、当位[*1]也、浪ににたりとみる心より、水なき空[*2]といふ詞は出来たり、なこりは、余波のえん有へし、当位即妙[*3]哥也

ならの御門　平城天皇、大同天子、桓武御子也、治四年[*4]、後南都ましく〳〵き、其後又世の御望ありしか、其もとけすして、つゐに又南都におはしましける也、此ならの御門と申は、奈良七代の御事にはあらす、陵和州にあり

90 故郷となりにしならの

故郷のさま也、御門の御身の上をおほしめす心あり、なひきつかへ奉りし人も、かはり行時分の御心なるへし、花のみひとり色もかはらぬとは、御述懐の心なるへし

良岑むねさた　遍昭也、僧正遍昭と入たる所もあり、又俗名をも入[*5]たり、或説には、俗にてよめる哥は俗名を入、法躰以後の詠は法名を入と云[*6]〻、又云、僧に似合たる哥は法名を入、俗に似合たるをは俗名也云〻、此説も哥をみるに其定ともなし、如何云〻

91 花の色は霞にこめて

心は明也、ぬすめとは、花のかをひそかにさそひこよの心也、霞中に花をみたる時のさま也、ぬすめの詞、今も時によりて用へしと云〻、おもひはからふへきにや

92 花の木も今は堀うへし

うつろふ色に、世の人のならはむ事を制したる心也、※1うつりやすきを思ひかへしたる心也、人ならひけりといへるも、我心をことくさにいへる也、非に恋心、(1)春たてはとは、春に成て花の比とみるへし、(2)今はとは、色なる花に心のうつる時をいへる也

93 春の色のいたりいたらぬ

*1表の心は明也、つゐに春色のあまねき心也、裏説、君子の道はいたりいたらぬ処はあるへからす、しかるを其恩に預る事のあまねからさるは、人によるへし、愚にしてをのつからうけさるもあり、又賢者なれとも不幸にてうけぬも有、又不賢なるも幸にうる事もあり、いつれも思へはたゝ我からの理也、此義をしらは恩の及はさるを恨心もやむへし、作者の述懐も侍るにや

94 (朱)三わ山をしかもかくすか

しかもとは、さもかくすか、なとの心也、かうもなと云心也、あやにくに霞のかくすは、人にしられしとする花のあるにやと也、霞をいとふ心より、かゝる心をまうけたる也、万葉に、三わ山をしかもかくすか雲たにも、

95 (朱)いさけふは春の山へに

*2なけ、御抄明也、暮ぬとて花の光のなき※1にてもあらはや、やとりてみんと也、或人云、なけ、にこりてよむともなき心なるへし云々

96いつまてか野へに心の

限もなく奇特によめる心也と*3云々、理は明也、思かへす心あり、人の心の着する処一切如此、されは其理を思かへしたる心也、心の師となりてよめり

97春ことに花のさかりは

ありなめとは、あらんすらめとも也、心は明也、尤哀なる哥也云々

98花のこと世の常ならは

花は散といへとも、又はさきく常也、むかしと成ぬるは、一日くとうつりて更かへる道なき心也

99吹風にあつらへつくる

告也、よくとは除也、一本の花の陰にしてよめる也、風の方へいひやるならひも有物ならは、とよめり

100まつ人もこぬものゆへに

待人のために花を折たるに、その人もこぬ折、*4なに

となく口すさみによめる心也、花をおれは、鶯のうれへつる物を、なといふ心はよろしからす、又益なく花を折て、鶯もはやこぬ心なとも嫌へる説也、只鶯の鳴つる花を折て待人のむなしき折のことくさなるへし、鶯に心をあつかふへからす

101 咲花はちくさなからに

心分明也、千くさなからにとは、花といふ花は皆あたなれとの心也

102 春霞色の千くさに

花やうくうつろふ比、山の霞の色くなるをみて、花の映たる陰かも、とよめる也、遠望の様也

103 霞たつ春の山へは

いつくともなく立こめたる山への霞より吹くるかせに、ほのかに花の匂ひたるをよめる也、尤面白き躰の哥なるへし云々

104 はなみれは心さへにそ

はかなき事に心のうつろふを、世の人にはちたる心也、本心もなくなる様を思かへす也、花の木も今は堀うへしの類也

105 鶯の鳴野へことに

鶯の鳴を聞て行てみれは、けにうつろふ花に風の吹ける、といふ義は嫌ふへき道也、鶯の鳴野へなとに野遊して、をのつからみれは鶯のなけるは、うつろふ花に風の吹けれはと也、少の差別なから、幽玄なるへし云々

106 吹風を鳴てうらみよ

心明也、鶯のこゑも人をうらみて鳴心ちする故ニ、かくよめる也、此心、哥の命也

以上第四日(朱)廿五首

典侍洽子〻小書ニ寛平延喜、掌侍典侍、糸所別当云々、掌侍にて有しか、後に典侍に転したるにや

107 散花の鳴にしとまる

無義、けにとまるならひあらは、涙おしむへきにあらすかし、又景気あり

仁和の中将のみやすん所の家に　此こと書心得かたし云々、説々あり、当流義は、仁和の御時、中将なる人の女の御息所なるへし、家と云へるは、中将の家の事にや

藤原後蔭[*1]蔵人右少将[*2]中納言有穂男[*3]

108 花のちることやわひしき

優なる哥也云々、別而理を付すして、たゝ其まゝにてみるへし、侘しきとは、かなしき心也、なと釈するも不可然也、わひしきとは、たゝならぬ心なといふへきにや、景気の哥也、幽玄也

109 木つたへはをのか羽風に

心明也、こゝら、そこはくなとの心也、おほき也、裏〻花のちるをかなしむ事も、我心より出る也、然を、他におほせてかこつ事を制したる也、鳥の上にかきらす、世上ニ此心ある也、あしき事也

110 しるしなきねをも鳴哉

明也、花をおしと思ふ心より読る也、鶯のとある、の文字、尤優なるをき様也云々、世に観して見侍るへきとそ

111 駒なめていさみにゆかむ

なめて、なへて、共に用へし、ならへたる也、故郷はとよめるに、余情おほしと云々、故郷の花はみる人[*4]もなく、いたつらに雪とのみこそ散しくらめ、と思やりたる也、哀なる哥也、哥のおもては、又たけあり云々[*5]

112 散花をなにかうらみん

花をおしむ心には、とまるへき事のやうに思ふに、さもあらす、散行時、思かへして観したる理也、散花を何かと其まゝにみれは、こと浅也、花をも風をも恨あまりて思ひ侘て、なるへし

小野小町　出羽郡司常澄女云々

113 花の色はうつりにけりな

二の心あり、なかめせし、一説、霖雨也、一説、なかむる心也、一云、花さきなはみむ事を思ひしに、

我身世にふることわさなとに打過して、長雨の比にさへ成て、むなしく花もうつろひぬる事を思へる也、為氏卿は此義を賞し給へりとそ、一云、花のうつりぬるとは、小町身のおとろへを思ふ也、世にふるうちに、物思なとになかめかちにて、いつ過るともなき程にうつりにけり、なとよめる也、是も花をみてよめる心也、両説共用之、に文字四あれとも耳にたゝす、妙也、小町好色の人なれは、世をも人をも恨かちに打なかめてくらすへし

114おしと思ふ心は糸に

花を思ふあまりにわりなくよめる也、こまやかにたくみなる躰也、素性か哥にはみる所待るとそ、余の哥人も又同

115梓弓はるの山辺を

弓を女にたとふと云説あり、不用之、みちもさりあへす、花を女によそへてよめり、心をうつして行やらぬさまをよめる也

116春の野に若菜つまむと

若菜をつみし時、霜雪をふみ分て道もまとひしか、又野遊なとに落花を分まとふ心也、光陰のうつる事を思ふ也

117やとりして春の山へに

心明也、春の山に宿したるさま也

118吹風と谷の水とし

山風、谷のなかれのたよりに花をみて、散ぬる恨をも忘たる心也、風も水も花のためはうらみある物なるを、思ひかへす心也、世上にも此理待るへきにや

志賀より帰けるをうなともの　をんなと読へし

花山　はなやまとは花山也、遍昭か住ける処也、しかに近かるへし

よみてをくりける　此人々は遍昭知人なるへし

119余所にみて帰らん人に

枝は折共とは、くせちなと出きぬ共したへの心也、遍昭は、少されたる哥つねにみゆ

120我やとにさける藤浪

花の折ならぬ時は、やすらふこともなき人のきたりて、花にやすらふをかこちてよめる心也

121いまもかも咲匂ふらん

明也、今歟也、もは、そへ字也、もとみしを思ふなるへし、(1)顕昭は、こ嶋のくまといへり、(2)猿丸哥也

122春雨ににほへる色も

にほへる色とは、うつろひかたに成たるをいへり、つよく降雨には有へからす、打なひきたる様、面白也、下句明也、作者同

123山吹はあやなゝさきそ

あやなくなさきそ也、*1あやなは、かひなき心也、歟冬をうへたる宿に、そのうへし人のみえぬおりなと行て、よめる也、今夜とは今日なといへる、同心なるへし

124吉野川きしの山吹

明也、花ちれは影にもちる心也、うつろひにけりは、うつるとちるとの心を兼たり

125蛙なく井ての山吹

*2幽玄なる哥云々、かはつ鳴は、井てといはむ為也、又は、かはつなとも有へし、山吹の過かたにゐてに行てよめるなるへし、左の注は、作者を賞したる義也清友、贈太政大臣嵯峨后父、*3諸兄ノ孫也云々

126おもふとち春の山辺に

明也、そこともいはぬとは、所もさためぬ也、旅ねしてしかとは、たひねをせはや也

127梓弓春たちしより

両義あり、暮春の心は詞にみえたり、三日卅日比の心也、む月一日より一日〳〵とうつりて、程もなく、三月晦日方に成ぬるを、おとろきたる心也、それを年月のとよめる句、尤幽玄也云々、いるかことくとは、弓の縁也、矢のことく早き心也、一説、*4春たちしの心は同前也、年月のいるか如くとは、年の末までを思ふに程もあらし、とよめる也、三月卅

日比思ふなるへし、此作者の事、長明無名抄ニ、貫之にもおとるましなといへり

128なきとむる花しなければ

是も我心より思ひよれる心也、はては物うくとは、するゑよはになるやうなる心也、うき心もすこし有へし、杜鵑詩不レ如緘レ口送ニ残春一といへるか如し[*1]

129花ちれる水のまに〳〵

まに〳〵は、水にまかせて也、花の流をみて山に入ぬれは、次第ニ春もなく成ぬるとやうに心うるは、きらひ道也、此哥は、やよひのつこもり方の山中の木〻は皆青葉にて、花はのこらす水になかれたる、眼前ニおとろき思へる心也、とめくれはとは、花を見ゆくさま也

130おしめともとゝまらなくに

霞も春の帰る時節は、思たちてとゝまらぬと也、霞をうらむる心あり、とゝまらなくにとは、とゝまらぬといふ心のみ也、思へはとは、霞のさまをかく思ふ也、忘れて又したふ心也[*2]

131声たえす鳴や鶯

明也、春のうちをたに、こゑたえすなけと也、二たひくるにもあらねはと也[*3]

花つみより　師説、花をもとめ愛したる事を花つみと云へし云〻、或説云、三月比、人〻野なとを分て色〻の木草の花を折て、無縁の霊なとに手向事ありき云〻、此事定家卿自筆の本に書加給へるありと云〻、[※1](1)それをみる女とも也[(2)]

132とゝむへき物とはなしに

女ともをあはれと思ふ心をよめり、花を女によそへたる也、行帰るさまをちる花ことにと読る也、思かへしたる所、あはれふかし、心かとは心哉也

133ぬれつゝそしゐて折つる

雨のうちのよしは詞書にみえたり、雨中ニ折たるは、心さしをいたすよし也、年内ニと読る優也、つこも[*5]

りをいくかもあらしといへるも、大やうにて面白云々

134 けふのみと春をおもはぬ

明也、春の中は、いつとてもたつ事やすからぬ花の陰なるに、けふのみと思ふ春の花の陰はことに也、長たかく哀ふかゝるへき哥とそ

以上第五日（朱）廿八首 *1

古今和歌集、

夏哥 夏哥の次第は不定にみえたり、古は夏哥おほくもなかりけるにや、郭公の外少云々 *2

135 我やとの池の藤浪

池の藤も咲ぬ、此上に郭公を聞そへなは、いか斗面白かるへきの心と云説は、嫌道也、心深遠の哥也、可仰とそ、春過夏来て池の藤も咲ぬ、郭公又いつかなかんすらんと思へる心也、たけたかく面白躰云々、(1)

春の内の事をふくめる、余情也、光陰を思へる也 (2) *3

136 あはれてふことをあまたに

あはれとは、愛するをいふ也、心は、たゝひとりあはれと思はせんとて、春にをくれて一木さきたるかと也、花の心を察したる也、夏になりて一木さける花をみるに、春みるよりも哀にたくひなくおほゆるによりて、此心をまうけたる也、さくらむを桜をたち入たるといふ説は、不用之

137 五月まつ山郭公

ほとゝきすは、もろこしには春鳴やうにみえたり、爰には五月を時と、いひならはせり、されは、五月まつとよめる也、卯月の哥なるへし、打はふきとは、郭公の鳴時、羽をひろけぬる也、躰也、又おりはへて、打はへてなといふ心もすこしあり、又あまねく声おしますなけ、と云心こもれり *4 *5 *6

138 五月こはなきもふりなむ

五月は珎しかるへからす、と云心にはあらす、いまたあまねからさるさきにきかはやの心也

139 五月まつ花橘の

橘（タチバナ）はとこ世より来る、なといふ故事をよめるにあらす、むかしの人なとを恋しく思ふ折節、橘のにほひぬるを、かく思よそへたる也、さ月まつとは、橘のさ月を待て匂ふ花なれは也、卯月ニいへる心にはあらす、又彼物語の心にはかはるへし

140 いつのまにさ月きぬらん

郭公のあらたなる声に驚たる心也、覚えすして日月のうつりぬる事を思ふ心あるへし

141 今朝きなきいまた旅なる

郭公の初て打鳴をあはれに聞て、過なん事をおしむ心也、旅なるとは、初て来るをいへり、宿はからなむといふ心より、旅なるともいふ也、下句又面白き心と云[*1]

142 音羽（ヲトハ）山けさこえくれは

ことからたくひなく長高（タケタカキ）き哥也云々、今朝こえくれはとは、兼（カネ）ても越たりし山なれと、ほのかに初て聞たる心也、待きつる心にて、今そ鳴とよめり、景気ニのそむさま、尤面白し

143 郭公初声きけは

両義あり、時鳥は妻（ツマ）をこふる物なれは也[*2]、初こゑを聞て面白く心もそゝろにて、かゝる時人もとへかし、と思ふ心有也、誰とはなく思へる也、思へはかなき心也[*3]けりと思ふ心あり、一云、此初声を心ある人も来たりて、おなしくきけかしの心也、両用之、はたとは、まさになといふ詞也、将字也、但、しかと理をつくへからすとそ

144 いその神ふるき都の

顕注にさま〳〵の義あり、密勘（ミツカンニ）ニ、境（キヤウ）の分別（サカイ）までをたゝすに及へからす、とみえたり、ならを過て磯（イソ）のかみに行心なるへし、磯上は、ふるといはむ為也、故都とは奈良（ナラ）をよめり、万葉にはあすか寺とよめり[※1*4]

145 夏山に鳴ほとゝきす

郭公の声をきゝて、あちきなく悲（カナシ）き心也、詩（シ）にも愁（ウレヘ）を催（モヨヲ）す心に用也[*6]、和哥には此心によめる稀（マレナリ）也、[*5]

物思ある身に此声を聞て、いとゝかなしさのまさるよし也、妻を思ふ心ふかき鳥なれは也

146 時鳥なくこゑきけは
不レ如レ帰(フショキシシカカヘランニハ)と鳴と云心を思へり、いとゝ故郷の恋しくなるよし也、さへの詞、心得かたし、思捨つる古郷も恋敷なる心なるへし※1

147 郭公なか鳴里の
汝か鳴也、あはれとは思へとも、うとましと也*1

148 おもひいつるときはの山の
紅のふりてとは、紅の花を布なとに染付てふりいたす物也、思ひいつるときはとは、思出る時とつゝけたり、時鳥を思ふ折也*2、又ふりいてゝ鳴とは、花やかなるこゑの珎しく聞ゆるさま也、又杜鵑泣レ血(トケンナクチニ)ともいへは、紅のふりいてゝとよめり、此こゑを聞て我思のそふよしを、よそへよめる也

149 声はして涙はみえぬ
我はねにはたてすして、袖の涙にひちぬる故ニ、時鳥の涙はみえぬとよめり、ひつとは、ぬれたる心也、袖をかなしみていへる也

150 足曳(アシヒキ)の山郭公
おりはへては、打はへてと同、鳴ねのあまねき心あり、我思にまさるはあらしと思ふ由を、ほとゝきすにゆつりて、誰かまさると鳴とよめり

151 今更に山へかへるな*3
初五文字の心あたりても聞えかたし云々、一説に、今とよみ切て、更にと心得へし云々、又云、今殊ニの心云々、いつれもわつらはしき義也、今山へ帰るなと、大やうに心得へしと也

みくにのまち　仁明(ニンミヤ)更衣(フカウイ)云々、貞登(テイノトフノ)母也、登は仁明御子也※2

152 やよやまて山ほとゝきす
なき人を思ふ折節、郭公を聞てよめる也、しての山にかよふ鳥なれは也、なき人にことつけせまほしき心也、下句ことにあはれ也、たのみし人なとに別た

るにや、※1紀氏に此名あり、可レ尋レ之

153五月雨にものおもひをれは

時しも晴かたき五月雨の中に、物を思ひてゐたる折ふし、夜ふかく時鳥のほのかに鳴て行を、聞てよめる也、時鳥も物かなしく鳴ぬ、され共、猶もゆく方あるや、とうらやみて読り、哀なる心と云※2

154夜やくらきみちやまとへる

過かてに鳴声を聞て、夜やくらき、又道や迷とよめり、我やとをしもと、卑下したる心あり、くらきにまとふか、又行へき方ある道にまとへる歟と也、やすらふへきにしもあらぬ我宿に、と読る也、感二郭公声一也

155やとりせし花橘も

橘は枯ぬにと心うるは、あまりにつよき心也、不可然、やとりし橘もかはらぬに、と心うへし、尤幽玄なるへし

156夏の夜のふすかとすれは

心明也、夜のみしかき心也、夜のとをける、のの字、優也云々、又云、時鳥の声に貪してかく思ふ也云々

157くるゝかとみれは明ぬる

暁かたに郭公のしきりに鳴心也、夜をしたふかと聞也

158夏山に恋しき人や

声ふりたてゝは、しきりに鳴也、声のしきるを聞て思よれる心也、時鳥のこふる人や山に入ぬらんと也、珎しく思ひえたる心也

159こその夏なきふるしてし

かはらぬ声なから、今あらたに珎しく聞故に、それかあらぬかとよめり、郭公を賞したる心也

160五月雨の空もとゝろに

御抄にみえたり、とゝろは、空もうこくやうにと也、夜たゝとは、夜さはくやうに也、時鳥の鳴さまさる事也、我思ひのある心よりかくよめる也、物を思へはかゝりけると思ふ也

さふらひにて　殿上也

161郭公声も聞えす

此哥、詞には時鳥待哥とあれは、夏の初ニ入へけれとも、哥は待心ともみえす、稀に成たる比の心にや、勅にてつかまつる哥なれは、いつくに鳴声をも山ひこもこたへぬ事はやはあらし、と云心あり、普天下王土ならすといふ事なき心也、こたへやはせぬとは、何とてこたへぬその心也、此時切ニ待心あり

162時鳥人まつ山に

山にゐて人もとへかし、と思ふ比の心なるへし、*1恋のまさる也、又時鳥は妻をこふる物なれは、時鳥の人を待やうに鳴、と聞なしていへる也

はやくすみける所　むかしすみける也

163むかしへや今も恋しき

へは、やすめ字也、我もむかしを思ふ時分、古郷に時鳥の鳴をきゝて思よれる也、故郷にしもとある、しもの二字、殊ニ感ありと云々、*2余情有へしとそ、家伝説、むかしなとや今も恋しきの心と云々

164ほとゝきす我とはなしに

二の意あり、我とは何しにの心也、我こそ物思てかなしきに、我と共には何しにの心也、卯花のうき世中とは、重詞也、渡りかたき世を歎心也、又云、我こそあらめ時鳥は、我にもあらぬになと鳴渡るらんと也、我にてなきの心也、此義宜歟云々

165蓮葉のにこりにしまぬ

不レ染ニ世間法一如ニ蓮華在ニ水一云々、人の心は蓮のことく清き物也、しかるに此心を以て蓮葉の露をみて、玉とあさむく心をかへりみたる也、露をは露のまゝとみるへきに、玉とみる心をきらへる也、あさむくとは、愛し弄する心也、御抄ニ、いつはりはかる也云々*3

166夏の夜はまた宵なから

月を執心のさま、詞にもみえたり、宵のまとおもひしに明ぬれは、月もいつくにか有らんと思ふに、*4さ

もあらねは、かくよめり

167塵をたにすへしとそ思

妹と我かぬへき床夏といふ説は、嫌道也、妹とぬる床のやうに、花の上をおもふ也、花を愛したる心也、又は、床といはむために、妹と我ぬるといへり

168夏と秋と行かふ空の

行かふは行ちかふ也、*1かたへは片方也、半涼しき心也、涼風のすこし吹比弥しき様也、裏〻*2暑涼善悪ニたとへたり、暑は悪也、悪はつよし、物を破る也、されは善悪相対したらむ時も、悪ノ方ニ用心すへき事也とそ

*3以上第六日（朱）卅四首

*4古今　第四

169炑きぬとめにはさやかに

春哥の巻頭のことく、さしむきてやすらかに心うへし、さやかにとは清心也、早涼のいたる比、時の気におとろく心也、*5夏の空のくるしさ、引かへたる心也

秋立日うへのをのことも〻殿上人ともの河せうえうの様、面白かるへし

170河風の涼しくも有か

此哥、晴の哥の躰也云々、逍遥の折に似合たるとなん、貫之か哥は、其もの〳〵によく叶へり云々、あるかとは、有哉也

171我せこか衣のすそを

上句は序也、うら弥しきといはむため也、又めつらしきといふに、我せことをけるもたよりあり、うら弥しきとは、なにとなく弥しき心也

172昨日こそ早苗とりしか

心明也、程もなく過て又来る事、万如レ此、*6景気にのそむ哥也と云々

173炑風の吹にし日より

別れしよりまたぬ日はなけれとも、殊秋に成て、

わりなく思ふさま也、是は七夕にかはりてよめる哥也

174 久かたのあまの河原の
別の切なるへき事を思やりてよめり、君とは彦星の事なるへし

175 天川紅葉を橋に
紅葉を橋に渡すにやと也、紅葉の橋と云物のあるにはあらす、秋をのみ契りて渡る故ニ、かく思へる也、七夕つめとはつま也、実方の、かよふ浮木にとよめるは、紅葉の橋の有やうによめり[*1]

176 こひ〳〵て逢夜はこよひ
心明也、恋〳〵てとをきて、あけすもあらなんといへる心かなへり、第二の句、面白き詞也云々

177 あまの河あさせ白浪
浅せもしらぬ心也、渡りはてねは〳〵とは、ほのかに逢夜の夢のことくなるさま也

同御時后宮[*2](ママ)。

178 契劔心そつらき
明也、心あさからす云々、一夜のあかぬかなしみよりかく思ふ也

179 年ことに逢とはすれと
明也、哀なる心也、をもく吟すへし、感ありと云々

180 七夕にかしつる糸の
かしつるいとは、願糸の事也、竹頭糸左糸七右糸七云々、第一二句、序也、年のをとは、年々相続してたえぬをいふ、思のいとなといふか如し、恋や渡らんとは、七夕の心をふかく察したる心也、はかなき契にして、年々なかく恋渡らん事を歎也[*3]

181 今夜こむ人にはあはし
切に思人なと待心とは、みるへからす、大やうにみるへし、今夜はあはしとは、七夕の契のさまをいまはしく思よし也

182 今はとてわかるゝ時は
明也、切なる心也

183けふよりは今こむ年の
いつしかはいつか也[*1]、こし方を思て、今はたのむかたなき心也、切なる哥也[*2]

184木のまよりもりくる月の
木間(コノマ)の月のもりかねたるを、あはれとみるあまりに、秋といふ物はたゝ心尽しにきたりけるそ、と思ふ心也

185大かたの秋くるからに
おほかたにくる秋なれとも、思ひはたゝ我身ひとつに来ぬる[*3]思也、此哥も、をもく吟味(ギンミ)すへしとそ、物思人の、秋になりて万(ヨロツ)を思つゝけてよめるにや

186我ためにくる秋にしも
わか身にうかれとてくる秋にはあらねともと也[*4]、虫のこゑ[*5]は悲生(カナシミシヤフスル)る物也、まつそかなしきといへは、よろつの思ひこもるへし

187物ことに秋そかなしき
此哥初秋に入たる、尤感(カン)[*6]あり、もみちつゝとは、一木なとやう〳〵色かはりそむる比より、世上の何事もきはまりゆくことはりを観したる心也、哀(アワレ)ふかき哥也云々、高円(朱)[*7]の野ちのしの原するゑさはき[*8]、とよめる哥も此類の心なるへし

188ひとりぬる床は草葉に
明也、秋くる宵(ヨ)はとよめる、夜のなかゝらん事を思ふ心あるへし
これさたのみこ　仁和第二、元右中将云々、光孝(クワウカフノ)御子也、御位の事不定なりし故ニ、御子もまつたゝ人にて、後にみこになり給し也、宇多御門も、初は侍従にてまし〳〵けると云々

189いつはとは時はわかねと
大底四時心惣苦(テイシシイシスヘテクルシ)、就(ツイテ)中(ナカニ)腸(ハラワタ)断(ハタフ)是秋(コレシユフテン)天、此心也、いつはとは、いつとは也、思のいたりての限也
かむなりのつほに[*9]　さるへき人々の、秋の夜をおしむさま面白し

190かくはかりおしと思ふ夜を

秋風すゝしく、※1*1取あつめて深行空のけはひえんなる比、人〻秋の夜を哀みおしむ心なるへし、其心のあまりに、人さへそとよめる也、秋の感さまをこめてよめり、月の夜とは見えす云〻、※2余情かきりなし

191 白雲にはねうちかはし

影さへといふ説は、不用之、御抄、しら雲に*2はね打かはしとは、中空なとにはるかなる心也、哥の躰をみるへし云〻、月前鴈とあらん題には、此躰尤可然、落鴈なとはいかゝにや

192 さ夜なかとよは深ぬらし

夜もはや深ぬらんと打なかめたる折節、鴈打なきて、月やう〳〵かたふく空の様なるへし、哥の*3躰たくひなしと云〻、*4古風なるへし、万葉の哥にや、又*5幽玄也云〻、風情詞つゝき言語道断云〻

193 月みれは千〻に物こそ

夜もなかき比、月に対しては千〻のかなしみの生する心を、いひつゝけたるなるへし、月は陰の気にて、月に対すれは愁も生し、身一の心ちすれは也

194 久かたの月の桂も

明なる月にむかひて思やれる心也、紅葉を橋、といへるたくひなるへし

195 秋の夜の月の光し

月如レ昼といへるやうなる夜のさまなるへし、くらふの山に対していふにあらす

196 きり〳〵すいたくなゝきそ

人のもとにてとあれは、我宿よりも夜のなかき心也と云説、不用之、又、※3はしめて我思人のもとにとまりて、行末のなかき思ひとなるへき事を思てよめる也云〻

197 烋の夜の明るもしらす

明るもしらすとは、いたくなくさま也、それをきゝて、*6我ことくとよめり、思の切なる心也

198 秋萩も色つきぬれは

秋はきもやう〳〵色かはる時分、蛬の声を聞て、

我ことくかなしきにや、とよめり

199 秋の夜は露こそことに

露はいつもをく物なれとも、秋の夜は殊ニ深かるへし、露の夜さむなる比の心也

200 君しのふ草にやつるゝ

まつといふ心より、君しのふ草にと読り、第一第二句、やさしき詞也[*1]、荒たる宿(アレヤト)にひとりのこりて、松虫の催(モヨホス)す声にいとゝかなしき心なるへし、恋の心なとにや

201 秋の野にみちもまとひぬ

旅の心にあらす、野遊にこゝかしこ分つゝまよふ様也、松虫の声する方になといへる下句、野遊の心にかなへり

202 烋のゝに人まつ虫の

虫の哀(アハレ)に鳴こゑ、人まつやう[※1]の心あり、下句、其心よりいへる也、とふらはむは、なくさめむの心也[※2]

203 紅葉はの散てつもれる

秋もやう〳〵ふかくなりて、紅葉のちり敷たる比の宿には、とふへき人も思ひ絶たるに、松虫の人まちかほに鳴を聞て、かくよめる也、こゝらはおほき心也、一云、我思にて虫の心を察(サツ)したる也[*3]、秋の末の哥とみえたれと、虫の哥をあつめたる処にて、始末相交なるへし、又、松虫はたのむ人もあるにや[*4]、といふ心もあり

204 ひくらしの鳴つるなへに

日くらしの声を聞て、日も暮ぬるにやと思ひしは、山の陰にて有けるとよめり、なへにとは、鳴つるからになとの心也

205 ひくらしのなく山里の

明也、ひくらしは山里のさま也、姿(スカタ)心優(イフ)に心ふかし云〻、以上二首は猿丸哥也、ことに好士也とそ

206 まつ人にあらぬ物から

鴈の鳴そめたる声をあらたにきけは、まつ人なとの来たるを聞こゝちする由也、まことにさる事也[*5]云〻、

新鴈の声を聞たる感よりよめる也

207 炁風に初鴈かねそ

蘇武か故事は勿論なれとも、初鴈の声を聞て面白く思ふ心より、たか玉章をと思へる也、初鴈かねと読る、肝心也、是も珍しき声に感して思よれる下句也[*1][*2]

以上第七日（朱）卅九首[*3]

208 我門にいなおほせ鳥の

此鳥の事説々あり、御抄ニみえたり、如此事をは、御抄ニも態かくして注し給事あり、此鳥三鳥の一也、口伝は裏の心也、おもての義を用へし、御抄のおもむき面白し[*4]

209 いとはやも鳴ぬる鴈か

いとはやくも也、鴈かとは、哉也、かゝる折、鴈の鳴たる也、賞したる心也、色とる木きとは、染初たる心也[*5]

210 春霞かすみていにし

先景気を思へし、春の空よりの心こもれり、春の空に帰る折はうらめしき心あるを、秋来て初鴈の声をきけは、恨をも忘て感する心也、世上の様も如此なるへし、又云、春秋の程もなく世間のうつり行事を思心也

211 夜を寒み衣かりかね

衣かりかねとは、衣をかると云縁有詞也、鴈の衣を借といふ心にはあらす、哥の心は、秋の空の夜寒になる比、鴈鳴折ふしの景気也

212 炁風に声をほにあけて[*6]

ほにとは、あらはなる也、鴈を舩にたとふれは也、初五文字ことに面白し云々、秋風の空に鴈のさやかに鳴たるを聞てよめる也、天のと渡るとは、空を渡る也、景気又可レ見云々、遠天の晴たるに遥にきく也[*7]

213 うき事を思つらねて

秋の夜のね覚に、こし方の事、又時にあたりたる思なと思ひつらぬる時分、鴈のなく折愁にたへすして[※1]

打鳴心也、又云、一事〳〵を思ひつらぬる心也云〻

214 山里は秋こそことに

山里の哀はいつと侍らねと、鹿の声する時分の秋のね覚こそ、ことに侘しけれと、*1くときたてたる也、侘しきとは、一事ならす心ほそき様也

215 奥山に紅葉ふみ分

外山（トヤマ）のもみちも散はてゝ、奥山（ヲク）のかけをたのみしに、それも落葉の比ふみ分て鳴鹿の声に、物の限をおもふかなしみ也、かゝる時、秋はかなしと也、(1)是貞（コレサダ）の家の哥合とあり、不審也、時代相違（サウイ）す、※1(2)猿丸詠也元明比（ゲンミヤフノコロ）人云〻

216 秋萩にうらひれをれは

*2とよみ、うらひれとは、物思ひなつむ様也云〻、わか物思ふ折節、*3花もやう〳〵おとろへて、露けくうつろふ時分なるへし、此時鹿も物かなしけに、とり*4もしつめす鳴を、ことはり也と聞心也、秋萩にうらひれとつゝけたるは、※2萩に対しての心にや、又、かゝる折ふし、鹿の声を恨る心も侍るにや

217 烋萩をしからみふせて

しからみふせては、鹿の萩に立なれつゝ鳴様也、(1)一云、領する心也云〻、*5めにみえぬとは、いつくともなく聞たる也、(2)はるけき野への様也、をとゝは声の事也、又云、さやけきは、ひやゝかなる也

218 秋萩の花さきにけり

秋はきの咲ぬるをみて尾上の鹿は、と思やりたる也、此高砂は山の惣名也、たかき山をいふへきにや

219 烋萩のふるえにさける

古枝（フルヘ）には花咲ぬへくもみえぬに、又*6咲たる也、故人の、もとの心を失せぬに、よそへたる也、詞にみえたるか如し

220 秋はきの下葉色つく

萩もやう〳〵色かはる比、我いねかねたる心より、人の事をも思やりたる也、時節の感なるへし

221 鳴渡る鴈の涙や

物思ふ比は、萩[*1]の露もみし秋にもあらすたゝならすみゆる折に、鴈の鳴渡るを聞て、かく思よれる也[※1]

222萩の露玉にぬかむと

無義[*2]、ならの御門は聖武天皇也、奈良七代の内也、此集、号奈良御門、三あり云々、裏〻君子の心は、わか賞する事をも世間にゆつりて思ふへし、憐愍の心也、御門御製に殊勝也云々

223折てみは落そしぬへき

たはゝ、とをゝ、共に用之、なひくさま也、心は面白き様也、花の露を愛して、とかく思ふ也

224萩か花散らむを野の

思ふ人なとのかたへゆかむと思ふ心にて、かゝる折[*3]こそ、又哀とも思ふへけれなと、[※2]又云、たゝ萩を愛する心にて読り云々、此義猶よろしき歟云々

225穐の野にをく白露は

目前の様也、面白躰なるにや

226名にめてゝおれるはかりそ

序には、嵯峨野にて馬よりおちて云々、爰には、題しらすとあり、優になれるにや、女郎[*4]をは女によそふれは也、作者遍昭なれはかくよめるなるへし、女におつる心也、馬よりおつる心をは不用也、又序[*5]にあるをなをして入たる事もあり

227をみなへしうしとみつゝそ

女郎花、墓上より生たる花也、なと云説、不用之、心明也、又詞書に、遍昭かもとにまかるとあり、其心あり、遍昭はたくひなき道心の人也、其所へ心さして行道にて、女郎花[*6]の男山といふ山に咲たるをみて、此心出来る也、遍昭は最愛の妻を捨て遁世の人となむ

228秋の野にやとりはすへし

野遊の心也、とても旅なる身にもあらすと也、[*7]女郎[*8]を愛する心也

229女郎花おほかる野へに

明也、あやなくは、せんもなき也、又は、あちきな

き也

朱雀院の女郎花合　宇多御門御事也、此院にまし〳〵ける時の事なるへし、朱雀冷泉は、おりゐ御門ましますと云々[*1]

230をみなへし秋の〻風に

心をもをかす打なひきたるを、はかなく思ふ也、女のさま也、又云、女郎花の心一を誰にかよすらむ、とゆかしく思ふ由也、いつれも面白云々[*2]

231秋ならて逢事かたき

明也、珎しく思ひえたる心也、更にくたらぬ躰ことから也

232誰か秋にあらぬ物ゆへ

秋にあふも、女郎花の我秋にてこそあれ、心より色めきて又うつろひなとするも、誰ゆへならぬ物をと也、女の心になしてよめる也、色に出るとは、思ひの色也

233妻こふる鹿そ鳴なる

女郎花を妻となしてもなくさめかしの心也、躬恒か作、常にかくたくみ也

234女郎花吹過てくる秋風は

明也、なつかしき心あり

235人のみる事やくるしき

霧のうちに、ほのかに花をみて思よれる心也、景気を思ふへし

236ひとりのみなかむるよりは

二の意あり、やもめにて独なかめたる比、かく思也、又云、女郎花のひとり有をみて、荒たるやとりなりともうへてなくさめましと也、女郎花のひとりなかむる心をおもひやりたる也、いつれの説も面白し云々、始の説、猶宜歟云々[*3][*4]

兼覧王　惟喬男

237をみなへしうしろめてくも

うちあれたる家の、男ひとり住らんなとおほゆる所に、女郎花のさけるをみて、うしろめたしと也、た[*5][*6][*7]

〻ならしなんと思やる也

238花にあかてなに帰るらん

明也、こと書の心みえたり、あかす帰る心也、世につがへ人にしたかへは、身にもまかせぬ心あり、貞文好色者なりき云〻

以上第八日（朱）卅一首[*1]

239なに人かきてぬきかけし

心明也、たか袖ふれし宿の梅そもの類也、此五文字をは、やはらかに吟すへし云〻、たしか過たる句なる故也[*2]

240やとりせし人のかたみか

思ふ人なとの宿にかりに立よりて、あかす思へる心より思よれる也、一説、我宿に人のやとりし其かたみともいへり[*3]

241ぬししらぬかこそにほへれ

何人かきてぬきかけしの類也

242今よりはうへてたに見し

大かたも野への薄ほにいつる比の秋は物あちきなきに、殊に物思ふ人なとは物かなしき心なれは、かくいへる、有増事也、たにの詞、つよくはみるへからす、うへてもみし、なとの心なるへし

243烋の野〻草のたもとか

下句は上を訓尺したる也、秋の野の景気を愛する哥也、打まねくやうなれは也[※1]

244我のみやあはれと思はむ

物ふりたる宿なとに、きり〳〵すの打なきつゝなてしこの哀に咲たるをみて、尋とふへき人もなけれは、我のみや哀と思はむとよめる也、又云、我のみや〻〻とは、誰もかゝる様をはあはれとこそおもはめと也

245みとりなるひとつ草とそ

明也、裏〻〻一気のおこりて、葦芽の如しなといへるより、人生のさま〳〵四時をゝくりむかへて栄へ衰ふる事を、思ふなるへし

246もゝ草の花の紐とく

たはれんとは、たつさはらん也、野遊の心也、うかれ行とも人なとかめそと也

247月草に衣はすらん

明也、はかなく思へる、*1(ママ)事に面白し云々、哥人の心は、はかなきを賞して、物にふかく着する性をは嫌也

248里は荒て人はふりにし

荒たる宿の様也、人はとは、我身のふり行心、又は母なとの事にもや、物かたりのつゐてにと詞にあれは、かゝる様をおほしめしやれ、と思心なるへし、尤哀ふかき哥云々、こまやかなる躰にや云々

古今〜五　秋哥下

249吹からに秋の草木の

此哥、序には野への草木とあり、野へと有しを、貫之撰入レ之時、烋と改て入たるなるへし、吹からに〜山風の一吹〳〵ふく度に、秋の草木のしほれゆく故ニ、あらしといふらん、とよめり、あらき心也、山風は嵐と云字也、といふ説は嫌之也、むへとは、ことはり也と云心也、宜字云々、康秀はたくみなる躰をおほくよめりと*2云々、九品の時下品に入と云々

250草も木も色かはれとも

草木のうつろふ比、さもあらすして、しかも浪の花の面白きをよめる也、景気有云々、たゝしき哥也云々*3、或説(朱)、家集ニ、人の処にまかりたるに機嫌よからぬ事ありて、帰て大盤所に出たるに、人々のなたらかなるをみて、大海のをもむきを思ひて、独吟と云々、如何、独吟のを又哥合に出したるにもや

秋の哥合しける　何の家ともなし

よしもち　淑望は貫之か猶子也云々

251紅葉せぬ常磐の山は

明也、余情あり云々、ときはの山里に住人は、紅葉

なんとの面白き景になくさむ事もなくて、只風のをとにのみ秋を聞らんの心也、聞渡ると云詞、感あり、秋風の思ひのみを思ひやる心なるへし

252霧たちて鴈そ鳴なる

面白き躰也云々、第五の句たしか過たると古人評け[*1]り云々

253神無月時雨もいまた

神なひ、(朱)[*2]神無月によめるにあらす、(1)又、神無月の時雨もいまたふらぬ比と也、(2)(朱)神無月は時雨といはんため也、裏〻身上の行末なんとを人々しらさる也、此哥は此理を思て、身退[※1]へきをしへ也[*3]

254千はやふる神なひ山の

神社の紅葉なれは思懸し、なといふ説は嫌之也、ちはやふるは、神とよめる枕詞也、境界にうつりて本心を失ふ処をかへり見たる心也、又、うつくしき物もうつろふ習を思ふへき也

255おなしえを分て木葉の

秋の西より来るといふ事は勿論なれとも、今此紅葉をみるに、領解したる心也

256秋風の吹にし日より

音羽山は、紅葉を賞する山也、秋の立にしより程もなくうつり行事を、思へる心あり、景気面白き哥也

257白露の色はひとつを

明也、其色々にわかちて染たるをかくよめり[※2]裏〻君子たらん人は平等の心なるへきに、偏頗なんとある事を歎く心也

258烋のよの露をは露と

秋の夜の露はことに深くして、草木の色も染ます物なれは、秋の夜の露と読る也、[※3]感したる也云々、野への色のたくひなくみえたるに、鴈の鳴折、ひとしほなれは思よれる也、鴈の涙や落つらんのたくひ也

259烋の露色々ことに

明也、又、異にとよむ説あり、心は同にや[*4]

260白露も時雨もいたく

明也、見所ある哥也云々、守山に漏とよそへたり

261雨ふれと露ももらしを

かさとり、笠を取と云心にはあらす、雨に笠は縁あれはつゝけたる也、心は明也

262千はやふる神のいかきに

あへすとは、秋にたへすの心也、心は、時節来りては、神のいかきをたのむ葛ものかれぬ事はりにてうつろふ心也、※1世中の理、又同

263雨ふれは笠とり山の

是も、雨ふれは笠をとるといふ心にはあらす、哥の心に不可然云々、笠の縁(ヘンマヽ)によめる、優なるへし、心は、雨ふれは袖さへそてるとよめる也、笠取山二首(朱)の間に、神のいかきの哥の入たる事を不審ありしに、答云、山はいかてかと読るさまと、神のいかきにはふ葛もとの哥の心つかひ、類する故也、又、前の笠取の哥は、白露もいたくもる山と、雨ふれと露ももらしとの詞の類する故也云々

264ちらねども兼てそおしき

明也、今は限の色とは、染尽したる比の事也、欠盈の心を思ふへきよし也

265たかための錦なれはか

いかなる人のためにか立かくすらんと、霧の中にあかす見たる心より思ふ也、人のために切にするかの心也、景気面白し云々、怪惜(欺)するかと思ふ心にはあらす

266炾霧は今朝はなたちそ

さほ山に霧をよめる処也、よそにてもみむとは、心さしをふかくつけたる心也、今朝はとは、只今の時節の感也

以上第九日(朱)廿八首*2 *3

267さほ山のはゝその色は

心は明也、炾はふかくも成にける哉とあるを、心にしめて吟味すへし、万の心こもるへし云々 *4

268うへしうへは

花に付[*1]たりとあり、かゝる哥は殊ニ花を賞して読へし、うへしうへは、かくうふるとうへはの心有へし、秋なき時や云々、秋たゝむ時は、必年々咲へしと也、第二句粉骨也、哥人思へき所也云々

269久かたの雲の上にて

菊を星かとみたる也、あやまたれけるとは、おとろく心あり、左の注に、殿上ゆるされぬ時めしあけられたる時と云々、其心をよめる也

270露なからおりてかさゝむ

菊の齢をのふる心也、露なから折てかささんとよめるわたり、爰にやさしく読[*3]る云々、露は草木を養[*2]ふ心あれは也

271うへし時花まちとをに

明也、うつろふ秋にあはむとやみしの心は、世間の事みな如レ此、この哥におなし、し文字三あり、され共、みゝにもたゝぬにや云々[*4]

[*5]おなし御時〻吹上の浜のかたに〻其時のうちに、此哥は吹上のかたありし所によめり、といふ詞也すかはらの〻小書にみえたり、右府にて在ましけるか、左迁の時除名たり、其後、贈位たひ〳〵なり[*6]しか共、それは又、此集以後の事なれは如此云々[*7]

272秋風の吹上にたてる

時の興に乗して花を賞する哥なれは、珎しくあらたによみ給へる也、花とやみん、浪とやみん[*8]の心也

273ぬれてほす山路の菊の

仙宮に〻かたを　絵を題にてよめる也

仙境のさま也、ぬれてほす露のまとは、そとの程也、いつかちとせを云々、仙宮にいたれる人に成てよめり、やかて千とせをふる心ちする故にかくよめり、塩かまにいつかきにけんの類なるへし[※1]

274花みつゝ人まつ時は

白衣佳人の故事は爰には不用、一二句、花をみて人をまつとさしつめて心うるも、嫌心也、人を待

比、花の白妙なるを何となく思ひよそへたる心とみるへし

275 一本と思ひし花を

菊を花とのみよめる也、只みたる端的也、此哥花の影のうつる心は勿論なれは、其沙汰をせさるをよしとす、右四首同時哥也

276 秋の菊にほふかきりは

明也、匂はむ限はかさゝんと也、詞にみえたり、[*1]あらたになくなりたる人を思ふ比なとにや、花よりさきといへれは、[*2]後ともしらぬ心あり

277 心あてにおらはやおらん

かさね詞也、おらはやとは、有増にいふ也、白妙なる花のうへに初霜のをきたる様の心也、[*3][※1]花をも霜をも愛感したる心なるへし、心あてにとは、霜のをきまとはすによて也、埋はてたるにあらす[*4]

278 色かはる秋の菊をは

白菊のうつろひそむる比面白きを、ふかく愛する心より、かく思よれる也、一草より二様に花の咲たるかと思よし也

279 秋をゝきて時こそ有けれ

仁和寺に　寛平法皇此寺に在ましける比なるへし[*5]

さかりの秋を置て、又時こそ有けれと也、うつろへるを愛したる也、仙境の事を思ひてよそへよめる[*6]也、賞し奉る心也

280 さきそめし宿しかはれは

明也、詞にみゆ、色さへにとは、所もうつろひたる心あり

281 さほ山のはゝその紅葉

明也、ちりぬへみとは、ちりぬへくなりぬる也、かゝる折をみよと月の照すと也、此哥よりは秋の落葉の部也、[*7]故、紅葉の哥の次に菊哥ありて、又如此

282 奥山の岩かきもみち

いはかきは、岩のかさなりめくりたるか、垣のことくなるをいへり、[*8]奥山の様明也、又詞にかける心を

よめり、紅葉を我身にたとへてよめり、日光は君恩のよそなる心、[*1]又いく程も有へきならぬ心也

283 たつたかは紅葉みたれて

当位即妙之景気也、下句殊たくひもなく新なる作也云々

此哥は、文武、定家卿注也、奈良御門を文武と注し給事有レ子細、序にいたりて可聞之云々、貞応本の規模也、嘉録本に、阿仏写之云々、[*3]文武天皇行幸の時御哥也、嘉録本[*2]に書加事の沙汰、後光厳院御時、[*4]良基公へ為明卿申上し事也、又此哥、上の三句を古の字にあてゝ、下二句様の委を今の字にとる、古今一部は此哥より出ると云口伝あり

284 龍田河もみち葉なかる

家隆卿は、嵐ふくらしとはなとなかりけんと云々、定家卿は此義をうたてく思給へり、[*5]打吟するにあちはひ限なし云々、時雨ふるらしとあれは、こし方時雨きぬるより今も思やれる心こもりて、大やうにおもしろしとそ、又上下をならへてみるべし、小書に云、此哥不注人丸哥云々、[*6]定家卿注也、何本にも[*7]人丸と注せすと也、(1)されとも人丸の哥也と云注也、(2)此哥を[*8]も古今の字にとる事あり、此立田河の二首は、君臣の道、此集の根源也、非に師説一者難レ許云々

以上二首の子細、序相伝之時可聞之云々

285 恋しくはみてもしのはむ

散にし木末の紅葉の恋しくは、木本の落葉の面白き[※1]折、風の吹ちらすをみてよめる也本ノマヽ

286 炉風にあへす散ぬる

二の意あり、秋風にはかなくたへす散行もみちのことく、我身行ゑもさためすとかなしむ也、又云、紅葉はのど序をきて、心は、風にさそはるゝもみち葉ゝ、落つく所も有へきを、我身は更に行ゑもなき事をかなしむ心也、[*9]是もしにあたりて也[※2]

287 穐は来ぬ紅葉は宿に

炉はきぬとは、炉も過行心也、ゆきぬといふを上略

したる歟と云々、六巻注にも、炑の過る心也とあり云々、心は、秋暮て紅葉はちりしける比、ふりたる宿のさま也、うしともかなしともいはぬ心にこもり[*1]て感あり[*2]云々

288 ふみわけてさらにやとはむ

さらにやとは、態といふ心と[*3]云々、又といふ心にも通すへきにや、山里なとにても人の家にても紅葉の散しけるをみて、忘かたくしたふ心ありて、さらにやとはんとよめり、ふりかくしてし道とみなから、といへる二たひの心にもや[*4]

289 秋の月山[*5]へさやかに

明也、濃なる躰也云々、山[*6]へなといへるわたり面白し云々

290 吹風の色のちくさに

当位の面白心也、第一二句の作あらた也

291 霜のたて露のぬきこそ

露霜の織出したる紅葉の事也、紅葉の色々面白をみれは、程もなく散行事をおしむ心よりよめり、珍しき作也

292 侘人のわきて立よる

雲林院は花も紅葉もある所也、世間不運なる理也、世上はかゝる習そと観して、心をやすんする事有へし、又、執心あらせぬも、よしやと思かへす心も有へきにや

293 もみち葉のなかれてとまる

明也、湊とは、津みなとゝて、舟[*7]ものより所とする処也、女御の御事によそへて、めくみのふかき心を、紅ふかきとよめり、紅葉々の〻人々の寄する心さしもふかゝるへし、しかれは又恵も深かるへしの心也

294 ちはやふる神世もきかす

立田川の秋の末つかた、落葉の当位、言語も難及さまなれは、神世もきかすとよめり、是も御息所の御事をほめたる心あり[※1]

295 我きつる方もしられす

明也、ちるとまかふとは、ちるとなれは必道のまかふ心也、又、たゝ散まかふなるへし、我きつる方さへしらぬは、散まかふ事のしけき心あり[*1]

以上第十日（朱）廿九首[*2]

296 神なひのみむろの山を[*3]

明也[*4]、落葉の哥也、紅葉に映（エイシ）したる心のみ也

297 みる人もなくて散ぬる

明也、深山の紅葉をあはれふ也[*5]、詞におらむとてとあり、かゝる所のを、我さへおらすはの心有へし云々、又たゝ此所のさまはかりにても

298 たつた姫手向（ヒメタムケル）る神の

たつた姫の心を尽してそめ〳〵し紅葉をちらすは、たむくへき神の有にこそ、とおもへる也

をのといふ所に　当国の小野にやと云々[※1][*6]

299 秋の山紅葉をぬさと

秋の山かぬさと手向る故ニ、我さへ旅心ちすと也、旅にぬさを手向る事なれは也、心ちして、心ちするといふ詞は耳なれたる故にや、きらはるゝ也、但、旅心ちするといへるはくるしからすと云々

神なひの山を過て、立田河の水上、神なひ山也

300 かみなひの山を過行

わか過行やうに烋の過行とよめる也、其秋の手向るぬさ也、又我過行事はいはすと云々[※2]

301 白浪に秋の木の葉の

眺望（テウバウ）の哥也、落葉の河上にうかへるをみては、大方の秋の愁（ウレヘ）[*7]世の思ひをもなくさめぬるに、白浪のは[*8]やき流に、をしなかして行程に、なくさめし心のたよりをうしなふ処を、海人の船をなかしたるによそへたる也[※3]

302 もみち葉のなかれさりせは

五文字先興（マツケウ）すへき心みゆ、水上（ミナカミ）の紅葉の面白よりおこる也、水は不変（フヘン）なる物なれは、流さりせは誰かしらまし、といへり、又、水上の景（ケイ）に乗（ショウ）して、落葉

の恨をも忘たる様也、此哥のたくひを、二条家の作の躰に執したると云々、すこしの所に珎しく成義也

303 山川に風のかけたる

落葉の留て水をせく心にはあらす、山川のはやき水上に、落葉の嵐もはけ敷て間断なき様也、景気を思へし云々、上句たくみなる作也、志賀山越の秋の興也

304 風ふけは落るもみち葉

ちらぬ影さへ〳〵ちるもちらぬもみゆる心也

305 立とまりみてを渡らん

無義、絵にかける其人になりて読る也、景気也

306 山田もる秋のかりいほに

或云、たうといふ鳥也、不用之、又は庭たゝき也云々、此ニハ無用也、此哥にては鳥の名をたゝすに不及、此哥は当位面白き様也、秋の田面の露をみる時の心也、稲の縁也

307 ほにもいてぬ山田をもると

ほにもいてぬ比より程をへて苦身したる様也、哀なる心也云々、五文字より山田のさま也、猿丸哥也、家集に恋哥也

308 かれる田におふるひつちの

ひつちもほに出る事もあり、是はほにいてぬをみてよめる也、朝にもつかへし人の出身なくして、身上を比してよめる也、身を思ふ折節見たる作也

309 もみち葉ゝ袖にこき入て

明也、秋も暮ぬ、紅葉もちりはてたり、と思はん人にみせはやの心也

寛平〳〵ふるき哥奉れと云々、みむろの山にしくれふるらしの名哥をたてまつりて、そのおなし心をよめる也

310 深山より落くる水の

或説ニ、落葉も過て水の元の色になかるゝをみてよめる心也云々、嫌道也、落葉のなかるゝをみてよめるなるへし、詞にもおなし心をとみえたり、尤哀なる心也云々、俊成卿、此哥を立田河の哥に合給へ

りと云々、[*1] 俊成卿は、[*2] み山より落くる水を、[*3] みむろの山に時雨ふるらしに合、定家は、[*4] 秋は限といふを、みむろの山に時雨ふるらしに合給へりとなん、此用様に浅深有へしとそ[*5]

311 年毎にもみち葉なかす

立田河紅葉に名をえたる所にて、年々歳々かゝるよしをよめり、みなとは、紅葉のなかれとまる所をいへり

312 夕月夜をくらの山に

鹿の声を今きく心にあらす、夕月夜の比より鹿のねを聞し内に、炁の暮ぬる事を思ふ也云々、又云、夕月夜は、をくらの山といはん枕言也、或、今きく鹿の声なから、秋も暮たる心也、何も用へき説也、後の義は猶優なるにやと云々、声の内にとは、鳴一声に明るしのゝめの類也、所の興を思入てみるへし[*6]

313 みちしらは尋もゆかむ

秋をしたふ心也、秋を尋もゆかんと也、おなし卅日とは、前の詞書の哥の同時のつこもりの事也と云々、行秋のぬさを手向ると也

(1) 古今　第六冬哥

(2) 四季を六巻とする事六義を表す、六根[*7]をも

よみ人不知　口伝延喜御製云々、[*8] 彼御製[*9]はいつれも其心ふかし云々

314 立田川錦をりかく[*10]

明也、をりかくとは、織かくる也、にしきをりかく神無月、とつゝけてよむ説、又、神無月の時雨の雨を、と心うる義あり、景気の面白き心あり、共用之、其謂重可聞之云々、又貫之作と云義[*11]あり、[*12]しからは、やすらかにしてしかも一ふし有躰なるへし云々、猶有口決云々、文武天皇立田川に行幸ありて、人丸合躰として読給ひける哥をうつしたる心也、されは、文武人丸の二首を古今の古の字にあつる也、此哥をは今の字にあつる也、此哥の心を二に云[*13][*14][*15]

事、御門と貫之との心にあてゝ二首用る也、仍貫之か哥、別にはなし、此哥、冬の巻頭に入事、此集に秋おほく落葉の哥あり、冬の落葉に此哥よくあらは也、下の心、春夏炁は不定之時也、※1冬は物皆おさまりて実なる時也、春は花さき、夏葉さかへ、炁色付は、皆不実*1之義也、草木落葉して根に帰るは実所の姿也、是王道の大意也、実なる所に心を定をけるは、あたなる方へ心をやるも、みたるゝ心はなき也

315 山里は冬そさひしさ

山里を都に対していへる心也、山里は四時さひしけれとも、取分冬そさひしきと也、春は花鳥のたよりにも人めをみる事あり、夏は郭公なと、秋は草木の紅葉に付て、をのつからとふ人も有へし、冬になりてさひしさのみなる心尤深かるへし、思入てみるへしとそ

316 大空の月の光し

月の清くやとりつる水のいつしかこほりたるをみて、月に映せられて氷も先むすひける、と思よれる也

317 夕されは衣手さむし

夕されはとは、夕にしあれは、なといふ心也、*2たゝ夕に成たる心也、たゝ夕暮なるへし、吉野ゝ山を思やりたる心、さのみとをき所よりにてはあらしと云ゝ、又、彼山は雪の深き所なれは、都よりも思やるへきにや、長高躰也、余情ありとそ、万葉には夕去と書、但、去心はなし

*3以上第十一日(朱)廿二首

318 今よりはつきてふらなん

相続ての心也、すゝきをゝしなひかす程の雪也、といふ義は悪し、薄もそのまゝにて、うす雪に降*4そめて、すこし打なひくはかりの雪なるへし、雪も薄も面白き程也、かやうに相続てふれといふ心也

319 降雪はかつそけぬらし

冬も雪のふりきゆる事あれは也、大雪にはあるへか

らす、滝の音のまさるやうなるを聞て、思へるなるへし

320 この川に紅葉[*1]はなかる

落葉の山川に流来れるをみて、さしむきて此川にとよめり、是は常の落葉の比過たる時分なるへし、冬あさき比の雪はやかてきゆる也

321 古郷は吉野の山し

吉野の古郷の感也、荒たる所は雪もふかき心あり

322 我やとは雪ふり敷て

雪には道のたゆるならひなれとも、又必[*2]たえはつる事もなきを、只我宿から問人もなけれは、道たえたるを思ふ心あり

323 雪ふれは冬こもりせる

御抄にくはし、冬こもる草木とは、花も葉もなく枯たる木の雪中の様也、さくや此花といふ哥[*3]よりおこれり、春のちかき比の雪を花とみる心よりよめる也

324 白雪の所もわかす

志賀は花の処なれは此心あり、山の岩ほの花もなき所に、うす雪なとのむら〳〵面白きをみてよめる也、裏説、花とは和する心あり、和する心なる人には、いかなる磐石の如くなる心もやはらく事ある理也、井蛙抄(朱)、文覚(ママ)西行を批判せし事、此心にかよへり、又云、必とする事なかれの心也、岩ほにも花のさく如の事有と也

325 みよし野ゝ山のしら雪

故郷さむくとは、ならの古郷の事也、幽玄なる哥也云〻、余情限なし

326 浦ちかく降くる雪は

浦ちかき所にて雪のふるをみたる心也、末の松の浪に思よそへたる也、景気の哥也云[*4]〻、金玉集には人丸哥といへり

327 み吉野の山のしら雪

山ふかく雪をふみ分て入にし人の、心さしのふかき事を哀と思に、あのことくをとつれもなきを思入た[*5]

る也、余情あり云々、世のうき事なとも、思しられぬるなるへし

328白雪のふりてつもれる

山里ならぬ宿も雪の中の物心ほそき時分、山さとを思やりたる也、何事もあ※1となくこそ思けちて、すむらん人を思ふ也、忠岑殊*2上手也と云々、源氏物語にかゝる所にすむ人、心に思ひ残す事あらし、なといへるか如し

329雪ふりて人もかよはぬ

雪ふり敷て道もたえつゝ、人もとふへくもおほえぬ時分、打なかめて、何事か我思ひこし事の跡あると※2思ひゐたるに、又衆相の跡なき事を観に*3云々、道なれやとたとへ思也、冬は空劫也、上句を序として、跡なしとうけたり、さりなから、雪中の観心なるへし、らんは詞のみ也

330冬なから空より花の

漸く春ちかき比の空をなかめたる折也、春はいつくより来るともしらぬ故に、かく思ひよれる也、新なる作也

331冬こもり思ひかけぬを

我冬こもりしたる也、木高きひまより雪のふりくるを花とみて、雪そふりけると思へる也

332朝ほらけ有明の月と

山といふへきを里とよめるは、心有へし、有明の月にまかふ程の、うす雪の※4面白き興なるへし云々

333けぬか上に又もふりしけ

明也、春霞たちなはなとのわたり、殊優也云々

334梅花それともみえす

疎句哥也、あまきるとは、うすくもりたる様也、すこし空のきら〳〵としたる心あり、大雪とはみえす、ふかゝらぬ雪のなへてふりたるなるへし、花も雪も難分ほとの様也、花をも雪をも賞したる哥也

335花の色は雪にましりて

明也、かをたにゝほへの、をの字、人にわかるゝ事

を、人をわかるとて、といへる類也、又妹を恋といふ心に、いもに恋といふも此類也

336梅のかのふりをける雪に

ことこと、悉也、誰かかくわかんと也、ことく、又は清歟云々

337雪ふれは木毎に花そ

木ことにとは、梅〻字の心也と云説、不可用之云々、諸木の雪も面白き比、梅を賞したる心也

338わかまたぬ年は来ぬれと

年はきぬるとは、歳暮に成事也といふ義は、嫌道也、晦日なれは、明日の春の来る事をいふ也、冬草の枯にし人なといへる渡り、優也云々、冬草は枕詞也、又はにほひとなる云々

339あら玉の年のおはりに

年〻如此うつり行事を思也、初五字、幽玄にをけりと云々、此哥思入て心うへし

340雪ふりて年の暮ぬる

貞松は年の寒にあらはるゝ心也、こしかたは思ちめぬを、年暮に思えたるこゝろ也

341昨日といひけふと暮して

必歳暮の哥ともみえねとも、こと書にてしられたり、人の心は千とせをすくすとも、又如此なるへし

342ゆく年のおしくも有かな

歳暮はいつもおしき事なから、老となりて鏡に対してみる時、いよ〻悲き心也、我影をみれは、わか年も暮る心ちすれは也、影さへくるゝとよめる、新なる作也、余情あり、又一年も如此なるへし、と思ふ心有へし

以上第十二旦（朱）廿五首

古今　第七賀哥　祝言也

343我君は千代にや千世に

八千代といふにはあらす、千世にやと云之、又千代にやと読る也、心は、限もなく遠くといはふ也、哥

無義

344 わたつ海の浜の真砂を

わたつうみとは海の惣名也、四海の心也、真砂をおほくいはむため也、砂の一を千代の数にせむと也、四海に心あり云々[*2]

345 しほの山さしての磯に

甲斐国名所云々[*3]、彼国には海もなき国也、そのかみいかゝ有けむ、此哥はしほの山といへるも磯をいはむ為也、千鳥も千世〳〵と鳴心あり、哥の心は、我君を八千世といはふ心より、千鳥の鳴を聞も、八千代と鳴心ちする故にかく読り、鳴とは告る心也、景気も有べし云々

346 我齢君か八千代に　思いてにせよ

わが齢も君にひかれて君とひとしくあらんを、思出にせよと也、合躰の心を思へり、是思出なるへし、とゝめをくとは、君と共にながらへん事也、思出にせよとは、我とかく思出る由也、とゝめをきてとは、治定したる也、祝の事なれは也

347 かくしつゝとにもかくにも

かくしつゝとにもかくにもとは、不レ満足之詞也、ながらへて其しるしもなけれども、とにかくにながらへて、我思ふ君か八千代にあはゝやと也、天子の御製にて弥々面白し、其徳もましまさぬ御身なから、とおほす御心なるへし、初五文字、殊々勝[*6]と云々[*7]

仁和御門みこに　御をは　祖母の御事にや、尚可尋云々[*8]

348 ちはやふる神やきりけむ

此杖をつきては、則千年の坂をも越ぬへくおほゆるに、神やきりけむと読り、神は神通自在の事あれは也、又命なかき事にも便あり[*9]

堀河のおほいまうちきみ　小書昭宣公〳〵貞観十七年、四十

349 桜花散かひくもれ

散かきくもれと也、[*1] まかふかに、かにとよめる、わさとはなけれと、をのつから賀によせありと云々、[*2]

俊成定家卿も此よしの給へり

さたときの御こ　小書云、貞辰清和第七、をは、伯[*3]女なるへし、四十とあり

きのこれをか　家本用之、(1) 小書云、(2) ※1 惟凞、定家はこれをかを用と也、惟、[*5] 思也、有也、辞也、為也、謀也、伊也、凞、[*4] 和也、(1) 光也、(2) 広也、長也、[*6] [*7]

350 亀のおの山の岩ねを

明也、亀も久しく、巌もうこきなき物なれは読る也、所又大井辺也、とめて落るとは、岩ま〳〵なとをもとめて落るさま也、景気くはゝれる哥也

さたやすの御こ　小書云、貞保、二品式部卿、清和第二、号南宮、母二条后

351 いたつらに過す月日はおもほえて[*8]

賀の時、四季の絵の屏風なとあり、平生月日の過行はおもほえすして、花に対する春は早くうつる事を驚心也、花に着する故也、此哥賀の心はみえす、こと書にてみえたり、又云、おもほえてと清て[*11] 読説あり、当流には濁也、此哥、廿四首とて書抜[*12] て相伝する事あり、世上の道の為に観心となる事也、賀の哥にも、たゝ絵のさまのみ読て、いはひの心なきもあるへしと云々[*13]

もとやすのみこ　小書云、本康、仁明第七、式部卿、号八条宮、〻母

352 春くれは宿に先さく

梅は諸木の花の中に、早く開る事也云々、又は、梅[*14] 花の中にとくさける花ともいへり、何にても其人を賞する心に読る也、心さしの切なる儀也

353 いにしへにありきあらすは

君にとは、此君にはしめむと読り、心詞新に読り云々

354 ふして思ひおきてかそふる

おきふしに万代を祈由也、家隆卿、大方の秋のね[*15]

さめの長夜も、とよめるは、此哥よりよめり、*1此哥には、身を思ふとての心もこもりて、優也と云々

355 鶴亀も千とせの後は
我思ふ心は限なき也

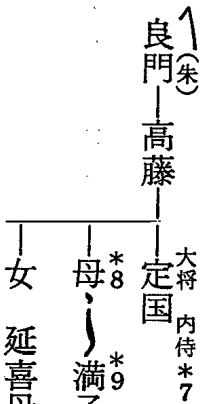
此哥はある人の*2〜哥の同類を思ふへき心つかひ有へし云々、黄門ことにいさめられける事となむ

よしみねのつねなり　素性一性*4の人なるへし

356 万代を松にそ君を
松にそとは、待といふにはあらす、只松にいはふと也、但、待心も少は有へきにや、千とせの陰にすまむと読る、むすめにかはりたる哥なれは其心あり、祝つると有も、鶴を思へるにやと云々*5

内侍のかみ　小書云、満子、内大臣高藤公二女、奉養延喜聖主云々

右大将藤原朝臣　大納言右大将定国、延喜八年*6、四十云々



357 かすか野に若なつみつゝ
此哥祝の哥の本たるへし、序ニ、六義の頌にも此哥を出せり、此哥は素性か詠也、前の哥に同しとみゆ、素性は此賀を奉行*10しける也

358 山たかみ雲井にみゆる
心詞たくひなく面白き哥也*11云々、躬恒か哥也、賀の心は明ならね共、絵に対したる心也、但*12、何も少は賀の心あるにやと云々、以上二首は春の哥也、春と題せされ共、こと書に、四季の絵かけるとありて、此哥を出せり、夏秋冬を題したれは、春の哥とはみえたる心にや

359 めつらしき声ならなくに
こゝらの年を、賀の心あり、貫之か哥也、年々あかす聞由也、哀*13有にや云々

360 住の江の松を秋風

秀逸躰也云々、躬恒か哥也、ことなる理なくて、[*1]殊勝なる哥なるへしと云々

361 千鳥なくさほの河きり

遠白の躰也云々、忠岑哥也、[*4]尤幽玄也、有感と云々

362 [*5]炾くれと色もかはらぬ

常磐山の陰に、いつくともなき紅葉の散来る様也、下句新なる作也云々、忠岑哥也、又云、紅葉を吹来るにあらす、風の秋の気色に吹なしたる心也[*6]云々

363 白雪の降しく時は

貫之哥也、降しくとあるを、ふかくつもれるとはみるへからす、此詞をはつよくあたらすしてみるへしと云々、つもりたる雪にては、下句の様もかなはす[*7]と、花そ散けるといふ様にみるへし、当位の景也

以上七首、素性はかり名をあらはせり、余の人あらはさゝるに口伝あり、其故は素性は作者名誉にして、又能書也、勅命にかなへる人也、此賀の時、[*8]奉行して哥をよませかける故ニ、皆素性か哥のことくに入たる也、素性は出家にはあらす、入道也、

古今(朱)一部の心もみな天子の御製なる理也、[*9]二百人許の作者なれども、此勅撰によて悉〻名誉あらはす故ニ、畢竟天子の御製なる道理也、[*10]此賀の四季の哥も、其理に同し、又此集も、貫之一人撰のやうに心うるかことし、猶(朱)口決有へし云々

春宮の　小書云、文彦太子、保明親王、延喜三年誕生云々、延喜之御時春宮也、此みこは北野天神御たゝりにて、うせ給へりと云々

364 嶺高き春日の山に

明也、此春宮の御母も藤氏なれは、春日山祝心也

以上第十三日九月朔(朱)廿二首[*12]

古今　第八離別哥

365 立別いなはの山の

わか別路にても人のわかるゝにても也[*13]

立別いなはとは、いぬる心にうけたり、此哥は、詞のつゝきはなれたる所なくみえぬるを、末に今帰こむと読るによりて、※1めてたきとそ、まつとしきかはゝゝといへるは、其人を賞したる心あり、今かへりこんとは、やかての心也、待人もあらしの心もあり、行平述懐ある人也

366 すかるなく秋の萩原

すかるの事、御抄(セウ)にみえたり、鹿別名(シカノヘツミヤウ)云々、心は、秋の萩原の花の盛に鹿も鳴比は、別行人も心をとゝむへき折なるに、其にさへやすらはてわかるゝ人なれは、帰りこむ事をもいつか待へき、と思心也、尤哀なるへし云々

367 限なき雲井のよ所に

我旅にたつおり、切に心さしある人なとを思ひをく心也、限なき雲ゐのよ所に*2とは、遥なる心也、月日をゝくり、千里万里をへたつとも、心をは君にそへんの心也、をくらさんやはとは、人を我にをくらか*3さしの心也、我心を人にそへすは、とゝまる人は*4をくれぬへき理也、遍昭哥也

をのゝちふる　小野(ヲノ)は氏(ウヂ)也、千古(チフル)、名(ナ)也*5

368 たらちねの親(ヲヤ)のまもりと

まもりとは、切に思ふ心は、則まもりと成へき故也、仮令(ケリヤウ)、人をあしく思へは、其しるし有か如し、国にくたるを親の心にとゝめたく思へとも、大やけ事なとにて、留かたき事あれは、心はかり*6也と読り、哀*7也云々、とゝめそとは、誰にいふともなくいふ也

さたときのみこ　きよふ(ウ)(朱)　清生(キヨウ)(朱)

369 けふ別あすはあふみと

都ちかき国なる心を読り、思へともとは、又やかても逢へき事そ、といはひ思ふ心あれとも、夜や深ぬらん、何となく袖も露けきと也、尤哀なるへしと云々、露けきとは、涙の事也、とはことはるへからす、只大方にいへる此哥の感なるへし、又涙の事に*8ては有らん

370帰山ありとはきけと春霞

こしへゆくには、[*1]かへる山をこゆる也、此山の名を帰(ル)へき便(タヨリ)とたのめとも、恋しかるへしと也、春霞とをける詞、面白と云々、立といはん為也、又おほつかなき心あり

371おしむから恋しき物を

別をおしむに、[*2]やかて恋しき心有習(ナライ)也、まして立なはいかならんと也、なに心ちせむといへるに、心こもるへし、白雲のといふに、はる〳〵とわかるゝ心あるへし

372別ては程をへたつと

かつみなからとは、かくみなからと也、遥(ハルカニユク)行人を思ふ故に、行末の恋しさの、はやうかふ心也

いかこのあつゆき　[*3]いかこ、氏(ウヂ)也

373思へとも身をし分ねは

思へともといへるは、様〳〵の心こもるへし、此五もしをよく思ふへし、はる〳〵と東まて行人の上をも思ひ、我心にも又いつかは、なと様々思へとも、[※1]世にしたかふ習あひそひて、行事もかなはす、又身をもわくる事なき故ニ、心をたくふるはかり也

なにはのよろつを　万雄(ヨロツヲ)

374逢坂の関しまさしき

しは、やすめ字也、逢坂は、あふといふ心にあらす、関は人をとゝむる所なれは、関もまさしくはと也、人にわかれて切なる心よりかくよめり、関の心[*5]とゝむへき事ならねとも、思よる心也

375から衣立日はきかし

朝露のおきてとは、露のをくによせて、おきて旅立心をよめり、此哥には、又置といふ心をふくめり、我を捨をく心也、尤哀ありと云々、左の注にみえたり、貫之も心ありて、此左注をせしにや

ひたちへ　きみとし　きんとしと読へし、公俊(キントシ)也

寵(テウ)(朱)小書云、或本、無此名云々、[*6]然は読人不知なるへし

376あさなけにみへき君とし

あさなけは、朝夕也、草枕(1)也とは、旅と云心也、万葉にも、草枕旅[*1]とおほくよめり、万葉(2)にはあさにけと有、きみとしは、公俊をよそへたるにはあらす[*2]、たゝ君と読るを用る、優也、さりなから、君としとよめるは、公俊と云心もありしにや[※1]、心は、朝夕にあひそひてみるへき君ならねはと也、人の心のうつろふ比なとにや、以上両首相ならへたるは、女の人にわかるゝ哥、又女のとゝまる心なとを、類したるにや云々

紀のむねさたか　人の家にやとりて、門出なとしける処にや

377えそしらぬ今心みよ

初五もし肝心(カンシン)也、此句ニ心は皆こもれりと云々、いま心見よとは、まさに心みよの心也、命(イノチ)あらはと読る、尤哀也云々、人やとはぬとは、人や忘るゝの心也

378雲ゐにもかよふ心の

雲井にもとは、遥(ハルカナル)なる心也、更にをくれぬよし也

379白雲のこなたかなたに

しら雲とは、立別るゝと云縁(エン)也、又遥かなる心あり、こなたかなたにとは、朝夕にあひなれたる人の別行は、こなたかなたになる心也、別の心のみたるゝを、ぬさと読り、ぬさは、こまかなる物也、切(セツ)なる由也、手向のぬさによそへたり

380しら雲のやへにかさなる

大かたのあつまよりも、みちのくなれは弥々とをき心也、おもはむ人にとは、旅なる人を思ふへき人に、心へたつなと也、わか思ふを公界[※3]になして読る、優也と[*3]云々、たけある哥也

381別てふことは色にも

心にしみてとは、心にとをる様也、心にはなれぬ也

382帰山何そはありて

へたゝりては、帰山といふをたのみしに、又程もなくくたりぬる事を思ふ也、詞つかひなとたくみ也云々、とまらぬ事の名にこそあれと也

383 よそにのみ恋や渡らん

雪を行によそへたり、行みるへくもなきとは、身を心にもまかせぬ心也

384 音羽山木たかく鳴て

我思ひを郭公におほせてよめり、木たかく鳴てとよめる、殊面白云々、時鳥の声もことなるさま也、我思ひも遥に行人をしたふ涙なれは、切なる由なるへし、木高く鳴、切なる心あり

藤原のゝちかけかから物の使に　遣唐使の事にはあらす、帰朝の舩より、唐物なと奉るへきための勅使の事にや云々

385 もろともに鳴てとゝめよ

長月卅日なれは蛬の秋を時なる物に云へる也、我心をきり〳〵すにいひたる也、秋の別は尽の心也、又云、秋別わかるゝ人の事を秋別と云々、いつれもかよふへし

386 秋霧の共に立出て

秋霧と共に立出てといふ心也、炑霧のと読る、優也、朝霧の空に旅たつ心の哀も有へし

源のさね　実公、嵯峨第五御子、明大納言贈正一位の孫也、舒之二男也

しろめ　遊女也、実公右少将なる時の事にや

387 命たに心にかなふ

命の長短を歎心也、我身なからへても人をはしらす、人なからへぬとも我身しらぬ事なれは也、女の哥にて殊哀也、思入てみるへし、立帰(朱)るまての命をしらぬ心也

388 人やりの道ならなくに

御抄(1)にみゆ、朋友(2)の別をおしみて、したひ来たる心を謝したる心也、下心、心を人にまかせたる道の大切也

389したはれてきにし心の

人をしたふ心にて来たる也、心空にして道もしられぬ由也、志の切なる也

390かつこえて別も行か

かく越ての心也、逢坂といふ所もかくこえて、別も[*1]行かと也

391君かゆくこしの白山

必白山へ行人ならねとも、こしへ下人なれはよめる也、雪にまかせて尋んと也、かくれあらしと也[※1]

人の花山に、夕さりつかた[※2]

392夕暮のまかきは山と

人をしたふ心の切なるによて、わりなくいへる也、入ほかにならさる也、五もし、山となりなゝむ[*2]、といへるに便あり

山にのほりて、山にのほりては[*3]、比叡の山への事也、幽仙か住る山に人々来りて、其内に入堂なとにても、又何方へにても出て[*4]、幽仙か坊に帰て、さて京へ人々別るゝ時[*5]よめるにや、此詞書[*6]あらはならすと云々[*7]

393別をは山の桜に

無義

九月二日(朱)[*8] 廿九首

みこはつねやす親王也[*9]

394山風に桜吹まき

山風に、とをけるに文字面白と云々、山かせの内になと云心也、心は、人をとゝめ侘て、花故にや立とまると読る也

395ことならは君とまるへく

同し時の哥なるへし、遍昭はみこに対しての本人なりしにや、幽仙か哥、へたゝりたり、此哥の心は、花の匂ひの面白に対して客も来れり、如此ならは、君をとゝむるやうにほはなむと也

兼藝(朱)、

396あかすしてわかるゝ涙

こと書の様を思ふへし、此哥こと〳〵敷珎しく読る也云〻、下とは河のする也[*1]

かんなりのつほにめしたりける　勅にてまいりたるなるへし

397 烋萩の花をは雨に

秋蕤のしほるゝは尤おしき事なれとも、それにもまさりて、わかるゝをしたふ心也、兼覧王の帰るをしたへる也

398 おしむらん人の心を

しくれと読るは、雨の折節なれは也、心は、おしまるゝ我身としりなましかは、いたつらに有[*2]ふる身とは思ましき物を、といふ心也、尤心詞面白哀なる哥也云〻[*3]、前の貫之か哥はさしたる事もなきにや、此哥のすくれたる故に、前のこと書より、貫之か哥をも入たるにや云〻

399 わかるれとうれしくも有か

有哉也、人を恋ふるも一たひあひたる縁なくてはな。ル[*4]れは、わかるれとうれしと也

400 あかすしてわかるゝ袖の

我涙は珍しからぬ物なれとも、君か形見故につゝむ由也、切なる折の涙なれは、形見にといへる也[※1]

401 限なく思ふ涙に

明也、哀なる心也、五[*5]もし心あり、此哥をはよく思入て吟すへし云〻

402 かきくらしことはふらなむ

かくのことくふれと也、ぬれきぬと云事、本説有によて読るなれとも、しゐて不可用、哥の心は、春の雨なか〳〵と降たるさまは、行人[*6]の為にさしもなき事[*7]なれとも、如此ふるは、君をとゝめむたよりとせんの心也、雨故ニとゝまると云は、かこつけなれは、ぬれきぬと読り

403 しゐて行人をとゝめむ

無義、我かとゝめかねたるを、花にたのむ心也

志賀の山越にていし井のもとにて　此詞[*8]のにてと云

ことは、かさなれり、しかれ共、かくならてはよろしからさるにや云々

404 結ふ手の雫にゝこる

水をむすへは手の垢の落るによて、にこると云心也、といふ人あり、不可用[*1]云々、此集におひては、手の垢なとをよまん事、有へからすと[*2]云々、あかてもとは、すこしある水をむすへは雫にゝこる也、されは、又むすひかたきによて、満足せさる心也、俊成卿は、貫之か結ふ手の哥とて、幾度も感し給へり、哥の様を思へし[*3]云々、定家卿、貫之か哥を批判に、余情妖艶はなき由あり、此哥は余情も有にや云々、万葉に、結ふ手のいしまをせはみ奥山の岩かき清水あかすも有かな、と読るを本哥なるへし[*4]

道にあへりける　物をいひつきて、思ふ事を云入たる心也[*5]

405 したの帯の道はかた〳〵

帯をひきめくらすには、末の別てあふ物なれは也、[*6]行めくりてもと読るは、車によせも有にや[*7]

※1 古今　第九　羇旅哥

旅にまとはされたる心也、旅の中路の心を読へき也と云々[*8]

406 あまの原ふりさけみれは

初文字、殊面白云々、ふりさけは、ふりあふく心也、[*9]此哥は、又手裏に提たる心あるへし、此時の様をよく〳〵思へし、もろこし我朝をかけて、万里の外[*10]まてすみ渡りたるに、思ふ心みかさ山の月も、手にとるはかりなる様也、月の名所もおほかるへかるへけれ共、もろこしに対して、春日なる三笠の山を読[*11]る、尤相当すへき名山にや、又は、彼山にてなかめなれたる月を思ふにや、仲丸は、元明元正両代の比人云々、左の注を長々と書たるに余情あり、めいしうとは、みやう州と云所也[*12][*13][*14]

407 わたの原八十嶋かけて

あまの釣舟とは、都へかくことつけやる人をよめる也云々、*1 此集にては其儀を不用、此哥の一二の句殊に哀也云々、*2 かゝる行ゑもしらぬ海上茫々たる処に、更ことかはすへき人もなし、此国の外までも漕出る心ちするに、たゝあまの釣舟のかすかにみゆるならては対する物なし、されは、※1 人には告よ、と只釣舟にいふのみ也、此心をきかん人は、一段哀なるへき事也、此事、(1) 仁明御宇也、此時(2) 此処の様、哀深かるへし、可工夫云々

408 都出てけふみかの原

明也、都を出ぬる事はたゝけふなるに、いつしか河風なと寒き時分、物かなしく成たる心あり、旅行の行すゑまて思やる心有へし

409 ほの〳〵と明石のうらの

此哥哀傷無常の心ありなと、様々のよそへある説、不用之、旅の哥に入たる心、※2 奥義と云々、あひなれたる人の、旅にをもむくを、明石の浦にて送る時の様なるへし、はる〳〵と漕出る浪の上に、朝霧渡りて、ある時はかくれ、又はほのかにみえつゝ、次第〳〵にとをさかりて、奥津嶋なとにはやかくるゝをみれは、いつちへ漕行らん、いかに成行らん、なと思ひも捨すなかめたる躰也、大かたの旅の別さへかなしきを、切に思ふ人の海路にわかるゝ時、尤思捨かたく物かなしかるへし、舩をしそ思ふ、とあるに、心を付てみるへしとそ、此哥上品上生也と云々、幽玄にして有心也、又うるはしき躰あり、哥の道は、此躰に過へからすとそ、仍、特に執する哥也、切帋有と云々

あつまのかたへ　こと書にて其様をみるへし、業平の、未見すしらぬ国に遥にむかふ心を思ふへし、友とする人ひとりふたり云々、筆のにほひ幽玄也とそ、河のほとり、伊勢物語には沢とあり、三川と云につきて河と書るにや

410 から衣きつゝなれにし

衣はきつゝなるゝ物なれは也、なれにし妻しあれは
と也、旅をしそ思ふと読るに、余情おほかるへし
武蔵国としもつふさ　うと読ならひ也、こと書伊勢
物語にすこしつゝかはれり、猶面白かるへし、限な
くとをくもどいふより云々、はる〳〵となかされ行
心を思ふへし、日暮ぬ、とある本もあり、一説、日
暮ぬるといふこと葉ゝ、天子の御前なとにて憚る
心あれは、暮ぬとはかりいふと云々、但、証本にも
日暮ぬ共あり、都鳥はうつくしき鳥にて、ひなひぬ
鳥なれは名つけたる也、此事書、余情限なしとそ

411名にしおはゝいさことゝはん
明也、心中ニ都を思ふ折節、鳥の名をきゝて読る也、
此所のさまなと、こと書にてよく〳〵みるへし

412北へ行鴈そ鳴なる
此時のさまを思ふへし、孤鴈の哀に打侘たる声
を聞て、我思をなれもさこそ、なといへる心也、左
の注、尤哀也云々

*2おと　在原滋春か妻の事にや、かりそめの行かひ路
と読し、同人歟、甲斐の受領にて彼国にてうせた
り、かりそめの行かひ路とそと読し人々、可尋之

413山かくす春の霞そ
いつか都にゆかん、なと思道の心ほそき様也、春の
霞の様なと哀也、たのみたる人にをくれて、せめて
都をたのみ所にて、はる〳〵とのほる時の心中思ふ
へし、哥の躰面白しと云々、是も夫にをくれての哥
也云々

414消はつる時しなけれは
旅の哥とみえす、こと書にてみゆる也

415いとによる物ならなくに
別の哥とみえたり、是もこと書にて旅の哥とみえた
り、都を別たる事を思ふなるへし、こまやかなる躰
にて哀ありと云々、余情なしといへり

416夜を寒み置初霜を
初霜の比より、夜な〳〵の旅ねの悲き様也、かひの

くにへまかるとあり、はる〳〵の旅とみゆ

たちまの国　ふたみの浦、播磨*1但馬国也、人々の中に兼輔本人と見えたり

417 夕月夜おほつかなきを

彼浦面白所なるに、夕月夜のほのほのとしたる折なれはよくみたき心也、夕月夜はおほつかなきといふ枕詞のみにはあらす

418 狩くらし七夕つめに

目前の理也、此時の様、こと書にて思へし、当座にて七夕つめに宿からん、と読る感あるへし、つめは、妻也

*2みこ此哥を云々　此みこ、哥人にてましまし、誠に返しをえし給はぬにはあらす、ふかく思惟し、吟味し給ふなるへし、其時有つねか請取て、時の興につかうまつれるなるへし

419 一年に一たひきます

かゝる作意、尤哥の命也

420 此たひはぬさもとりあへす

此度は也、御幸の俄なる供奉にて、私をかへりみ給はぬ心也、紅葉を其まゝ神にまかせて手向る由也、奈良へ御幸也、ことからいかめしくして、目出き哥也*3云々、此御詠、多分如此とそ

421 手向にはつゝりの袖も

同御幸の時の事也、つゝりの袖は、衲衣の事といふ、不用之、只卑下の心也

*4九月三日已上十五度（朱）廿八首

古今　之十（以下朱）*5文明十三　十月一日　廿三首

物名　（朱）口伝ありと云々*1

物名とは、万物之名也、*6有レ物先ニ天地ニ無レ形本寂寥能為ニ万象主ニ遂ニ四時ニ不レ凋*7と云頌あり、此心を用、（朱）混沌未分を云也、言語道断之処也、万物是よりして出る也、（朱）第十ニをける事も心あり、此部を執する義也、（朱）第一は最初勿論也、第十も一段之処也、

第十一も恋は万物のはしめなる義なるによて一段之部也、第二十巻又一段也、名は万物之名也、草木名所等仏神等も同し、神は陰陽不レ測之神、仏は法身なるへし、物名の哥は物の名をよむといへとも、哥の面は其事にあらす、以レ虚成レ実之心あり、裏説云敵を代之儀也、はかり事のたとへ也、知ものは知之、しらさるものはしらさる心也、代敵事は治レ国之政也、故貴此理也、籌を惟握の中にめくらすへき心なるへし

うくひす　鶯は春をつかさとる鳥也、春四時の始也、此鳥、春をえてはしめて陽を発する初也、故ニ第一に出也、事の始終分別之儀也

422 心から花のしつくに
　うくひすとのみ、憂く不レ干の心也、花は春の花也、鳥とは鶯の事にあらす、一切の鳥の事也
　ほとゝきす

423 くへきほと時過ぬれや
　とよむる、一説、此哥郭公をよむ也と云々、不用之、物名は其物をは不詠也、此哥恋哥也、人をたのめたる時過れは、まちわひて鳴由也、切なる思ひなれは、大かたの鳴ねならす、人をもとよむるほとなると也

　うつせみ

424 浪のうつせみれは玉そ
　瀬々の白浪のうちみたれたるか、玉のことくなるをみてよめる心也、裏云、真の宝珠、又は金銀也共、取ましき事をは取へからさる教也、必はかなくあしき事となるへし

　返し

425 たもとよりはなれて玉を
　前の哥をうけてよめり、たもとをはなれては、玉をつゝまむ事ならねは、うつせみむと也、人にいふ心也

　うめ

426 あなうめにつねなるへくも

花をよめる心也、あな憂目に也、常ならすはかなき花なれとも、にほひはとゝまる心也、裏云、五もし観する心あり、無常に対すれは法性は常住也、無常はかなしみ也、法性は香しき也、元来をいへは、法性ならすといふ事なけれとも、二となる時は、法性の余薫は、したはしく恋しき心をよめる也、法性無常一如の時は、いつれも不常住之理なる故に、常なるへくもみえぬとよめり、二なる時は、恋しくも香しくもおもはるゝ也

かにはさくら　かはさくらの事也*1

427 かつけとも浪のなかには

東国にかんはさくらといへり、かつくとは、そこを尋る心也、波の玉の風にちる様也、浪の下にはなき物なれは也、裏云、人の心底になき事を、ことはに玉をちらすを、おもしろしと思てさくりみれは、実なき事あり

浮沈不定無実之故也、よくはかるへき事なれは其教也、浪の玉の風にうかふたとへ也、人に数年なれても、不定の心はしられぬ也

すもゝの花

428 今いくか春しなけれは

物はなかめてとは、物わひしきやうなる様也、暮春の空を打なかめたる折節、鶯の哀に鳴を聞て、鶯も物はなかめて思ふらん、と思ふ心なるへし、程なき事を観する也

からもゝの花

429 あふからも物はなをこそ

兼別恋の心也、会者定離之理也、裏云、何事も不定なる事に心を付ぬるは、一切如此かなしき也

430 足引の山たちはなれ

殊面白き哥とそ、序哥也、世上の様也、此理をよく観すへき事也と云、旅なとにはあらす

をかたまの木　三ケ也

431 みよしのゝ吉野ゝ滝に

滝の白玉の如くなるをみれは、又きえぬる程に泡を

や玉とみつらん、とかへして思也

やまかきの木　柿の木也、柿の実の小なるを云説あ

り、但、不用也[*1]、又山柿と云木あり

432 秋はきぬ今やまかきの

今やとは、今よりやの心也、夜な〳〵を思ひやる心

也

あふひ・かつら・　葵ト桂ト也

433 かくはかりあふひの稀に

恋哥也、義なし

434 人めゆへ後にあふひの

忍恋也、人目を思ふ故に我うとく成を、人は我を

つらきとや思はむの心也

裏云、人めをのみ本として、更首尾もあはぬ事あ

る人の性を風する也、わかつらきにやとは、天道ニ

たかひてみゆへき心也

くたに　苦丹、牡丹類也

435 散ぬれは後はあくたに

花の哥也、てふは蝶也、心は明也、裏云人の物に着

して、はかなく心をまとはすたとへ也、裏説を先い

へる心は、哥の自面はかりは花の上を賞せさるに似

たる故也、裏の心をもちてみれは、花をたすけてみ

る心ある故也、故実也とそ

さうひ

436 我はけさうひにそみつる

我はけさとは、朝ニ花をはしめて面白くみて、思か

へしてあたなる物といふへかりけり、と思ふよし

也、春の花の事也

をみなへし

437 白露を玉にぬくとや

花の上に露のをきたるに、さゝかにの糸をはへたる

をみてよめる也、花は春の花の事也

438 朝露を分そほちつゝ　今そ野山を

へしりぬるとは、こゝかしこにやすらひ、夕までも野山を分つくしぬる也、※1序ニ、花をそふとてたよりなき所に、なといへる、入すきたるさまの類なるへし、凡哥人の心、*1執着(シウシヤウ(ママ))をきらふ也

439をくら山みねたちならし

殊勝なる哥とそ、心は、秋の山の面白きに、鹿の打なきたるを、いつの世*2の秋をへて、かくしつゝ有けむ事にか、と思ふ心也、余情多くこもれりと云々、物名の哥ともみえす、面白しとそ

きちかうの花　桔梗也

440秋ちかう野はなりにけり

明也、漸(サウ)く、うつろふけしき云々、(朱)裏云、君ニ讒言なとする人の詞は、草の露玉をかさりたる如くの虚言(キヨゴン)あり、されとも、次第ニ其心あらはれぬれは、讒人に秋ちかくなる如く、君にも許容(キヨヨウ)なき事のたとへ也

しをに　紫苑也

441ふりはへていさ故郷の

ふりはへて、わさとゝいふ心すこし有へし、*3心明也、心さしをいたしてし*4たひきたるかひもなきを、うらむる心也、(朱)裏云、変約(ヘンヤク)の事を風する也、ふりはへてとは、約を憑みきたる心也

りうたんの花　りんたう也

442我やとの花ふみしたく

野はなけれはやとは、野のなきやうに、此花になと来るそ、といふ心也、ちらすといふ本あり、したくはすこしをもき也、(朱)裏云、*5いつくにてもなるへき事を、あやにくに*6人のいとふ所なんとにてせん、と思ふ人あり、あしき事也、可覚悟事也、偏(ヘン)ニ入て、人の心をはからぬ事あり

443※2ありとみてたのむそかたき

*7たのむそ、たのみかたきの心也、如露亦如電(ニヨロヤクニヨデン)ト観(クワン)すへきをしらて、たのむ事を教(フシヘ)たる也

けにこし　牽牛子(ケンゴシ)也

やたへのなさね　(朱)なさね片一

444うちつけにこしとや花の

※1花をみてよくも見さためすして、面白く色こき花とみるは、朝露の当座色々と染なしたる也とよめり、裏云、万事此理あり、能々みれは、はしめてみたるにかはる事有へし、和哥を、一ふしある様なとを面白しと見る事あり云々、巧(タクミニシコトヲヨクスルイロヲスクナシ)言令レ色鮮矣仁(ジン)の理あり

*2二日廿四首(朱)※2

二条の后、〜めとにけつり花させりける

三ケ也、后宮の御方にありしなるへし、可尋之、或説、めと〜いふ草云々*3、しからは、めとにけつり花さすといふ、又不審也

445花の木にあらさらめとも

(1)けつりて花に作る物あり、(2)心は、けつり花の事を読り、此花をみて、身の思ふ事を成事もかなと也、*4

裏云(朱)、官位に成のほるましき人のあかる事あり、元よりさりぬへき人の、古ぬるまてなりをくれたるか、うらやみ見て述懐の心あるたとへ也

446※3山高みつねに嵐の

明也、裏云(朱)、嵐は人の心のはけしく仁心なきたとへ也、花をは、やさしき心ある人にたとふ、さるへき人といへとも、仁心なき人の下には、やはらかにやさしき心なる人は堪忍しかたきよし也、此用心有へきよしの風也

やまし　しといふ草の名也、山にある也、こまのひさとやらんいふと云々、しとは、羊蹄(ヤウテイ)の事にやと云々

447郭公みねの※4

雲中にしてみえぬよし也、裏云(朱)、悪事をなす人の咎*5かくるゝ事あり、あらはれぬをたのみて、悪(アク)を不レ改(アラタメ)、なをあしき事をなせは、つゐに身をほろほす也、慎(ツヽシム)、其独(ヒトリ)之理也

からはき　萩にあり、からなてしこなといふかことし

448うつせみのからは木ことに

無義、裏云(朱)、諸人住所はあれとも、道ありて玉のやうなる人は、さらにみえぬ事を歎く心也

かはなくさ　三ケ也

449 烏羽玉の夢になにかは

明也、裏云(朱)、一切衆生(サイシュシャウノ)の欲情(ヨクシャウ)の限(カキリ)なき事を風(フウ)する也

さかりこけ　かつら(1)のやうなる物にや、苔は葛の類也、さかりこけ(2)*1片一(朱)

450 花の色はたゝ一さかり

花の色は、たゝ一さかりのあたなる色とみゆれとも、露は返〻よく〳〵染ける也と読り、裏云、人の心さしに如此の事あり、下なる人なとの、すこしの心さしなれ共、其身には心をくたき身を尽して、涯分なる志あり、よく可分別の教也

にか竹　苦竹(ニガ)也

451 いのちとて露をたのむに

たのむにたのみかたき也

かはたけ　河にあり、*1内裏竹台(ダイリチクタイ)のかは竹也云*2〻、又かはたけを、むかしは筆の管(フデヅク)に用云〻

452 さ夜ふけてなかはたけゆく

ことから殊勝なる哥とそ、物名の哥は、うつくしくのみはよますと云〻

わらひ

453 けふりたちもゆともみえぬ

誰かわらひと、わらを焼火の事也、もゆともみえぬ草の葉とよめるは、蕨(ワラビ)の事とみゆ

さゝ　まつ　ひは*3　はせをは

454 いさゝめにときまつまにそ

恋の哥也、いさゝめは、そとの心也、そとの間にて有らむと思ひて、其時節を待つるに、逢事なくて日を*4へつゝ、我心はせをは、世間の人にみえぬると也、かひなき由也、忍心あり、裏云(朱)、一定ならぬ事にたのみをかけて待つゝ、成就せすして、いたつらに日月を*5過る也、はかなく人にはみえて、胸中苦労

するあしき事也

※1 兵衛たゝふさかもとに侍ける　女(朱)なるへし

455 あちきなしなけきなつめそ

明也、此哥をは思ひ入て吟すへしとそ

※2 456 浪のをとのけさからことに

義なし、唐琴(カラコト)の国、未分明(フンミヤウ)

※3 (1) 457 かちにあたる浪のしつくを

舩のかちにあたる浪の打ちるをみて、折節春なれは、花と見さらんやと也、(2)いかゝ崎(サキ)、河内国云々

あほ(朱)のつねみ　阿保(アホノ)(朱)経覧

※4 458 かのかたにいつからさきに

舩のさきたちてはやく行さま也、かのかたとは、行へき彼方也、むかひに舩のわたりたる心にや

459 波の花おきからさきて

明也

※5 460 烏羽玉(ウハタマノ)の我くろかみや

鏡裏(カヽミノウチニ)思はす雪を新に見たる心也

※6 461 足引の山へにをれは

山家のさま也、哀なる哥とそ

※7 462 夏草の上はしけれる

序哥也、又たとへよめり、心の行かたなきとは、慰(ナグサメ)かたなき也

かつらの宮　桂宮院(ケイキウイン)是(コレ)也、うつまさにあり

ほとこす　忠

463 秋くれと月のかつらの

花さきて木の実(ミ)はなる物なれとも、月桂(カツラ)は光(ヒカリ)を花とちらすはか(許)りと也

百和香(ハクワカウ)(朱)　あはせ薫(ガウ)の事也

464 花ことにあかすちらしゝ

風の花をちらしても、あかす〳〵ちらすを、我かうしといくそはく思ふらむと也

すみなかし　帋(カミ)に墨(スミ)して文をなす也

465 春霞なかしかよひち

中し、しはやすめ字也、かすみのうちに鴈の帰るさ

まをみてよめる也

をきひ　火炉(クワロ)*1なとの火の事にやと云々

都良香

466なかれ出るかたゝにみえぬ

涙川の水上もしらぬ心也、深さま也、おきひん時とは、大方ひん時は、底もしられしの心也

467※1のちまきのをくれておふる

苗(ナヘ)に前後あり、をくれて生るも又あたならぬ也、憑(タノム)は田によせたり、裏云、晩学のたとへ也、志をいたす人は、晩学もあたならぬ也、前後によらす、志をいたすへき教也

はをはしめ、るをはてにて、なかめをかけて

長雨(ナカアメ)をたち入る也、又なかむる心にやと*2云々

*3僧正聖宝(セイホウ)　当流本*4、如此、或説*5此集撰時は未極(ミコク)官して、*6後僧正なりし故に、正字を加たる也云々、定家卿被加なるへし、延喜已前任給へり、もとの本に僧と許ありしに、被加たる歟、よむには、僧正聖宝と読也

468花のなかめにあくやとて

花を満足するほとみんと思ひて分入(レ)は、心も共に乱(ル)やうにて、更に満足の心もなき由也、裏云、一切(ノ)事は三昧(マイ)をたつる事なかれと也、其三昧(マイ)に入と思へは、即(スナハチ)三昧(マイ)にたかふ也、自然にして有へき様に、何事も程をはからひてよき程なるへき也、此理殊に此集の肝心也と云々※2

文明十三　以上十五度

九月三日聞之(朱)

同十九未夏之間重聞此集説加筆早　夢庵判

奉加一覧早無比類者也

文明十九年六月日　宗祇判

明応五丙辰七月上中旬(ジュン)之間以(テ)祇公聞書(ヲ)加筆也　夢庵判

文亀三癸亥孟春従(ニ)十一日(ニ)至(ニ)仲春二日(ニ)覧(ミル)レ之重見(ニ)合祇公聞書(ニ)加(レ)筆早為(メニ)源頼則(ノヨリノリノ)(ニ)読之時也

永正三寅自八月至九月卅日為二真存法師友弘
同聴一読レ之

古今　十一　文明十三九月三日（朱）※1

恋哥一　恋部を五巻とする事は、五大を表する儀也、恋は五大を受る人のわさ也、一切妻をこふる生類も、五大をつかさとる也、十一（朱）の巻よりを下巻と云人あり、不可然、二冊にしたる本ならは、上下ともいふへきにや

469 郭公鳴や五月の

御抄にみえたり、序哥也、あやめもわかぬとは、恋にほれ〳〵しく成て、善悪の分別もなき心也、此哥、恋の最初（サイショ）に入たる事、物のはしめは、無分別なる理也、物思ひそむる時、いかなるへき事共分別せす、又行末いかゝともしらす、心ほれ〳〵とある躰を、あやめもわかぬとよめる也、いたりての始也

470 をとにのみ菊の白露

序哥也、菊を聞によせたり、露は詞の縁とせり、あへすとは、たへすといふ心也、夜はよもすからおきあかし、ひるは又ひねもす思つゝ、かくありても思をもとけすして、むなしくきえやせんと読り、昼は夜るに対していへり

471 吉野河岩浪たかく

上は早くといはんため也、又我心のたきる心によそへたり、はやくそとは、こし方思初し一念の、はや心のさはく様は、岩ねのたかきことくなれる、たきつ心を思へる也、思初てしといへる、心有へし

藤原勝臣（カチヲン）（朱）

472 しら浪の跡なき方に

御抄にみえたり、※2 白浪の跡なき方とは、たよりもなき心也、風そ思人のゆかりなとをはつかにみて、是にこそ思をもつたへめと思ふ心也心定家、*2 寄恋の躰也、清輔注〳〵大海の船も風を便とす、我恋は便なきと也

473 音羽山をとに聞つゝ

逢事をはへたてゝ、音にのみ聞つゝ、いたつらに年をへたる心也

474 立かへりあはれとそ思ふ

見御抄、奥津白浪は人に心のかゝる由也、思ふ人はつれなし、さらは思もたえなんなと思ふに、又立かへり思へは、我なから哀なる也、さるへき契なんとにや、かく人に心の猶かゝるらんとたのむ心有也

475 世中はかくこそ有けれ

世中は一切あやにくなる物也、一目も見ぬ人に心をまとはすは、あやにくなる事也、我思ふより世中を思ふ也、人は風を見すと云々

右近の馬場のひをりの日　右近馬場は一条大宮也、ひをりの事、見御抄、褐をひきおる事をいふとあり、ひをりの事、此集の大事也、たてたる車は物見なるべし

476 見すもあらすみもせぬ人の御廉をよそへて読ると云説、不用之、ほのかなる心也、恋しくはとは、ほのかにみしより、思ひは打つけにあり、猶切に恋しく成なはの心也、けふやと読るを大やうに心うへし、今日はかりの心には有へからす、あやなくは、あちきなく也

477 しるしらぬなにかあやなく

しるしらぬとは、人の思かけたるを、領解すともせす共何かいはん、恋路は只其方の思ひこそしるへなるへけれと也

かすかのまつりに　二月の初の申の日也

478 春日野の雪まを分て

君はも、わもと読也、序哥也、二月の初の比の様也、草のはつかになと優也云々、見えし君はいかに、なとやうに心に尋る心あり

479 山桜霞のまより

序哥也、無義、下野入道素伝説云、思ふ人をほのかに物へたてゝみたるに、其人を桜によそへて誰にう

つろふらん、いかゝなとおほつかなく思ふ心あるにや云々、堯孝法印、此儀を甘心にしけりとなむ

480たよりにもあらぬ思ひの

万の事は便ありてこそあるに、我思は更たよりもなき人を思ふは、我なからあやしき心也、思ひは火の心也といふ説、不用之

481初鴈のはつかに声を

初鴈ははつかにといはん為也、中空といふも縁あり、思の達せん事もしらすして、思かくるは、中空なる事也、思初たる躰也、人をみるよりは声を聞は、けちかき事也、中〳〵にて、又まことにみる事もなく中空なる思也、と云義あり

482逢事は雲井はるかに

雲ゐ遥にとは、いつの世に逢へき事もなく、只音にのみ聞て恋ふるははかなき心と也、たけ高き哥也云々、家集には禁中の人を思云々、人丸哥に、天雲の八へ雲かくれなる神の音にや人を聞云々、相似作也

483かた糸をこなたかなたに

とやいひよらむ、かくやせむなと思へ共、さても猶あふ事なくは、何を玉のをにせんと也、命も絶ぬへしと也、玉のをは片糸に縁あり

484夕暮は雲のはたてに

夕の雲の幡の手の如くなることあり、又雲のはたてにとは、乱たる心あり、天津空なる人をとは、及なき人を思ふ也、夕の空に物思さま也、雲なとにも思ひ有へし

485かりこもの思ひ乱て

しるらめやとは、よもしらしの心也、いもとは、あひなれたる思人をいへり、是はたゝ女の事と心うへし

486つれもなき人をやねたく

人をやねたくと我心をかへりて歎したる心也、ふかく歎く心あり、おくとはぬとは、夜は夜もすから昼は尽日の心也

487千早振かもの社の

序哥也、思かけぬ日もなく恋る也云々、ゆふたすきは、木綿は乱ちかふ物なれはにやと云々、千はやふる賀茂の社とよめるは、木綿を毎日なとかくへき大社を思て、読るなるへし

488我恋はむなしき空に

思の一天に満たる心也、行方もなしとは、思の達せぬ事也、心ゆかぬよし也

489するかなる田子のうら波

海もあらき処にて、波のたゝぬ日もなき也、賀茂の社とよむも此類にや云々

490夕月夜さすや岡への

序哥也、夕月のさしたる岡辺の松の様、面白云々、二の意あり、いつともわかぬ恋とは、我思の不変なる心也、又云、人の心の、つれなくみさほにて、少も打ゆるふ事なきを、いつともわかぬと云々、此哥能々吟すへし、をのつから感情もうかふ也と云々

491足引の山下水の

入しれぬ心にたとへたり、木かくれてたきり落る氷の様也

492吉野川岩きり*1とをし

かひあるへき人の心にもあらねは、恋はしぬとも音にはたて*2しと也

493滝つせの中にも淀は

渕をは思のよとむにたとへ、瀬はたきる心也、ふちせともなきとは、いつも我思ひのたきる由也、又云、渕瀬は浅深かはる事あり、我思は常住おなし様也云々、両儀、心は通也

494山高み下行水の

山高みとをけるは、下行水の下にとかさねいはん為也、入しれぬ由也、なからへて恋こそせめと也

495思出るときはの山の

思出る時と読り、岩つゝしはいはぬとつゝけん為也、打出すは、思ありともしらしの心也、此哥は業

平元服の後、真雅僧正のつかはしけると云々

496 人しれす思へはくるし

末摘花は紅の事也、色ふかき物なれは読り、人しれす思へはくるしと云て、紅の色ふかき花を読る心有へし

四日（朱）廿八首 *1

497 秋のゝのを花にましり

勘云、秋の野のいつれの花とも聞えす、盛過、心ほそけなる長月の霜に、尾花はかり残りたる比、りうたんの花やかに咲いてたるを、尾花にましり咲花とは、紫のゆかりを思へるにや、此花は思草の事也、りんたう也、密勘にくはし、序哥也、心は逢事はなくて色に出てやこひんと也 *2

498 我そのゝ梅のほつえに

はつえ、いつれも用之、末の枝也、（はつえ片ノ（片ノ、朱））序哥也、無義、一説云、ほつえとはつほみたる枝也、花の次第ニ色にあらはるゝ如く、我思切に成行て、ねになきぬへき由也、両説也云々、又云、人の心のとけぬによて、我思の切なる也 *3 *4

499 足曳の山郭公

時鳥も妻をこふる物なれは、其を読ると云儀は嫌道也、人を思侘ていねかてにせんかたもなき折、時鳥の鳴を聞ていとゝ物かなしき故ニ、我心をもて云付たる也、夜もねす鳴を聞て也

500 夏なれは宿にふすふる

思のくるしき様を、かやり火の草なとつみたる下に久しくくゆるによそへて読る也、夏の哥にては此五文字如何云々

501 恋せしとみたらし河に

伊勢物語には、逢て後の哥也、爰にては不逢恋の部也、せむかたもなくかなしき故ニ、恋せしと祈るに、それをさへ神やうけす成ぬらんと也、逢事を祈し心よりかくいへる也

502 哀てふことたになくは

人の哀といふ事たになくはと云説あり、又云、我となくさめたる事也、思の乱たる時、是もよしなと我となくさむる事あり、それたになくはいかてか思をやすむる事もあらんと也、恋の乱をつかぬる心珎しく面白云々

503 おもふには忍ふる事そ

無義、哀なる様也、詞のつゝきなとを思へし云々

504 我恋を人しるらめや

しらめやとはよもしらしの心也、身になれぬるものは、枕ならてはなけれは枕のみこそとよめり

505 浅茅生の小野のしの原

あさちなとの生たる小野也、篠もかゝる所にある物なれは読り、序哥也、くるしくしのふとも云人なくはしらしと也、勘忍の心にやと云々

506 人しれぬ思ひやなそと

かゝる思は何事そと也、蘆垣のとは、はかなきさま也、何[*1]そとは詞也、いかなれはなといふ心也、と文字はそへ字にや、はかなきへたてなとにてあひかたき中の心也、忍ふ中はかゝる事ある也[※1]

507 思ふともこふともあはむ

人に恋らるゝには紐のとくるといふ事アリ、ゆふてもたゆくとは、むすへは又とくるよし也、あはむ物なれやとは、逢ましき物をといふ心也、此哥は女の哥なるへし[*2]云々、心つよき様也、又説、身を心ともせぬ身なれはにや

508 いて我を人なとかめそ

見御抄、いてとは発言の詞也、ゆたのたゆた、大舩はゆりたてゝしつまりかたき物也、我心中のしつまりかたき様也、人もとかめぬへきと思心よりいへる也

509 伊勢のうみに釣するあまの

糸をなかくはへて、それにうけと云物を付て浪にうかふる也、うけはかるくうきたる物也、我心の、とやせまし、かくやせむなと、定かねたる思ひをたと

へたる也、思ひ切なる時の心なるへし

510いせの海のあまのつり縄

我思ひのくるしく、又いつを限ともなき様を思ふ也、序哥にて又たとへたる也、打はへ折はへ同、又打はへては限もなくの心あり、打はへは行末とをきやうの心あり、折はへはなへての心あり、又所によりてもかはるへし

511涙河なに水上を

明也、涙川の水上を、まことに尋る心あるによて、かくいふにはあらす、つれなき人を思侘て、打わするゝひまもなきを思へは、只我からの涙也けり、と思ふ心[*1]よりかく読る也

512種しあれは岩にも松は

明也、思そむるは恋の種也、恋といふ恋のあはぬ事あらしと也、思よはりたる時思かへすたのみ也

513朝な〳〵たつ河霧の

思へともしるへもなく中空なる心也、又云、人の領解せぬを何とかなと思ふ様也

514忘らるゝ時しなけれは

明也、あしたつとは蘆の辺に常に住故也、思ひみたるゝと読るに縁也

515から衣も日も夕暮に

日もゆふと云は、衣の縁也、かへすも縁也、切なる思ひなるへし、かへすかへすそ

516よゐ〳〵に枕さためむ

いかにねし夜かと読る、殊面白き心也云々、思の切に成ぬれは、枕もさためす、ねもやらす、されは夢にみる事もなけれは、いかにねし夜夢にもみえけんと也

517恋しきに命をかふる

逢事にかふる命ならは安かるへし、今はたゝ、むなしく思ふにきゆへき命なれは、後世までも思ひの散しかたかるへしと也

518人の身もならはし物を

身はならはしにてこそあれあはすしてとは、合事を思絶てもやあらむ、※1さありても又恋しぬる物にやと也、思に死ぬへく成ぬる時思かへす心也

519 忍ふれはくるしき物を

胸中しのひかたく苦しけれは、人にもかたらはや也、されと人の為も我為も、うき名もたて〻思をなくさめむ人は、誰にかと思ふ也、*1又くるしけれとも、さりとて又、忍事を誰*3にかたらむと也

520 こむ世にもはや成な〻む*4

こむ世にもとは、※2世をへたてむこと也、さもあらはつれなき人をむかしとなさむと也、我身きえてなとまて、つよくはいふへからす云〻

521 つれもなき人をこふとて

切なる思ひの様也、つる哉といふに心あり、泣様也といふ儀は如何、只切に読る也

522 行みつに数かくよりも

亦如画水随書随合の心よりおこれり、*5はかなき思ひをよめり

523 人を思ふ心は我に

明也、切なる恋を嗟したる心也、人の限なくつれなき恋の心なるへし

524 思ひやるさかひ遥に

いよ〳〵人の遠さかり行中を思ふ也、夢の中にも*6まよふ心のみなるに、みる事もなきを歎也、夢路とをける、さかひ遥にと有にかなへり※3

525 夢の中にあひみむ事を

うつ〻にさりともとたのみつ〻、暮ぬれととふ人もなけれは、さらは夢にもなと思心也、くらせる宵と読るに、待詫たる様みえたり

五日（朱）廿九首*7

526 恋しねとするわさならし

ならしとにこりて云義あり、嫌道也、一向に夢にもみえすは思ひもよはるへきを、又夢にみゆる事もあれは物思ひのはしとなる故〻、恋しねとすると読る

也

527涙川まくらなかるゝ
明也、いかめしくいへる也

528恋すれは我身は影と
影と成はおとろへたる様也、人にそはぬとは、影の形にしたがふと云事あれは也

529かゝり火にあらぬわか身の
鵜かひのかゝりの事也、我思の火の、涙の川※1にうきたる由也、珎しき作也云々

530かゝり火のかけとなる身の
なからへていつともなく下にもゆる思ひをたとへたる也、かゝり火は影の水の底にもえてみゆる物也、爰に影となると云るは、おとろへたる心にはあらす、切なる恋の心なるへし

531早き瀬にみるめおひせは
涙の川のいたりて早き事を切にいふ也、早瀬にはみるめも生ぬ物なれは也

532奥辺にもよらぬ玉もの
沖にもへにもの心にや、されと沖へとはたゝ沖にもの心也、海上の玉もの様也、人はつれなく我身は思ひもやます、中空にてよるかたもなき心をよそへたる也

533蘆鴨のさはく入江の
あしかもはあしたつといふかことし、切なる思ひには胸中のさはく様を白波にたとへたり、かゝる時立かへり我心をせめたる心也、かく恋んとはしらすやと、我と歎したる也、又云、しらすや人をとは、思の行末の、切にくるしかるへきなと、兼て思ひしを、思つゝかくなりたれは、しらすやと我にいへる也

534人しれぬ思ひを常に
明也、二条家の富士の烟の不断の心みえたり

535とふ鳥の声もきこえぬ
深山幽谷のたとへ也、ふかく思ふ心也、かゝる思ひ

を、少も人のしる事もあれかしの心也

素伝家伝説云、かく深く思いれとも、人の音信はいさゝかもなきを、[※1]鳥の声も聞えぬと云々

536 逢坂のゆふ付鳥も

ゆふ付鳥の、しきりに哀に打鳴を聞て思よれる也、

逢坂はあふ事にはよせぬ也[※2]

537 逢坂の関になかるゝ

序哥也、是もあふことに逢坂といふにあらす、心に思ふとは、あひみむ事を思ふなるへし

538 うき草のうへはしけれる

限なく深き心をたとへたる也

539 打わひてよはゝむ声に

せんかたもなき躰なるへし、我なけくこゑには、山彦もこたへぬはあらしと也、さても我思ひを、人はさそともいはぬ事を思ふ心あり

540 心かへする物にもか

物にもかなの心也、人の心をわか心になし、我心を人にかへて見せはやと也

541 よ所にしてこふれはくるし

入ひもはさす紐也、おなし心にとは、ひとつに心をなさはや也、打とけたる中とはみるへからす、未逢ぬ恋の類也

542 春たてはきゆる氷の

たとへて読り、氷はむすほゝれぬれと、とけぬる時は只一水となりて、更にのこる所なし、其如く我にとけよと也

543 明たては蟬のおりはへ

あくれは蟬の間断もなく鳴如く鳴くらし、夜は又蛍のもゆる如く昼夜くるしき[*1]とはみるへからす、たゝ夜昼[*2]くるしき思のたとへ也、蟬の鳴もくるしけなる物也、折はへは、打はへなとの心なるへし、鳴くらすやう也云々

544 夏虫の身をいたつらに

夏虫は火をとる虫[*3]の事也、我はそれよりもかなしき

心也、夏虫は火をとらむとするに、虫にも思の火あれは、ひとつなる思ひ也、我恋はたゝ我思はかりにて、人は思の同事もなし、かくて消なん事を思心也

545 夕されはいとゝひかたき

無義、哀ふかき哥[*1]云〻、つゝといふまて心有へし

546 いつとても恋しからすは

大かたの思なき人たに秋の夕はあちきなきを、まして恋侘たる人の[*2]炾の夕は、尤切なるへし、思の弥〻くはゝるを、さても秋の夕はいかなる故そ、とあやしむ心也

547 炾の田のほにこそ人を

あらはれてこそ恋さらめ、心には何か忘れんと也、人はつれなくとも忘れしの心也

548 秋の田のほの上[*3]を照す

我や忘るゝといふに、人の思ひもしらぬ事を恨る心あり

549 人めもる我かはあやな

下ニ思ふ心のくるしく限なき時、我とかく思ふ也、なとか色にも出ぬと思ふ也、人めを憚へき事もなしといふにはあらす、切に思侘たる時の心也、少述懐めきたる心也

550 あは雪のたまれはかてに

たまれはかつ〳〵くたくる様也、木の枝なとにふりかゝる雪の気色なるへし

551 奥山のすかのねしのき

序哥也、すかの根しのきとは、打なひかしふる様也、霜雪をしのきて行なん、といふにかはれり、我身今は消ぬるとやいはん、若哀をもかくる事やあらんの心也、心中ニ打案したる躰なるへし、万葉には、すかの葉しのきとあり、よろしきにつきてすかのねと成て入たるにや、又、奥山の槇の葉しのき降雪のふりはしくとも土におちめや、とあり、しのきはなひく様也

[*4] 六日（朱）廿六首

古今　十二　恋二　六十四首

552 思ひつゝぬれはや人の
つゝといふ詞は、少程をふる心あり、我心よりみつる夢なれは、さまさしも又心なるへき物を、と思ふ心也、切なる心よりいへる也

553 うたゝねに恋しき人を
はかなき夢なから、人をみし故ニたのまるゝ心也、夢てふ物はといへるに、はかなき物をと思ふ心あり

554 いとせめて恋しき時は
いとは切に恋しき心也、衣をかへすは夢のため也、春の哥に一感(ママ)を顕注にいと盛と釈して、最字を用たる、其密勘ニ此集に有へからすと注し給へり、其ニよりて、此哥のいとせめてをも最字也とは沙汰せす、密勘の詞を憚故也、当流は万法度を守る事を肝要とせりと云々 *1

555 炾風の身に寒けれは
身にさむけれはといふは、只風の寒き許にあらす、物かなしき比なるへし、人のつれなきもこし方はさもこそあらめ、かゝる折はさりともとたのむ様、尤あはれなるへし云々、此哥、定家卿執せられけるとそ、此集の哥いつれかと御尋有し時、有明のつれなくみえしを奏せられけるに、此炾風の哥をもくはへてまいらせはやとの給けりとなん ※1

しもついつも寺に　此寺説々あり、六条有房は毗沙門堂を号云々、当流には下御霊、其跡也といへり、或抄、いつくにても云々、人のわさは追善の法事也、いへること葉とは、衣裏宝珠の事を講しけるとみゆ、玉を縁にして読る斗也 *2 ※2

556 つゝめとも袖にたまらぬ
白玉のこほるゝ如くなるは、人を見ぬ思ひ故の涙也けりと也、目といふにあたるへからす

557 をろかなる涙そ袖に
明也

558恋侘て打ぬる中に

恋侘てとは、とにかくに人をたのみきぬれともかひもなき心也、人を待心もよはりて打ぬる様也、夢のたゝちとは端的也、夢のうつゝにてあれかしと也、うつゝのたのみ絶たる時の心なるへし、又はたゝ地と、にこる説もあり、直路とも直字をもよむと云々

559住のえの岸による浪

序也、夢の中にさへ苦身[*1]して忍ふ様也、うるはしき躰の哥也と云々

560我恋はみ山かくれの

序哥也、忍恋の類にはあらす、思のしけく成まさる心也、たとへたる心あり、あはれなる心あり

561宵のまもはかなくみゆる

夏虫は蛍也、宵の程、蛍のはかなくもえてむすほゝれたる思ひをみつゝ、我思は猶まさりたりと読る也、猶はかなき思也と也、間もとは、何となくよめる字也

562夕されは蛍よりけに

我[*2]はかひなき思ひの物思ふ折節、蛍のもえ侘たるを、いかなる思ひ故にかくまて身をこかすらん、と蛍の思ひを察するに、[※2]なれは、猶まさりてくるしき心也、人を恨みんたよりもなくあちきなき心あり

563さゝの葉にをく霜よりも

草木の上よりも、さゝの葉にをける霜はさむけなる物也、哀なる心也云々

564我宿の菊の垣ねに

菊の垣ねはませなとなるへし、消かへるとは、思きえて恋しさもなきやうに思へは、又立かへり恋しき心也、白菊の上にをける霜は消ぬるとみえて、又残る物なれは、それにたとへたる也、おもては序哥也

565河の瀬になひく玉もの

序哥也、無義、かなしき恋也

566かきくらしふる白雪の

した消とは、上は消ぬやうにみゆる雪の下のかつき

ゆるにたとへたり、かなしき思の様なるへし

567 君こふる涙の床に

床にみちぬるは海の心也、みおつくしは、深所のしるしにたつる物也、珎しき作也云々

568 しぬる命いきもやすると

情はあさくとも、あはむといひていきもやすると心みよと也、玉のをはかりとは、そとの心也、なさけなき人を思ふなるへし、かく人にいはせまほしき心よりいへる也

569 わひぬれはしゐて忘れんと

人はつれなく思ひは切なる恋也、おもはすなる夢なとに、ほのかにみて、又思のまさる心也

570 わりなくもねてもさめても

恋しきかとは、恋しき物かなと也、心をいつちやらはとは、心をいかやうになしてかの心也、心の一すちなるをいかやうになしてかといへる、面白也[*1]

571 恋しきにわひて玉しゐ

むなしき物からの名にや残らんの心也、なき跡にも名にや残らんと也、空蟬なとのからの如く言にはあらす、をそろしけに成故也、からの心をは、そとおもはせたる、優なるへし

572 君こふる涙しなくは

無義

573 よとゝもになかれてそ行

よとゝもには常住なるよし也、みなは、水の泡也、水のしつかならぬ処に泡は生する也、我思のさはくによそへたり

574 夢路にも露やをくらん

夢中にも露けき様也

575 はかなくて夢にも人を

初五字、尤切に心あり云々、つれなき人を夢にみはや、と思心[*2]もはかなき心也、又夢もはかなくみえつゝ、其朝の様也、朝の床そ云々、又はかなき心也、哥の次第不逢恋なるへし

576偽の涙なりせは

偽の涙ならは、※1かくくるしくしのはしと也

577ねに鳴てひちにしかとも

春の雨のしめやかにふる時分、我思の切なる心より

かく読る也、*1春雨のさま涙に似たるによて也、一義

也

578我ことく物やかなしき

時そともなくとは常住なる也、よる〳〵鳴を云り

579五月山木すゑを高み

梢を高みといへる、鳴音空なると云にかなへり、心

は、むなしき事のかひなき物ゆへにと思心也、こと

から面白云々、又云、※2我心いつくともなき由也

580秋霧のはるゝ時なき

心もほれ〳〵として、あやめもわかぬ様也、ある空

もなき心也

581虫のこと声にたてゝは

明也、涙のみこそといへる、切なる躰也

582秋なれは山とよむまて

無義、ひとりぬる夜はといへるは、少たのむ心ある

人のよめるにや云々、逢後の独ねには有へからす、不

逢恋の類也

583秋のゝに乱てさける

千種にとは千々の思也、思の乱たるによそへたる也

*2七日（朱）卅二首

584ひとりして物を思へは

そよとは秋の田によそへたり、我思人のみならす、

さそといふ大方の人の哀を、かくるさへなき由也、

(1)為明卿筆、夜とあり、(2)秋の夜のと書る本あり、心か

はるへし、秋の田、可然にや※3

585人を思ふ心はかりに

雲井にとは心空なる様也、一説ニ、禁中なる人を恋

る也云々、又遠くへたゝれる人を思ふ也

586秋風にかきなすことの

かきならすを中略したる也、秋風にとは怀風楽を引

心也、と云説は嫌道也、秋風物かなしく身にしむ比、かきならす琴の音とはなし、又秋風楽もをのつからよせは有へし、をよそ故事なとを哥に読る事、其事を其まゝ読はよろしからす、下のにほひに成やうには詠[*2]へし云々、こと書なとをも大方に詠事あり

587 まこもかるよとの沢水

序哥也、淀の沢水、もとより深き所也、常よりことに〻〻、切なる恋の心也、結句ふつゝか也、いたりて古き哥の躰[*1]云々、一説云、まこもかるはことわさ也、恋も人のことわさなれはよそへたりと云々

588 こえぬまは吉野の山の

こと書にみえたり、越ぬまとは思ひの未達の心也、たけある哥也とそ

やよひはかりに物のたうひける[イ給*3]

逢たりし人なとをいふこともあれと、是は哥の次第、未逢の人にせうそこなといひかはしたるなるへし

589 露ならぬ心を花にをき初て[*4]

心を花にとは、人に心をかくる由也、風吹ことにとは、又せうそこする人をいへり、はかなくうつろひやすき人に、心をかけそめて、折〻物を思ふ様也

590 我恋にくらふの山の

花の一えう〻〻散にくらへても、猶我恋はまさるへしの心也、爰にてはくらふる心にて濁と云々[※1]

591 冬河の上は氷れる

上にはみさほつくる様也、人もしらぬ也、然而非忍恋ノ部、下になかれてとは、下に思ひむすほゝれつゝ、年をへたる心也[*5]

592 滝つせに根さしとゝめぬ

滝つせには、いとゝ萍は生かたき所也、うきたる心のしつかならぬにたとへたる也

593 宵〻にぬきてわかぬる

かり衣は狩衣の事也、衣架なとにかくる心をよせた

り

594東路のさやの中山

中〳〵になにしかとある内に、人のつれなさも、我思のかなしき心もこもれり※1

595敷妙の枕のしたに

思し事はつもり行ケとも、其しるしは更になき事を歎心也

596年をへてきえぬ思ひは

思ひを火によせたる也、涙も思ひもとしをへてつきぬ様也

597我恋はしらぬ山路に

つれなき人に貪したる心也

598紅のふり出つゝなく

切なる思ひの涙なるへし、たもとのみこそとは、更に思ひのしるしはなくて、袂のみ色まさるよし也、人のつれなさはかはらぬ心也

599白玉とみえし涙も

いたつらに思ひの切に成たる様也、白玉と見えしも、大方のなみたならす

600夏虫をなにかいひけん

何かいひけんとは、夏虫をはかなや、何故に身をこかすはかりは思ふらんなと、もとく様に思ひしか、我思切に成ぬる時は、又かくのことくなれは何か云けんと読り

601風吹は嶺にわかるゝ

序哥也、此哥ことから限なしとそ、すこし心とけぬへく見えつるなさけもたえて、跡もなく成たる也、高山のうこかぬ様、つれなき人によそへたる也、心かとは、心哉也、思入たる詞なるへしとなん

602月影に我身をかふる

無義、月にむかひて感ある時の思ひ也、優に哀ふかき哥也、月は愛ありてなつかしき心有と用也

603恋しなはたか名はたゝし

我身いたつらに恋しなは、世上の無常のことはりに

そ君はいひなさむすらむ、さりともそなたの名はたつへき物をと也、此哥は及なき人を思ふ心あり云々

604つの国のなにはの蘆の
めも春にとは、春の蘆のもえ出る心も有へきにや、自面は目もはるかなる心也、春のあしへをはる〳〵と見渡したる心にて、しけき思ひにたとへたり、人しるらめや、ふるくは、しらしの心也、近代はしるらんの心によめり、此哥にては、しるらんやといふ心にもかよふといふへきにや云々

605手もふれて月日へにける[*1]
人になれちかつかぬ様也、おきふし夜るは〳〵思の切なる也、手もふれてといふも、いこそと有も弓の縁也

606人しれぬ思ひのみこそ
人にしらるゝ程の思ひならは、せめてなるへきと也

607ことに出ていはぬはかりそ
言に出ぬ也、水無瀬川下にかよふとは、小河の水の様、うへにはなきやうにて、又かすかになかるゝをいへり、人に心のかよふによせたる也

608君をのみ思ひねにねし
思ひ〳〵てねし我心からみえつる夢なれは、人の情にもあらす、されは是にもなくさまぬ心也、[※3]なくさめかたき心なるへし

609命にもまさりておしく
遥に思ひ絶[*2]たる中を思ふ比、ほのかに見たる夢は、命にもまさりておしかるへし、思侘たる身の命はおしからぬ心[*3]あり

610あつさ弓ひけはもと末
序哥也、昼なとはとやかくやと、人めにもまきるゝ事も有へし、夜る切なる心を思ふへし、無心なる物も、ひけはよる心もあるにや云々

611我恋は行衛もしらす
明也、思初しより身の行衛もしらすいつをはてともなき様也、はてもなしと読きりて、逢をかきりと思

ひつゝけたるやうに吟すへし云々、又あふをかきりの心一にて行衛もしらす、心の落着もなき心と云々

612 我のみそかなしかりける

明也、ふひんなる哥様也

613 いまははや恋しなましを

少しほのかにたのめし事を命にして、猶いつまての思をかせむと思ふ心也、中〳〵なる物思ひの様也

614 たのめつゝあはて年ふる

又は偽〳〵して年をふるにも猶こりぬ心をしれかしと也、伊勢かかたへをくる哥と云々、後撰に業平の哥と入たり、あやまりなるへし云々

615 命やは何そは露の

命やはと有は、命をかろく思ひたる詞とみるへし、たとへ千年をふへき命なり共、切なる人にあふ事ならは、かへんにおしからし、まして露の命なれは、何か惜からんの心也、それさへ思ふにかなはすして、物を思ふ事を歎也

八日(朱)*1 卅二首

古今　十三　恋三　六十一首

やよひのついたちより　一日比の事なるへし、忍ひに物らいひてとは、物こしなとにことの葉なとかはしたるなるへし、雨のそほふ(ソヲ朱)りけるとは、春雨のかすかにふるをいへり

616 おきもせすねもせて

此哥、伊勢物語には逢て後の哥也、此集にては不逢恋の部也、おきもせす〳〵ほのかに物なんといひて後、思ひの切に成たるさま也、春の物とて〳〵春は花の色、鳥の音に付ても物哀なるに、物いひかはしつる名残なれは、そなたのみ恋しくてなかめくらす様也、自面は雨の心なし、*1こと書に雨のふるよしあれは、雨の心をもすこしはにほはせたるなるへし、伊勢物語にては、面に雨の事をよめりと也、事により所によりて其心かはるへし

業平朝臣の家に　業平のいもうとの事也

617 つれつれのなかめにまさる

なかめ、雨の事也といふ説は、不用之、人を思わひつゝ逢事はなくて、つれ〳〵と打なかめゐつゝ、いとゝ泪もまさる様也、袖のぬゝるはかりを、ことわさにて、逢事はなき躰あはれ也云々、こと書にも返哥にも雨の事なし

618 あさみこそ袖はひつらめ

思の浅深に涙もよるへき心也、身さへなかるとのこと葉、幽玄也云々

619 よるへなみ身をこそとをく

見御抄、よるへなみはよる方なき也、人にさしはなたれたる様也、されとも我心ひとつは、君か身をはなれぬと也

620 いたつらにゆきてはきぬる

誠に恋路のならひ、如此し

621 あはぬ夜のふる白雪と

人を尋行てあはぬ夜の心也、あはぬ夜のつもりぬるに、我身きえもやらて、思ふにくるしきを恨たる心也、雪のつもることくならは、きえぬる事あるへきをと也[*1]

此哥は、〳〵左に注する作者は、右の一首の事也、爰にては、右の三首いつれも人丸の哥也と口伝す、但可[*3]尋云々[*2]

622 炑のゝにさゝわけしあさの

此哥も人を尋てあはぬ帰さの心也、篠分し朝の袖とは、さゝは露もこほれやすく、朝の袖はいたうぬれたる様也、其よりも猶あはて帰る夜はぬれまされりと也

623 みるめなきわか身をうらと

此哥伊勢物語には人の返哥也、人の問来れるに、あはすしてかへしたる哥也、あはて帰りたる哥の部に入り、みるめなきとは、問きたる人に女のあはぬ事也、かくあはぬは、其人につらき事なと有故なる

を、其我身を恨とはしらてや、たひ〳〵くるらんと也

624 あはすして今夜あけなは

人のもとへ行てあはて帰心也、心さしをいたしてきたれるにむなしくは、なかき恨となるへき由也

625 有明のつれなくみえし

あり明は久しく残る故ニつれなくとうけたるなり、つれなくみえし別とは、あはて帰る別也、終夜心を尽しつるに、むなしくて今ははや帰らてかなはぬ時節の心也、折節残月なとの空切なるへし、たとへ逢ての別也とも、かなしかるへきに也、暁はかりと有を、暁ほとゝいふ心也とはいひ出へからす、哥の品ことの外に成へし、理は暁ほとの心と思ひてをくへき也、又定家卿かやうの哥[*1]一首、〱此哥を、定家家隆同心ニ、此集にはこれなるへし、と申されけりとそ

626 逢事のなきさにしよる

逢事なきとつゝけたり、浪によそへて読る也、或説、浪とは涙の心ありと云〻、必難用之となん、以上七首は、行て不逢哥也、此内あはぬよのふる白雪の哥も、あはぬよのといへるより、行て不逢さまとみえたり

627 かねてより風にさきたつ

逢事なきさきに名の立たる心也、浪に名をよせて読り、浪の様にたとへ読る也

628 みちのくにありといふなる

序哥也、下句ことに哀なる哥也と云〻、逢みての名さへ、〱[*2]なき名とは一向に心をもかけぬ人に名の立事にはあらす、思へともいまた逢事なき人に名の立事也、又云、ありといふなる、〱身のうへに成ける事といふ心もあり

629 あやなくてまたき無名の

またきたつとは未逢ニ名の立をよめり、渡るとは、人に逢事なるへし、やまむ物ならなくにとは、思ひ

やむへき物ならぬと也、休しかたき心也[*1]

630 人はいさ我は無名の

此哥後撰集には作者かはれり、返哥也、人はいさと[後*2]は対したる人にいふ詞也、此集にては其心もかはれり、人はいさとは誰にても世の人はしらす、我は無名のくるしけれは、むかしも今も更にしらすといはんと也、無名なと立ても其まゝとかくある人もあれともの心也

631 こりすまに又もなき名は

実事はなくて物なんといひかはしたるに、名の立たる心なるへし、又かたらふ時なとこし方の事を思たる也、密勘にも此義也、人にくからぬとは人に着したる心也、我心を嗟[*3]したる心あり

東の五条わたりに、伊勢物語には逢たる人の所也、此こと書の様もあひたるやうにみゆ、しかれ共、此集にては哥の次第末逢恋の部也、人をしりをきてとは、人をたのめをきなとしたるに、又物なといひかはす程のことなるへし、えあはてともいひかはしかたき也、あるし聞付て、伊勢物語にはついひちのくつれとあり、爰にはかきのくつれと書る、優に成たりと云々、くつれとあるに築地の事とはみえたり[*4]

632 人しれぬわかかよひ路の

明也

633 忍れと恋しき時は

忍ひ〳〵きぬれと、恋しさの切に成時はあらはるゝ事を、山の端にみえさりし月の、やう〳〵あらはるゝによそへたり、いてゝこそくれとたとへていふ也、前の哥夜恋の類也、[※1] 又云、うかれ出たる心も有へきかと云々[※2]

634 恋〳〵て稀に今夜そ

明也、此哥より逢恋部也、五文字より切に哀なる作也

635 秋の夜も名のみ也けり

ことそともなくとは、たまさかにあひて、何事をい

ひいつ共なく、思つめたる事も其しるしもなくて明行様也、密勘にみえたり、殊勝の理也、又云、ことそともなくは取あへぬ也云々、同し心にや

636なかしとも思ひそはてぬ

あふ人から、片清、連々ひとりねに長夜を思侘て、今逢夜に明易時、むかしより此理そと思也

637しのゝめのほから〳〵と

次第明行様也、たまさかにあひそめたる夜の、やう〳〵鳥の声なともきこえたる時分を思へし、第二句の様を思へし云々、或説、延喜御製*1〳〵如何、其心正直にしてしかも哀ふかし云々

国経朝臣(1)*2　公卿なるを朝臣と書る事、此集には丞相の外は官をかゝす*3、しからは、朝臣は惣して四品にかきらすいへるとみえたり、親王すら多分実名を書たり

638明ぬとて今はの心(2)

今ははや別るへき由也、密勘云、いひしらぬとは云もならはす思もならはぬ別の惜くかなしき心也云々、初逢恋なるへし

639明ぬとて帰るみちには

※1かきくらし降雨にもとまるへきならねは今はとて*4云々、こきたれてはかきたれての心也、いたくふる躰なるへし※2

寵一説、ウツク、一説、チョウ用之　此小書、こゝにいたりて有、如何

640しのゝめの別をおしみ

切なる心也

641郭公夢かうつゝか

なすらへたとへたる哥也、朝露は枕詞也、されは末に暁と読り、時鳥の一声をほのかに聞たるは、夢かうつゝかとおほゆる也、玉さかなる人に逢て、あかす別ぬる暁のさまは、一声きゝてあかぬ心に似たる由也、ことの葉なとを思ふへし、或云、郭公にとふ心也云々

642玉匣あけは君か名

玉匣は枕詞也、我のみならす人の名をも思へは、夜ふかく帰りしを、猶いかゝと切に忍心也

643 今朝はしもおきけん[*1]方も

しもは詞也、霜によそへたり、別路の夢うつゝともなくて立出たる様也、思いつるさへ失心する程かなしき由也、きえては霜の縁也

644 ねぬる夜の夢をはかなみ

後朝恋也、ねぬる夜の夢とはほのかに人に逢たる事也、其はかなさに、夢にもやみゆるとまとろめは、いよ〳〵はかなくなると也、夢にもやとまとろむ事わさのはかなき心也、夜深く別て、ねて夢にもやと思ふ也

業平朝臣の伊勢の国に　人やるすへなくて

とはたよりなき也

読人しらす　作者斎宮也

645 君やこし我やゆき鈒〻〻

夢ともうつゝともわかす、ほのかなる様也、下句は上の注の如し、第一第二句、あらたに寄[*2]なる作也

646 かきくらす心のやみに

世人さためよとは、女の哥に、夢かうつゝかと問やうに読たれは、我も心のまとひに無分別なれは、世人定めよといひ捨たる也、誰ともなくいへる也、世人濁てよむ故実也[*3]云〻

裏説云、君やこし我やゆき鈒は、一切此境界の様也、我来て人をあらはすか、人来りて我に対する歟、忙然たるはかり也、亡したる処は中道也、夢かうつゝかとは、実か実ならさるかの心也、此界の生は実か否歟也、即、空仮中三諦[*4]也、夢は空諦、うつゝは仮[*5]〻〻、両篇亡したるは中道也

かきくらす心のやみに

裏説云、無分別なる処は中道也、世の人にまかせたるは、何ともいへはいはるゝ理ある故也、無造作之心也、放下したる也、をよそ哥人の心は、亡したるをたうとひ、造作を嫌へり、当一念〻〻(ママ)なるへし、

花さけは開に対し、散はちるにうつる心なるへし

九日[*1]（朱）卅一首

647烏羽玉のやみのうつゝは

夜ほのかに人にあひて、たと〳〵しき心也、裏云、一切世間はやみのうつゝ也、迷の衆生のさま也

648さ夜深て天の戸渡る

天の戸は空也、月のかたふく影をみるか如く、あかす君をあひみしと也、又云、月のやう〳〵更ぬる比、思ふ人にほのかに逢てあかす思心也、共用之説也云々

649君か名も我名もたてし

なにはなるとは、みつといはん為也、深く忍ふ心也

650名取河せゝの埋木

奥州にあり、名の立によそへたり、瀬々の埋木はかくれぬれと、又あらはれてみゆる物也、さてもあらはれはいかゝ、なと切に思ふ心なるへし、密勘にくはし、可見之

651吉野川水の心は

水の心を人の心のはけしきにたとふる説は、不用之、我思のたきりたる心也、されとも音には立しと忍心也

652恋しくは下にを思へ

ねすり、いねて紫の色の身にうつるを云をは不用之、紫の根にて摺たる衣也、恋しくは〳〵我心に恋しく切也とも下に思へと也、夢とはゆめ〳〵也、切云詞也

653花すゝきほに出て恋は[*2]

ほのあらはれての恋は名のおしきと也、下ゆふ紐の[*4]とは、枕詞[*5]也、下に思ひむすほゝれて打も解ぬ由也、それもくるしき思ひなれとも名を思ふ也、恋わとよむ也

654思ふとちひとり〳〵か[*6]

ひとりひとりかをくれさきたち恋しなは、藤衣きむ事をいかゝと忍ひかたきよし也、偕老同穴と思へ共

の心也

655なきこふる涙に袖の
涙は何故にも落る事あれは、それによそへて、夜る[*1]
こそきかへめと也、藤衣はかくれなき物なれは、[※1]き
む事を忍心也

656うつゝにはさもこそあらめ
哀なる哥也云々

657かきりなき思ひのまゝに
うつゝに忍事の切なるによてかく思ひよれる也、よ
るもこむとは、夜ゆかんと也

658夢路には足もやすめす
見し[*2]ことは、夢中にはしけく逢みれとも、うつゝに
一たひ見たるにもをよはさると也、夢にもなくさま
ぬ事をおもへり

659思へとも人目つゝみの
思ふあたりへゆかはやの心に人めをはゝかるよし
也、河と見なからは、堤の縁也、見渡しなるやうな
る心あり、裏説、一切人は名利を本として人めをつ
ゝむ也、名利の高き心也、思へともは、彼名利をは
なれん事を思へ共、難離は此界の様也、此理をしら
しめむか為也

660滝津せのはやき心を
人めつゝみ、早き心とは、思のたきり早き也、物に
もさへらるましき思ひなから、人めにはせかるゝ事
を思也

661紅の色には出し
かくれぬとは、草なとしけき陰に沼は有を云、切に
忍心也、紅もかくれぬも皆序也、下にかよふ心はく
るしく共と也

662冬の池にすむにほ鳥の
冬の池といへるは、鴛鳥のつれなく寒水にくくる心
にてよめり、我思の休すへきをも休せす、つれなく
かよふ心を人にしらすなと、我心をいさめたる也

663さゝの葉にをく初霜の

さゝの葉に夜寒の比の霜の、しみつくにたとへて、氷のさま云々

我思はふかく共色に出しと也、さゝの葉のみとりは、色のかはらぬ心也

664 山科の音羽の滝の山イ

音に人しるやうに恋ぬへき事かはと也、やゝもすれは、人知はかりになれるを、※1嘆し思返也、此哥は墨をもて滅哥の中にあり、返しと云々

665 みつ塩の流ひるまを

塩のひるを昼によせたり、ひるは逢かたき故ニ夜るを待と也、塩みては、みるめのよる事によせたり、面白き迷立也*2

666 白河のしらすともいはし

人に逢たる事を人のいふ事あらは、我はしらすとはいはしと也、世々になからへてすまむと思ふ故也、すまむとは、人とかはらすと憑心也、底清みとは、とゝこほる事なく契かはしたる中の心也

667 下にのみこふれはくるし

玉のを、命にはあらす、玉は糸につらぬく物なれは、緒たえぬれは玉のみたるゝによそへたり、忍事くるしけれは打みたれんと也*3

668 我恋を忍ひかねては

※2山橘は冬もみとりにて実のあかき物也、忍はんと思へとも色にもいつへきと也、かみそきの時用物云々

669 大方は我名もみなと

御抄ニ委、世をうみへとは、世をうきと也*4、海辺はみるめあるへき所たになしとは、人をみつへき所にてもみかたき心也、我名もみなと〻大方はとは、大略なんといふ心也、十の物に七八ほとの事也、大方かく思ひなりたる也*5、我名もしられぬやうになきになして、いつくへもゆかんの心にや※3云々、みなとは舩の出入の所なれは也

670 枕より又しる人も

無心なる枕のみしるとは、ふかく忍故也、もらしつる哉といふに、※4我おこたりを歎心あり、めてたき哥

也云々

671風吹は浪うつ岸の

序哥也、忍〳〵こしかかくも成けるよといふ心也

672池にすむ名を鴛とりの

序哥也、思の切に成たる心也、兼輔哥とそ

673あふ事は玉のをはかり

玉のをはかりはそとの事也、滝つせのことく世に名のひゝくと也、恋のあちきなき事也

674むら鳥の立にしわか名

ことなしふとも、ことなし(1)といふともの心也、こと(2)なしう共といふ様に読へし云々、村鳥は立といはむ為也、又は名のさはきたつ心也、過則勿憚改(朱)といふ性なき人のあやまりをいふ、かくさむとする事をいへり

675君によりわか名は花に

我名は花にとは、はな〳〵とあらたに色々敷名の立心也、世の人言かゝる物也、我名は花にと読きるやうに吟すへし、春霞とをける句面白*1し云々

676しるといへは枕たにせて

枕のしるといふ事ありとみえたり、枕のみこそしらはし*2らめ、枕より又しる人もなとの哥をうけて読るに*3や云々、心は、塵こそかろく立やすき物なれ、我名の立やすき事を歎也、さしも忍し名のなとかくかろく立やすかるらんと歎由也

十*4日(朱) 卅首

古今　十四　恋四*5　七十首

677みちのくのあさかの沼の

序哥也、花*6かつみは薦也、かつみるとは、ほのかに逢見たる也、恋や渡らん、はかなくあひみし人ゆへに、かく恋や渡らんと観したる心あり

678逢見すは恋しき事も

逢後に思のまさる故に、只音にのみ聞てあらは、かゝる思はせしとの心也

679磯上ふるの中道

序哥也、見すはとは、逢みすはの心也、あひみはやと思ひし事なとこもる也

680君といへはみまれ見すまれ

初五字に心をつけてみるへし、肝心也云々、富士のねの珎しけなくとは、常住煙の立心也、見まれ見すまれは、みる時もみぬ時もの心也、我恋と終に読る、よろしからさるへし、此哥にては詞のつゝきによりてくるしくも聞えす云々

681夢にたにみゆとはみえし

たとへ夢にみゆともわかみゆるとはみえしと也、我面影にはつるとは、朝に鏡なとにてみれは、思におとろへぬるをはちたる作意[*1]、女の哥にて殊面白[*2]し云々

682いしまゆく水のしら浪

序也[*3]、ほのかに人にあひてあかす思心也、かくこそはみめとは、石まを行水の岩なとにさはりて、立かへり〳〵するをみて、立かへり又みまくほしき心をよそへたる也、立帰るといふも回頭してみるへき心にはあらす

683いせのあまの朝な夕なに

みるめをはしけくかつきする物なれは也、あくよしもかなとは、満足したき心也、又云、我みるめはしけからすと対していふと[*4]云々[*5]

684春霞たなひく山の

恋の一に、山桜霞のまよりといふ哥は、未逢してみたる也、此哥はほのかに逢みてあかす思ふ也、たとへたる様、殊面白[*6]し云々[*7]

685心をそわりなき物と

此哥、未逢して人をみたるときこゆ、しかれ共部類之次第、逢ての哥なるへし、[※1]ひとたひなとにてやみもせての心也、みる事有のみにて実のすくなき心とみるへし

686かれはてん後をはしらて

夏草のふかきをみる時は、かれん物共おほえぬこと

く、はなはたしきは必変する事あり、人の変せん事をもしらす、ふかく思ふさま也、少憑むへき心ある中なるへし

687 あすか河渕は瀬になる

世間の変化はいかやうに有とも、思ふ人を忘れしと也

688 おもふてふことの葉のみや

怀をへてとは、草木なと秋は必色のかはる也、其縁に秋と読り、心は世間の事何事もかはるならひなるに、只我思ふといふことの葉のみかはらぬと也、人のうつろふ心こもるへし、又云、人の心と詞との相違をいふとも

689 さ莚に衣かたしき

はしひめ、橋姫の物語なとあり、此哥の心は、旧妻なとふかく契たるに立はなれて思やる心也、我妻を橋姫によそへて読る也、橋姫は久しき人なれは便あり、又さま〳〵の説あり、定家卿無詮云々、又は玉姫とあり、をとりたるにやと云々

690 君やこむ我やゆかむの

いさよひはやすらふ也、此哥には宵の心もすこしかけたるにや、真木の板戸も云々、いたつらに夜の深たる也、かくしつゝ夜な〳〵あかしたるさま也

691 今こむといひしはかりに

密勘云、いまこむといひしを待程に、月比過て秋さへ暮て、在明の月を待出たる心云々、いまやかてなんとはかなくいひすてたるをたのみつゝ、秋も暮ぬる様なるへし、此哥殊勝也となん、余情おほくこもるへし云々

692 月夜よし夜よしと人に

万葉に、わか宿の梅さきたりと云々、の哥より読る、月もさやかに夜も面白き折なるへし、こてふにたり云々、とにかくにあちきなく思わつらふ様也

693 君こすは閨へもいらし

こ紫はもとゆひを染る故也、霜はをくとも、定なき

人を憑みて夜の深行様也、霜はをくともと誓たる心也、こ紫とをける、殊勝也云々[*1][*2]

694 宮城のゝ本あらの小萩

本のあらき萩をいふ也、或説、萩の露の風を待如くまつ心也云々、嫌道也、露をもき萩の風を待やうにみれは、君まつことによそへたる也[※1][*3][*4]

695 あな恋し今もみてしか

見てしかなの心也、今もとは切なる心也、逢ての後に思ふなるへし、なてしこを人によそへてよめり、山かつは垣ほといはむため斗也[*5]

696 津の国のなにはおもはす

あふといふ名はかりには思はす、常に合みむ事をこそ思へと也、とはに[*6]

697 敷嶋のやまとにはあらぬ

序哥也、比もへすしてとは、逢みたる人を程もへたてす又逢事もかなと也

698 恋しとはたか名つけゝん

しぬとそたゝに云々、かくいひて哀をもかけ、とはれもやせんの心也、誰いひをきけむ事そ、なといふか如し[*7][*8]

699 みよし野ゝ大河のへの

序也、人に思おとされたる事なと有て、我身数ならぬを歎心也、なみくにも思はれは、かゝる悲き思ひをはせしと也、見初(1)し時思ひし行衛のかく有けりと也

700 かく(2)恋ん物とは我も

兼て思しことくかく恋侘ぬる事を思ふ也

701 天の原ふみとゝろかし

ふみとゝろかしといへるは、いかめしき物さへの心也、雷は威勢のいかめしくおそろしき物なれ共、それさへ思ふ中をさくる事はなしと也、さくる人ある事有て読るなるへし、此哥は、陽成院の御乳母、心あためきたるにや、思ふ人なと持たりけるに、陽成院の御気色あしかりけるを、うらめしく思奉りて読[*9]

る哥と云々、可尋云々

702 梓弓ひき野ゝつゝら

梓弓は引といはん為也、ひき野は名所也、末つゐに云々[*1]、見御抄、切に思ふ人に行すゑいかなる事か出来て、さはる事もあらんなと思ひしか、末つゐに口舌なと出来たる中の事なるへし

此哥はあめの御門　天智天皇御事也

703 夏引のて引の糸を

絹の糸なと手にくりかくる物なれは、て引といふにや、夏引は夏この心にや、又、麻の夏引にやと云々

704 里人のことは夏野ゝ

世の人の詞なと口舌はしけく共也、かれ行君に云々[*2][*3]、かれ〳〵なる中の心にや

藤原敏行、女を　業[*4]の妹也

705 数々におもひ思はす

初五字大やうにいへる也、さま〳〵になとの心有にや、思ひおもはすといはむため也、思ひも思はすもはや問かたく成とみゆと也、身をしる雨とは、雨によて身をしる心也、涙の事にはあらす[※1]

706 大ぬさの引てあまたに

大ぬさとは、或説、幣の手をあまたにきりかくるをいふと云々、幣帛は是かれの手にとり渡す物なれは、引手あまたといふ也、用此義、心は哀とは思へ共、たのみかたしと也、又、榊に麻の緒を付たるをも大ぬさといへり

707 大ぬさと名にこそたてれ

つゐには君かかたへよるへしと也、ぬさのなかれよるにたとへたる也

708 須磨のあまの塩焼く煙

風をいたみとは、煙の風に不勘(ママ)[*5]様也、人の他人に心のなひくをよめり、哥の姿たくひなしと云々

709 玉かつらはふ木あまたに

玉かつらは草のかつらの事也、玉椿玉篠なんといふか如し、一木ならすはへる物也、心は、我方ニ絶ぬ

も又うれしくもなきよし也

710たか里に夜かれをしてか

あた人なとの我にうらみたるか、ちかきあたりなと[※1]に声なとするを聞て、たか方を夜かれをしてかと読[*1]る也、郭公によそへたる也、夜鳴物也[*2]

711いて人はことのみそよき

いてその人はなといふ詞の如し、詞のみよき也、変シ安き人を恨也、色ことにとはいひしるき也[*3]、巧言令色鮮矣仁之心あり

712偽のなき世也せは

人のことのは[*4]ゝうれしけれ共、思へは又偽のみなれは、千万の事もかひなき心也、哀なる哥と云々、又説、誰も偽にてこそあらめといふ心云々[*5]

713偽と思ふ物から

たのまれぬ人と思つめても、さても其人をさしをきて誰をか我はたのまむと也、たとへまことある人ありともと思ふ也、尤哀なる心也、乍〻秘伝也、当

[*6]十一日(朱)卅七首

714秋風に山の木の葉の

山の梢の昨日けふまで緑(ミトリ)なりしか、秋風にいつしかうつるへるをみつゝ、人の心もかはる事もやなと思ふ由也、いかゝとそ思ふと読るに余情あり、ふかく思かはせる中なとにはあらさるへくや、世の変化に思ふ也

715蟬の声きけはかなしな

物思ふ身の、おほえす月日も過行に、蟬の声のあらたに鳴を聞て、時節に驚きもよほされて思ひよれる也、物思ふ時は物にふれてたのむ事もあり、又うたかふ心もある也、夏衣(1)はうすくといはむ序也、蟬の鳴比に縁有、心詞(2)やさしき哥云々

716うつせみの世の人ことの

世の人言也、はかなくいふ詞[*7]のしけき也、空蟬の世とははかなき世の心也、されとも此哥には、たゝ世の人ことゝ許みるへし、人ことなんとにをのつから

我中もかれぬへき事を歎也

717 あかてこそ思はむ中は

そをたにとは、それを成ともの心也、心明也、夫婦の中にかきらす世上の理にもあたるへし、十分ならむと思ふましき教也

718 忘なむと思ふ心の

有しより[*1]けに、有しよりまさりて也、人のつれなさよろつくるしき故に、よしや我も忘なむと思へは、あやにくに猶恋しく成心也、先そ恋しきとは、忘れんと思へは恋しさのさきにたつ心也

719 忘なむ我をうらむな

時鳥は怀にあはぬ鳥也、それによそへたる也、人の秋にあはぬさきに忘れなんと思ふ由也

720 たえす行あすかの河の

絶す人の方へ行かよひしを、自然さはる事なとに、とたゆる事もあらは、かはる心あるとや人の思はむと也、我か切に思ふ事なれはかく思ふなるへし

此哥は　あつま人か哥也　又あつまと(朱)[*2]ゝよむへきにや云々

721 淀川のよとむと人は

すこしのとたえなと有とき、人のいかゝ思ふらん、われはなからへて行末まてふかき心ある物と也、又云、人のため我ためことなくなとして、行末とをく[*3]と心中には思かまふる物をと也

722 そこひなき渕やはさはく

無底也、ひはそへたる字也、人をふかく思ふ性は言語もなく徹したるにたとへたる也、浅せにあた浪の立とは、思事をもあさく詞に云いてたる心也、我心はさはなき由也、人の恨うたかふやうなる事ある時云なるへし

723 紅の初花そめの

初花染は殊にふかき色のよそへ也、思ひし心云々、行するとをく忘しの心也

724 みちのくの忍ふもちすり

誰故[*1]にとは、君故にこその心也、忍ふもちすりの事、元来は錦木の事よりおこれる也云々、ちかくは奥州忍にて、石に山藍して摺たるを云り、此作者名をあらはせるは、ことなる作者なるを賞したる儀にやと云々、多分は大家をはよみ人しらすとあり、或は左ニ注するもあり、又一段執して名をあらはさゝるもあり

725 思ふよりいかにせよとか

思ふとは、人を切に思ふ心也、かく思ふより猶いかにせよとてか、人の心のなひくとみえしか、思の外思はすなる気色になるらんと也、浅茅のさまによそへたり、炾風になひく浅茅は色かはる比也

726 千々の色にうつろふらめと

人の心のうつろふらんをも我はしらすと也、紅葉ならねはとは、我心は色〳〵しからす定心にて、一篇に思ふ故にしらぬと也

727 あまのすむ里のしるへに

うらむるといふ縁[*2]也、我を人のうらむへき故もなき物をと也、里のしるへ[*3]にあらぬとは、うらみん故もなき心也

をむね ラムネ(朱)

728 くもり日の影としなれる

たとへてよめる[*4]也、心はかりは、人の身[*5]をはなれねともちかつく事なき心也、かく思ふを人はさもしらしの由也、くもり日は目にはみえねとも影はある也

729 色もなき心を人に

千々の色にうつろふらめとの哥と同心也、我心は色[*6]々しくもなき故に、うつろはむとは思はすと也、又人もうつろはむ事とはおほえすと也

730 珎しき人をみむとや

人に逢へき時紐のとくるといふ事あり、めつらしき人とは、ほのかに逢みし人に又珎しくあはむとやの心也、しかもせぬとは、解ぬへくもむすはさりし紐のとくる由也、裏云、さたかにもなき事なとを心に

憑みて、心をくるしむる事あり、吉凶の前相なとの事にあり、よろしからぬ事としるへしと也

731 かけろふのそれかあらぬか

かけろふは蜻蛉をいふ、又は草をもいふ、又、陽炎遊糸ともいへり、袖(1)ぬるゝは心つくせし人に逢て也、それか(2)あらぬかとは、ふるくみし人なとに又逢てたとる心也、春雨は袖のぬるゝ縁也、ふるひとうけむため也、ふる人なれはと読は優なちすや、ふる降(朱)日となれはと読て、旧人の心をふくむへし

732 ほり江こくたなゝし小舟

難波堀江也、崩(ママ)*1無小舩は小キ舟也、心は、もとあひたりし人を忘かたく、立帰り恋渡よし也

733 わたつみと荒にし床を*2

わたつうみと読へき歟云々、此哥は、藤原仲平のかれくに成しか、思はすに今夜こむなといひをこせたる時の哥也、荒にしとは、人のかはりし事をよめり、海と荒にし床をはらはゝ、袖も泡と浮なむと読り、たくみなる作也云々、泡*4とははかなき心也、深く契りしたにかはりつる人の、又今夜なといふは憑みかたき事也、それをたのみて床を扑(ママ)ふさまは尤はかなき心也、心詞殊勝也とそ、幽玄至極*5して哀深哥也云々*6

734 いにしへに猶立帰る

恋しきことに、※1わするへき人を忘もやらすして、立かへりつゝ恋ふる心也

735 思いてゝ恋しき時は

あひなれたりし人のあたりに、せめてなと思ひて行たる折なるへし、思出てとあるも忘たるにはあらす、其あたりに来たるをも人はしらしと也、此哥、序には人はしらすやとあり、黒主の哥の様也、あらためて入たるなるへし、よろしくなるにや

736 たのめこしことの葉今は

我身ふるれはとは、*7我身ふるされぬれは也

近院の右のおほいまうちきみ　能有、文徳源氏、右

大臣、右大将、近院は所の名也、春日東洞院也

737今はとてかへすことの葉

今はとてかへすは、女の心をよめり

738玉鉾の道は常にも

玉ほこは道の枕詞也、我あたりの道をまよへかし、我を問かと思ひてもなくさまむと也、と絶[*1]たりし人なとの、たまさかに思はすに立よりたる時よめるにやと云々、今とふをも実と思はさる心也、又云、よそをとふをみたる折なとにや云々

739まてといはゝねてもゆかなむ

別をしたふ心也、ねてもゆけと思へとも、しゐて行人をしたふ心也、駒の足を折てもゆかしとせよかしの心也、此哥、詞姿よろしからす、此集に入かたき姿[*2]也云々、されとも恋の心切なるによて入たる也、恋哥は、無心なる物に心を付たる面白[*3]し云々、又云、如此哥入集事恵命也云々

のほる　昇、延喜八年二月中納言云々、昇は融公ノ息也

閑院　延喜比人也、女房也、先祖不詳云々、末皇[*4]

740逢坂のゆふ付鳥に

心はこと書にみえたり、逢坂は逢心にはあらす、近江へつかはすに縁也、なく〳〵もみめの心哀なる様也云々

741故郷にあらぬ物から

あれてとは心のかはるをいへり、うらみたる心也

742山かつの垣ほにはへる

序哥也、其方(カタ)の便[*5]なとあれとも思ふ人のこと伝もなき由也、あちきなき恋の様也

さかゐの人さね　酒井人真

743大空は恋しき人の

物思ふことに、物思ふ時は空にあふくより外の事なけれは也、我心をせめていふ心也

744あふまてのかたみも今は

人のとゝめけるかたみになくさむ事はなき心也

745逢までのかた見とてこそ

思の妻となる心也、涙にうかふは海辺によそへたる詞也、涙を浪によそへよめり

746形見こそ今はあたなれ

根本は仇なるへし、密勘云云、定家卿説、あたなれとよむを聞て仇とをしへん事いひかたしと云々、あたと読て仇の心をふくむへしと云説あり、為氏卿は、あたなれとよむのみならす、心をもあたなる心に用へしと云々

十二日（朱）卅三首[*1]

古今　十五　恋五　　此巻は哥の次第なし、雑、恋ト

みゆ　　八十二首[*2]

五条の〻〻西のたいに住ける人、二条后の事なるへし

月の面白かりける夜

伊勢物語には此詞なし、貫之くはへ侍るなりし[*3]、こと書のさまをよく〳〵思やるへし、哥の幽遠なる心もうかふへしとそ、切に思人にへたゝりては大方も思わひぬへきに、去年の其比に成て梅花さかりなる時分なと、せむかたもなく成ぬる心にて彼所に行たる様を思やるへし

747月やあらぬ春やむかしの

月も本の月、春ももとの春、我身も本の身なれ共、此時この所にての心はいつれもさもあらぬ心ちする也、此哥理をいふに及はす、たゝうち詠したるに優に面白と云々、是哥の妙処也、俊成卿いくたひもかの[*4]月やあらぬとその給ひける

なかひら　仲平、枇杷左大臣[※1]

748花すゝき我こそ下に

ほに、仲平の伊勢に心かはし給しか、すこしかれくなる比、兄の時平公の通し給ける時の哥也と云々、我は忍つゝ心をかけて心のまゝにもなかりしを、人はあらはれて契ありけりとうらみたる也

749よ所にのみきかまし物を

よそにきかまし物を、みなれても逢事はなきよし也、かなしき恋路の様也、音羽川はをとにのみきかましの心也、みなれは見馴也、水になるゝによそへたり

750 我ことく我を思はむ

我と我身を思ことく思はむ人もかな、さても猶うき物かと世を心みんと也、あまりにうき心より思よる也、人を我思ことくといふにあらす

751 久堅の天津空にも

天津空はとをくよ所なる物也、人にとをさかりぬる事を思めくらす心にてよめる也

752 見ても又またもみまくの

人にあひみても又あかぬ也、さある故なるゝを人はいとふと也、世上の理如此とみるへし、さなけれは哀[*1]にきこゆる故也

753 雲もなくなきたるあさの

朝の空のうら〳〵とはれたるを、なきたるといへり、我なれやとは思よそへたる也、はれたる心也、しかれ共、いと晴てとよまむ事は聞よからすとなん、いとはれてと読て晴たる心をふくむへし

754 花かたみめならふ人の

花かたみは籠也、めならふ人のとは、人の目にかゝる人の事也、我ならぬ人の事也、我身を卑下したる心よりいへる也

755 うきめのみおひてなかるゝ

うきめ生る浦とは我身の方をいへり、卑下也、されは、かりにのみくるもことはり也とよめり、かりにとは、和布に縁あり、おひてなかるゝとは、海草の様也、なからへての心有へき歟云〻、つねにうき心也

756 あひにあひて物思ふ比の

月さへぬるゝかほなるを、あひにあひたるとよめり

757 炑ならてをく白露は

秋ならぬ時の露といふには非す、秋故の大方の露にはあらてをく露は、かゝる枕の雫也けりと也、心よ

くねたるね覚なとには有へからす、人のとたえたる比、ぬるともなくてめのさめたる折、枕の雫なるへし、其様をよく思入てみるへし、哀なる心也と云々

758 すまのあまの塩焼衣

序哥也、衣はおさのやうによりてあらき物也、人の心のとをさかる比の事也、疎遠なる也、ま遠は人の心のをろそかなる也

759 山城の淀の若こも

序哥也、若こもはまたからぬ心也、みしかき心也、かりにたにこぬといへり、かりにたにこぬといはむため也

760 あひみねは恋こそまされ

水なき川なれは、何にふかめてといはむ為也、又は人の心の浅きを水無瀬川と読り、我は何にふかめて思ひけんと也

761 暁の鳴のはねかき

鳴のはねかき、榻のはしかき、古来両義也、此事本説有事也、百夜問たらはあはむと云しかは、来て榻にしるしをかき付たるか、百夜めにこさりしかは、其夜は待人の書続たるとなん、鳴と読るには百夜を百羽とかへたる也、こぬ夜の数を我そかくと読りと云々、五音相通する心にや[*1]云々、本説によらすして見る義あり、物思侘つゝあかす暁かた、鳴の羽音のほろ〳〵としけきをきくにひとりねの空にあちきなくかなしき様也、かゝる夜なく〳〵も君かくる夜は聞ともなく過ぬるを、ひとりねにきけは鳴の羽かきを只我ことわさそとよめり、定家卿、鳴のたつ[*2]山田[*3]のくろの哥も此心より出たるとみゆ、此哥本説より出たりとは心うへし、就御抄裏説あり、口伝也云々、裏説[*4]云、暁は明闇の境也、鳴[*5]、小人にたとへたり、羽かきは小人のことわさ也、君とは君子にたとふ、君子の行跡をなさすして、小人のことわさのみをなす事を思ふへき心也、右追聞[※1]

762 玉かつら今はたゆとや

玉かつらは[*1]一説女の事也云々、又云、玉かつらはたゆるといふ枕詞也、末の句に人のとよめれは、上は序なるへきにや、契のとたえなとは常の習也、風のたよりにさへきこえさるは、はやたえぬるにやと也[※1]

763 我袖にまたき時雨の
時雨の時分ならぬにの心也、建立おもしろしと云々

764 山の井の浅き心も
山井は浅香山なと名所にも有、又は山にある井をもいふ也、たまさかに来ても、ほのかにて帰る人を思ふ心也、影さへみゆるの哥をとり用とみゆ、さりなから此哥の山の井、名所には有へからす

765 忘草種とらましを
かく逢事のかたくは、せめては忘草を尋んする物をと也

766 こふれとも逢夜のなきは
夢路にさへ忘草のおふる心珎しき作也云々

767 夢にたにあふ事かたく
我や云々、我身もほれ〳〵としたる心なる様也

768 もろこしも夢にみしかは
思はぬ中は夢にさへみえぬ心也
さたのゝほる　貞朝臣、備中守、登、仁明御子

769 ひとりのみなかめふるやの
只ひとり人もとはぬ古やにうちなかめ〳〵つゝ年月をふれは、軒には忍草なとの生るによそへて読り、妻とは我身の末なる心、又は思の妻なといふ心ありと云々、今案説云、只古屋のつまの事にてよろしきにやと云々、なかめ、雨の心はなし、但なかめふる屋の声はきゝよきやうに読へし

770 我宿は道もなきまて
人を待つゝ今や〳〵なと思ひ、又もしやなと憑て月日かさなり行は、庭は蓬葎のかけに成ぬる様哀なる心也云々

771 今こむといひて別し
わかれし朝より毎夕の様なるへし、思ひくらしは日

くらしをそへたり

772 こめやとは思ふ物から

立出つゝもしやなと待さま也、[*1] 日晩は夕の時分の気色也、つゝと読るに余情あり、ことわさを観する心也

十三日（朱）廿六首[*2]

773 今しはと侘にし物を

今はと也、しはやすめ字也、万葉には今しはよとも、今はと思きりたるに、さゝかにの猶人をまたする様なると恨たる心也

774 今はこしと思ふ物から

またもやまぬ哉の心也、我心をせめて読る哥也

775 月夜にはこぬ人またる

終の七もし此哥の肝心也、さても安かるましけれとも、侘[*3]てもねんの心尤切なるへし、殊勝の哥と云々

776 うへていにし秋田かるまて

月日うつりて待人も程へたる心也、秋[*4]も半なる比鴈の声におとろきて、思ひもすゝみねになきたる由也、第一二の句契ありし心也、栽ていにしとは誰共なし、うへし田の時節たかはぬ心歟云々

777 こぬ人を待夕暮の秋風は

かゝる時、秋風の身にしみたへかたき故に、うたかふ心あり、侘しきといふは、一事にあらす、思ふ事なるへし

778 ひさしくも成にける哉

住の江の松の久しきをよそへて読る也、待はくるしき物にそ有けると読る心を能々吟味すへしとそ、大方に人を待一夕なとの事には有へからす、つれなき人を待きたる心を観したる心あるへし、哀ありと云々

779 住の江の松ほと久に

首尾明なる哥也[*5]云々、殊すくれたる作也となん

なかひらの朝臣　あひしりて　仲平は伊勢か初てあひなれたりし人とみゆ、其かれかたなる比の哥也、伊勢集にみえたり

780三わの山いかに待みむ

心詞殊勝作と云々、こと書に思合へし、此哥は、我庵は三わの山もと恋しくはの哥を本哥として読る也、とふらひきまぜとあるは、とふへき人のある心也、それをもていかに待みむと読り

781吹まよふ野風をさむみ

吹まよふ風とは大なる風なととはみえす、漸あらくなる様なるへし、すこしあらく吹て、吹もやまぬ程の風にや、野風と読る此哥にては聞にくからす[*1]云々、序哥也、ゆくかは行哉の心也、歟とうたかひても[*2]云也

782今はとて我身時雨に

今はとては思極めたる心也、人の今はとて我をふるす也、我身ふりぬるとは人にふるされぬると也、両義あり、我を人の恨て我ことのはもかはるなといふにこたへたる心也、あらかひもせす古さるゝ故に、我ことのはもうつろふ由を読る也、又云、人のことのはもうつろひて、あたなる情さへなき由也、此説猶可然歟と云々

783人を思ふ心このはに

思ふ心は定心なれは、木の葉のことくなるへからすと也、かろく散もみたれしと也、此返しにてみれは、両説之中、後義に相当へきにや

なりひらの朝臣〻此こと書、伊勢物語にはかはれり

784天雲のよそにも人の

成行か、なり行哉の心也

785行かへり空にのみして

初五字、伊勢物語の哥にかはれり、就五文字有沙汰事云々、ゆきかへりとは、ひるはきて夕さりかへる様也、我ゐる山の風早みは、こと人の通する心也といへり、又云、そなたの心のはけしきをいふのみ也、此義を用云々

786から衣なれは身にこそ

衣はなるれは身にまつはるゝ物也、かけても、衣の

縁也、人に大方なれぬるはかりにて、ちかつく事なき心也、たゝかけはなれぬのみにて、かくこひんとやは思ひしと也

787 秋風は身を分てしも

心は身の内におさまる物也、秋風は身の内を分てもふかぬに、いかゝ心を空になすらんと也、秋風吹は心の空になる故也

788 つれもなく成行人の

さま〳〵かけをきしことのはを思ふ也、秋よりさきとは、大方の秋の紅葉よりさきに、はやく色かはる事を読り、又云、人の心の秋といふよりもはや詞の[*1]かはると也云々

心ちそこなへる比　俄に病気なとしたる折にや

兵衛　藤原高経朝臣女

789 しての山ふもとをみてそ

麓をみて嶺はさこそなと思へる心也と云説あり、難用之云々、かゝる時人のとはさりしをふかく恨たる心也、ふもとは山といふによて読る也、つらき人よりさきにこえしの心也、又、[*2]人をつらくは思へ共先たゝむもさすかにかなしくて帰心云々

あひしれりける人の、〻やけたるちの葉に　或説、[*3]此哥によて[*4]こと書を書あわせたるにやと云々、又焼[*5]たるにても有へし云々

790 時過て枯行をのゝ

人と我相思し事の時過たる心也、小野は氏を思ふにやと云々[*6]

791 冬枯の野へとわか身を

我思ひは行末にたのみもなき心をよめり

792 水の泡のきえてうき身と

人にうとまれたる比、思きえ〳〵するうき身なれは、はや思ひもたえぬへきに、猶たのまるゝ事を思ふ也、又云、はかなく消ならひのうき身と也

793 水無瀬川ありて行水

人の便も絶はてぬと思つめたる時、又思かへしてい

へり、みなせ河たえぬと見えぬれと、又行水のあるを思ふ也[*1]

794よしの河よしや人こそ

芳野河はよしやといはむ為也、早くといふも縁也、はやく云とはむかしの事をいへり、よしや人こそうくとも、ありし情をは忘れしと也、世間にも此理有へし、こし方の芳恩を忘へからさる也[*2]

795世中の人の心は

明也、我思人の事をいふに、世中の人と読る、面白しと云々、心には其人の事を思ふ也

796心こそうたてにくけれ

うたてはうたゝ也、あまりなるなとの心、又ははなはたの心也、又常にいへるうたてしき心にもやと云々、うつろふ事のおしきも、我心をそめし故也とよめり

797色みえてうつろふ物は

色にみえすしてうつろふ也、人の心の上は色にもみえすして、心中のうつろふを恨たる也、色にみえねは、もしやくとたのむにうつろふ事あるをうらむるなるへし、世上の人心も如此

798我のみや世をうくひすと

花と散なはとは、深く思ひし人のうつろひはてむのこと也[※1][*3]

799思ふともかれなむ人を

花といふ物は未開より心を付て、咲ぬるにも心を尽しつるに、思ひくまもなく散事を恨ても、さて恨はつる事はなし、此理にて我思ひをなくさめたる也、心をやすんすへきこと也、裏云、世上の理も、往不咎之心也[※2]

800今はとて君かかれなは

人の今はとかれはてなは也、花にさへとはす成ぬる比、此花を君もあひなれつゝ、もろともに見し事もなと思出てこそしのはめと也、猶人を忍ひ思ふ心なるへし[*4]

十四日（朱）廿八首[*5]

むねゆきのあをん　あそんとよむへし、され共をんと書るも誤にはあらさるへし、臣字ををんとよむ事あれは其義なとにやと云々、重可受説也※1

801 忘草枯もやすると
趣向あたらしき哥也と云々

802 忘草何をか種と
つれなき人打なひく事もなく、年月をさへふれは、様〳〵おもひ侘て、さらは忘なむと思心也、我心に忘草生ふへき事ならねとも、切なるあまりの心也

803 秋の田のいねてふ事も
秋の田によせてよめる也、此哥両義有、一云、いねと我いふ事もなきに何をうしとて人のかれぬらんと也、一云、いねはいな也、五音通故也、いなといと*1ふ事もなきにといふ心也、此義哥様宜かと*2云々

804 初鴈の鳴こそ渡れ
鴈は序也、又は秋の時分の事也、世の人の心といひて、我思ふ人の事をふくめり

805 哀ともうしとも物を
いとなかるらん、頭注には最無也云々、密勘にはいとまなかるらん也云々、あはれともうしとも物を思ふとは、いはゝたゝ切なる思ひのさま也、哀とは愛する也、とにかくに涙のいとまもなくて猶思ひをそふ※2るをなとかくあるらんと読り

806 身をうしと思ふにきえぬ
かくてもへぬるとある肝心の句也、思わひ〳〵ても消やらねは、かくてもある様世間の自由ならさる理也、*3かくいへるもうき人故の事なるへし

807 あまのかるもにすむ虫の
此作者※3二条后の哥也、或伊勢物語注ニ直子の哥也として、二条后の哥ならさる由みゆ、不審千万也、長良卿女二条后の妹二人有にも直子みえす、文徳の孫惟彦の女ニ直子あり、然而それにては有へからさる也、当流作名也、口決ありと云々、重受へし、二条后のうへにさま〳〵の心こもるへし、哥の心は*4殊勝の作

也、只我からの理を思へる也、一切我からそと云理に住すれは人に恨もなし、人に和する道也、されは此集の肝心也、此哥を眼目と用、裏説、重可受之、非を知は聖のはしめ也云々

808 あひみぬもうきも我身[*1]

人にあはむとて紐のとくるといふ心也、我身のから衣とは、我身からとつゝけたる心也、衣は紐に縁也、又[*2]、我おこたりのある事をよめりと云々[*3]、逢事なきもうきも只我身からなれはたのみもなきに、いかて紐のとくらんと也、裏説、万自身よりの事なるを、はかなきしるしなとをたのみてあしき事をいさむる也

たゝをん　忠臣

809 つれなきを今は恋しと[*4]

つれなきはかはりはてたる後なるへし、涙かは、なみたかなの心也、やゝもすれは立かへり〳〵恋しく心よはき様也、裏、一定不可成事を不可思也[※1]

810 人しれす絶なましかは

人の絶はてぬるはかなしき事限なけれとも、せめて人にもしられぬ事ならはと也、切なる心也、侘つゝも、尤切なる詞也、女の哥にて殊に哀也と云々

811 それをたに思ふ事とて

絶はてたる恋也、なさけと思ふへき事なけれは、それを成とも思ふ事にてもらしたにすなと也、人のかはりはてゝの事也

812 逢事のもはら絶ぬる

もはらは専也、大方恋しき時もさる事なれとも、たのむ心も有し程はなをさりなるにや

813 侘はつる時さへ物の

人もかはりはて我も思きりたるに、又物かなしく思心の出来る事を思かへす様也、涙そと我心をせめたる心也

814 恨てもなきてもいはむ

絶はてたる恋也、鏡にみゆる影ならては我にむかふ

人もなし、独身なる心也、それならては誰にてもいはんかたなしと也

815 夕されは人なき床を

殊ニ哀なる哥なるへしとそ、絶はてたる中なるを、我本心もなくほれたる様にて、夕になれは床打払つゝ思ふ心也、かゝる歎のみせむと成ける我身かと也

816 わたつ海の我身こす波

松山の浪の心也、我身こす波とは人の心の変しはてたる由也、立かへり〳〵うらむるより外の事なき也、恨つるかなといふに恨てもかひあるましき物をなといふ心あり、建立面白き哥也、わたつ海、海人等縁也、ありそ海は海の惣名也、*1 ありその浜わたり（朱）なとは越中の名所也

817 あら小田をあらすき返し

荒小田は人の心にたとへたると云説嫌道也、あら小田はかへすといふ序也、絶はてたる人も猶かへしても〳〵かきりをみてこそ思もやまめと也

818 ありそ海のはまの真砂と

※1 浜の真砂ニ*2 たとへて思心かとさま〳〵人のたのめし事はたゝわするゝ事の数也けりと也※3

819 蘆へより雲ゐをさして

序哥也、雲井に行鴈はみるうちにとをさかりつゝつゐに跡もなくなる也、めにもみえつる人の昨日けふに次第〳〵に遠さかりて終にへたゝりぬる心也※4

820 時雨つゝもみつるよりも

紅葉する比の秋は殺の気にて物かなしき物也※5、大方の秋のかなしみよりも、人のことのはの心の秋に逢は侘しき也

821 秋風のふきと吹ぬる

人の心の我に変して秋風ふきぬれは、ゆかりの人の心まて我にはかはる物也、紫の一本ゆへにの哥の理の裏也、ふきと吹ぬる面白や、世上もかくの如し

822 秋風にあふたのみこそ

秋風にあへる田※6をよそへ読り、※7 哥の心は、人をさり

ともくと思こしに秋風吹てたのむ方なき心也

823 烋風の吹うらかへす

序哥也、秋かせのしきりに吹て葛のはのかへるさまを思ふへし、恨ても猶〻〻切にいはむため也

824 秋といへはよ所にそ聞し

世間の秋は大方よ所に聞しを身にある事也けると也

825 わすらるゝ身を宇治橋の

中絶したるそと思ひしを其まゝ人の変しはてたる心也、左注[*1]無義、又はと注たるはまさらさる故[ニ]左に注たるにやと云〻

826 逢事をなからの橋の

もしやくと恋渡る間に年をへて逢事なき物故[ニ]なからへていたつらに朽はてぬる由也、橋によそへたるなるへし

827 うきなからけぬる泡とも

うきなから也、水の泡はよる方なくてうきなから消る也、其ことくよる方もなくきえなはやと也、なかれてとたに〻〻たのみこしかひもなし、行末も又たのむへきにあらねは也

828 なかれてはいもせの山の

寄恋の哥也、なかれては此句末の五句にもよほす[*2]心也、なかに落るとはふたりの中のたえぬ理也、いもせ山は紀伊国[ニ]あり、二の山の名也、吉野川をへたてたり、此哥、恋の哥としもみえす、然而[*3]深き心あり、此道より一身世界をひきて[*4]万物の根元となる也、一切陰陽之儀[*5]おなしといへとも、夫婦のかたらひは殊ふかき事也、其さま或は人の心の変するもあり、又は生死の別もあり、或は衰老なる[*6]も様〻[ニ]にして、会者定離をはなれぬ理なれは、よしや世中と云捨たる也、心ふかく尤感あり、恨捨たる心あり、則心を安する道也、恋の絶(ママ)[*7]に入たる心甚深なるへし、仰は弥高く筆に尽しかたしと云〻、此哥[ニ]古今の二字の心あり、なかれてはといふにこしかたの心あり、よしや世中といひ捨たるは今の心也、恋部にも郭公

鳴や五月といふ哥よりよしや世中とあるまて古今の心也、又此集一部の始末の事、口決あり

廿八首[*1]

古今十五日(朱)卅四首(朱)　十六　哀傷　卅四首

哀傷部には次第をも部類せす、人の高下をもわかたすあつめたる也、是哀傷の理也、此巻をは一日に伝受也、哀傷の事なれはなか〳〵しきはよろしからぬ心也、天子御相伝之時は此巻をは斟酌する也、別て勅なれは申也とそ

829 なく涙雨とふらなむ

歎の切なる心より思よれる也

さきのおほきおほいまうちきみ　忠仁公、延喜比、大政大臣只二人也、仍雖不辞官前ト書也、前後之由也云々

830 ちの涙落てそ滝つ

世になへておしみ思ふ心みえたり、素性殊ニ切に歎けるにや、尤たくみなる作也云々

ほり河のおほきゝ昭宣公、寛平三年正月薨、五十六、太政大臣、関白始

831 空蟬はからをみつゝも

土葬なりし故にいとゝあへなき心也、但後にとあり[*2]、深くしたふ心にや、うつせみは玉しゐはみえねとも、からをとむるをもみるに、それよりもはかなき心也

832 深草の野への桜し

此哥も昭宣公の別の哥也、みな人々服衣なる比なれは、花も有しにかはる色に咲といふ心也[*3]、花は不変の色にさけるをみるはかなしき心あり、花も服衣をきよといふ心とまては事過てよろしからすと云々

833 ねてもみゆねてもみえけり

敏行か別は友則切なる朋友の思なるへし、ねてみる夢もはかなく、又ねもせぬ別の夢もあたなる事を、思入たる心也、道ある人なとのむなしき折世間を観

するに、いつれの物いつれの人も皆夢にあらすといふ事なし、世は夢なりけりと観する心也

あひしれりける人の　親類なとの別なるへし

834夢とこそいふへかりけれ

明也、思けるかなと読る感ある詞也、一切の事を思ふと見えたり

835ぬるかうちにみるをのみやは

世上にかけて思へる也

836瀬をせけは渕となりても

流水[*1]不帰也、殊ニ早き瀬はとゝめかたきをそれさへせかるゝ事あり、別のとゝめかたき事を深く思心也

藤原のたゝふさかむかしあひしりて侍ける人　妻女の別なるへし、閑院の切に思ふへき人にて有けるにや[※1]

837さきたゝぬくひのや千たひ

後悔[*2]不返流水[※2]不帰之心也、我身のさきたゝすして、かゝる歎すると悔心也、後悔はたゝ流水の不帰如くかひなき事[*3]也

紀友則か身まかりにける　撰集の間にうせたり、四人の内かくうせぬるを貫之深切に思ふへし、其時の心さしを思ひやるへし[*4]云々、殊ニ一性[*5]也、友則、延喜四年大内記云々、逝年不詳、可勘之

838あ[*6]すしらぬ我身と思へと

839時しもあれ秋やは人の

同時の哥也、尤哀ふかく殊勝[*7]云々、あるをみるたに恋しきとは秋の心也、秋は我も人もすこしのへたてなとあるたに、恋しく物かなしき事なるにと也、哥の様吟詠して殊哀限なしとそ

840神無月時雨にぬるゝ

紅涙の様也、哀傷の哥はいつれも其人其時の心を思やるへし、紅葉を打なかめたる時の作なるへし

841藤衣はつるゝ糸は

藤衣はつるゝは、服中おとろへたる心也、建立面白しと云々、或説、はつるゝいとは玉をぬきとむ

る程に、それをなくさみと思ふ心也云々、不用之、

只縁にてよそへたる也

思ひに侍ける秋、山寺へ　跡なととふらひに山寺に

ゆく折の心、※1こと書の様を思ふへし

842朝露のをくての山田

秋の田は種をうふるより種々の造作有物也、程もなく苅田と成て、すこし残りたるをくてなとに、朝露のはかなくむすひたる様をみつゝ、世の人のはかなきに思よそへたる也、種子といふ事も一切の生をうけたる物のうへにあり

843墨染の君かたもとは

とふらふ人もとはるゝも涙の雨ふる由也、思ひなる*1人はいふに不及、とふ人もかゝる服衣の様なとをみるに涙を催すへし

女のおやの思にて　おやの思にて女の山寺に侍る心

あはれふかし

844足曳の山へに今は

此初の五字に感なり、枕詞なれともあし引の山へにとよめれは、大方の山の心よりも山ふかき様もあり、女のならはぬすまゐの様、其心のうちもしられ

侍るかし

諒闇の年　此諒闇の事、未詳、嵯峨(朱)御事歟、淳和の

にや、可尋之、仁明云々※2

845水の面にしつく花の色

御抄ニ委、花の枝の水にひたるか、ひたらさるかなるにや、影の水にさやかにみえたるを、天子の御影のわすれかたくみえ給へるによそへたる也、更になき影ともおほえぬ心也

深草ヽ〜御国忌(ミコキ)(朱)、或おこきと読と云々、*2当流みこきとよむ

846草ふかき霞の谷に

翌年の御国忌に読るにや、草ふかきとは、深草の心也、物ふかき様也、霞の谷は帝の崩御を昇霞と申心也、帝日役(ママ)岑万侶闇深、公雲落谷百官歎庶*4ト文の心也※3*3

と云々、てる日の暮は天子の御事を読り、けふにてはなきかと世人に歎へき事をおとろかす心也、又けふにやはあらぬとは、けふの御国忌にあたりたれとも、猶其崩御の時をしたふ心也、けふにていかてなかるらんと也、康秀は詠物巧也とみゆ、此哥殊其心みえたりと云々、或云、草ふかきことは小人にたとふ、万民百性[*2]まて歎心也と云々

深草の御門の御時に、蔵人頭にて　こと書の様にて感を思へし[※1]

僧正遍昭　蔵人頭、右近少将良岑宗貞

847 皆人は花の衣に
　明也、かはきたにといへる、切なるへし
　河原のおほい〻〻嵯峨源氏融〻〻
　近院〻〻能有、文徳源氏〻〻

848 うちつけにさひしくもあるか
　ある哉也、紅葉の色ふかゝらぬとあり、なき人の家のやかてさひしき心也、人のもてはやすによて、花紅葉も色まさる事也

849 郭公けさ鳴こゑに
　月日のうつり[※2][*3]行は、何となく打まきれきぬるに、去年の其比に成て、郭公のこゑに驚て思ふ心也、高経は長良卿の息也

850 花よりも人こそあたに
　花をうへてはいく世の春をもかけつゝ契るならひなるに、一春にたにあはすしてうせたる事尤哀なるへし、いつれをさきにとは、かねては花とも人とも思はさりしと也

851 色も香もむかしのこさに
　影そとは面影の事也

352 君まさて煙たえにし
　彼家に塩かまをうつしていかめしき事共ありし、其跡もなきやうなる心を思やるへし、うらさひしきとは何となくさひしき心也、又はいたうさひしき心と云々

藤原としもと　利基、高藤公兄

さうしのとしもとの室うせたる也[*1]※1

853 君かうへし一村すゝき

一むらすゝきにて心に句を切て心うへし、いつしか荒たる所の様也

これたかのみこの　惟喬のもとより友則か父[*2]の哥をこひ給へる也

854 ことならはことの葉さへも

如此むなしく成ぬる人ならはと也、涙の滝、縁のことはもなく[*3]読る面白しと云々

855 なき人の宿にかよはゝ

無人の宿に郭公のかよはゝと也、則かく読る人の宿の事也、※2かよはゝとはかよふとならはの心也、時鳥はしての山にかよふ鳥といふ事ある故也、かけてとは此宿と無人の方とをかけてつたへよの心也

856 誰みよと花さけるらん

無人の跡に花のみ有しにかはらす咲たるをみて読る也、白雲のたつ野とはいたく荒たる心也、葬の煙の心も有にや[*4]云々、但其期の哥にては有へからす

式部卿のみこ　敦慶、閑院の五のみこ、閑院未詳、可勘之

857 数々に我を忘ぬ

春の比うせたる人にや、数々にとは何事につけても[illegible]の心也、春の山のはの打かすみこめたる比の様を思やるへし[*5]、限の煙をいへるなるへし、※3思のはれぬ心を霞と読ると云々、いく程もなくてうせたる人の心なれは思の晴ぬ心有へし

858 声をたにきかはわかるゝ（ママ）付箋　きかでけ[illegible]

平生ふかく思かはして契たる中なるへし、こゑをたにきかてとは男のかへるをもまたすしての心也、※4玉よりもは我よりもの心也、女の哥にて殊ニかなしき心也

859 もみちはを風にまかせて

紅葉の微風にも散やすき様をみるに、命のはかなき

事を思入たる心なるへし、又は紅葉は又の秋もこそ
あれなとの余情も有へし

860 露をなとあたなる物と
平生は露なとをも只大方はかなしとのみみしに、期
に仰(ママ)てふかく思合たる也[*1]

861 つゐに行道とはかねて
昨日はけふと思はさりしの心と云説は嫌道也、一切
人の命期は只如此也、又何事にも此理あり

かひの国に　人につけ　ことつけたる也

862 かりそめの行かひちとそ
遥なる道の空にての心を思ひやるへし、行かひ、甲
斐にそへたり、母のもとへと有心を思やりて吟すへ
しと也

十六日(朱)廿三首(朱)[*2]

古今　十七　雑哥上(朱)(サツカノー)　ましへたる義なり
七十首

863 我うへに露そをくなる
伊勢物語にいへる心にはかはれり、俄にはからさる
思なとある心也、思の露の大方ならぬ故に天川と渡
る舩の雫かと読り、鳴渡る鴈の涙や落つらんのたく
ひ也、我上にとは我身に思の露のをきたる心也、裏
云、我といふも人我の対したるにあらす、禅ニ主人
公といふことくの我也、起居動静ニあつからす、青
黄赤白をも請ぬものなるへし、其上に一気始ておこ
る時、一滴の露よりはしまる、是より喜怒愛楽の七
情も生し種々の造作をなす、天川[※1]とは本分の不動所
也、ど渡る舩[*3]とは造作の道也、かいの雫は一滴の露
をうくる処也、此哥雑の第一ニ入たること心あるへ
しと云々、重而可受其説也、一気[*4]を請てより七情お
こり、さま〳〵にうつる処をしめして、此哥を雑の
第一ニをけり、いつれの哥もおなしことわさなれ共、
万の事をあつめたるを雑とする故[*5]也、次の哥も此心
をうけたり

864 思ふとちまとゐせる夜は

思かはしたる朋友なとの中なるへし、から錦はたつといはむ為斗也、錦を裁如く思ふといふ説、不可用之

865 うれしきをなにゝつゝまむ

時にあたりて悦の身にあまる事を読る也、大方の袖にはつゝまれぬ由也

866 限なき君か為にと

伊勢物語には作枝に雉をそへたるとあり、業平の哥と云々、此集には忠仁公の哥とみゆ、彼物語には禄を給ふなとあり、忠仁公褒美の餘に詠草なとに書加給へる歟[*1]と云々、此集にては忠仁公の哥と用也、爰には雉の心も造花の事も有へからす、心は人を賞したる哥なるへし、花は散やすき物なれ共、君か為に折つれは花も常磐也と也、此にては無雉之心也

867 紫の一本ゆへに

紫は武蔵野にあり、みなからは皆なから也、わか哀と思人あれは其ゆかりまてを思心也、裏云、わか愛する人ゆへにゆかりまてあるましき寵ある事あしき也、玄宗の貴妃故ニ姉妹兄弟皆列土[*2]、可怜光彩門戸生ト長恨哥ニ云か如し

めのおとうとをもて侍けるか[*3]

868 紫の色こき時は

寵愛の心也、めもはるかにみゆる草木まてわかす[*4]哀と思ふ由也、前の哥の同心也、裏説又同

大納言藤原国経　寛平六年五月五日任中納言即従三位、近院ノ〻于時大納言右大将

869 色なしと人や見るらん

そめぬ袍の綾にや、染ぬによそへて我思心さしをよめり

いそのかみのなんまつか　此名に説々あり、或説、(朱)

なんまつは童名歟[*5]云々、不審あり、[※1]次の詞にいそのかみといふ所にと書り、上の礒上は性[*6]にや、宮つかへもせてこもり侍とあり、又爵を給ふ由みゆ、童と

はみえさるにや、名乗なるへし、※1成松と書と云々、
又浪松云々

870 日の光やふしわかねは
めくみのへたてなき心也、古にし里にとは、いたつらにこもりゐし身の爵にあつかりたる心也
二条の后の　高子、貞観八年二月女御、十年十二月生第一皇子、*1十一月三日皇太子、〻春宮母儀女御也、第一皇子は*2陽成御事也
大原野社　閑院左大臣冬嗣公勧請

871 おほ原やをしほの山も
※2日神と天児屋根尊とは陰陽の神として神代合躰の約を思ふなるへし、二条后藤家也、皇太子は天子となら せ給ふへき事なれは、神代の御契のたゆましき心をよめり、御息所参詣あるに、をしほの山も*3思ふらんと也
よしみねのむねさた　こと書にあはせて俗名に入たるなるへし、又俗の時の作にや云々

872 天つかせ雲のかよひ路
五節事、袖ふる山に天人くたりしよりおこれり、今の舞姫をさして天乙女とよめる也、心は乙女の姿をあかす思ふ心なるへし、此哥は心詞相対して殊ニ遍昭詠の中にもすくれ*4たりとなむ、定家卿百人一首にも此哥を入られたり
五節の朝にかんさしの玉の　かむさしのかさりの玉也

873 ぬしや誰とへとしら玉
此ぬしを一向にしり*5給はぬはあらしなれ共、かく読たるなるへし、とへとこたへぬ程に、さらはなへてやと読たり、※3あはれとは、すこし思をかくる心有*6や、又は憐む心ともいへり
寛平の御時に　きこしめしたる酒のおろしをと申ける也、蔵人ともの此小瓶の様をわらひたる也※4

874 玉たれのこかめやいつら
御抄に委、風俗の外に玉たれのこかめとつゝけたる

哥みえす、玉たれのみすとよめる哥はあり、只風俗につきてよめると心うへしと云々、其心は未分明、心は小瓶をおかしき物とわらひつるはいつら、既におまへに出たるうへはと読る也、おきはおまへに出たる心也、本来は玉のたれたる瓶とつゝけたる心なれとも、此哥にて不当之故ニ定家卿其説ニつき給はぬにやと云々、俊成玉たれの鉤と云々

875 かたちこそみ山かくれの
明也、御(1)注、作者の心に成て思へしと云々*1、心は花にとは、何事とは不可定也、誰(2)も此理なる事あり

876 蟬のはのよるの衣は
こと書に合てすこし心得かたき歟、衣をうすきといふにあらす、うすけれとゝは、かたたかへかりそめ*2のうすき契なれとも、あるしの心さしはかゝる折にもふかき由也、たとへて読る也

877 をそく出る月にも有かな
月を待心の切なる我心より思よる也

878 我心なくさめかねつ
大和物語にをは※1を捨たりし故事を思ふ心は嫌道也、此哥に両義あり、一云、此山の月をきてみるに心をもなくさめ思をも忘れんと思ひしに、或は心有人と見はやなと思、又こし方の思もすゝむ故にかなしき心出来れはなくさめかねつと読りと云々、一云、をはすて山の月にさしむかふに所からたくひなく月はすみ渡りて、さし深たるは更にことはもなく面白く胸中ニ感情みちく〳〵たれは、いかにともせぬ心にてなくさめかねつと読る也、名山の月に対したる当位の様なるへし、此義猶感あるにやと云々*3

879 大かたは月をもめてし
是そ此とはおこたりを驚く心也、大かたは、おほよそなとの心つもりきたりて老となる事を月に対して思えたる心也、よろつの事に此世後世思べき事をは忘て、こし方貪しきたりし事をも思ふなるへし、此哥をは理をいはすしてをくへしと云説あり、心中ニ*4

観したる哥なれは也

880 かつみれとうとくも有哉

かつはかくみれともの心也、月によそへて躬恒かきたりたる事をよめり、時鳥なか鳴里のあまたあれはの心に同

881 ふたつなき物と思ひしを

新しき作也、二条家には此哥は心入すきたると云々、如此哥も撰入事又勅撰の様也云々

882 天川雲のみおにて

雲のみおとは、みおとよまむとてあまの川なれは雲によせたる也、水のみおといふは河なとふかき中程なとをいふ、月のはやくうつるをみてかく読る也

883 あかすして月のかくるゝ[*1]　明也

884 あかなくにまたきも月の

此哥、山の端にさしむきて入すもあらなんと読るとみれは誹諧になるへし、只月のかくるゝをあかすおしむ心の切なるによて、ねかひ事にいふ心にてみれはよろしき也と云々、みこの内へ入給ふにによそへたる也

田むらのみかと　あきらけいこ　慧子代始斎院、文[*2]

徳御宇

あま敬信(キヤウシン)(朱)　よるかの朝臣母

885 大空を照行月し

元来咎なき心を月によそへてよめり

十七日[*3]　廿四首(朱)

886 礒の上ふるからをのゝ

いそのかみはふると云枕言也、ふるから小野とは勘※1枯野を云歟と云々、草木枯たる心にや、※2冬は草木皆枯ぬれと、柏は散やらて春まてもある物也、本の心を忘ぬとは、ふるき由みなとある人を忘ぬ心なるへし、柏によそへてよめり、恋の哥にはあらす[*4]

887 いにしへの野中のし水

もとむすひしし水なとを忘れぬ心也、旧友のよしみを忘れさる事をよそへて読る也[*5]、顕注ニ野中清水と

は本妻の事也と云々、勘に委敷みえたり、定家卿も
さもやとは思給ふよしみゆ

888いにしへのしつのをたまき
しつのをた巻はいやしきといはむ為也、いやしき人
も又しかるへき人も一さかりはある事あり、おとろ
へなとある人の思ひをよめる也、しかれとも古のさ
かへも今にのこらす、今さかへてもむかしのおとろ
へはかへらぬ理也、只過しを思ひ残して詮なき心也

889今こそあれわれもむかしは
勘云、遁世したる物の詠と聞しと云々、此義をかな
らす用へしとはみえさるにや、男山(1)*1は世に有し時の
心、心(2)*2は今こそあれとはおとろへたる時の心也、さ
かへしことも有し昔を思出て歎たる心也、男山はさ
か行といはむためのみ也、坂とつゝけたる也、昔は
男なりしと云説は感なくや侍らんと云々、此両首、
世上の不定を思へし

890世中にふりぬるものは津の国の
明也、我身と橋とを比したる心也、此哥名たかき人
の世にもちひられすして古たる人読るなるへし、
甚(1)深義也云々、なから(2)の橋の名たかきも古※1されて、
世間の用にもたゝぬによそへたる也、橋は人を渡す(朱)
を徳とす※2

891さゝの葉にふりつむ雪の
くたち(朱)、さかりはも(朱)、くたちとはかたふく様也、我*4*3
さかりはもとは、我さかりはいかにと云心也、心に
歎也、くたつとは末になる心、斜なるなと同心也

892大あらきの杜の下草
当流*5、おあらきとよむ、山城名所也、又おほあらき
と、五字によむと云々、万葉*6におほあらきの野のさ*7
ゝなくにと七字の句によめり、それはおほあらきと
読へし、下草の老たるを我身によそへよめり、裏
〻大荒城は先王の御事、恵ありしを思也、駒は心
なき物也、心のなき人にも心ある人にも捨られたる
よし也、桜麻*8のおふの下草、おふ心得かたしと云々*9、

或説、桜麻は桜の比麻をうふる故に号云々

893 かそふれはとまらぬ物を

年月のうつり行をかそふれは、ととまる事なくかさ[*1]なる事を思ふ也、としといひては年を速なるによそへたり、かくしはしもとまらぬ年をかそへて、今年はいたく老ぬと観したる也、此哥、をろかなる心を読る也[*2]と云々、是身業をよめり

894 をしてるや難波のみつに[*3]

三津といふ所あり、みつとにこりてよむ也、[※2]をしてる難波とは、舩をゝしいたす心なる詞也、只枕言と心うへし、序哥[*4]、からくもとは辛字、くるしき心也、[*5]いたくもなと老にける哉と心にあちはふ也、此哥[*6]は、口業にあたれり、大伴[*7]のみつは、つもしすむと云々

895 老らくのこむとしりせは

老のかなしみのあまりにあるましき事をはかなくよめる也、以上三首、身口意にあたれり、此哥は、意[*8]業也[※3]

此三の哥は　以上三首の作者説々あり、文武、人丸、聖武と云々、又は、聖武、人丸、赤人と云々、或は人丸、黒主、行平云々、可有口伝乎○此三首はいつれもをろかなる心なる哥也云々、一切衆生の様皆如此、[*9]愚する理をしるは哥の徳也とそ、はかなき一[*10](ママ)は哥道也、神明の衆生に同塵もをろかなるに同し給ふ也[※4]

896 さかさまにとしもゆかなむ

年月うつり行て、よはひのつもる事を思ふあまりの心也

897 とりとむる物にしあらねは

とゝめかたき年月なれはあなうとのみ云て、年々歳々くらす事を思也

898 とゝめあへすむへもとしとは

むへもとは、ことはりにといふ心也、思とる道もなき心、としとははやき心にそへたり、しかもつれなくとは、かくもつれなく過る齢哉と也、つれなくと

ゝまらす過る事を思ふ也、年も齢も同過也、又は上を重テ云

899 鏡山いさ立よりて

鏡といふ山なれはかくよめり、花(1)の陰に休る心、此(2)哥の事、序ニ沙汰する事あり、第二句なと俗にちかきにや、心は哀なる哥也

なりひらの朝臣　母のみこ伊登内親王ゝ〳〵こと書の心哀ふかし、伊勢物語にすこしかはりたる詞あり、とみの事は俄なる事也、病気なりしにや

900 老ぬれはさらぬ別の

生老病死の理也、一子にへたゝりて時々もみすは、我身老ならて憑む心ありとも、切に思ふへき事なるをいよ〳〵見まほしかるへし、可思とそ[*1]

901 世(1)中にさらぬ別の

さら(2)ぬ別とは不辞之別也、伊物には祈ると有、爰には歎と書り、祈る心もこもるへし、業平の心より世間にかけてよめる也、優也と云[※1]

902 白雪のやへふりしける

帰山は北国なれは雪深由をよめり、か(1)へる山はかへる〳〵といはむ為也、年々かへり〳〵つゝ老となる事を思也、ゆ(2)きかへり〳〵老ぬると云[*2]、ふかく歎心あり、白雪の八重ふりしけるは、歳霜[*3]のつもる心あり

おなし御時　おほみあそひ　御遊也[※2]

903 老ぬとてなとか我身を

せめきけむ、責来也、平生は老ほとかなしき物はなしと思ひしを、けふのあそひにあひて、老すはと思ふ也、なくさめたる心也[*4]、世間にも此理ある事也

904 千早振うちの橋守

橋もりは橋(道を)をまもる神なれはちはやふると読り、橋守となりていく春秋をすくす覧とあはれふ心也、道ある人のいたつらに身の老によりて思へる也、裏云、橋守は道をまもる人の心也、其家ならてはたとへ天性器用あるも信仰しかたき也、世をへて家をか

さねたるを信用すへき事也

905 我みてもひさしくなりぬ

老者の哥なるへし、心明也、ひめ松説〻あり、小松を云説此哥にあたらさるにや、又、男松め松といふ心にて姫松はめ松也云〻、難用之、当流は松の惣名也、然而大木なとの一本あるなとは似合さるにやと云〻、大小相交たる松のさまにや、住吉の松の気色なるへしとなむ、此哥作者重可受之

906 住吉の岸のひめ松

明也、垂跡の昔なとゆかしき事をも問へき物をと也

907 梓弓いそへの小松

あつさ弓はいそといはむ為也、あらいそなとにある松の大木となるまて有へしともおほえぬか、浪風にもをかされすしてあるを読る也、海辺なる古木の松の面白きをなかめて読るなるへし、心詞殊勝也と云〻、生かたき所なるをみてかく思ひよれる也

908 かくしつゝ世をやつくさむ

我身を卑下したる心也、世を尽すとは世に久しくある也、何の用もなくてつれなく世にふる由也、高砂の松は名所の松なれは世をへてもかひある物也、さもあらぬ身の古ぬる事を歎する也[※1]

909 誰をかもしる人にせむ

こし方のとある事かゝる事をも、又今の思ひをも云へき故[*2]もなく独身なるを歎也、高砂の松にと思へとも、それも又しる人ならねはと也、高砂の松にやふるき事かたらふへきと思へとも也

十八日[*3] 廿三首（朱）

910 わたつ海の奥津塩合に

わたつうみは海の惣名也、塩あひとは塩と水とのさかひをいへり、かゝる所に泡のたえす有也、身の上の述懐也、善悪にもつかすたゝよひ[*4]、よる方もなく又きえもやらぬさま也、裏〻[*5]大海は世界也、塩合は善悪の中身[*6]をゝく心也、よく分別してつゐに身のよる方を工夫すへきをしへ也

911わたつうみのかさしにさせる

此わたつうみとは海神の事也、浪をかさしによそへたる也、さすとはかさしの様也、遠望の心也、白妙なる浪の上に淡路嶋のうかひたるは、浪にてゆひたてたる如く見ゆるよし也

912わたの原よせくる浪の

玉津嶋の眺望の心也、しは〳〵[*1]もとは、しけくみまほしき也、序哥なれとも其所の様也、かもは哉の心也、万葉にはかもと読る哥おほし、波のしは〳〵[*2]とは浪のしけきをうけたり

913難波かたしほみちくらし

あま衣は雨の衣也、田蓑とつゝけむ為也、遠望の心也、田蓑嶋にたつの鳴渡るをみて塩満くらしと読り貫之かいつみの国に　たゝふさ大和より和泉へ来る也

914君を思ひおきつの浜に

おきつの浜、和泉国也、思ひをくとつゝけたるにはあらす、たつは尋るとつゝけん為也、聞といふも縁也、尋きつれはこそありともきけと、をとつれなともなかりし事をうらむる心也

915奥津なみたかしの浜の

たかしの浜、和泉也、奥つ浪はたかしといはん為也、松の名にこそ君をとは、松は常磐なれはいつも待渡りつると也、さてこそきたりつれといふ心也、又云、たかしの浜松は名たかき松なれは聞[※1]えすやは有らんと待渡りつる也、所からによてこそきたれと我身をは卑下の心也、此義可然と云〻

916難波かた生る玉もをかりそめの[*3]

難波にいたりぬる事を海士となると読り、心に述懐ありてよめるなるへし、奉公の人のいたつらにゐ中わたらひなとするは用られさる故也、其心を読り、臣非王命不越境云〻、かりそめとはこゝにきたれる時を云り

917住吉とあまはつくとも

あまは海辺なれはよめり、人といはむに同し、長[*1]居[※1]なれゆかは人の心忘草も生るならひありとをしへたる也、人の心は始思ひしもかはるならひ也、世上にも此理有

918雨により田蓑の嶋を

一本に、きたれ共云々、定家卿筆[*3]なるへし、雨に仍て也、名には、難波をよそへたり、心は明也[※2]

法皇にし河に　宇多御事也、西河、大井御幸にや

919蘆たつのたてる河辺を

たつのむれゐ[*4]たる眺望の様也、此景をほめたる哥也、花かあらぬかと読る類也

中務のみこ　敦慶、後式部卿、法皇は宇多御事也

920水の上にうかへる舩の

君は舩、臣は水といへる心にはあらす、只当座の心也、或説、伊勢は宇多御門の御思人なれは少し其心ありて読るにやと云々

真せい法し

921宮こまてひゝきかよへる

聞えのたかき名所の心也、浪のをすけてとは、琴といふ所なれはかくよめり

922こきちらす滝の白玉

間断もなく落るさま也、我涙はこの滝の玉をかりたるとおほゆる也、世のかなしみのおほき心也

923ぬきみたる人こそ有らし

此哥伊勢物語には、我世をはけふかあすかとよみたる哥を和したる詠也、前の哥の同時とはみえす、こと書前にも布引の滝にてとありて、次の哥に又布引の滝の本にてとあり、別の時の哥にや、心は此滝の様玉の緒をときてみたしたる如く成也、ちるかは散哉也、袖のせはきにとは卑下の心也、身にあまりぬる心つゝみかたきよし也

924誰ために引てさらせる

世をへてみれとは、常住同し様なると也

神たい法し[※3]　神退

925清滝の瀬〻のしら糸

滝の眺望也、面白くみる心より此作出来たり、※1山分衣なと上下相合たりと云〻、くりためて衣を織なと有かたき事を作たる、是哥の命也となん、龍門にあり

龍門(リウモン)(朱)にまうて〻　伊勢集に此時のさまみえたり、仙の岩屋なとみたるよしあり*2*3

926たちぬはぬ衣きし人も

龍門は仙人の住し旧跡となん、仙人はたちぬはぬ衣をきると云〻、仙人も今はなし、何山姫のさらすらんと也、此布もたちぬはぬものなれはかくよめり、一云、世間にはたちぬはぬきぬきし人もなき物を、何かは山姫のはかなく布さらすらんと苦身を思ふ心也、又云、伊勢か仲平に忘られて大和へゆきし比の事也、されは人もとりもちゐぬ事を思かへし〳〵苦労したるは、此山姫の無用の布さらしたる様に似たるとよそへ思ふ心也、伊勢常に物思ひけるに述懐の哥*4*5多し、惣して其人の一生の事を聞て哥をも心うへし

云〻

朱雀院〻〻寛平御事也

橘のなかもり　長盛は直鞍ノ父也

927ぬしなくてさらせる布を

滝の事也、我心とやとは、ぬしに成てやの心也

ひえの山なるをとはの滝　音羽といふ所西坂本にありと云〻、当国に両所也と*6

928おち滝つたきのみなかみ

重詞也、水上を髪によそへたり、滝の水上のしろ〳〵と落たるをみて思よれる也*7

929風吹と所もさらぬ

滝のさま白雲のたなひきたることくなるをみる興也

三条の町　惟喬みこの母、名虎女紀静子也、勘には更衣とみゆ

930思ひせく心のうちの

絵なる滝を思ひによそへたり、心中の思を御門へもらし奉る心あり

931さき初し時より後は
一[*1](ママ)絵に書そめしよりにや、不断なる心也

932かりてほす山田のいねの
絵に山田に鴈もありとみえたり、かりてと云て鴈の心あり、こきたれてはかきたれて也、頻なる心也、
我思ひをよめる也
十[*2]九日　廿五首（朱）

雑哥[*3]下　十八　　六十八首

933世中は何か常なる
あすか河の渕瀬にかはり安きをみて、世上の何事いかなるわさか常ならんと観したる心也

934いく世しもあらし我身を
此哥はあまのかるもにと読る肝心也、あまのかるもにとよめる、たけもありめてたし云々、藻はみたるゝ物なれは也、殊ニ感あり、たくひなき哥[*4]也云々

935鴈のくる嶺の朝霧
上は序也、又は鴈のくる時分の景、秋の哀をふく[*5]める心あり、思ふへし、此哥くるみといふ物を隠題によめるとなん、此集にては無用云々

936しかりとてそむかれなくに
しかりとてはさありとて也、世中のうき事あるたひには先歎かるゝ也、さありとてそむかれはせすと也、人々かくをろかなる也、篁身上の思ある心より読るなるへし、此哥心詞つよく金石の如くにして、尤心詞甚深にして、すくれたる作也と云々

937都人いかにとゝはゝ
殊ニ悲き心みえたる哥也、もしほたれつゝの類也、甲斐のしらねなと大山の陰に住居して、なくさむかたもなき遠国の様を思やるへし
文屋〻〻あかた見には[※1]

938侘ぬれは身をうき草の
初五字尤切なる心也、おほくの心こもるへし、余情[(1)]無限云々、落[(2)]つく所もなき身の様を萍にたとへたり、

哀ふかしとなん

939 哀てふ事こそうたて

あはれてふ事とは、実なけれとも[*1]其事となく少憑事あるやうなる事也、さても[*2]世は捨かたきを、うたて(1)、うたゝ也、いよ〳〵なとの心、かくて(2)世を打過〳〵する事を思かへす心也、表裏おなし心也

940 あはれてふことの葉ことに

何となくこしかたはとありし物を、かゝりしなとこふる心也、かひなき事なるへし、涙なりけりとことはりたる也

941 世中のうきもつらきも

涙に告る事はなきを、うき事にあたりてはさきたつやうなれは也、うきをしる人はなくて、たゝ涙のみなる心也

942 世中は夢かうつゝか

世のさまかくのことし、此哥は色即是空〻即是色の心也と云〻

943 世中にいつら我身の

とかめたる(1)心あり、いつら(2)とはありともなしとも難分別之心也、あはれむへき我身とやせん、又ひたふるうきとやいはんの心也

944 山里は物の侘しき

物の侘しきとは一事にあらす、万つ事たらすさひし(わ歟)さもかた〳〵住かたき心也、物のさひしきといふ本難用之、世[*3]のうきになすらふれは猶住よきと也

945 しら雲の絶すたなひく

心は明也、惟喬のみこの御詠にて殊〻感あり、小野〻山里のかすかなる御[*4]すまゐの様思やるへし、伊物[*5]にもみえたり、位につき給へき御身の云〻

946 しりにけむ聞てもいとへ

しくめるとはしきりなる也、見御抄、知にけんとは世のうき事は人〻心にあたりて知らんと也、又さもおほえすは聞てもいとへと也、世上の風波ほとはけしき事[*6]はなし、見ても聞ても心のとまるへきにあら

すと也

947いつくにか世をはいとはむ

勘〻〱*1世をそむきてもいつくにこもりゐんともおほえす、野にも山にも迷つへき事を思也、又云、世をいとひて、いつくにか*2とあらぬ野山を思やる、其心やかて野山に迷らんと也

948世中はむかしよりやは

むかしよりはやはうかるへき、只我身一の為に世はうき物となれる歟と也、又云(朱)、かくうき事はむかしよりなれるか、又我身一の為になれる歟と也、やはのはの字はやすめ字也※1

949世中をいとふ山への

世をいとひてすむ山里なとのあたりにさける卯の花をみて、花もうき名ある色に*3咲けると也、花の心の色ニ出けると也、草木とやと読る大やうにて感あり

950み吉野ゝ山のあなたに

深きより深きをもとめたる心也、世のうき事の切なるを歎心也※2

951世にふれはうさこそまされ

岩のかけ道、かけ道両説也、陰道は面白しと云〻、かけ道も一説也、山ふかく入て岩の陰道の人しれぬ処をも分入らんの心也、かけ道の心は、*4はけしき道をもふみならしてんと也、世のうき心切也、ふみならしてんはふみなれんと也

952いかならん岩ほの中に

※3心詞無限可工夫云〻、巌中までもうき事はいたるへき心也、世のうき事はいつくに行てものかれぬ物そと思ふ心よりいへる也、※4世のいとはしき心の深きより尋思ふ也、初五字殊ニ感也とそ

953あし引の山のまに〳〵

あるかひもなしは山のかひによせたり、山のまに〳〵とは、山に我身をまかせてかくれんと也、とかく*5思かへす、たゝ山にまかせんと也、哀あり、世にかひなき心也

954 世中のうけくにあきぬ

見御抄、うけくとはさむけくなといふ如く、けくはそへたる詞也、うき事にあきはてぬ、※1ゆきや消なましと也、雪を行にそへたり、素伝説云、木のはゝかろき物也、雪もはかなき心有と云々

955 よのうきめみえぬ山路へ

山路にと読へき哥なるを、同文字をさるによて山ちへと読也、但此集に此への字をあまた読り、えとへと同こゑなれと、かなつかひのかはる故に読る也、※2哥の心又殊勝也云々、思ふ人とは何となく思ふ人有へし

956 世をすてゝ山に入人

我世のうき心より思やれる也、猶心のおく其人に有へきを思心面白くや云々

物思ひける時いときなき子をみて　躬恒か子なるへし

957 今更に何おひ出らん

明也、尤哀深哥云々

*1 廿日　廿三首（朱）

958 世にふれはことの葉しけき

世中は人のことの葉しけき物也、又云、諺しけき心也、我思を鶯によそへて読り

959 木にもあらす草にもあらぬ

御抄に、内親王入内の後、思ふやうにもなき時の詠なるへしと見えたり、はしにとはは*2はしたなる心、つく方なき心也、或本ニはしたに我身とありと云々、はしにはまさるへくやとそ

ある人のいはく高津のみこの哥也　桓武女

960 我身からうき世中と

両義あり、我身からとは、うき世の我とうき世と名につきて、人の為さへかなしくなれると也、此義ハ諧ニなる説也、難用云々、又云、我一身*3よりうき世と名付て人のためさへかなしくなすと也、以上二首は好へからさる躰の哥也とそ、此外山のはにけて、山のはならて出る月、駒のあ*4しおれなとも此類なるへ

し、但撰集の様なりと云々

961 思きやひなの別に

八十嶋かけてと読し時の哥なるへし、ひなの別は、ひなに別きたる也、なはたきとは、縄をたくる也、※1釣のことわさをのみ友とみる心也、奥の小嶋の様を思ふへし、思きやと読る心様〳〵なるへし、*1篁は仁明御時遣唐使(ママ)*2のそへ使にさゝれたりしを、一人ならはと申しによりて流されたる人也、才智すくれたる人なれは、高位高官にも思かけぬへきを、かゝる罪にあたれる、思かけぬ心なるへし

田むらの御時ことにあたりて　流罪なるへし

962 わくらはにとふ人あらは

わくらはとはたまさかなる心也、もし我を問人あらはかくこたへよと也、殊ニあはれふかしと云々

左近将監とけて　をのゝはる風　寛平二年任右少将

963 あまひこのをとつれしとそ

天ひこのをとつるゝは、有かなきかはかりかたき物也、我身の様をかれにたとへたり、今の身のさま有かひもなく、有かなきかなる心也、昇進をこそ思ひしに官さへとけてかひなき時の心也、人のをとつれをあまひこになすらふるにや云々

964 うき世には門させりとも

つかさとけて、此世に執心もあるまし き身なるといふ心也、門させりともといふ作珎しき心也、切にかへり見たる也

965 ありはてぬ命待まの

明也、殊ニ哀なる心也と云々

みこの宮の　春宮也　たちはきに

みやち*3のきよき　小書○※2

966 つくはねの木のもとことに

つくはねを君によそふる也、木の本ことに〳〵つかさもとけぬれとも猶めくみをしたふ心也、東宮かたの人のあたりに立寄心なるへし、春のみ山は春宮の

心也、君臣の道をたかへぬ心あり

時なりける人の、〻思て　おもつてと読也

967 ひかりなき谷には春も

深谷の目月の光も不及心也、春もよそなるとは、めくみのよそなる也、をのつから愁もなき心也、此理を思ふへし、無事の境堺也、徳は失のもと也[*1]

桂に侍ける　伊勢は七条后宮に宮つかへしけり、御門の御子をもち奉りて桂にをきまいらせたる時、后宮の御哥のかへしに読ると家集にはみえたり、此こと書は伊勢も桂に有ける時の哥どみゆ

968 久かたの中におひたる

中宮を月にたとふ、烝の宮とも号す、中に生たるは桂[*2]の事也、光をのみそ、中宮の恵をのみたのむと也

紀のとしさた　阿波介

969 今そしるくるしき物と

人を待侘てくるしき時思ひしる心也[*3]○、人にまたるゝ時は此心を忘るゝ也

これたかのみこのもとに　伊勢物語の詞にすこしかはれり、此哥小野にて読とみえたり

970 忘ては夢かとそ思ふ

初の五字肝心也、此哥惟喬の一生の様を思合すへし、心詞殊勝云〻

971 年をへて住こし里を

女にをくる哥也、伊物にはあき方ニなると有、立出て程をへは野とやならんと思やる也、女をあはれむ心也

972 野とならは鶉となきて

物語には、鶉となりて鳴をらんとあり、あらためて[*4]殊ニ哀ありと云〻、狩によそへたる心にはあらす、[※1]此哥不便なる様也云〻、此返しの心尤人の心にかくへき処也[*5]

973 我を君なにはの浦に

みつの、[※2]すみてよむと云〻、我を何とも思はさりしかはの心也、切にもあらぬ由也、なにはの事にも心

とむる様もみえさりしと也

此哥は　みつの寺に[※1]

974 難波かたうらむへきまも

いつの程にかくうらむらん、さもおほえすと也、いつこをみつの、我心をいかにみてか、かくなりけむと也

975 今更にとふへき人も

人に問捨られたる心也、てへとはといへ也、うらみたる心也、誰にいふとはなし

676 水の面に生る五月の

五月はうき草のしけくなる比也、うき事のしけき心によめり、ねをたえてこぬとは、かきたえをとつれぬ心也

977 身をすててゆきやしにけむ

此哥こと書にかなへり、[*1]心すこし心得かたし、尤とふへき事なるをとはさりしかは、我心の身を捨て外へや行けんと也、慮外なる由也

978 君か思ひ雪とつもらは

躬恒を思ふ心は、此雪の如くつもるといひしによて読る也

979 君をのみ思ひこしちの

白山の雪の如く思心なれはつくすへからすと也、思ひこしちのとは、こしにありしより思こし心の浅からぬといふ心あり

980 思ひやるこしの白山

人を思心の深き様也、優なる哥也とそ

[*2]廿一日　廿首（朱）

題しらす　読人しらす　以前注之、[*3]又此ニおひて子細あり、義ある哥なれは題しらすと書り、よみ人しらす、哥の数のおほく入事を憚て隠名事あり、又神詠勅詠なとにもあり、此題不知は神詠の故也○

981 いさこゝに我世はへなん

菅原の伏見は大和国也、名高き里の荒行をおしむ心也、爰にしはらく世をへて里を荒さしと也、裏説

云、伏見里とは人の境堺也、菅原は世澆季にして人の心のみたりかはしき様也、いさこゝに我世はへなんとは、日神和光同塵の心也、是神明の誓也、夫日本は神国也、神代より人の世とわかれ来り、神代は大道也、人の世となりて仁義五常出来れり、大道廃て仁義興之理也、仁義も又すたれて人々失正成邪之故ニ、日神此時和光同塵し給て避邪立正之徳をほとこしまします、神(1)も和光に及へからす、是(2)によりて罰あり、利生あり、大道之時は此義有へからす、いたりてはたゝ無事の境堺に身をおさめよとの心を、神のめくみましますなるへし、日神の神詠也、人に託しなとありけるにや

982 我庵は三わの山もと

明神御詠也、明神此山本に垂跡して和光の恵をほとこす、こひねかひて仰奉らん人は尋よ、杉立門を知へにしてと也、杉立門口伝也云々、裏云、我庵とは垂跡のたちと也、三わの山本とは衆生の貪嗔癡の三毒也、三毒あつくたかくして此輪を出る事かたし、此三の輪を越よとあはれみ給ふ明神の御心也、此境堺に和光し給ふ心也、一切衆生をまねき給ふ由也、又人人此三毒のあつまる処は四大五蘊也、此中ニ心地の和光を神とす、心地の和光とは慈悲と正直と是也、則三毒を破へし、此理は三輪明神の心を不借して即一心ニ和光する也

983 我庵は都のたつみ

此哥は喜撰世をのかれて、身を安んして此山に居住したる時なるへし、しかそすむと読る心にかなへり、住えたる心あり、人々世をうしとは云也、誰も身をおさめ心をやすんせは人々喜撰なるへし、裏云、我庵とは王舎城也、我とは心王也、天台に王即心王舎即五蘊と釈す、城は本覚法身のみやこ也、世を宇治山とは五蘊之中に六塵の山有を云也、迷悟の一心ニ有事をしめす也、故ニ毘盧心土不超凡下一念と云々

984 荒にけりあはれいく世の

さるへき人の宿なとの思の外荒はてゝ、住こし人も行衛しられす成て音信もなき心也、旧宅を打なかめて、いく世の宿なるらんとあはれむ也、裏云、世の濁に成て、人心の欲[*1]にのみ成たるを荒にける宿と読り、住けん人のとは仁心[※1]のうせたる事也、自性の仁を失したるを歎心なるへし

985 侘人のすむへき宿と[*2]

女の所へ読てつかはしたる哥なれは俗名ニ入たりと云々、をのつから俗にての事にもや、世を侘人の住らんとみる故に、ひく琴の音も歎のこゑにきこゆる也、怨者は其吟悲なれは琴声もさも有へし、裏云、生死におほれたる有待[*3]の穢身のあやうき様を荒たる宿といへり、盈ては缺[*4]ふかる人生を侘人とよめり、人々のことわさは皆歎なる事のみ也

986 人ふるす里をいとひて

物思事ある時の哥なるへし、ならの都も古郷なれは人の古したる里也、されは爰もうき事のかはらぬ心也、裏云、定心ならされは堪忍の心なくてこゝをさり、かしこに行ても同愁なるへし、富貴薄命も天然之理也、此理を心得て心を安すへしと也、影[*5]ヲイトヒテ走ルカ如シ云々

987 世の中はいつれかさして

世間に我宿と定むへき事なし、古郷と思ふ処にも住はてぬことあり、他郷にも又住つく事も有之[*6][※2]、世界は常住にして方処なし、○[*7] 裏云、十界分々の住処也、十界皆かりの境也、いつくか真の住処ならん、生死の本末をしらせむの心也

988 逢坂の嵐のかせは

嵐のかせはさむくかなしけれとも、爰をさりても行すゑをもしらぬ故ニ侘つゝ有心也、ぬるとはふる心也、哥の様に読る也、殊勝也[*8]云々、又はね覚によめるにや云々、裏云、五行相合之境を相坂といへり、嵐のかせは有為転変の心也、五行所成之此身は必有為の転変ニ[*9]あへる理也、此心行ゑ[*10]しらぬはてもなし、落

着難知、たゝ侘つゝ送年也

989 風の上にありかさためぬ

一身のはかなきさま也、行ゑしらす成つへき心也、裏云、風の上の塵とは、風大地大[*1]也、塵は土也、水火は風と地とに属す、人身の五大所成之様也、人身は風にもたれて軽物也、五大所成に生して老病死にうつる也、其理を行衛もしらすなるといへり、空大也、但終に空[*2]に帰[*3]すとのみ見は二乗の見也、生死を常住と見理ありとそ、是法住法位世間相常住也、此哥も生死の本末をしらしめむの心也、以上三首蟬丸の哥也、世中はいつれかさしての哥は身業也、相坂の嵐風のは心業也、風の上の身心[※1]のはてをあらはせり、御抄云、蟬丸哥也、後撰には名をあらはし、古今には名をあらはさす、古今ならひし次[※2]に聞し事なれはと云々、其心あるへし、蟬丸は化人也、仍此集に名をあらはさゝるは面白き理也、然を後撰にあらはすは定家卿庶幾なき心にや、いさ爰に我世はといふ哥より此に至て九首也、今世後世共に身上をはかる哥也、尤肝心とそ、神道を仰[*4]は王法全し、世間をなけゝは仏法あらはる云々、抑雑哥の始に我上に露そをくと読る、一滴の露より起る心を始として次第に種々の人事にうつる心みえたり、其中に恋の心又は祝言等さま〳〵あり、雪月花の興にいたるまてよくましへたる部也、もれたる事なしと也

990 あすか河渕にもあらぬ

瀬になるを銭にそへたると云説かつて嫌道也、あすか河の渕瀬にかはるも自然之理也、家[*5]をうりて渕瀬の如くなるさまも又自然の理也、されは歎かさる心伊勢か心也、栄辱得失も又自然也、此哥伊勢か女の中務[*6]伝受の哥也と云々、風躰面白哥也、又身上の教也、自然之理を知には人を恨る心も有へからす、是則和する道也、仍肝心とす

991 古郷はみしこともあらす

見し如くもあらす也、碁を立入たると云々、晋の王

質入仙家見碁たる事を思へる也、朽し所そ恋しかりけるとは、碁をうちし朋友のかたをこふる也、古郷のゆかりも不平なる事あれはむつましからす、他人なれ共むつましき事ある理也

992 みちのく　橘のくすなをか女　葛直

あかさりし袖のなかにや

女は友たちをもふかく思ふ心あるによてかく読る也、裏説云、此哥ニ嫌へき心あり、友たちと物語なとして別ぬる事を、袖の中にや入にけん、玉しゐのなき心ちするとまてはあまりに過たる理也、人を思ふ事も過たるはかへりてうとくなる事あり、世上常に如此と云々

寛平御時　もろこしのはう官　遣唐使大使一人副使二人判官四人云々

993 なよ竹のよなかきうへに

なよ竹はよのなかき竹也、にか竹にや、よなかきうへに、竹のさま也、夜なかきといはむため也、おきゐて物を思ふとは、今夜の別の悲き心也、よなかきといふに御門東宮をかけて祝する心あり

994 風吹は奥津白波

左の注、伊勢物語にすこしつゝかはれり、殊ニ面白く哀也云々、注を委く書たるにて心を思入へし、夜は、古くはよはと読、今はよわと用也、頭注ニ奥津白波を盗人の心にあらすと会見せり、勘ニ盗人の事と聞き、此今案可仰可興、やまとにはあらぬから衣のたくひと云々、心は立田山の深き道を越る事を思やる也、女のおとろへぬるにかれ行人はかなしけれ共力なし、さても猶男を思ふ心尤哀ありと云々、此内に盗人のことなともこもるへき歟云々

995 たか御祓ゆふ付鳥か

から衣はたつたといはむ為也、立田は四境の祭に鶏を置所也、ゆふをつくると云々、たつたにてゆふ付鳥の鳴を聞たる心也、たか御祓のゆふ付鳥にてか、たつたの山におりはへて鳴と也、立田は御祓の在所

也、おりはへて、打はへて同し

996 忘られん時しのへとそ

たかともしらぬ文をとりて見たる時よめる心也云々、こと書のほしき哥といへり、今案、友なとの方へやる文の事をよめるにやと云々

貞観御時　奈良御門　聖武御時と答奉る也、此時分は万葉事うとかりしとみえたり、聖武より清和までの間十二代也、順か次点(シテン)(朱)*1より以前は不分明云々

997 神無月時雨ふりをける

あつめをきたる心あり、神な月は時雨といはむ為也、又此時神な月にや云々

寛平御時　つゐてにとは、※1めさるゝ哥奉る次ニ奉りける也

998 あしたつのひとりをくれて

きこえつかなむ、鶴戻*2九皐声聞于天と云心あり、心は千里官なと成をくれたる心を申上はやの心也、誰もきこえつけと也、鶴のさはにあるによそへたり

999 人しれす思ふ心は

同時の哥なるへし、官位なとのそむ事ある心也、春霞は立出てといはむ為也、又霞はみる人の愛する物なれは、君にみらん心によそへたり、立出てとは立身の事也、思心は是也とよめり

1000 山河のをとにのみきく

宇多おりゐ給て後、伊勢七条后宮に候しか、其後宮中にすまさりし時、哥めしけるに奉る也、山川は音にきくといはむ為也、みをはやなからも縁也、水のみおのはやき心也、身を昔のやうにして百敷※2をみるよしもかなと也、たとへみる事ありとも、むかしの如くならてはかひなき心あり、※3雑部哥躰(ノ)は浅より深ニ入深より浅(ク)入か如しと云々

廿二日*4(朱)

古今　十九○雑躰(サッテイ)(朱)

雑の哥に相似たり、此部は躰を交たる哥也、躰は長

哥、短哥、旋頭、混本等也、混本哥はみえされ共、此中にをのつからある理あり、混本哥は三十一字の哥に一句不足也、長哥[*1]のさま混本ともいふへきにやと云々

短哥　長哥[※1]を短哥と号たる事古来の大事也、種々説あり、万葉には長き哥をは長哥と書、其奥ニ加たる三十一字の哥をは短哥と号す、或は反哥[※2]共いへり、長きを短哥と号事なし、但万葉の中に一首あり、七夕哥のみ也と云説あり、未分明にや、一説云、此集の長哥の中ニ忠岑か長哥の奥にのみ短哥あり、其をもて短哥と号と云々、難信用之説也、題短哥事、一首ニかきるとみえす、俊頼[*2]、顕輔等説、又云、三十一字とつゝきたる所なし、みしかく読切たる故也云々、此説俊成用にはあらねとも興ある説と云々、又説、最末卅一字の一首となる故ニ号短哥[*3]云々、是も未詳事也、又云、此部の初の一首を短哥と題す、次よりは長哥[*4]とあれは長哥なるへし[*5]云々、是又難用也、短哥は惣ニ題する号也、哥には各こと書あり、所詮難決事なるへし、久安崇徳院時百首哥めしけるに、奥ニ短哥を奉るへき勅定なりしに皆奉長哥云々、此時俊成卿も御人数也き、此仰は古今に准せし義にや、千載集には短哥と題せり、俊成卿准古今之心也、定家卿は此事を此集の遺恨也と云々、長哥と題せさるを庶幾なきにや、尚以難決事[*7]也云々、当流には此事おほつかなきをもて心とす[*8]云々、定可有会見[*9]乎

題しらす（朱）　此哥は恋の哥也

よみ人しらす　爰には有口伝云々

1001 あふ事の稀なる色に
　色は思そむる心也
もえつゝとはに[※3]たゆる時なく、行水をうけてかく
　なはをかけたる詞也、かくなわとは油物也云々、縄
　の如くにて乱たるさま也
思みたれて　かくなはをうけてふる雪によそへたり、
えふの身なれは　えんふの身也、此界ニ生たる身な

れは思はしと思ふ事も難休也、見御抄

山下水の　思ひはふかしといふより出たる詞也

せむすへなみに　せんたよりもなき心也

思へともなをなけかれぬ　又打かへし歎也、さても

あはすしてやはてんと思ふ心也

春霞　かすみは遠く立物なれはよそにとつゝけたり、天雲のよそにと云か如し、思へともと云詞にけ

なはけぬへくの心こもれり

ふる哥たてまつりし時のもくろくのそのなかうた※1

此集を撰時、古来の旧哥等を奉し時の事也、真名序ニみえたり、もくろくとは、此集の部立の目録の心也、序の長哥*1とは、此長哥を部立の序のやうに読て奉る由也

1002 ちはやふる神の御代より

和哥のはしまりより代々にたえぬよし也、伊弉諾以来妻盛烏尊*2(ママ)にいたり、人の世となりて此道のさかりなる事をいへり

あまひこの音羽の山の　枕言也、此中に此たくひおほし、音羽はの山*3の東なる山なれは、春のくるに縁*4あり

思みたれて　霞のみたるゝ心、撰集の事を思心*5こもれり、以上春の部也

五月雨の　これより夏也

もみち葉を　秋の部也

神な月　以下冬なり

(1)千世*6にといはふ　賀也

世の人の　上の句をうけ下の句にかけたる詞也、此たくひおほし

(2)庭もはたれに　うす雪のさまと云々※2、草木のはのたるゝ程なるを云云*7

もゆる思も　恋也、あかすしては不満足の思也、上下をかけたる詞也

わかるゝ涙　雑*8(ママ)別也、旅は是ニ属すへし

藤衣　哀傷*9也、をれる心も八千種のは哀傷の心也、

これより雑部以下終までの心こもるへし

ことのはことに※1

うらの塩貝ひろひあつめ　此集をえらふに古来の哥等をあつむる心、しほかひをひろふ如くの心也

とれりとすれと玉のをのみしかき心　心*1みしかくていかゝなんと思ひわつらふ由也、卑下の心也

なをあら玉の年をへて　撰集事延喜五年ニ勅を奉りて、奏覧は年をへて後の事也と云々

大宮にのみ〻〻此集仁寿殿にして撰之云々、勅にしたかひて撰スル様也

かへり見もせぬ　忍草生ふる〻〻卑下の心也

ふる春雨のもりやしぬらん　下の心は如此さま〳〵撰あつむれ共、猶さるへき哥なともやもれぬらんと也、諸人の心をかへりみ*2おほふ心なるへし

古哥(朱)にくはへて　諸人の旧哥を撰者として奉るに、加て奉る長哥也

1003 呉竹の世々のふることなかりせは

旧哥共を奉る事也、神代より代々の事也、此道ならてはいかてか我も人も思をのへんの心也

あはれ昔へありきてふ人丸こそは　人丸文武合躰の臣として哥道興盛ありし事※2なれはうれしきと也

身はしもなから　人丸は高官ならねともと也、正三位ニ*4(ママ)叙したるも哥の道によての事と云々、此道の御師たりし事*5也

今もおほせのくたれるは　此集撰事也、人丸の跡をつけとの仰なるにやの心也、真名序ニ先師柿本人丸と云々、此心也

塵の身に　我身を卑下の詞也

つもれることをとはるらむ　撰者を承りて古いまの哥をえらひ奉るへき由仰らるゝ心也

これを思へは獣の　家集には薬*6けかせる獣のとあり云々、淮南王*7古事也、人丸の力にて我も如此承る心薬*8の力にたとふ云々、又心は数ならぬ身にして※3撰者承て、及なき禁中ニ入てえらふ事をたとへたり

千々のなさけもおもほえす云々　君恩の千万なる事もおほえす、身にとりては此一事のみ思出なる心也、撰者として万代に名をのこす事切なるへしかくはあれとも照るひかり、〻てるひかりちかきまもりとは、左近衛の番長にて、天子のちかきまもりなりしこと也

誰かは秋のくる方に　其後右衛門尉生[*1]に任す、随身なれは随分の昇進なれとも、外衛なる事をかなしふ也、君に遠き心也、右衛門を秋のくる方といへり、左は春に属し右は秋をつかさとる義也

あさむき出てゝ　とは、いつはりはかる心也、御抄に蓮葉の哥の注に見えたり、[※1]たれかはたはかるやうにして、外衛の官になしつらんとおほめくよし也

おさ〳〵しくもおもほえす　おさ〳〵しくはおとなしき心也、昇進をもおさ〳〵しくも思はすと也

九かさねの中にては、〻禁中にても殊に君にちかき心也、近衛なりし時の事也

今は野山しちかけれは　君に遠くなる心也

春は霞にたなひかれ　野山ちかきといふ心よりかくよめり、四時の様也、袖をかしせめらるゝなと君をしたひ奉る心也

つもれる年を

いつゝのむつ　は、卅年奉[*2]公也、番長に成しよりこなたの事也

これにそはれる　奉公卅年の外の年を加ての事也

やよけれは　よきり過る心也云々、はやき心也

なみのしはにや　ひたひの波の心也

おほほれん　は、老はてなむ事也

老すしなすの薬もか　不老不死の薬もかな也

若えつゝみむ　我老身わかくなりたきよし也

1004 君か代に相坂山の

此集の撰者と成て、後代に跡をのこさむ事を悦心也、我身のかなしみを兼て思ける事よと也

反哥（ハンカ）（朱）とは、前の長哥の心を一首に返してよむ心

也、又は反哥をへんかとよむ説ありと云々※1

冬のなかうた　この長哥殊ニ面白しと云々、是は此集を撰時の哥にはあらさるにや

1005 千はやふる神な月とや
くもりもあへす初時雨うち時雨イ
玉のをとけて　霰のちる様也
白雪のつもり〳〵て　是より卅一字の一首となれり、長哥いつれも多分如此シ

年をあまたも過しつる哉　此詞ニ一切の事、心の思ひおほくこもるへし

七条の后うせ給　延喜七年六月八日崩卅六

1006 奥津なみあれのみまさる
奥つなみはあるゝとうけむため也、又は宮中もすさましく成ぬる心、陰をたのみし身もより所なき様也

伊せのあまも　尼の心にあらす、伊勢といふ名をよそへたる也

涙の色の紅は　我らか中の時雨にて　とは、伊せ一人にかきらす、人人の様也

とまる物とは花すゝき　花薄のみ残るへしと也、薄によそへて我身の様をいへり、むれたちても薄の様也、人々の歎*1く様をよそへたり

空をまねかは　天にあをく心にや、又打なかむるさまなるへし、薄によせてまねくとよめり、又つゐに宮の中をわかれなは、空をあふきてよ所にこそみめの心あり

初鴈の鳴渡りつゝ　花薄なとの比鴈の鳴に縁あり

よ所にこそみめ　宮の中をわかれなはの心也

旋頭哥　はしめにかへる心也、かみに帰る共、五句の外ニ一句あまる哥也、五字にても七字にても一句あまる也、卅一字の如く次第にくたらすしてかさなる句にてはしめにかへる心也

1007 うち渡すをちかた人に物申われ
梅花をよめる哥也、打渡すとは行人の様也、梅花の辺を行かふ人をみて問心也、梅花とはみつれ共、奇

妙ニ思ふ故ニ何の花そととふよし也

1008 春されは野へに先さくみれとあかぬ（朱）

此句は一字あまりて読る句也

まひなしにたゝ名のるへき〜まひなしとは、花もいひなしにてこそあれ、やすらかにやは名のるへきといふ心也、※1たとへは物にそ有けるといふ詞を物にさりけるといふか如しと云々、梅とみれとも何の花そととへる返しなれは、花もいひなしにてこそあれ、あさはかにたゝ名のるへき花の名にて有らむやと、思はせてこたへたる心也、見御抄、顕昭はまひなひの事と云々

題しらす　前の哥も題不知也、此ニ又書る不審也云々（朱）

1009 はつせ河ふる川のへに*1　ふた本ある杉

古河のへも初瀬川の名所なるへし云々、名木なれは面白き心也、又もあひみんは杉をほめたる也、又恋の心にもや*2※2

1010 君かさすみかさの山のもみち葉の色（朱）

うち時雨たる比、三笠の山の紅葉をみてよめる也、雨は笠に縁あり、又はみかさ山なれとも雨のもりて染たるとみる心と云々

*3五十八首　廿三日　廿九首（朱）

誹諧哥　そしりてとゝのふる心也、正道にあらすして正道をみちひく理ある也云々、誹諧哥は、おもては利口にて、事過たる様にて、非正道、此躰は哥の宜しからぬ躰也としるは則正道をみちひく理也、道にいたりては毛詩の心あり、諸国の詩を采詩の官あつめて奉るをみて、政を直する類なるへし云々※3

史紀滑稽（コッケイ）伝なとの心也※4

後漢東方朔至て矮子也、禁庭にて雨の降時、矮子のをそくぬるゝ由の利口を云しによて、余人雨にぬるゝ事を御覧して、*4ぬれぬことありしも此類也云々*5

雑躰之中にも長哥五首、旋頭四首あり、誹諧哥五十八首入たり、道のため用ある哥なる心みえたり

此部の哥に裏の説有哥多之、和国の仮名の字のみを

もて、身をおさめ政をあらたむる理をうる事肝心也、人〻身上の本末をも知へしと云〻

・誹[*1]甫尾切・誹謗也・諧胡皆切・和也・合也・調也・偶也、偶〻合也

1011 梅花みにこそきつれ

ひとく〳〵とは、鶯のとひなきの声をきゝなしたる也、梅花をみにきたる人なるを、鶯のおとろきて人来といとふさまに鳴也、いとひしものしもは詞のたすけのみ也、裏説云、人はさもなき事を、とや思ふらんかくや思ふなと、疑心の深きはあしきこと也

1012 山ふきの花色衣

黄衣の事と云〻、又は山吹花をさして云也云〻、此説宜乎、くちなしにしてとはこたへぬ心也、山ふきは口なしの色なれは也、不多言を執する也

1013 いくはくの田をつくれはか

しての田おさは郭公[*2]の別名也、時鳥と我名を鳴事をしての田おさをよふとよめり、田をうふる時分鳴鳥也、或云、過時不熟と鳴と云[*3]〻、あさな〳〵よふは、いくはくの田をつくるらんと也、裏云、道をおこなふ人の、成もたゝぬ事、我分剤[*4]にあはぬ事なとをなさむとするはあしき事也、不可成之時をは退へき也と云〻

1014 いつしかとまたく心を

またく心は待心也、跨くる心をよそへて読り、脛にかきあけてさしまたけて渡らんと也、明日[*5]まてはをそき心にてけふやと読り、裏云、成就すへき事の眼前なるをまたすして急〻するはあしき事也、又成就の遠かるへき事は又急にすへからさる也

1015 むつこともまたつきなくに

秋の夜の長きといふはいつらといふ心也、此下句誹諧の躰也、裏云、恋は貪欲也、熾盛なる人はいよ〳〵増長に貪して、少欲知足の心なき也、あしき事なるへしと云[*6]〻

1016 烋の野になまめきたてる

なまめくは媚也、うつくしきさま也、うつくしくかさりたる花も一時の事にてこそあれと也、霜雪のおとろへのまさにちかき事を思ふ心あり、秋の野にとよめるも心あるへし云々、あなかしかまし、あなこと〳〵しなと落したる心也、裏云、※1可然人も花麗をこのみ居をやすんするをみれは、あなこと〳〵しとおほゆるなるへし、かへり見よの理也

1017 秋くれは野へにたはるゝ

たはれをなといふか如し、つむとはなれむつふる心也、人をつむ事によそへたる也、花なれはつむと読り、裏云、実人ならぬ人の女*1〻しく花やかなるに、世の人のなつさいついせうする事あり、よからす思へともしたかひ賞する事あしき心也

1018 秋霧の晴てくもれは

花のすかたのみえかくれすると、女の様にたとへて読る誹諧躰也、世上にも実ならぬ様也

1019 花とみておらむとすれは

大方花とみておらむとすれは、女の姿にてあれは斟酌の心也、うたゝ有とはあまりなるといふ心也、出家なる人の哥にやと云々、小乗の機なるへし、裏云、可然人とみゆる程になれよらむとすれは、女〳〵しき心なとありてむつひかたきことあり、宜からぬ人なるへしと也、源氏物語に、なよひかに女しとみれはあまりなさけに引こめられて、とりなせはあためく、これをはしめの難とすへし、なといへるか如し

1020 秋風にほころひぬらし

蘭ほころひてそ有らんと也、蕤の一名をつつりとも云、させともいふ也、それを縁にしてつゝりさせと云と読り、※2裏云、成就しかたき事、及かたき事なとをなさむとすれは、*2苦身のみ身につもる事あり、其を風する哥也

1021 冬なから春の隣の

中かきよりそなと読る利口なる躰、誹諧也、裏云、一切の事は一事出*3て又こと事にうつるをよしとす、

いまた一事のおはらさるに又事を交ふるは悪し、政道にも此類有へし、人と交る時言語も他にましふるは宜からす

1022 礒のかみふりにし恋の

恋のつもり来りて身にたゝるやうに成ぬる也、いそねかねつるとはをこたりをも申えぬ心也、いそねとは神なとに身のおこたりを申事也、神のたゝりなとのやうなる由也、裏云、道ならぬ事を思そめて、思惟もせすして其にしたかひ行は、我身にたゝるやうになる也、あらためむと思へともかなはすして、其事にて身を失ふ事あり、兼てよく思ふへき也

1023 枕より跡より恋の

切なる恋の様也、せめくる心ちする也、裏云、枕は上、跡は下也、善悪にとる、欲心に貪して善悪をわかぬ事を風する也、恋は欲也

1024 恋しきかかたも方こそ

か文字清てよむ時はやすめ字也、又濁て読義あり、いつれも義理はおなし、にこりて可然にやゝ、恋しき事はなといふ心也、一切の事は方処あり、今恋に亡したる様は方角もなく忙然たると也、裏云、恋をは貪欲にとれり、欲にひかれて方角前後をも亡して、身をいたつらになす事あり、其を風する哥也

1025 ありぬやと心みかてら

あはすしてあらはさてもありぬなと思ひてゐたれは、又たはふれにくゝ恋しき心也、心みかてらあひみぬはたはふれなる心也、裏云、世をのかるゝ人の行末をも身躰をも思とゝけすして、山入ても悔る心なとある事を風する也、源氏、思たつ時は心すめるやうになとある心也

1026 耳なしの山の口なし

耳無山、大和名所也、恋といふ事は、きく事とこといひかはす便よりはしまりて、様〳〵の思と成也、耳にきかす、言云かはす事なき事を、心地に深く染たらは、恋のうくつらき事も有ましきと也、裏云、

大人は耳に聞と人の語を以て悪事となる事あり、聞にも言にも心をうこかさすは可然也

1027 足曳の山田のそほつ

そうつは玄賓のつくりそめける也、人形などの事也、此哥は、女などを数ならぬいやしき人などの思ふといふ事有を嫌心にて読るなるへし、たとへは山田のそほつなとか我思ふといはむはうかるへし、其ことくうれはしきと読り、をのれさへとは、かゝるそほつさへ思事うしとわれおほしてふ、うれはしきこと、裏云、田をもる物は人のたくはへする心にたとふ、貧窮なる人のたくはへを苦身するたとへ也、家伝ことすみて読説あり、理はおなし

1028 きのめのと

ふしのねのならぬ思に

成かたき思なれとももえはもえよと也、我とかく思ふ心也、神たにも思ひはけたぬならひ也と也、富士の烟は神もけたぬ煙を思へり、ふしのねのならぬ思ひにとつゝきたるさま、誹諧也、恋の哥也、裏云、神たにもけたぬ事ありなむと云て、はゝからす悪事をなす事有、不可然也

1029 あひみまくほしは数なく

見まくほしき事は数もなくおほけれ共、人に便なき故に迷ふ心也、月なきをつきもなきによそへたり、裏云、道ある人などにあひたく思へとも、便もなくて打過る事あり、悪事にのみひかるゝ心をよめる也

1030 人にあはむ月のなきには　はしりひに

人にたよりなきを月によそへ読り、思ひをきてとは、さりともと思ひ来れる心也、裏云、前の義に同し、道ある人に逢事を思ふへしと也

1031 春霞たなひく野への若なにも

つむとはなつさふ心也、序哥也、裏云、他人の役をのそむ心を風する也、若菜は人につまるゝ物なるをうらやむ心也、富貴さかへをうらやむ事も失也

1032 思へとも猶うとまれぬ

春の霞の面白きをよめり、郭公なか鳴里のたくひ也、霞をかくまて思ふ由を読る誹諧なるへしと云々、裏云、我にちかつく人の他の所へ行事[*1]を嫌心不可然也、他にもすゝめて学なとをなさしむへし、我も心をのこさすをしふへき也

1033 春の野のしけき草葉の
雉のほろゝうつ事也、ほろゝといふ詞をよめる誹諧なるへし、ほろゝと鳴とは涙のほろ〳〵とこほるゝ心也、恋の哥なるへし、草葉のつまとつゝけたり

1034 秋野に妻なき鹿の
かひよとなくとは鹿の声のかく聞ゆる也、つまこひもかひなき物をなそ年をへてかく鳴らん、[※1] たゝを[※2]のか恋のかひよと鳴にこそあれと也、裏云、妻をは従類に比す、あるへき人ゝを略[*2]するは宜からぬ事ある心也

1035 蟬の羽のひとへにうすき
人になれなはしたしくよるへきと思へは、さもなき由也、衣によそへて読り、うすき衣はよる物なれは也、裏云、朋友の中の契のうすき事也、友なとも善悪をよくみてなるへき也、さもあらねは知音も長からぬ事あり、いたつらになる事也

1036 かくれぬの下より生ふる
序也、くるといふ縁あり、人のかたへゆけとも、逢事はなくて、くるをいとふ人に、かく読る也、君にあへると名をはたてし、くるはかりをはいとひそと也、ねもせぬ故ニ名はたてしと也、裏云、友をとるへき事を教へたる心也、悪名なとたつましき人をはしたしむへしと也

1037 [*3]ことならは思はすとやは
いひきらすしてかけたる心也、玉たすきなるとは、かけて苦と也、裏説同、世上にもいひ切へき事をかけてくるしき事あり

1038 思てふ人の心のくまことに
思ふとはいへとも心の奥を見はや、[※3] 偽[※4]にてもや有ら

んと疑ふ心也、裏云、朋友なとも思ふといはゝ其分にて打まかせて有へし、しゐて疑はあしき事也

1039 思へともおもはすとのみ

明也、人を思へとも猶思はすとのみ人のいふなれはかひなしと也、裏云、君臣之交に此心あらは賢なるへからす、雖君不君臣以不可不臣之心也、又思ふかひなき人なとをは思捨て、よき事有理も有

廿四日　廿九首（朱）

1040 我をのみ思ふといはゝ

明也

1041 われを思ふ人を思はぬ

明也、表裏同、恋の哥也

一本（朱）　ふかやふ　定家卿の本には此作者なくて、他本ニ有をすてかたき心ありて、しはらく他本ニつきて如此あるにや、家本ニなき故ニ一本と云々

1042 思けん人をそともに

我を思ふ人を思ふは即むくひ也

一本（朱）　よみ人しらす　前におなし

1043 出てゆかむ人をとゝめむ

門出なとに隣に人の鼻をひたるをとを聞ては、立帰りてましなふ様なる事あり、さる事もあらは、人をとゝめむ便もあるへしと也、恋哥也、鼻ひるをは善悪に用るにや※1

1044 紅にそめし心も

人をあく事を紅にさすあくによせたり※2、此様誹諧也、人の心のうつろふ事を読る也

1045 いとはるゝ我身は春の

野かひかてらとは打やりたる様也

1046 鶯のこそのやとりの

去年のやとりのふるすとやなと利口なる躰也、人にふるさるゝを古巣によそへたり

1047 さかしらに夏は人まね

夏は誰もひとり〳〵ぬる也、常にしたしくぬる人も別々になる心也、さかしらにとは、さかしかほに人

まねなると也、妻ある人も夏はひとりなとぬる如く、我も其人まねにて、※1冬の夜さゝの葉に霜のさやく比も又ひとりぬると也、さやく霜夜とは、そよ〳〵と声のあるやうなる霜夜のさま也*1

平中興　なかきとよむ也

1048 逢事の今ははつかに

廿日の月によそへてよめり、逢事の稀に成たる人は、宵なと来る事なくて、夜ふかくほのかに逢さま也、つきなきとは便なき心也、月のなきによそへたり

左の〻〵枇杷〻〵也

1049 もろこしの吉野ゝ山に

両の心あり、遠くはもろこし、近くはよし野にこもるともをくれしと也、又云、もろこしの吉野成ともをくれし、まして此国のよし野なとは尋もゆかむの心也、此義可然にや云〻、もろこしによし野といふ所有にはあらす、つくり出してよめり、いつれも誹諧なる作也、此哥は伊勢、三輪の山いかに待みんと読し時、仲平の返し也*2

1050 雲晴ぬ浅まの山の

あさまは高山にして雲もはるゝ事なし、又煙をいふ、我思の煙も浅まの如くなるを、あさましやと観して、されとも人の心をみてこそやまめ、只はやましの心也、又云、世の人の思あれは此山ももゆる心、人の順路なるをみてこそ、山もゝえやまめと也、詞の様も心も誹諧の心あり、吟味すへしとそ*3

1051 難波なるなからの橋も

つくる也、尽也、橋も尽てなけれは、古ぬる我身を何にくつるなといはゝ宜かるへしと云〻、たとへんと也、つくると読る誹諧也、此哥作尽の両義あり、序相伝之時可聞之※2*4

1052 まめなれとなにそはよけく

苅萱はみたるゝ枕言也、よけくとはよくる心也、一説よけく、よき心也、※3まめなるは実なる事也、実也

とみえたる人のさもなき事あり、又実ならす乱たり
とみる人も、よくみれはあしからぬ事あり、又云、※1
まめなれとさもなき人とて何かはよけむと也、難レ
定由也、(朱)まめなれとゝいふうちに、さもあらぬ事(朱)あ
る心こもるにや※2

1053 何かその名のたつ事の
名の立事ありて、憚る事も我のみの事ならねは、何
か名もおしからむと也、よからぬ事と知てまとふ事
也、裏云、無道なる人のよからぬ事と知なから、我
ひとりかはとて不改事あり、悪事也

いとこ也ける男によそへて　いとこのかよふと人の
いふ事ある也

1054 *1くそ　源つくるか女
よ所なから我身にいとの
いとのとはいとこの心也、いつはりに過るはかりと
也、針にすくるとつゝけたり、糸の縁あり*2

1055 ねきことをさのみ聞けむ
思かくる人の、こと葉を尽す様をねきことゝ読り、
さのみとは、かなたこなたのこと葉を領掌なとして
ききをきなは、はては難*3と成へしと也、あた〳〵し
き人のうへなとをよめるにやと云*4

1056 なけきこる山としたかく
思のつもりて歎こる山となれる*5心也、身のくるし
くなる故つら杖のみつかるゝ也、物思ふ人のさま
也

1057 なけきをはこりのみつみて
是も恋の哥也、歎をはこりのみつみてなとよめるわ
たり、誹諧なるにやと云

1058 人こふる事をゝもにと
荷持也、逢期をわうこによそへたり

1059 宵のまに出て入ぬる
序哥也、三日月はかたわれなる心也、われてとは、
人と我とのこなたかなたにうとく成たる心也※3、又わ
りなく物思ふ也

1060 そへにとてとすれはかゝり

世上万事の様如此也、さにてあるよと思ひて、とすれはかくたかひ、さらはと思ひて、かくすれは又変する事あり、あないひしらすとは、何としたる心そ[*1]と歎心也、言語道断也、あふさきるさは、あふさまくるさま也、爰にては縦横にたかふ心也

1061 世中のうきたひことに

身上の事也、うき事のしけき也、裏云、世間の人のかなしみ、時のうれへにあへる様を思ふ也、世の無道の時を風する也[※1]

1062 世中はいかにくるしと

明也、裏云、世のひか事はなき物を、たゝ一心のもちやうによりて、うき事ある理也

1063 何をして身[*2]のいたつらに

やさしきははつかしき也

1064 身はすてつ心をたにも

はふらさし　放埒させし也、はうらと読[※2]、身をこそ時にあたりてはつるとも[*3]、心をは放埒せし也、心さへはふらしてはつゐの落着いかゝ也、身をはつる[*4]とはうき事なとにあたる事也、おちふれたるさま也、裏義、同心の放埒[*5]を制する也、五大分散すとも心は金剛正躰の所を思ふへし

1065 白雪のともに我身は

白雪はふりぬるときえぬとの縁也、雪とゝもに身もふりぬる也、裏云、五大の身は仮に古行とも心は不消之由也、此理は心に落たる説也、只当一念〻〻花に対し月に向ふも、心境ともに亡したるは虚无自然之心也、是即金剛不壊ノ身也と云〻

1066 梅花さきての後の

すき物と酸[*6]によせたり、好色の心也、身を梅の実にたとへたる也[※3]、裏〻人は花実相兼たるをよしとす、実のみなるをは人のはゝかる事あり

法皇にしかはに　前ニ鶴立洲といふ哥の同時なるへし　山のかひ　峡字也

1067 侘しらにましらな鳴そ

けふの御幸のめてたき時を山のかひ有とよめり、猿のこゑもわひしらにな鳴そと也、裏云、世に侘しく思ある人もおほき物を、と歎く心を下にこめたる也、此説は憚あり、かゝる御幸の時の哥に此心をよまむ事いかゝ也と云々、師説如此、但此哥に其心ありとは見えたり、※1故ニ此裏説をは秘すと云々

1068 世をいとひ木のもとことに

世をいとひて樹下石上に居住し、*1墨衣の麻衣のみなる躰也、ふしかねそめの心也、うつふしたる心もあり、又云、誹諧部のはしめに、梅花見にこそきつれの哥より種々様々にうつりて、つゐに此哥にて終ぬ、心は、世にあひ時をえたらん人も、終には身退て麻衣の躰、樹下山居によろつ放下なる事肝心也、人のはてをよめる哥也、師説、此集は世上の理を知へき簡要也云々

うつふしそめ　又はふしそめをおもてに云て、うつふしを下にもつへき歟云々

*2従恋一以上廿二度

古今和哥集巻第二十 ※2　卅二首 *3（朱）

此巻は一段有子細也、十九巻雑躰も余集にはかはれり、殊此巻は王道神道を兼てあみたる也、此巻を天真ト用也

一京極黄門云、姹（朱）公之籍（朱）孔父之書は与日月俱懸鬼神争奥、文選短慮非所及云々、文選注曰明如日月深如鬼神云々、此巻の心也

一上ニ賀部あれともまさしく君を祝ふ心は此巻也、其故は、天照御神より天の日つき*5をうけ給て御即位之後、新年之米穀をもて手つからみつから天神地祇をまつらせ給大嘗会の事あり、君の祝言不可過之也、神楽事は天照御神岩戸を出ましゝ時の神楽是也、神楽は天下安全を祈給し事也、是又王道の肝心也、仍王道神道は天真独朗也、是をしるは又和哥之

徳也

大哥所御哥（ヲウタトコロノミウタ）（朱）　此所は大内にあり、御字は貫之うやまふ義にて加たる也、大哥所は立少路[*2]は西の壬生の東也、南は皇嘉門、北は安嘉門のとほり也、横小路[*3]は西の土御門の南、東は上東門、西は上西門のとをり也、図書寮の東丈[*4]あたりて方一町也、南北門あり云々、大哥所別当は親王以下納言等補之、大嘗会新嘗会等舞妓[※1]のまいる時大哥之人発物音云々、此処は諸国之風俗神楽催馬楽一切哥曲をつかさとる所也云々、又大哥所は大和国の心あり、大哥は大和也、所は国也、諸国の風俗等の事[※2]此巻あれは也

おほなほひのうた　大直日也

一説、節会之時群臣内裏祗候の日をいふと云々、宿直の心[*5]なるへし、又云、大直日は直なる心也、又神の御名大直（ヲヲナヲイ）（朱）の神と申あり、其心同、天照太神[*6]の御心をまなひうつす天子の御心も直を本とす、是をおほなほひと云也、群臣の君をあかめ奉るも又君の直をうつす心也、即我か国治世之本也

1069 あたらしき年のはしめに

一説[*7]、此哥は聖武天皇天平十四年正月十六日、女踏哥出御大安殿[*8]舞妓御覧之時、大哥人弾琴歌此哥也云々、故号大直日哥云々、あたらしき年とは御代始をいへり、新年踏哥の哥にや、しかれ共御代の始と用、けふより千年のはしめといふ心也、されは聖武御即位より天平十四年までは治世十九年なれ共はしめと読る也、一説、たのしきをつめとは、正月十五日百官宮内殿[*9]へ御薪（ミカマキ）（朱）を奉る事をよそへてたのしみ[*10]をつむ事をよめりと云々、かくしこそとは今を云詞也、かくこそその心也、千年をかねてとは今より行末の千とせを兼て也、群臣君の直心をうけて私なき心也、日本記（ママ）は、続日本記（ママ）ありと云々、可分見[*11]

ふるきやまと舞のうた　大和国より出たる舞也、国の風欲（ママ）[*12]也、延喜以前のなれは古きといふ也、和州のなれはかつらきを読り、たとへは駿河より出たるを

するか舞といふか如し、大嘗会春日祭諸社祭等ニ用云々

1070 しもとゆふかつらき山に

しもとゆふはかつらきといふ枕言也、しもとは木枝薪なと也、恋哥[*1]也、裏説云、まなく時なく、群臣思君之心也、君も又如此有へきやうに徳を思召へきよし也

あふみふり　近江国よりうたひ出たる哥也、ふりは曲也、哥の事也、国の風欲民(ママ)[*2]の口つからうたひ出す也

1071 あふみより朝たちくれは

旅人なとの夜深く出たる時のさま也、朝立と云も夜ふかき時分なるへし、羇中眺望もあり、裏云、前の哥は、百性[*3]の君を思ふ心也、此哥は、百性[*4]の君に足手をはこふ心也、又民性[*5]にかきらす臣下等もおなしかるへし、たつのこゑは鶏人の唱をかたとる也

みつくきふり　前は一国の風也、是は一郷の風也

1072 みつくきの岡のやかたに

ふりはも　不里波毛(朱)、(朱)私　或説フリワモ　片伝(朱)

夫婦ねたる朝に霜の面白きをあはれむ心也、おりによりて物ことに感ある也、ふりはとはふりさまはいかになといふ心あり、わかさかりはもと(ワ朱)読る類にや、裏云、君を思へは必ス徳を蒙る故ニ我[*6]もとめり、夫婦のかたらひの道もたかはす[*7]、さていもせのかたらひふかき人も朝におきて、寒夜にもおこたらぬ民のくるしみをいかにと上より思やるへき道也、富貴にして貧賤を忘へからさる風也

しはつ山ふり　しはつ山、近江名所云々、一説、(朱)豊前[*8]云々、しはつ山とも、はの(1)字清濁両説云々、是も(2)一郷の風也

1073 しはつ山打出てみれは

万葉に入にや、彼眺望面白きさま也、笠ゆひといふによせてかくるゝとよめり、たなゝし小舟はちいさき舟也、裏云、打出てみれはといふに観心の心あ

り、笠は身をかくすへき心也、小舩は徳のすくなきたとへ也、君に仕る身も波のしはをたゝむはかり老ぬれは、徳すくなく用なき時必退て身をかくすへき事也、さてみをかくすにつきても猶恩波にうかふ理を思へし、深山の巌の中も同かるへし、是仕君之人の道也、君恩無不到之故也、此理をそむかは道にたかふへし、以上四首身躰一期之間の事也、君に仕るより身退までの事を風する也、諸国の風俗を都にしてうたふ心、王道の肝心也、民の口つから出たるを大哥所にうたふ事、是君子の御心也、異朝に采詩之官国風をあつむる、同し心也、うたひあくる事、又殊勝之理也、音律をもて其国の治故をしる、世を治るはかりこと也、肝要事なる故大哥所哥を此巻為最初也

神あそひのうた　神楽の哥也、神遊は神の自在なるといふ心也、又有口決之

とりものゝ哥　神楽の中のとり物の哥也、神に手向る物を、神楽男の手にとりて舞事ありし也

1074 神かきのむろの山の　付箋　みむろ

榊、とり物也、みむろの山、大和国の名所あらす、みむろとは社頭事也、社頭の山の心也、和州のみむろ山にも神社あり、それを神かきのみむろの山とも読るあり、哥心は社頭のさま神木物ふかき躰也、感ありと云々、神社の山森々たる也

1075 霜やたひをけとかれせぬ

八度は数多也、しけく置心也、たちさかふるとは、榊の霜にいたますさかふる心、きねを祝ふ也、きねとは神につかふる人也、かもとは哉の心也、神徳を思ふ心也、裏云、榊の霜雪にたへたる、喩る也、人の物に勘忍の性は出身のはし也、短慮なれはよろこひをもいたつらになす也

1076 まきもくのあなしの山の

此事未分明云々、葛、とり物也、此山の社頭の神事の時、一説、あなし山は風はけしき所なれは、山人

頭を葛にて巻てかせをふせく事あり、興ある躰なれは、※1神楽の時のひかけ、冠にかけたる躰を、その山人のさまとみえぬへしと也、※2(1)又暁の雲を山かつらといふ事あり、(2)ひかけはこけの事也、かつらのたくひ也、清き物也

1077 深山には霰ふるらし

面白く殊勝なる哥とそ、公任卿九品の中上品中生*1入之也、裏云、人の心奥*2に悪心あるは必外に其色あらはるゝ也、はつへき事也云々、天道の鑑のみならす、人の間にも如此也、又、天子治世の心遼遠までをもはかりしろしめすへき義也

1078 みちのくのあたちのまゆみ

あたちのまゆみは樹なるへし、然而弓によめる也、恋哥也、すゑさへとは後さへより来よと也、行末かけて也、裏云、一切の事始終あり、思立処堅固ならては成就しかたき也、又中道にしてやむも不成就也、いつれをもかたくすへき也、忍々には勘忍の心也、すゑさへより来とは学る道の身にいたるへき心也

1079 吾門の板井の清水

杪、とり物也、水を汲とよめる杪の心也、心はさひしき様也、裏云、水は人にくまるゝはをたやかならぬ也*3、我門とは浮生の境堺を放たる処也、里遠みとは去紫陌紅塵之心也、水を心中にたとへたり、隠遁して無事なる様也、人しくまぬとは善悪にあつからぬ心也、水草生とは徳のあらはれぬさま也、徳とみゆるは不徳の理也、無事の境をよめり、荘子(私)(朱)曰、才全而徳不形、停水*4にたとへたり

ひるめのうた　日神の御名也、神楽哥也、大ひるめとも申

1080 さゝのくまひのくま川に

神楽に日神を勧請し奉りて、あかり給をしたふ心のうた也、駒は神のめす物也、万葉にはさいのくまとあり、恋の哥にや、(1)此巻にては此心に用、※3*5(2)面に聞え

ねは題す[*1]、又神楽の本哥に、いかはかりよきわさしてか天照やひるめの神をしはしとゝめむ云々、同心也、日神をしたふとは正直をしたふ心也、我心を御神の御心とひとしくとしたふ心あるへし

(1)かへしものゝ哥　呂の律にうつる時の哥云々、未分明、おりかへしうたふ事あり、其事にやと云々

(2)以上四[*2][*3]種のとり物、榊は色不変也、不変なるへきかたとり也、葛は物に託す、託して可然事あり、弓は人にしたかふ物也、したかふ道あるへき也、杉はたもつ物也、心に隠持[*4]する事のかたとり也、此四をまもるへしとそ

1081 青柳をかた糸によりて
春哥に鶯の笠にぬふてふの哥の心同、梅柳辺ニ鶯の鳴さま面白く作也

1082 まかねふくきひの中山
吉備国ニ鉄を堀て吹処也、帯にせるとは細き川の帯に似たる也、音のさやけさとは清字也、心は、深谷までも君恩のいたらぬ方なき心也、代をほめたる哥也、万葉にさやけ[*5]きと読る哥、みな物をほむる心也、多之

この哥は承和の〻〻仁明天皇大嘗会主基哥也、御へとはにへ也、其国よりにへを奉る時の哥也、きひの国とは備中也、もとは号吉備也、後に分て為前中後也

1083 みまさかやくめのさら山
恋[*6]にあらす、万代悪名をたてしとたしなむ心也、君臣おなしかるへし、一云、善悪共に名をたてしと也、老子経曰、名の名たるへきは常の名にあらす[※1]云々、無事を真とする義也

これは水尾の　清和大嘗会主基国美作也、昔は其国不定也

1084 みのゝ国関の藤かは
心明也、陽成〻〻悠紀方哥也

1085 君か代は限もあらし
明也、長浜、伊勢名所也、光孝　悠紀方哥也

1086 あふみのや鏡の山を

のやはやすめ字也、たてたれはとは哥のよせ也、つきたてたるやうの心也、今たつるには非す※1

これは今上の　延喜御時悠紀方哥也、当代の事なれは賞して作者をあらはせり、此廿巻にも部立は必なしとみえたり

あつま哥　東国の惣名也、あつまふりの心也、神楽哥、国ふり等相交り、此巻のさま也

みちのく哥　一国の風也

1087 あふくまに霧たちくもり

霧立わたりとも*1、恋哥也、あふくまは逢心也、明かたに霧のふる様也、まではすへなしとは、いつともなき人を待はかなしきにとしたふ心也

1088 みちのくはいつくはあれと

此国にも名所おほしといへともと此浦を愛する心也、かなしもは愛したる也、露をかなしふといへる詞に同、万葉ニ此詞多之

1089 我せこを都にやりて

まつそ恋しきとは、まちとをなれは猶恋しき由也、松によせたり

1090 をくろさきみつのこしまの

面白き所也、人ならはさそはんする物をと也

1091 みさふらひみかさとまうせ

宮木野は陰ふかき所にて露ふかき心也、みさふらひは侍臣也、宮城野は宮禁の心にてよめり、此巻にては名所勿論也

1092 もかみかはのほれはくたる

出羽名所也、昔は陸奥なりし也、水のはやき川にて、のほる舟の浪にさへられて舩のかしらをふるやうなるを、いなといふに似たればかくいふ也、序哥也、恋哥也、いなにはあらす、〻此月とはいつにてもいかさま行すゑにはなといふ心也

1093 君をゝきてあたし心を

こえかたき浪もこえむとちかふ心也、松山浪の事は

此哥よりはしまるにや云々、或説云、以上七首は、融公の家にちかの浦うつされし時、其名所〳〵を詠也云々、いかさまにも風俗にてうたふ哥なるへし

さかみ哥　哥とはふりといふに同※1

1094 こよろきの磯立ならし

めさしは和布なとを入る器也云々*1、又海人のをとめの事云々、爰には用之、めさしをもつ故に号するともいへり、哥の心はいやしき人のわさをも思ひやる心也、あはれむ性也、使民以時といへる心も通すへし

1095 つくはねのこのもかのも

明也、此方彼方也、木の陰しけき山也

1096 つくはねの嶺のもみち葉

木しけき山のさま也、落葉の名をしるもしらぬもみな愛する心也、裏云、君子の心は怨親平等成へき也

1097 かひかねをさやにもみしか

みてしかなの心也、かひかねの面白きをさやかにみむの心也、けゝれなく、心なく也、五音也、よこほりふせる、横り臥也、見御抄

1098 かひかねをねこし山こし

嶺をこし山を越と重たる也、人にもがもや、風を人にてもあれかしことつてやらんと也、思人なとのかたへことつてしたき心也、裏云、君恩のありかたき事を遠く告度由也、をのつからいたるへけれともはやくつけはやの心也

伊勢うた　是も東海道なれは東哥に入にや

1099 おふの浦にかたえさしおほひ

恋哥也、実なくともまつねてかたらはむ*4也、裏云、ねてかたらはむとは和する心也、其事成も不成も人には先可和也、和するに不和事ありともの心也、又和光同塵の心も如此なるへしとそ

此廿巻は王道神道也、然而、恋旅眺望名所等表裏様〳〵也、其心一途ならす、是天真にして難測之理也

冬のかものまつりの哥　臨時祭哥也、宇多御門御時はしめて被レ行し時敏行朝臣よめる也、臨時祭事、

宇多御門いまた王侍従と申時陽成御宇、賀茂ニ遊ましく
けるに神託の事あり、後に東宮に立給へり、奇瑞奇
特也、仍寛平元年十一月廿一日己酉日始臨時祭を行
はる、使は左近中将藤時平也、舞人十人東遊有き

1100 ちはやふるかもの社の

此哥を軸ニ入事、王道之徳此奇瑞にすくへからさる
故也、又延喜御時の集なれは父御門の嘉瑞事を軸と
する也、此集の巻頭の如く軸の哥も又大道なるへ
し、安らかなる躰也、敏行名をあらはすも一段之義
也、此哥剰殊勝之作也云々、貫之所為又奇特也とそ、
万代ふとも〻〻松によせて君徳をほめ奉る也

家々称証本之本〻〻

難捨之心にて奥に書をかるゝ也、書入てけす事黄門
の心にあはさる故にや

1101 杣人は宮木ひくらし

杣人の声に山彦のこたふる心也

1102 かけりても何をか玉の

たとへよみかへりても何をかみんの心也

くれのをも　草の名也云々、未分別*1

1103 こし時と恋つゝをれは

いつも此夕来し人と待さま也

をきの井　都嶋　名所也

1104 をきのゐて身をやくよりも

都嶋辺のとよめれは、物名にかくれたる所なし、都
を別しと今又此嶋辺を立別るゝとのかなしき心也、
句を切て読と云々

そめとの　あはた　左の注ニみゆ

1105 うきめをはよ所めとのみそ

雲の泡のことくなる也

1106 けふ人をこふる心は

切に恋しく思ふ心は大井川の水のたきりたるにもお
とらさるよし也

1107 わきもこに*2逢坂山の

忍恋の心也

1108 犬上のとこの山なる

此哥の外には近江ニ名とり川みえすと云々、万葉には

いさや河、いさら河とあり、あめのみかと、天智天

皇御事也

1109 山返しなの音羽の滝の

此哥恋部ニあり、爰にては御返しの哥の心をあらは

さむために入たるにや

1110 我せ子か

前ニあり、御門を怨奉るとは允恭〻〻*1御事也

1111 道しらは　無義

真名序は無宣下云々、故不必用之、然而又難捨にや、貞

応本被書入之、追可受之*2

奥書(朱)

此集家々〻〻本々不同之事也

且任師説又加了見　難計之故且任師説也、師説は基

俊俊成両人説也、加了見とは春霞たゝるやいつこを

たてるやと改らる、僧聖宝ニ正字をかゝるゝ等の事也

為備後学〻〻七十歳斗にして書給へるにや

近代僻案〻〻世ニある本の事也、書損之事なくてかな

はぬ事也、いさ桜、ひとさかりをいとさかりと書た

るに付て種々説を設く事等也

但如此之用捨〻〻此辞肝心也、古今一部之心也、和し

て不争之性なるへし、此集の眼目之理云々※1

志同者〻〻若又世人志同者也

貞応二年〻〻伝テ于嫡孫ニ　伝為氏也、是為二条家支

証規摸也、為氏は此年誕生也、祝言の心ありしにや、

但又嫡々に伝へしの心にや云々

古今和歌集序聞書（以上六度歟）*3　以宗祇本写之

夫トハ発言の詞也、其事を云出さむと云心也

和哥トハ和は国也、此国の心也、哥とはことわさ也

託其根於心地　根とは根元也、心地とは心底、心の

はたへ也、云心は眼耳鼻舌身ニ知所を心のはたへに

付る也、心地と云地によく本付へし、其根とは元来の無也、無は是さゝへて自性也、自性の源はあらはれす、これを物に託する所を哥とはいふ也

発其華於詞林　顕かたき自性の心をもあらはす也、是哥の大底を云也

人之在世不能無為思慮易遷哀楽相変　是は世間の人の様也、此五大をうくる物皆以其ことわさなきにあらさる物也、其ことわさとは二六時中のわさ也、枕をとり夢をみるもみなことわさ也、いたつらにあるといふもことわさ也、されは思慮うつりやすくして、たのしみかなしひ変して、人みな心をくるしめて安からす、安からねは又現当いたつら也、されは人のことわさ悪にひかるゝ所をさくるは此哥也、いかなるをかさくるといはゝ、哥人は心空虚にして念〻相続する所なし、花をみて花を愛し、月にむかひては月をあはれむ、只当意即妙の外他所[*1]なし、仍此道に住すれは世界の是非[*2]をのかる、是のかるれは又二世の安楽也

感生於志詠形於言　感とは心に興する事也、詠とはやはや思ふ事の詞にいへるを云也

是以逸者其声楽怨者其吟悲　逸とは無事なる儀又安きをいふ、されは其声もたのしみのこゑある也、悲[*3]はうらむる也、うらみ有人は其吟にかなしみあり、只心よりおこりて云所に其かなしみもあり、心は元来けかれす、たゝ物にひかれてにこり行ならひなれは、心のたゝしからん事を思ふへし、されは哥をよむ人も心のたゝしからむをもとゝし侍へきにこそ、天地は心也、心たかへは天地たかふ也、されは哥の風流[*4]たかはゝ天地の風流たかふへし、天地たかはゝ一切の人の為宜からし、其人は天下の神物たりといふ詞をよく〳〵まもるへし

可以述懐可以発憤　只此哥をもて思をもなくさめ、いきとをりをもやすむへき也、されは只念〻相続を嫌ふ也

動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌　是は哥の徳をあけて云也、事理の二有へし、事と云は能因か苗代水ことときの事也、理は又心は即天地なれは也、感鬼神とは目にみえぬ所を云也、色に見えぬ所をもあらはす、是哥也、鬼神二には心うへからす、是又心無事なれは鬼神やはらく心也、化人倫と云も心やはらけは敵する人もなし、化とは昨日まてはなひかぬ人もけふはしたかふ心也、されは万性[*1]を治る道是也、夫婦は云に及はす、皆以和哥の心によくなひきしたかふ、疑なし

和哥有六義一曰風〻〻仮名序ニ書之、又は若[*2]詩云歟

若夫春鶯之囀花中秋蟬〻〻是は此哥をよむ事人にかきらすといふ事也、仮名序には蛙と云、其は春来りて始て其気をしれは也、是は春ニ対する義也、心は蛙ニ同し、志を述るを哥といふ也、自然之理也とは、つゐに春の鶯の春をしらむともせす、秋蟬の炁を待事もなし、春来は花さき秋来は葉の落る、皆自然の理也、されは哥人の心も自然の理に住すへし、他家には曲折をもとめ、当流には自然をもとむる也、是大なるかはり也、くれ〳〵是を守へきや哥人とはいふへからむ、鶯蟬の声を曲折とは見侍へからす、哥に曲あらむとするを嫌也、古人の哥に自然の理なる哥

さゝの葉はみ山もそよにみたるめり我はいも思ふ別きぬれは

山高み夕日かくれぬあさち原後みんためにしめゆはましを

然而神世七代時質人涼[*3]情欲無分和哥未作（クラ）　神代自然ニ時すなほに欲情なかりしかは、哥といふまてにて、躰をわかち心をかさりて和哥をつくらぬと也

逮于素盞烏尊到出雲国始有三十一字之詠　神代の哥はたゝ長短をわかす、いかほともつゝけ、なか〳〵といひもて行、又一句二句も哥とて侍り、是大道也、すさのおのみことよりはや心みしかく世くたりて、なかき心をしらぬ故より、此反哥おこれり、今

も長哥の奥に入事此故也、長哥の心を短哥にてあらはす也(朱)

其後雖天神之孫海童之女莫不以和哥通情者也　天神之孫[*2]とは孫にはあらず、只子孫と云心也、彦火々出見尊の御事也、天照太神より四代にあたり、わたつ海の女とは豊玉姫の事也、此御ふたりにも哥侍り[*3]

彦火々出見尊(朱)

おきつ鳥かもつく嶋にわかいねしいもは忘しよのこと〳〵に

豊玉姫返し(朱)

あか玉の光はありと人はいへと君かよそひしたふとく有けり

是は只和朝に此道を用へき其ためにいへる也

爰及人代此風大興長哥短哥〳〵此風とは惣の哥の事也、神代の事はいつれもすたれたるといへとも、此風は残りて大に興よし也、読之哥と云斗の儀也、長短旋頭混本になるは大道すたれて仁義興之儀也、又云、人の世には反哥をのみ用て、此四はいにしへ有けると云義もあり、然而[*4]下文句ニ不叶、たゝ神代にはかく自然の儀斗なりしかともかくおこる儀也、下の高木巨海のたとへにて可知、寸苗の煙とは、すこしもえ出たるはほのかに、それともなきを煙とはいふ也、下文又同之

至難波津之什献天皇　とは王仁か大さゝきの御門に奉し哥也

富緒川〳〵達磨の聖徳太子に奉る哥事也

或事関神異或興入幽玄　如此事ひろく成しより神異にもあつかりける也、神異とは奇特之事なと也、興入幽玄とは次第ニ哥のうつくしくなり、色々に心のいたらぬかたなく、ほのかなるやうの所なと有也、神異にあつかるも世のくたれる也、されと又これも上世の通[*5]なるへし

但見上古哥〳〵かやうにくたるといへとも、猶上古哥はまことなる道[*6]を思ひて、耳に面白く目によろこふやうにはあらさりき、たゝ教誡のはしとする也、教誡のはしとは教いさむる道也、されは哥は和国の正

道なれは、理世撫民の媒疑なき者也

古天子毎良辰美景、〻古の天子と云に貫之かかける所さす所在之、是万葉の時分也、定家卿是を勘合て只大底にいへる也、文武天皇を下にふくむ心也、其儀口伝有へし、良辰美景とは四時花月の折節也、仮名序にはさかしをろかなりとしろしめしとかけり、それは君のしらせ給也、爰には君臣共にいへり、若賢ならすはよき哥を奉るとも詮なし、臣かしこからすは道ある哥をも奉らし、ともに大切なれは二をいふ也[*1]

所以随民之欲択士之才也　民とは当時云民にあらす、たゝ人の事也、心は、よめる所の心々をみて、世のためにかしこくをろかならん人を思ひわきて、其分々に人をもめしつかひ給へき故也[*2]

自大津皇子之初作詩賦　大津皇子とは天武第三ノ御子也、此御時詩の道を好み給ひしかは、人皆其事をねかひ好むより哥の道すたれたる也、此国は神国也、神代のことわさを捨たる事、世の零落也[*3]

然猶有先師柿本大夫者、〻先師とは、貫之は人丸の道をつたへたる由をもて先師とはかけり、古今の間に独歩するとは、いにしへより今にかたはらに人なしといふ心也、いかはかりのきはといはむ事は筆端に及へからすとそ

有山辺赤人者、〻ならひにとあれはひとしきなるへし、然而人丸は勝けるとそ、此心は位正三位にて天子の御師なれは也、おひては等同也[*4]

某余業和歌者綿々不絶　綿々とは、わたをひきのふるにたえざるをたとへたり[*1][*5]

及彼時変澆漓人貴奢淫、〻彼時は大津皇子の時にや、此御時詩賦を好み給へり、諸臣それに随て哥をゝろそかにし、心さしのまことたかひて、才学以下に心うつりて、うきたる詞えんなる泉わきて、実なる所を失て花にのみなれるなるへし、されは好色の人は是を花鳥の便とするといへり、花鳥の便とは花鳥を愛する心のたよりとのみして、理世の心を忘る也、[*6][*7][*8][*9][*10][*11]

乞食之客は只世をわたる中たちとして、撫民の道を忘れたるなるへし、此たくひはされはたゝ婦人の右として、人丸の前にはすゝみかたき也、[※1][*1]婦人の右、大夫之前、[*2]長短不同、長短は善悪の心也

近代存古風者纔二三人然、〻二三人といへとも六人也、是文筆のならひ也[*3]

花山僧正尤得哥躰然其詞花而実少　以前云所ニ其実皆落其花孤栄といふは花を嫌ふ也、此僧正の哥も、さこそは花なれと、以前云花にはあらす、是は又よきにこそ、去なから又少はあかぬ事有にや、定家卿は此僧正をよしと思給けるとそ、此六人の程別ニ記する也、在原中将か云〻、かの字いつれも有へし、又喜撰か哥に花麗とあるはうつくしき姿也、[*4]又は大なる躰也、停滞は首尾せぬ所あるよし也、猿丸大夫之次也、[*5]逸興とは花麗には不及、しかもよきになるへし、[*6]人を興かる様なといふかことき歟

此外氏性流聞者[*7]　皆世にある哥人の事也、しかれ共艶なる所をもとゝして実なる趣をしらぬ也、艶なる所にも実侍らはあしかるましきにや

俗人争事栄利不用詠和哥　俗人とは世の人也、さかへ利なる所にあらそふ事のみして、哥のまことある所を用ぬ心也

悲哉々々雖貴兼相将　官位高くして、あるは君にちかくつかへて政をなす宰相、又は世を刑罰する将軍等之事也

富余金銭而　位は高からねとゆたかにとみたる人の上也、心は、たゝ貴と富たると此ふたつもはかなき物也、露命限あれは土中ニ埋れ、むなしき苔の下になりては、骨はいまた朽はてぬまに、名は先消はてゝいひつたふる人なし、仍哥のみなかき世には名を残す物也と也

語近人耳、〻漢字をもからす、和語にてよくそのことはりをしらする事也　是和するの道也

義慣神明　神明にかなふとはすなほなる儀也、すな

ほは直也、直なれは又和もしたかふ也

平城天子詔侍臣令撰万葉集　平城をはならの天子（ミカト）とよむ也、就之其故侍へし、奈良ニまします故の号也※1

自爾以来時暦*1十代数過百年、〻万葉集より此かたの事也、時十代百年、又可尋之、すたるといへとも悉すたるにはあらす、只花鳥風月のもてあそひとする斗也、是を貫之すたれたりと書り

風流如野相公軽情如在納言、〻風流とはしわさ也、色〻かさるを云也、軽情とはうきやかにうつくしきやう也、たとへはうすやうなとをみるか如し、此篁行平は哥の上手なれは、其ふりをあけて、このことき

なる人世におほけれと、只此道をは次にして他才ニ心をかくる也、こゝを貫之嫌也、是和国の風にたかふをかなしむ故也、只此道にてあらはしたき心也

陛下御宇（アメノシタシロシメス）今九載　九年也

仁流秋津洲之外、〻皆以君の仁徳をほむる義也

渕変為瀬之声寂令閉口（ママ）*2　変化する人のうらみもなきよし也

砂長為巌之頌、〻是は君の徳いたりて、小は大になり、浅きは深くなり、事のとゝのほりたる義也、是も世以テほむる心也、洋々とはつらなるよし也

思継既絶之風、〻万葉以来たえたる道をあらはし、此集撰ト給事也、撰者、〻

少目（スナイサックワン）

家集　撰者家集又は古人の也

古来旧哥　いにしへよりの事也、ちかけれと無人をは古人といふ也

続万葉集　うちきゝとて先集ニ名をつくる也、かくて猶部類して、くはしく撰トて後に古今集と云り、是皆代〻集のならひ也

臣等詞少春花之艶、〻貫之卑下の詞也、なかきをぬすめるとは、あやしの名はかりなかくてといふ也、然者進退の二にはつる心也、時俗とは時の人也、中興とは万葉をかみにして当時を中興といふ也※2

人丸既没和哥不在斯哉　こゝにとは、うへには和哥の事、当時の義也、下の心は貫之か我身也、文王既没文不在于茲乎といふをもて書る詞也

延喜五年歳次乙丑四月十八日臣貫之等謹序[*1]

初作詩賦　七言之志

天紙風筆画雲龍、山機雲杼織葉錦云々

奢淫　毛詩正義云、淫者過也

花鳥使　唐書云、天宝末(ママ)有密採艶色者、当時号花鳥使、故昌(品イ)高献美人賦以諷之[*2][*3][*4]

軽情　注文選云、高情也、文之風情、商謂之軽情[*5][*6]

文琳　文屋康秀之字也、刑部中判事縫殿助也

続万葉[*7]　古今也

聖人之魂曰神、賢人之魂曰鬼

難波津之什　王仁之哥也

富緒川之篇　文殊飢人ト読給ヘル哥也、河内国イカルカト云所ニ、富緒川と云河ノ辺、飢人ノフシタルヲ太子哀給哥、贈答二首拾遺ニアリ、太子ハ救世観音ニテイマス也、飢タルトハ法機ニウヘタル也[※1]

衣通姫事　日本記(ママ)云、稚淳毛二流皇子九世也、允恭天皇八年春二月、藤原ニオマシ〳〵テ、ヒソカニソトホリ姫ノフミヲ見給フ、此故ニ衣通姫ミカトヲ恋奉リテ一人イタリ、御門ノミマスル事ヲシラスシテヨム哥、我せコカクヘキ宵也[*8]

玉津嶋明神トアラハレ給事、彼所ヲ昔メテ給ユヘ也[*9]

天神之御彦ニ当也
天神之孫事　彦火々出見尊也、日本記(ママ)云、ヒコホヽテミノ尊ワタツミノムスメ豊玉姫ヲメトシ給テ、子ウマントシ給時、豊玉姫ノ給ハク、ヤツコ子ウマン時ナミマシソ、尊シノフル事ナクシテ行テウカヽヒ給ハヽ、サカリニ子ウミ給時龍ニナリヌ、ハチテノ給ハク、我ニハチミセサラマシカハ、海陸アヒカヨヒテ、ヘタヽリタユル事ナカラマシ、ステニハチミツヽイカニシテカムツマシキ心ヲムスハムト云テ、草ヲモテミコヲツヽミテ、海ノホトリニヲキテ、海ノミチヲトチ[※2][*10][*11][*12]

テサリヌ、トキニ尊ヨミ給ヘル哥

オキツ鳥カモツクシマニワカイネシイモハワスレシヨノコト〳〵ニ

カモツクトハ舩ツクト云心也、イネシハ万ニハ卒宿ト書リ[*1]

海童之女事　豊玉姫也、日本記(ママ)云、トヨ玉姫ノミコトキラ〳〵シキ事ヲキヽテ、アハレト思テ、又カヘリテヤシナハント思ヘト、ヨカラシトオホシテ、弟(イロト)玉依姫ヲヤリテヤシナハセ給トキニ[*2]、豊玉姫ノミコト玉ヨリヒメニヨセテ、ヨミ給ヘル報哥、オキツトリノ哥ノ返哥也

アカタマノヒカリハアリト人ハイヘト君カヨソヒシタフトクアリケリ

アカ玉ハ子也、子ヲ玉ニ喩ル也、イロトハ弟也

日本記ニハ此贈答二首ハ号シテ日挙哥ト、コノミコト人ト成テヲハ玉依姫ヲ為妃ト、[*3]此ミコハ神武天皇ノ父彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊(ナミサタケウカヤクサフキアヘセノ)也、此ミコウミ給ヲヤニウノ羽ヲフケリ、此ヨリ産所ヲウフヤト云也　※1

存分無相違者也

文明十四暦三月日　宗祇判

同十九未夏之上中下之間重聞此集訖加筆早　夢庵判

延徳弐庚戌年三月又聞序十廿巻訖

文亀三癸亥仲春仲旬以祇公聞書素伝奥書粗書加之

源頼則伝授之時也

全部四十三ヶ度伝授之

哥数千百一首

此冊依竹田治房懇望所許書

写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日　宗訊（花押）

（補一）

京都大学附属図書館蔵「古聞序」―院中VI69

文明十三[*1]

九月廿六日（以上朱）

やまとうたは人の心をたねとしてよろつのことのはとそなれりける

此一段和哥の大意也

和ハ此国の名也、哥は此国の風也、此国をやまとゝ名つくる義ハ、伊奘諾伊奘冉国土山海草木人倫等を生出給し後、猶此国あらひて水土未乾しかは、人は山にのみ住て山を道とする事あり、故ニ山の迹といふ心にて号する也、やまあ(1)とのあ文字を略したる也、まの字ニあのひゝきあり、をのつからこもるへし、又山止とも書り、山にとゝまる心也、山迹の義通すへし、又云、[*2]山は至誠の義也、志の厚く高きを一切成就之根元とす、哥は志のゆく所をのふる也、よろつのことわさの根元也、二神[*3]の御哥是也、又云、やまと哥といふに大に和く義あり、大ハ小ニ対する大にはあらす、又三国におよふ大也、其故は天竺の梵字漢字ニうつり、漢字の心を和字にてのふる也、和字[*4]の哥をもて、陀羅尼の心漢字の詩をもしる也、和字は今四十七字ニ過されとも、其心をのへしる事此道の奥意也、[*5]古より今ニ及和也、神代の和の万物ニ及す心也、尽乾坤一切ニ及ほす和ヲ大ト云（ミセケチ）

又云、[*6]自古及今之和を大と称す、遠く及ふ心也、。二神代（ミセケチ）[*7]神陰陽和ヲ始として尽乾坤[*8]之間（ミセケチ）。一切万物ニ及ふ和也、和哥是也、やまとの説、山迹の義を本とす、大和の義も通すへし、并用事当流説也

人の心をたねとして、詩ニ言かことし、在心為志、云、心にあるとは心に動也、世界に弥淪（ママ）したる事心[*10]にうこく也、世界と我身と我身と相対す、世界の事を

心にうこかすなれは、哥は世界にある理也、たとへは、寒温を身にうくるかことく也、心にうこく所を言にいへるを哥といふ也、又云、天地陰陽の一気起て如葦芽[*1]（の起る処は一切万物之根元也（ミセケチ））といへる所也、天神七代以前を云り、一切万物之根元也、これをさして、人の心をたねとすといふ也、二神[*3]陰陽之和をおこなひしよりの心也、又根本最初の一念[*4]より哥も出来也、されは元始より今日にいたり、又終劫にいたるへき也、是人の心也、よろつのことのはとそ、物々[*5]に託してなる心也

世中にある人、いひ出せる也　一段也

真名序に、人之在世不能無為思慮易遷、云々、此心也、無為とは大道の処也、人の世となりて、味をなめ、黒白分別あるより、君臣父子朋友の道まて（等（ミセケチ））[*6]、ことわさならすといふ事なし、行住坐臥みなことわさ也（君ニつかへ民をめくみなと（ミセケチ））[*7]、ことわさあれは心に思ふ事あり、思ふ事あるによて、見聞につけていひ出す也、是大道廃て仁義興之理也[*8]

花になく鶯水にすむ蛙の、よまさりける　一段也

一切に託して、哥を詠する事、人のみにあらす、花中の鶯、水底の蛙も如此之理也、詩正義曰、哀楽之起、宜於自然、喜怒之端非由人事、故燕雀表啁噍之感、鸞鳳在哥舞之容[*9]云々、此心也

喜怒哀楽の性ある物は悉如此、応天地之気故春花鶯鳴春水蛙声するも自然の理也、鶯蛙[*10]は春来て先感其時之類也、一切の禽獣も如此なるへし、又花も水も詠哥の理ありと云へし、花の心は色に出、水の心はこゑにあらはるゝ也、鶯蛙をとり分て云出す事は、春色をえて其心をしる事、此二をさきとする故也

ちからをもいれすして、なくさむるは哥也

一段也、此段は哥の徳也、此心に事理の両義あり、天地をうこかすといへる、能因法し、苗代[*11]にせきくたせとよみて、雨のくたりし事なとは事の義也、天ハ地ニ対してあり、地ハ天ニよてあり、人は天地ニ対す、同根の理なり、天地ハ我を開き、我ハ天地をひらく、天地人の三は別にあらす、故ニ心に動く処、すなはち天地をう

こかす也、一首の哥を詠るも、天地を胸中ニうこかす也、是理之義也

めにみえぬ鬼神をも、

鬼神とは賢聖のたましゐ也、惣ては人〻のたましゐ也、神は心也、[*1]それをあはれと思はする也、哥を詠するに心の感動する、すなはち鬼神をあはれと思はする也、此道ニ入て、邪をすて正に帰し、仁をもつはらとする所をさゝへて、[鬼*2]思神を哀と思はすると云也、是理の義也、[*3]又天照御神住吉玉津嶋等の擁護ある道なれは、感応あるへき事勿論也、両神日神の化現也、又諸神も心の外に出へからす、畢竟一心之上をはなるへからず、伊賀国ニ鬼の人を損する事ありし時、土[草イ]も木もわか大君の国なれはいつくか鬼のすみかなるへき、とよみて、其事やみたると云事もあり

おとこをんなの中をも、

此理勿論也、其ためし不可勝計、[*4]たけきものゝふの心をも、

たけきものゝふの心をも、

かつらきの王のいかりを、うねめの一首にてやはらけたるなと此理也、是事也、ものゝふとは兵革を帯するものにかきらす、心の強情なるをいへり、和哥は胸中のものゝふをやはらくる也、[*5]笑裏蔵[カ*6]力といふ類、みな心のものゝふなるへし

以上哥の徳也

この哥あめつちのひらけ、いてきにけり　一段也

天地開闢より二神之和よりはしまる事也、其哥末ニ注す

あまのうきはしのしたにて、

天浮橋、道の通する処をいへり、此古注ニつきて説〻あり、二条家ニハ貫之注之と用る也、貫之巨細を注してくはしくいはん為也、女の内侍ニあたへたると云〻、

これにつきて六義注ニ、山桜あくまて色をみつる哉の哥、時代相違するといふ説あり、此哥平兼盛か哥也、[*7]後撰、貫之は承平まてありし人也、此時兼盛若年なる

へけれとも、道ニかなふ哥なる故に用之也云々、又云、山桜の哥は清慎公之詠也と云説あり、但兼盛哥也、清慎公の家にて兼盛よめる也、続古今ニみゆ、古注は公任卿筆云々、此事実なるにや、但、二条家のをしへは貫之を別て仰くゆへに、公任の書加といふ事をはゝかりて、貫之注すと用也、為家卿明疑抄ニ、貫之古注也、山桜哥兼盛云々、此分に用来なるへし、此注を古注と号する事、是よりさきには古今注なかりし故にや云々、又小注ともいへり

め神をかみと、

二神はしめてよみまします哥也

憙哉遇ニ可美少男ニ焉、陽神先唱曰、憙哉遇ニ可美少女ニ焉 日本紀(朱)*2

しかあれとも世につたはる、おこりける　一段也

しかはあれとゝは、二神の御哥はあれとも大道にして人の心及かたけれは、下てる姫の哥をのせたる也、したてる姫の哥、あもなるやをと織女のうなかせる玉のみすまるのあなたまはやみたにふたわたらすあちすきたかひこね日本紀(朱)*3

天にしてはといひて下照姫の哥を出す心は、これよりさきに二神の哥ありといへとも、大道ニして其心おほつかなき故に、神代の事なれとも、すこしちかきをもて下照の哥を出也

したてるひめとは*5

天照御神の皇孫を下して此国の主とせんとて、天稚彦を使として下し給しに、下照姫と契をなして天ニ帰給はす、つゐに矢にあたりてうせ給ぬ、其後下照姫と味耜高ヒコネと兄弟也、夫婦となりて*6あめわかみこの喪の時、天ニのほりての哥也、味耜、のかたちをほめ給ふ也、天稚、下照、味耜、みな素戔烏ノ御孫大己貴尊*7御子也

をかたにゝうつりて、

そのかたち丘谷にうつりてかゝやく也、丘谷にとは高下也、*8陰陽也、谷は陰、丘は陽也、みめかたちのよき

心也

えひす哥

夷曲也、日神の天の宮に対すれは、此界はえひすとよ[*1]
める也、天上にての哥なれとも、地祇神なれは夷曲と
なつけたり、ひなうたと云心也

これらはもしのかすも定まらす、

下照姫の哥も猶以文字も不定、哥のやうにもなしと也
あらかねのつちにしては、

地祇神の哥のはしめをいふ、八雲たつの哥事也

ちはやふる神世には、一もしはよみける　すなほにし[※1]
て

神世に文字のさたまらぬ事、古注にみえたりといへと
も、重説にはあらす、注は後に書る故也

人の世となりて、

人の世となりてと書てすさのをのみこととといへるは、
素戔嗚尊の卅一字の詠をはしめとして、人の世の哥は
これにもとつくと云心也、又人の世の哥此集一部を云
へしと云々、八雲たつの哥よりさきにも卅一字の哥あ
りし、と云説あり、但不分明にや

すさのをのみことゝは、

一女三男にてすさのをは弟にてましませとも、男を上
とし女を次とする義也、系図にも女を後にする也

又云素戔嗚尊つゐに天照御神にしたかひ給て後、御神も(ミセケチ)[*2]素盞
ノ日神ヲ思給ふ心、兄のことくおほしめしける心也
云々

女とすみ給はんとて

此国をたいらけて後、出雲国にして稲田姫と住給はん
とて宮つくりし給へる也、此国に鎮座ありし時をいへ
り

時にその所に八色の

此時瑞雲のたつを御覧しての詠也、出雲国とは、此雲
のいつもたつ故に号する也、いつも雲の立にては、時
にその所にとあるに相違せるやう也、此雲は元来此国
に立たる也、されは世のことわさに出雲と号たり、素

戔烏尊の此処に住給はんとする時も、又此瑞雲のたちけるなるへし、其人ニ感して瑞雲のたつことあるならひ也

八雲たついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを

やくもたつ出雲やへかきとは、此処のさまを大やうにいひいたす也、重詞也、郭公なくや五月なとのことし、つまこめは稲田姫をすへんために宮を経営の心也、やへかきつくる、ねんころにする心也、重詞なり、そのやへかきをとよめるは、ねんころにいへる心也、をろそかにすなとをしへたるやうなる心あり、*1八色の雲は八識にたとふる也、五句は五行也、八識五行成就したるは、世を興隆する義也、出雲国ニ蛇の人を損する事ありて、人も住かたかりしをみことたいらけ給て、人民やすき事をえたり、八識五行相具するは、一身をとゝのふる心也、八雲たつの哥に清濁の口伝あり、いつもやへかきをはすみてよむ也、下のやへかき二をはにこりてよむ也、すめるは上て天となり、濁は地となる理也、素戔嗚尊は地神なりといへとも、日神の御弟なれは、天地かけたる神にてまします也、此国ニ配し奉給也、日神と和し給て後の事なれは、よろこひの哥なるへし、卅一字を用るも此義也、此哥に風躰の切帋ありと云々、又神道口伝アリ、此哥斗を出す事は神世の哥、分かたき故也、*2日本紀の説ニ、此哥に四妙をたてたり、字妙、句妙、意妙、始終妙、是也、字妙とは三十一字にして、末代までの根元となる妙也、句妙は神代の哥なから五句にして五行ニかなへる也、意妙は上古の哥といへとも其心もあきらかなる也、始終妙は此哥を始として万代不窮に不可断絶之義也

かくてそ花をめて、なりにける　一段也

すさのをのみことの卅一字詠より、哥道万端さま〳〵になれるよし也、又は天地開しよりをいふと云々

鳥をうらやむ　とは愛したる心也

霞をあはれひ　興したる也

露をかなしふ　感したる也、露はことにあはれなる物也、人の心のさま〳〵なる情也

とをき所も〳〵なるへし　一段也、ちりいんちとよむ也

千里の行も足下よりはしまり、高山も微塵よりおこる心也、塵土也、塵も土也、ちりは六塵之義也、一気をうけて人身となる心あり、二神より人世にいたりて哥の道ひろまれる心也、最初よりおこるよしをいへり

なにはつの哥は　さくやこの花の哥の事也

御門のおほんはしめ也　仁徳の御代のはしめの事也、王道のたすけとなる徳みえたり

おほさゝきの御門の

仁徳の御事也、さゝきとは小鳥の名也、此御門御たけちいさくおはしましけるにや云々

東宮をたかひにゆつりて

応神天皇宇治のわかいつら（ママ）こと申みこに御世をゆつり給けるに、仁徳ハ兄にてましく〳〵けれは、それにをそ*2りて宇治のみこ辞し給、仁徳は又御ゆつりにあらねは辞し給て、三年まて位につき給はす、国のさゝけ物もくちうせて民のうれへたり、こゝに宇治みこ神変をもてかくれ給ぬ、其後仁徳猶即位なかりき、時に王仁（ニン）といふ高麗人、仁徳をいさめたてまつる哥也、王仁ハ日本の文道の師のためにわたれり、応神御時来朝せしにや、仁徳の御師たるへき歟、異国の人哥をもていさめ申事殊勝之理也、此国にしたかひたる心也、此国に来りときたるもの国の風にしたかふ儀也、かた岡山の詞も此類なるへし

いふかり思て（オモフテ）（朱）心もとなく思ふ也、かくてはいかゝなとの心なるへし

この花は

此花也、木の花といふ説あり、異説なり、明疑抄にも此説あり、如何、此時哥云、なにはつに〳〵、なには（裏書*3）とは一切の事也、津はあつまる処也、仁徳ニ万民のあつまる処をしろしめすへきよし也、なにはつにさくや

此花とは、まつ大やうに云出す句也、此時のさま也、冬こもりとは、仁徳の難波にこもります心也、又今は春へと、〳〵冬去は春の主となる理也、宇治宮のさり給へれは、仁徳の世をしり給ふへき心也、梅花によそへて、仁徳[*1]をたもち給て民の心のきさしをふくむをめくみ給へと也

あさか山のことはゝ、〳〵よみて　よんてとよむへし

かつらきのおほきみを、〳〵

陸奥に国司ありけれと、猶おたやかならぬゆへに、かさねておほきみをくたされけるに、国司をろそかにありけれは、王のすさましかりける[*2]時、うねめのかはらけとり銚子ニ水を入て、おほきみのひさをたゝきて、此哥をよみてなためける也、万葉のこと書にみえたり、あさか山かけさへ、〳〵此哥をよみける也、陰さへみゆるとは、高山の陰もうつる心也、深水也、あさか山の山井は深き水也、よろつの木の陰うつりてうちみるに[*3]は、あさくみゆるやう也、そのことく国司の心も君ををろそかには思はねとも、何となく都遠きさかひのならひなれは、自然にさもなき、となためたる心也

此哥を嘉禄冷泉家用本ニハこゝに云入[*4]書たり、貞応二条家本ニハ無之、あさか山の哥を書たる心は、難波津の哥は六義の処にみえたり、此哥あらはれさる故に書入也、二条家之心は、難波津[*5]の哥は六義の哥に出たり、此二哥をはいつれもあらはさす、世人あまねくしれる故也、あさか山のはかりを書入事如何と也、難波津の哥、六義に出せるをこゝに用ん事無其理云々、此哥嘉禄本にもはしめは無之、為相卿[*7]被書加と云々、或定家卿書入給云々、又は彼筆ヲ似セタリト云

このふた哥は、〳〵

哥の父母とさたまれる事ならねは、やうにてと書り、昔は手ならひなとにも此二哥[*8]を書てならはせけるとみゆ、徳ある哥をもて此二首を出せり、難波津哥は仁徳猶未即位天下難義なりし時、此哥にて王道をたすけたる、尤大徳なれは是を出[*9]なり、あさか山の哥も此一首

にて、心を和たる徳あり、両首徳の至りたる哥也、両首男女の詠也、父母にあたる理あり、又云、父母の子を思心に相当す、父の子を思ふ心は尤深し、其子の身をたて家を保へき事を思也、母は子を思ふ事不深之理あり、時にあたりて思心はふかけれとも、甚深の理に及はす、仍王仁の哥は天下のためとなる、采女のはかりのいかりをやはらく、是も一国の事には其徳ありき、人の心を種としてと云より、次第ニ道ひろく徳のいたる事をいへる也

*1 廿七日（朱）

そもそも哥のさま六也、からの哥にもかくそあるへき六義をいたして毛詩を類にひける也、毛詩を借ていふにはあらす、天然日本に六義の理あるよし也、是義勢也

そのむくさのひとつにはそへうた

一云風也、風也教也、風以動之、教以化之云々、詩序曰、*2 上以風化、下以風刺上、〻、注云、風化風刺皆謂譬喩不付言也云々、*3 譬喩とは諷する事をあらはにいはぬ心也、そへ哥はおもてにあらはれぬ也、風は物にふれされは見えさるかことく、物にそへて風化風刺の道をよめる也、風化風刺共ニ風に草木のなひくたとへあり

神武紀 能以テ ソヘウタノサカコトヲハラヒトラカスワサワイヲ*4 諷哥ニ諷歌 倒語一掃 蕩レ妖 件本此詞押帋也

おほさゝきのみかとをそへたてまつれる哥

*5 此哥は下より上をいさめ奉るなれは、風刺の義なるへし、此哥によりて仁徳世をたもち給、万民安事となる、是王仁之徳也、此難波津の哥、風の哥によく当り、故ニ注にも子細なきなるへし

なにはつにさくやこの花　前に注せり

ふたつにはかそへうた

*6 賦ハ也、量也、称也、しきのふる政のよきとあしきとをたゝちにかそへいふ也、たとへいふにあらす、称とはからひかまふる心也、とちむる心也、又草木禽獣の事をかそへいふ事もあり、*7 *8 金殿当頭紫閣重、〻、此

詩なと賦の躰也云々

さく花に思つく身の　花と我身とをかそへあけたる也

身にいたつきのいるもしらすて

いたましき事の身にいるをもしらすと也、花に貪して時日をうつして、身にいたつかはしき事のあるを、亡したるをかへり見[*1]たる心也、又花に限へからす、はからひかまへたる心也、称の心也、此哥事をすくめにいふ也

これはたゝ事にいひて物にたとへなともせぬ物也

此注の詞はかそへ哥のやうを注せり

このうたいかにいへるにかあらん、その心えかたし

さく花の哥、賦ニ十分あたらぬ歟のよし也、注者の心はかりかたし、さく花の哥も賦にあたるとみえたりと云々

いつゝにたゝことうたといへるなん〻

雅にいたせる、いつはりのなき世なりせはの哥、此賦にかなふへしと也、此哥人の事我か心をいへる、又人[*3]（偽といへるは[*2]）のことはのいつはりをかそへ云。思ふ（ミセケチ）[*4]也、是量字の心也、いかはかり人のことのはうれしからましといへるも、[*5]こちむるはかる心、すなはち称の字の理也、此両首を相ならふるに、哥のさまにおひては、花の哥はにほひありて、偽の哥よりはまさるへしとそ、又つくみといふ鳥をたち入てよめりともいへり

みつにはなすらへうた

比也、類を取て失を言、似有所懼云々也、あやまりをさしていはすして比類をとりていふ也、是なすらへ哥也、方也、并也、類也

君にけさあしたの霜の

比のをもむきさま〳〵なるへし、此哥は取類言失にはあらす、なすらふる心は相当へし、霜のをくと起るとをなすらへ、消ると云も相兼たり

これは物にもなすらへてそれかやうになんあるとやうにいふ也

比の注也、なすらへてと声をにこりて、君にけさの哥

の注也と用る説あり、如何、此哥は取類言失といふ心にかなはぬゆへに此義をいへるにや、不用之、此注は比の心を注せる也、其故はそれかやうにあるといふ也と云々、是比の心也、さるにとりて物にもなすらへてとある、もの字不審あるやう也、これは前の賦の哥の注の詞に、物にたとへなともせぬ物也、とかきたるをうけて、物にもなすらふるよしを書る也、これはとある詞五段にあり、同賦比興等の注也

この哥よくかなへりともみえす

たらちめのおやのかふこの

たらちめのおやとはかふことといはんため也、皆序のやう也、まゆにこもりたるこのさまは、中のゆかしく心もとなき心あり、そのことくいもにあはすして、心の中のおほつかなく心もとなきよし也、又養在深窓なといへる時の人にたとふる也、類を取によくあたれり、君にけさの哥も比にはあたれり云々

よつにはたとへうた

興也、ほむへき事をあらはにいはすして、たとへをとりていふ也、嫌ニ於媚諛ニ也と云々、人を直ニほむるは、へつらへるにたる事をはゝかる心也、比はあらはに、興はかくると云々、興は風にたり、然而風は風化風刺をもつはらとす、興は其心なし、又興にも政をほめそしる心もあるへけれとも、まつおもてにたてたる所如此

わか恋はよむともつきし、〜

此哥たとへたる心はあたれり、興に乗する躰はなきにや、興にあたらすと云々

これはよろつの草木鳥獣につけて心をみする也

興の注也

此哥はかくれたる所なんなき

興はかくるゝ所あり、然而此哥無隠処と也

されとはしめのそへ哥と、〜

我恋の哥を出たる心の注也、風と興との差別大事なるによて、さまをかへて我恋の哥をのせたりと也

すこしさまをかへたるなるへし

すこしといへるは、此我恋はの哥もあたれり、猶未十分之心也

すまのあまの塩やく煙

風をいたみとは風ニふかれてなひくさま也、我思ふ人の外へなるさまをたとへたり、あらはになきはかくれたる心也、そへ哥よりは又あらはに心えらるゝ哥也、よくかなへるにやと云々、*1杜子美作ニ、風蝶勤依将木、春鷗懶避船、杜陵か身上の喩也、又興あり（以上ミセケチ）*2

興は風景に乗する心あり、此哥其興あり○

風は外物ニ託す、比ハ比類を取、興も託外物也、故難弁、然而風は至て深き心也、興は風よりは浅し、比よりは興はかくるゝ也、此差別猶可思惟云々

いつゝにはたゝこと哥

雅ハ正也、素也、正はたゝしき也、政をたたしくいふ也、素はあきらかなる也、淳素の心もあり、賦と雅と相似たり、賦は政の心にある事をかそへいふ也、雅は政の正しきをいふ心ならねは不相当也、六義いつれも政の為也

いつはりのなき世なりせは　雅に此哥あたらすと云々

これは事のとゝのほり、雅の心を注する詞也

とめ哥とやいふへからん

正にあらぬよし也、文字なとを認たることきの心也、まことはそれにあらぬよし也、異説あり、不用之

山桜あくまて色を

雅の哥の正中也、此哥作者事前ニ注す、貫之承平御字まてありて兼盛か哥を注すと用也、此詞本押帋也

むつにはいはひうた

頌は誦也、容也、誦ハうたひあくる也、王者の徳をひろめてほむる也、容は盛徳をかたとりてあらはす也、頌の詩は宗庙にて誦しあくる也、哥は（ミセケチ）*3世をほめて神につくると云々

このとのはむへもとみけり

さきくさは檜木の異名也、又云、家の惣名と云説あり、三は四はとは棟なとのおほきさま也、さきくさと

いふ縁にて三は四はとよめり

これは世をほめて、〻頌の心を注せり

詩正義曰、美盛徳之容貌、以其盛徳告神也云々

かすか野に若菜つみつゝ

此哥よく相当也、又此殿はの哥も頌にはかなふへし、祝心つよきあひた、神に告る心もをのつからあるへし、此かすか野にの哥は頌の心勿論也

*1 これらやすこし、〻注者の卑下用心也

おほよそむくさにわかれん事はえあるましき事になんいつれの哥も六義にはなるへからすといふ心也、当流用此義、又説、六義によく分別する事はえあるましきと也、此義は貫之か六義に分事をかくいはん事はゝかりあり、仍不用之、此詞は注者の卑下なるへし、小注を貫之作と用る心は、ひとへに貫之を仰きたとふる義也、本の六義も貫之かあやまりたるにはあるへからす、聖人作して賢人述すといふかことく、大躰を出すのみなるへし、しかるをもし後人の注ニ相当する哥を*2しるさは、貫之か心にもそむくへからさる理也、政の正しきをほむる心よくあたれり

*3 六義之中風雅頌ハ政の名也、君化下者名政臣述之、於詩則名風雅頌、取政之名為詩之目、而事積テ漸クスルコトアリ、教化ノ道ハ必ス先風動シテ後ニ物ノ情ステニサトリテ教化トヽノホリタヽシクシテ其後ニ徳ヨク物ヲイレテ功成也、故ニ風動ノ初ヲ云ハ名之風、斉正之時ヲサセハ名之雅、成功之後ヲイサナヘハ名之頌云々

六義いつれも政のためならすといふことなし、哥の道上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目におつるのみにはあらす、世を治め身をたつへき道也、六義は品をわかち法度を定る義也、是殊勝之理也、風雅頌之中特ニ雅一を執する事あり、正しき道を本とする故也、周詩の思无邪に同し、此義肝心なるへし、当流説也

六義次第をたつる事あり、和哥に異なり

詩六義説別聞之、可通用之事在之、可看也

いまの世中色につき、〻なりにたり

なりんたりとよむ也、[*1]まめなる、ほに

此段の詞は古の事をいはんために、いまの世の事をいふ也、哥の道は此国の風俗として代々にたえず、殊に持統文武の御時、人丸合躰として此道盛なりしより以来、用きたれるやうは、今の世のことくならすといふ心也、今の世は色につき花にのみ成て世をおさめ身をたつる道には用さるよし也、巧言令色鮮矣仁の心也、当代は古の道をおこし給といふ心あるへし

あたなる哥　とは実ならぬ也

はかなき事のみいてくれは　思慮もなき心也、しかれは哥もはかなき也

色このみの家に埋木の人しれぬことゝなりて

埋木は人しれぬといはん為也、好色の家には、為教誡之端事をしらぬ事となると也

まめなる所には、

実なる人も又実のみにて花なる事なしと也、是も人の失也、花すゝきは[*2]ほにいたすへきといはむため也、実のみにて和せさるをいへり、花実いつれもかけては政によろしからす、質勝文則野云々、といふかことし、

又説、まめなる所には、実なる人あれとも、此時はいひても用にたちかたき心にて、巻て懐にする義也、[*3]又了見あるへき歟

そのはしめを思へは、奉らしめ給ふ

上古以来此道を用給ふ、むかしの代々御門は今の世のことくはなかりしと也、又古の御門といふうちに、当時延喜の御時のさまをこめたる心あり、今の御代は又[*4]むかしのことくと也

又かゝるへくなんあらぬ、と句をよみきるともいへり云々

秋の月の夜ことに、殊に也、当流用之、但をき字のやうに心うへし、読やう故実ありと云々、毎夜と用る説ありと云々、不用之

あるは花をそふとて、しろしめしけん

哥をたてまつる人々のさまをいへり、よろつさしむき

たる心なるをよしとすへし、諸人又かくのことくなるへし、花をそふとはたつぬる心也、世くたりては(ミセケチ)*2。君臣の道作意な*1とをもて、賢愚邪正を分別あるよし也、花をたつぬるとても思よらぬ処を思いり、月を賞するにも明石さらしなの外をとのみ思よれるは、よこ入たる性なり、道の心にかなはす、哥をよまんにも此理あるへし、これをもて人の賢愚をしろしめすと也、をよそ君につかふる人は私をかへりみさるを道とす、しかるに花月を愛するさまにも身躰を亡*3する事あしき事也、もろこしにも国々より学士のほりて詩賦を作て試る事あり、かくて官職にあつかるならひ也、哥人の心は情欲を放て執をとゝめす、花月*4に対しても当一念〳〵の景を愛すへき也

しかあるのみにあらす、〳〵なくさめける

しかあるのみにあらすとは、君の臣に哥を奉らしめ給ふのみならす、臣も又かくのことしと也、物々にことの心をわきまへしるよし也、つくは山、は文字の声清てよむ也、此処にかきると云々

さゝれ石にたとへつくは山にかけて

以下みな此集の哥に此心あり、必其哥の事をいふにはあらす

君をねかひとは千年万代*5をねかふ心也

たのしひ、たのしみとよむ也

よろこひ身にすき、〳〵君の千とせをねかふ徳にて、悦身にあまる理*6あり

ふしの煙によそへて、〳〵

恋の心也、人をこふるには、をよひなき高山にかそへ*7てもこふる事をいへり

松むしのねに、〳〵

富士の煙に松むしのねは大小を対していへり、友をしのふ心には松むしのたえ〳〵なるねにも思をそふる*8也、あれたる宿なとのさま也

高砂すみの江の松も、〳〵

山海の名所を対したり、あひをひとは相逐さま也、た

かひにをひすかひなるやうにおほゆる也、哥人の心をいへり、名木なる松を愛する心なり、物によせて思をのふるよし也

おとこ山のむかしを、

男山の女郎花墓上より生るなと云説あり、嫌道也、我もむかしはとよみ、あなことゝしなとの哥をもて書り、但自面は哥によらす、男山のむかしを思とは、男は人也、昔を思出れは何事も昨日の夢になりはてぬ、此理を思ふ也、女郎花の一時をくねるとは、をみなへしを弄したる心也、あなかしかまし花も一時とよめるも、弄したる心也、くねるとは違心あり、弄するもたかふ心也、花も一時の事にてこそあれと思ふ事をくねるといへり、心はおとこ山と女郎[*1]とは文章の句也、男女の心也、むかしを思出てとは、夫婦のかたらひも一時のさかり過ぬ[*2]れはむかしとなりぬれは、いたつらなるよしを観し思ふ心也、古哥をもひき新哥をもよみて此理をなくさむる也、是哥人の徳なるへし

哥をいひてそ、

古哥を吟し新哥を詠して万の事をなくさむるよし也、上にいへる条々も、みな哥人のなくさむさま也

廿九日　廿八日無之[*3]（朱）

又春のあしたに、

又といふ詞は上にしかあるのみにあらす、さゝれ石にたとへなとあるに対して也、世のことわさを巨細にいへり、花のちるを見といふより、吉野川をひきてとあるまては、みな此集の中の哥をもてかけり、しかも序の自面は哥の心によらさる也、心は、飛花落葉をみては誰か常住の思をなさんと観する心也

としことに鏡のかけに、

花やかなりしかたちもおとろへ行は、たのむへき方なき身を観する也

草の露水の、きえをまつ間の程なき事をよそへ思也

あるは昨日はさかへをこりて時をうしなひ世[*4]にわひしたしかりしもうとく成[*5]

盛者必衰の理を思には、したしかりしかうとくなるを
も必歎へきにもあらぬ心也
あるは松山の、此世後世と契れる中も、はやくうつろ
ひはつる事を思也
野中の水をくみ　うとかりし人の、又[*1]むつましくなる
事も世間のならひ也、もとの心をしる人そくむの心
也、世の中のさまなり
秋萩の下はを、うつろふ草はにつけてひとりある人の
物思あるなとを、さこそと思やりてあはれをかくる心
也
暁のしきの、こぬ夜のかすのつもりゆくも、只我から
の事と思て、人をうらむへき世もなき心也
くれ竹のうきふしを、世のうきふしをしる人なとにか
たりて、思をのふる心也
よしの川をひきて、
はねをならへ枝をかはす契といふも、みなおとろふる
はてを、よしや世中とうらみすてゝなくさみきつる心[*2]
也、うらみきつるといふもなくさめきつる心也
恨るもなくさむる心也
いまはふしの山も、
たゝすとは不断也、つくるとは作也、当流説
富士煙むかしは人の思ある時はたち、思のなき時は不
立也、いまは其煙の不断ニあれは思にくらへんさまな
らすと也、人の思は不断なる事ならねは也、されはな
くさめかたきよし也、思の支証になりかたき心也[*3]
なからの橋も、
作也、古ぬる橋もいまは又作るなれは、ふりぬる身の
たとへにもならぬ心也、誹諧部にては尽也、先注了
哥にのみそ
いつれも思をなくさめかたき故に哥をもて心をなくさ
むるよし也、吟古哥詠新哥なるへし、哥はさらになき
物を胸中ニ作出す物なれは、よろつの思をなくさむる
便也、前に恨きつるとはなくさめぬる也、しかれとも
煙不断、橋も作故に、世中の思なくさめかたきには哥

をいひてなくさむると也、不立不断両説、二条冷泉家各別也、冷泉ニハ不立を用、煙不立は思をなくさめかたき心也、橋作之義は冷家も同にや、富士煙のたえたるとよめる哥はみえさるにや、万葉にも絶たる哥はなしと云々、不立不断の事につきて口伝等あり

一説当流の義、上詞に恨きつるとはうらむる心也、煙不断なるとは、彼山の煙の面白き興あり、なからの橋の古ぬと思しも、又作るなれはうらみきつる心も今はなくさむへき也、おもしろき説也と云々、哥にのみそといへるも煙橋を翫ふ心也〻

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりそ文武天皇云々、京極黄門註也、ならの御門の事古来難義とす、或は平城天皇と云々、醍醐まて十代と勘るによる説なるへし、顕昭等用此説とみゆ、真名序に平城天子とあるをは当流はならの御門とよむ也、此御門院にて奈良にましましける故也、陵も和州にあり、或云、ならの御門とは聖武也、万葉集えらひ給へる事にまきれたるにや、大方は聖武とのみ心えたり、聖武をならの御門と申は、奈良七代の中にも他ことなる御門にて、仏法をも興隆ましまし、東大寺等御建立ありしに、とりわき如此称し奉り来る也、哥道又盛也、万葉撰此御時也、奈良七代は元明より至光仁和銅三年に和州平城にうつり給て桓武御時に至也、当流に文武をならと号する事、元明之前一代なれは准して用る也、是一義也、又文武をならと用事、ふりにし事をならと号する理也、遠き事をは神代ならねとも神世といふたくひ也、当流用之、ならの御時ひろまりけるとあれは、聖武御時万葉撰られし時の事とみゆ、しかれとも当流不用之、此事口伝あり、為家卿此事了見事、不用之 ※1

かのおほん時におほきみつの位〻

正三位也、柿本は姓也、人丸は文武の御師範として君臣合躰の哥聖也、非聖武時、故定家卿文武天皇と被記之也、龍田川の行幸の時、同心の哥つかうまつりし事等あり、人丸は持統より五代聖武御時までつかへし

と云々、しかれとも為帝師、尤哥道盛にありし事は文武御宇也、ならの御門事を俊成卿古来風躰抄ニ、聖武御事とあり、大仏つくり給御門と云々、此事定家の心に相違せり、仍俊成卿作にてなきよし被申云々、定家卿所存あるへし、およそ父子の心かはる事あり、俊は大やうニ定はねんころなる事ありき、猿沢池にて、わきもこかねくたれかみの哥を人丸のよみ給し事、万葉ニみえす、如何云々

秋の夕龍田川に　文武の龍田川行幸時御哥也

春のあしたよしの丶

同行幸の時、人丸みむろの山に時雨ふるらしの哥を詠す、しかれとも、其哥の事をはいはすして吉野桜をかけり、其故は秋の夕立田川とかけるに対して、吉野山桜と出せり、文躰のかさり也、人丸哥にはなき事也、此哥の事切帋ありと云々、猶以文躰の対にかきたる心面白と云々

又山のへの赤人

ならの御門人丸赤人三人の事をいへり、赤人々丸同時也、赤人はすこし末の人にや、万葉集の末ニ人丸の哥なし、赤人の哥は末までみゆ

あやしくたへなる

とは奇妙也、赤人[*1]の哥自然にしてしかも珎しく妙也、赤の作は自然にしてしかもめつらしき所あり、人丸のは環のはしなきかことしとそ

人丸はあか人かかみに

等同のよし也、当流用之、或説、人丸は赤人よりすこしはうへなる心歟云々、然而等同の義也、此批判を重いへるは文章のかさり也

たつた川　秋哥に注す

梅花　冬部にみえたり

ほの〳〵と　旅哥にあり

赤人春の丶にすみれつみにと　野遊の心也、春の丶を愛する心にて、不慮ニ何となく一夜[*2]ねたるよし也、奇妙の作也

わかのうらにしほみちくれは

かたをなみ、潟也、又方と用る説あり、方と潟との両説也当流方字を用、(ミセケチ)*1其中に潟の心もあるへし、方をなみとは、いつくともなくあしへへ鳴ゆくさま也、作意によろしと云々、

潟をなみと云は、*2塩満て潟のなくなる心也

此人々ををきて

ならの御門の御事にはあらす、人丸赤人両人の外にもといへり

これよりさきの哥を

さき不審、未決、定注云々、さきとは古今集よりさきといふ心也、万葉は撰集のはしめなる義也

此説口伝也

こゝにいにしへの事をも、ひとりふたり也き

遍昭*3黒主等六人の事也、人丸赤人なんとの比の人をいふにや云々

しかあれとこれかれ、各すこしの徳失ある也

かの御時よりこのかた、

かの御時よりとあれは、万葉撰られし聖武御時よりといふにたり、聖武よりは至延喜十六代百七十年也、平城天皇よりと云説は十代百年にはあたれり、顕昭説也、此時人丸あるへからす、当流は自文武至醍醐延木五年十九代二百余年也、文躰大数をいへる斗也、*4序の詞六人を批判するにわつかにひとりふたり也と書、*5真名序にも纔二三人と書るかことし、又文躰のきゝをいたはるなるへし、冷泉家には継躰の次第を勘て十代と用也、注別帝、

為家卿此事若失錯歟云々、定家卿の心と相違せり、貫之は此道の聖人也、不可有失錯之義也、貫之か心文武天皇御事を書るなるへし、尚有口伝云々

いにしへの事をも、

今此事をいふに

つかさ位たかき人をは　高位等の人の哥を批判酌酌ある心、殊勝之義也云々

其外にちかき世に　万葉以後の人々也

僧正遍昭は哥のさまはえたれとも
すこし実なる処なしといへども、詞心とゝのほりある
へきやうなる哥なるへし、後鳥羽院・定家に此六人の
事を御尋ありし中に、遍昭を挙し申されき、まことの
なからんにはと仰られしに、定家卿それを哥と申侍
る、と奏せられけりと云々、哥道の口実(シツ)なるへしと云々
あさみとり　はちすはの　前に注す
さか野にて馬よりおちて
哥心は秋部ニみえたり、こと書をみるに、かゝる時も
哥道を忘さる心、殊勝之理なり、哥には落馬の心はあ
るへからす
在原(アリ羽ラ)のなりひらは
哥を深く案し給□□に、詞のたらぬ所ある也、つねの
余情よりもふかゝるへし、しほめる花[*2]と詞のすこした
らぬたとへ也、句残は心の余あるよし也、智者のたま
たまいふ事の心ふかくいひきらすして、残おほかるか
ことくなるへし
月やあらぬ〜哥は前に聞〜、大かたはの哥も業平の
詠に殊ニ執する哥也云々
文屋のやすひては〜
詞のたくみに面白を、よききぬにたとへたり、心にす
こしいやしき処あるを、あき人にたとふる也
吹からに野への草木の　秋部ニハ秋の草木とあり、本
は野へとよめるなるへし
草深き霞の谷に　此哥[*3]詞たくみにして又余情ありと
云々、此序に出したる哥は、こと〳〵く批判のことく
ならさるもあるへき也
うち山の僧きせんは
我菴はみやこのたつみ
人はいへともとあるへきを、いふ也とよめる、すこし
物のたかへるやうなり、はしめをはりたしかならぬ処
也、晴天之月ニ暁かた一点の雲のさへきるにたとへた
り、又云、此哥のさま、かすかにおほつかなき心を、
あかつき、月を雲まにみたるにたとふる也、両説其心

かよふへし

よめる哥おほく、一首なれともおほくきこえすと書る

文躰也

をのゝこまちは、流也

なかれとはよむへからす、其流といふ心也、流とよむ

説あり、六人の中に小町は難なし、つよからぬは女の

哥なれはといへり

思つゝ、哥心前に注之

そとほりひめの哥　わかせこか

明也、哥のさまの支証に出せり

大伴のくろぬしは　姿はいやしく、心□□□しき也

思出て恋しき時は

人はしらすやといへる処、さまのいやしき也、恋部ニ

ハ人しるらめやとあらためて入たり

かゝみ山いさたちよりて

心は面白し、いさ立よりて見てゆかんといへる処、姿

のいやしき也、六人の失をいふに、何の哥を本として

いふとならは、人丸のを本として失を定也、人丸哥は

第一其心无限景気又殊勝也、詞つゝきとゝのほり建立

又たくみ也、環のことくにしてはしなし、故に本とす

るなるへし

この外の人々その名きこゆる野へに、

前にいへる六人の比より以来の人也、六人の外も哥人

おほしといへとも、哥をよむとのみ思て教誡たる心を

しらぬ也、前にいまの世中色につき、といへるに当

れり

かゝるにいますへらきの

きの字、こゝにてすむへし、常はにこりても云々、御

門受禅より至延喜五年九ヶ年也寛平九年受禅ましく

き、前の詞ニ古の代々の御門春の、云々、其中に延喜

御時の心こもると注す、此段のさまにみえたり、かゝ

るにいまといへるは、当朝ニ道をおこし給ふ心也

あまねきおほんうつくしみの波　つくは山

よろつの政をきこしめすいとま

(1)こゝにいへるは此集を撰はるへきことをいふ記也、難[*1]
(2)云、万機之余暇諸事のあまりとあり、然は哥は教誡の
はしにあらすや、如何、答云、哥道を必政とのみいふ
にあらす、政の助業也、政道無為の時にいたりては、
哥を教誡のはしとするに及へからさる也、行有余力則
以学文といふかことし、此問答一往之理也、序の心は、
君の万の事を捨ましまさぬ故に、歌道をも興給ふ義な
りと云々。又云、哥は政の名也、哥と政と別□□□[*2]へ
からさる理也云々、哥は諸道の源也、詩は政の名也と
云かことし、さしあたりて行ふ政をのみ政といふへき
にあらす、仁徳の心を政を行と云へし
古の事をも忘し　神代以来文武人丸等の道を忘しの心
也
ふりにし事をも　万葉をうけて撰集ある心也
いまもみそなはし　当代御覧のみならす後代までの義
也
延喜五年、奏覧の時ニハあらす、事のはしめをいへり
御書の所のあつかり
さきのかひのさうくはん　さつくわんとよむ也
[*3]万葉集ニいらぬ古き哥
此集ニ万葉の哥の入たるあり、其故は家集をもて撰入
たるなるへし、其集の内万葉にも入たるあるなるへ[*4]
し、延喜比までは万葉にくはしからさりしにや、村上
御時、源順点を加しより世にも学けると云々
みつからのをも、
撰者四人の自哥事也、貫之哥はみつから撰入ニあらす、
みな　勅定也云々
それか中に梅をかさすよりはしめて　以下此集の部立
のやう也
雪をみるにいたるまて　以上四季也
又つるかめにつけて　賀也
秋萩夏草をみて　恋なり
あふさか山に　離別、旅也
あるは春夏秋冬にもいらぬ　雑哥雑躰等種々部類事也

くさ〳〵の

すへて千うた、〻千首、廿巻也

古今和哥集といふ

真名序曰続万葉集云〻、撰集の時は先集の号をかりになつくる事あり、其義にや云〻、首尾して古今和〻と号せしなるへし、古今二字の心巻第一に記す

かくこのたひ〻*1

次第〳〵につもりて行末不絶のよし也、濫觴よりなれる心也

はまのまさこの〻此集の千余首□*2〻のほれるよし也

いまはあすか川の〻

世間の変化はあれとも、此集不変なるへき心也、聖代に貫之哥聖として合躰撰集のゆへなるへし

さゝれ石の〻

転変もなく次第に増長して万代不窮之理也

それまくら　臣等也、貫之か我等といへる詞也

ことは春花匂少くして

詞匂すくなきよしの卑下也、春花は詞縁也

むなしき名のみ秋のよのなかきを

はかなき名を行すゑ長くとゝめん事を難く也歎歎*3

かつは人のみゝに

哥の心にとは、未練の身を卑下し、又此集を撰をく事を道の心にはちたるよし也

たなひく雲の〻

起居動静此事をよろこふ也、聖代に生合て撰此集事也

人丸なくなりにたれと

なりんたれととよむ也、文王已没文不在于茲の心をもて書り

心は当代をほめたる心也、それも人丸の余慶余風なるへし、人丸をなをさりにいふ心にあらす、すてに先師柿本云〻

たとひ時うつり〻

世の哀楽変化ありとも此哥の文字たえすあるへしと也きしたふへき也（ミセケチ）*5

とゝまれらは

たのしひ悲行かふとも、此哥風とゝまりなはの心也、

鳥の跡とは、此集にしるしをく処也

哥のさまをしり

哥道の花実等相具し、正風なる事等をしる人の事也

ことの心を〻〻哥道意教のためなる理をえん人はと也

大空の月をみるかことくに

哥道は人の心のやみをてらす也、大空の月をみるたとへ也、人ゝしたひみて和の道ある故也

古をあふきて〻〻

天地未分以来□[*1]神□戔嗚尊等文武人丸よりの道をあふくへし、今[*2]と□□□をいへり、延喜貫之の時をこひさ[*3]ら□やとなるへし、帝の師[*4]として撰置処の集なれはなるへし、此詞古今の二字をもて書終る也

（補二）

九州大学文学部
国語学国文学研究室　蔵「古今和歌集聞書」御師説抄出―文国別79

483頁上段9行　日本ヲ天笠ヨリ（デク）みれは芦ノ葉ニ似たる故葦芽ト（イケ）云、芦ノきさす心也、やまと哥と云ヨリことの葉とそなれりけるまては序ノ中ノ序也

492頁下段10行　そへ哥トおなし

493頁下段1行　御師説素（ソ）　しるき心也

495頁上段8行　御師説なりんたり　にはね也、人丸集ニも丹波をたにはとあり、難波ト書てなんはトヨム

同いにしへの世々の　代々ノ王、延喜のみかと程になきゆへ也

497頁上段13行　御師説くねる　弄、もてあそふ心也

497頁下段3行　私是迄一度ノ分也

502頁下段2行　御師説　大かたは月をも　心も詞もたりたるやうなれと、つもれはの詞夜とも年ともしれぬ也

8　御師説　文屋　常ならは文屋といはんすれとも、ふみをみはねニいへは也、文室とも書也、いへの心也（作）

11　御師説　初春トヨム、初ハ漢音也、初ハ呉音也

12　御師説　近院ハ呉音也、キンハ漢音也、私まさすみ有能ノ子也、文徳の孫也（作）

13　御師説　老子ニ谷ヲやしなふトヨム

御師説　爰許ニ不審アリ、鶯の哥ノあるに谷風の哥斗へたゝりたるは、谷ニ鶯あるへ故歟、重而尋ぬへし

18　御師説　こゝに春日の哥へたゝりたるは、都は野への哥、此野ハ春日野なるへし

20「以上初日　廿首」　私古今集ヨリこゝまて廿首一日分也、以上三日分也

21　御師説　まとはと相通故也（詞）

23　御師説　春のきると当世よむ事いかゝ、躰なきゆへ也

25　私女房ヲせこと云

29　御師説　遠近の哥、猿丸か哥也

30　私　凡　二条家ニハヲツシトヨム（作）

31　私　帰雁トモ（詞）

32　御師説　にほへト句をきりて、梅の花のあると思ひて鶯の鳴と也

33　御師説　あはれ　これはあつはれ也

35　御師説　兼輔哥トみえたり、不審

43　御師説　河を花と見てはなかるゝ陰をなと、今世はよますはいかゝと也

49　御師説　春しりそむるは、御代はしめの事也、長久の心也

52　御師説　心さしふかくそめてしの哥をは忠仁公のなれとも、よみ人しらすトありてこゝに又あらはすは、題しらすにたいして也、又前書にそめとのゝなとゝのかれぬゆへ也、花をし見れは、そめとのを祝して也

53 御師説 なきさの院 山さきの事也 （詞）

57 御師説 さくらめとに桜をもたせて也

60 御師説 山への辺ニ心なし

61 御師説 暮春の哥にあらす、末のうるふをよめり、又末〳〵の春もあくましきと也、人の心にあかれやはなとせぬと云心也

64 御師説 おりてめのては、やすめ字也、おらめ也

74 御師説 此奥の、山吹はあやなな咲その哥ニ似たり

75 御師説 そうく法し 元慶（ケンケイ）の比（キヤウトモ）の人也 （作）

77 御師説 残りなく散そは花をみたてゝの哥也、これはまたちらぬ花也、我もちりなんは花をわか方よりさそふ躰也、当世はよまれましき風躰也

80 御師説 典侍（テンシ）よるかの朝臣ともあり、御つほねかたにもかみすけあり、尚侍（シヤウ）、内侍、女房也 よるかの朝臣、朝臣よるかとあらん事也、名の下の朝臣いかゝ （作）

81 御師説 我か風ニあたらぬもうつろふ心こめたり

御師説 すかのは氏也、高世（タカ） （作）

83 御師説 とく散と思ひもあへぬニはやく散たると也

87 御師説 風は心に任すへらなり 風は心にまかすらん也、任すへからすの心なれとも任すらんよき也、我はかへる程ニ風か心任にちらさん也、わかこしは帰る心也、往来ニ帰る心ある類也

89 御師説 桜ちる木のしたの類也、桜ちるの哥此集になきは此哥有故歟

92 御師説 春たては 立春の心にてもくるしからす、立春には人の心かはる故也

100 御師説 但鶯の残りおほき心も少はあらん歟

102 御師説 前のちくさにはかはりたり、是は色〳〵にみゆる也

104 御師説 心さへにそうつりけるは、心さへにの心也、けふそへになとあるも、けふさへに也、人もこそしれ、しらふれ也

107 御師説 典侍 春澄（ハルズミ）ノむすめ也、此前にあるも同名也、天子のわたなとの御座ある所歟 （作）

108 御師説 わひしき　常のわひしき也、

115 御師説 おんなのおほくとある故、道もさりあへぬとよめり

116 御師説 わかなと花と時分いかゝなれとも、こし物をにていはれたり、山てら、いつれともなし

119 御師説 枝は下枝の心也

121 御師説 万やとにある桜のはなは今もかも松風はやし土におつらん、ひつきやうは今もや咲匂らんの心也

122 御師説 にほふは花の色のはへのあるをいへり、香さへとあれとも山吹の香いかゝ、これほと色ニはへある間句はんと、こちよりすいしての心也、又にほはぬはえもいはぬと云心也、色香を賞翫(シャウクハン)しての哥なるへし

124 御師説 さへの字用ニ立也

126 御師説 はてのかもしにこる也、かなの心也

129 御師説 水のまに〳〵は、花をとめて来ての心も可然也、さしつめていふはいかゝ

132 御師説 いぬる女ことにやれ〳〵と思ふ心也

135 御師説 人丸正三位也、文武比人(ノ)（左注）

139 御師説 五月まつ山郭公は、四月、五月まつ山橘は五月の事たるへし、口伝あるへし、但五月まつは五月にまつと、に文字を入て見て可然歟

143 御師説 両説のうちはしめまされり、又はつ声とあれは、あみやう次第不同とみえたり

151 御師説 惣別(サウベツ)は今あらたまるを云也、今から山へかへるな也

152 御師説 みくには性(ママ)也、町女名(ヲンナノ)也、慥ニしれす（作）御師説 やよはやれ也、やゝの心也、よやのかへしや也、私ト御意也、しかすかの、呉音(ゴヲン)、さすかにかへる

155 御師説 かれなくはかはらぬにと云也、かるゝはかはる故也

156 御師説 てにはの物に、のゝ字やニかよふ也、やの心なるへし

158 御師説 時鳥の人を恋る事いかゝ、わか心に恋しく思ふ人を郭公のさつしなく歟と也

161 御師説 またなかぬ心あるへし、待心也、前書ニあつる所これよき也

165 御師説 人をたぶらかす心也

169 御師説 敏行(トシユキ)は、富士(フジ)丸か子也 (作)

173 御師説 古来より七夕ノ事ヲわか事ニよみならわしたり

174 御師説 わかれをおしみての哥なるへし、此哥に舟なし、いかゝ

175 御師説 七月の比紅葉あらん事不審也、唐(カラ)ニ楓橋(フウキヤウ)ト云事アリ、紅葉橋しれぬ也

178 御師説 よく聞て面白也、七夕ノ事をそはよりせうしに思て也

179 御師説 七夕のことく一年ニ一度つゝあひて、我は成ましき心あるへし

180 御師説 願(ネカヒ)ノ糸は糸のことくにねかひのすくニあれかなの心歟、又七夕のことくに長く恋わたらん歟、迷(メイ)惑(ワク)なると云心もあるへし、左ニ七右ニ七さほニ付て手向也

181 御師説 待もこそすれ 待もこそしやうすれ也

184 御師説 炑は心をいたましむる故也、炑の字ニ下心を書てうれへとよむも心アリ

185 御師説 わか身ひとつの炑にはあらねとの心也、これも秋の下ニ心を書てうれへとよむ旨用

188 御師説 草葉のうへにねぬに露けきと也

189 御師説 時はわかねとニ四時よくあひたり

190 御師説 かんなりのつほ なしつほ也、私ふしん (詞)

御師説 良夜(リヤウヤ)ヲ愛(アイ)スト古文真宝(コブンシンホウ)ニアリ、ねてあかすらんは、ねてあかす人かあらんするかの心也

192 御師説 昔の哥には鴈かねヲ鴈斗の事なるを、これは音の聞ゆる也

194 御師説 月のかつらはもみちせぬものなれとも、光のてりまさるは紅葉すらん也

195 御師説 くらふ すむ也

198 御師説 色つくは花のことにあるましき也、花おちて下葉もやう〳〵色つく心なるへし

202 御師説 訊尋る心也、われをまつ歟といひてとふらはん也

207 御師説 人のたよりを聞度トおもふ時分はめつらしからん也

213 御師説 わかなくを鴈のなくにもたせて可然也

216 御師説 右之説いかゝ、炾はきに対してゐて物思ひにくたひれたる時に、鹿まて鳴たる也、此はねやう今はならぬ也、なくらんは鹿のなくらふの心なるへし、是故はねられたる歟、又鹿のなくらんは鹿や鳴らんの心なるへき歟、やといへはいやしき故のといひたるへし、秋はきにうらひれたる時分、鹿も山したにてなきこそするらめと推量しての心、一段珍重歟、萩のうらとうけたる也

217 御師説 鹿かあちこちへ行故、珠を鹿かふみしたきてしからみのやうにしたる也

218 御師説 うらひれをれはの哥に同

222 御師説 君子治レ国如レ烹二鮮魚一、ちいさきうをゝきよくせんと思ひて、はらわたをとりてにれは、くたくることく也、ちいさきうををも其まゝにれはくたけぬ也、萩の露によそへて、天子の万民をよらせんとおほしめせは、其内にあしき者有也

223 御師説 わとよませんとてわを書たり

230 御師説 朱雀院トヨム（詞）左のおほいまうちぎみ　時平のおとゝの事也（作）

231 御師説 あふことかたきをいはんとて天川トいへり

234 御師説 香はをみなへしになけ。とも女ニもたせてかうはしき心也

235 御師説 女の物はちする心也

238 御師説 平貞文　好風カ子也（作）

243 御師説 袂ト袖トアリ、下句は上句を再尺したれは、袂ト袖トアリテくるしからす、少はいかゝ

246 御師説 たはれん　れんほの心

248 御師説 次而なからに、わか述懐を申したる也

249 御師説 山風を嵐と云説用ても可然歟、あし引の山と云かへに、あし曳のあらしとよみたるは山トもたせて也、九品ノ時下品ニ入、上品は詞のひやかなるをいるゝ故也

252 御師説 しぬらんとあるは、霧たちてとアル故思ひやりてはねられたる歟、第五面白し

253 御師説 かねてうつろふと云にて炁ニ入たる歟

255 御師説 綾綺殿 大内裏ニアル御殿也（詞）勝臣 朝臣をあをんトモヨム、人の名の時如此（作）

256 御師説 をとは 清水寺のにてはあはす、石山と前書ニあれは也、今ならは木葉とよむへきヲ遠き所を見てなれは梢面白シ、風の音とうけたると云説不用之

258 御師説 露をは露のまゝにて置て鴈の涙か野へをそめたる歟也

261 御師説 笠とうけて也

262 御師説 不レ敢ニ あらす、堪の字なり、萩ト葛トハ青ヲ賞翫

263 御師説 笠をとるとうけたり

267 御師説 はゝそはよく紅葉せぬ故也、うすきニ深きを対して也

269 御師説 雲客へ我は入たる間、星と対坐する心なるへし、左の小書にてしるし、菊のあまたの心也

271 御師説 かやうの哥、哥合にはまけニなる也、同字三ツあれは也

273 御師説 仙宮 仙郷、仙室なとゝ同なるへし（詞）

御師説 へにけんは、露の間に千とせをも経たらん間行末猶々久しからんの心なるへし

282 御師説 関雄 真元の子也（作）

289 御師説 山へは紅葉ニ心付て也

291 御師説 かつちるは、糸のよはく成故ほころふる心也、山のにしきと斗いひて紅葉をもたせたる、当世はいかゝ、にしきをとあらん所をにしきのとある、

面白自然の心也

292 御師説 今ならは此哥冬にならん也

295 御師説 くらふ山

297 御師説 朱買臣か古事より也

298 御師説 此哥ニちるトあるはヘイハクモフレチルヤウミユル故なるへし、ぬさはヘイハクノコトクニあさいとなとを五色ニそめてする也、大麻ト書

299 御師説 心ちきらふ事いかゝ

300 御師説 紅葉をふくみて也

302 御師説 是則、延喜ノ比ノ人也（作）

御師説 吹風と谷の水の哥の類也

305 御師説 見てをのをはやすめ字也、御屏風

307 御師説 藤衣これはいやしき衣也、田夫の哥ニなしてよけれはわか事ニしてよめるはあしき也

313 御師説 風のやとりはたれかしるの類也

314 御師説 惣而前書ト云はあしき也、詞書と云へし、但ませていひて可然也

316 御師説 映 アキラカ、ウツルトモヨム

317 御師説 此哥大和国中にて思ひやりたるへし

319 御師説 当時ならは春ニならん也

320 御師説 十月わたり水かさます事いかゝ、春ニ成へけれとも紅葉ゝなかるニひかれて也、右両首当時いかゝ

321 御師説 ひとひも雪のとよまん事也、ふかき雪のふるとはいかゝ

324 御師説 必とすることなかれの引事いかゝ

325 御師説 ふるさとならとアレ共、あなかちならにてよめると見へからす、前書ニあてはならの京と見へし、此哥は霜月末つかたの哥なるへし

326 御師説 興風哥也

328 御師説 忠岑哥ニ取てもよき哥也、迷惑してすむニあらす、山の感を面白おもひてすむ也

329 御師説 なれやはなるや也、わか事になして、はねてはいかゝ、雪のふれるをみてと詞書ニあれは、人の事をさつしてよめるなるへし、歌の自面にて見へし

333 御師説 ふりしけ ふりつけ也、しくニ布の字をも書、又鋪(シク)の字も書也、深雪なれとも春は見ましき故也

334 御師説 梅花さくなとあらは親句(シンク)なるへし、あなきりあひは、霧の事也、是はうすくもりてふる也

335 御師説 花の色は霞にこめてみせすとの類也、香をたに、このをの字にて哥のからよき也、梅花に生れつきたる香をたに匂へ也

336 御師説 此の文字、かにかよふ、君か代の類也

338 御師説 ものへ 物もうての事也、いつくにても (詞)

339 御師説 つゝの字よくたちたり、なることに

340 御師説 我身ニ観(クハン)して也、わかみ不変(フヘン)ニへん〳〵(ト)くらすを也、貞松彰(テイセウハアラハル)ノニ年寒ニ、此引事可然也

341 御師説 親句(シンク)也、過去(クハコ)、現在(ゲンザイ)、未来(ミライ)アリ、歳暮の哥に心かなふ也、夏の時をよまれぬ歌也

342 御師説 行年のおしくもあるかとあらんを、かなと置(フキ)たるは歎(ナゲキ)たるゆへ也

343 御師説 やちよのやはいよ〳〵なるへき歟、わが君はわが朝なとの心なるへし

344 御師説 千とせはかきりもなき心に、こゝにては用て可然と也、わたつうみは四海を君子ノおさめ給ふによそへて也

345 御師説 八千代となくは万世ヲよはふ心也、此やちよ、八千世也、さして

346 御師説 わかよはひといひて、思ひ出にせよと下知して、いかゝ、但よはひよくきけなとゝ下知なるへし、わかよはひ(ト)よひかけて也

347 御師説 遍昭を祝して被遊たる也、天子ノ御身にて君ト被遊たるは、在位君臣有徳(サイキノクンシンユウトクノ)君臣と云事アリ、その心なるへし、俗の時も僧に成ても、遍昭はよきものなれは也

348 御師説 御をは うは也 (詞)

350 御師説 をは 是は常のをは、めいのをは也 (詞)

351 御師説 日をおほえすくらすは祝義ナル故、賀の哥なるへし

354 御師説 行住座臥ノ心なり

355 御師説 しけはる 業平ノ子也、しけはるトときはる、同哥よみたるへし（作）

357 御師説 是ヨリ賀のうち四季を分たり、そせい俗の時なるへし

358 御師説 此哥賀ニ入はいう〳〵としたる故なるへし

360 御師説 松風ニ千代をもたせて也

361 御師説 霧も物をそむる故也、色まさるにて賀の哥歟

362 枝かはす与所の紅葉の埋れて秋はまれなる山のときは木

363 御師説 此内ニ賀ニあはぬ哥ともあるは、賀の時は屏風を給はる物ゆへ屏風の絵ニあはせて斗よめる歟

374 御師説 あふ坂にて人をわかれ あちよりわかるゝ故人をとアリ（詞）

376 御師説 寵 女房の名なり（作）

377 御師説 今心みよ 試の心なるへし、心見ニあるまし き也

378 御師説 心をつけてやると也、五躰はかりわかると人のみん也

384 御師説 あふ坂のきは音羽なれは也

385 御師説 帰朝の舟へ行ニわかれおしみてなり

388 御師説 山さきより神なひのつゝきよく尋ぬへし、山さきのしもに神なひある歟（詞）

392 御師説 みえなゝんはみえよなり、惣別旅には川をはやく渡り、山をは分残す物なり

393 御師説 散のまかひに家路わすれてなとの心なるへし

394 御師説 みたれなんは下知なり

395 御師説 これもなんは下知也

397 御師説 都の内にて別るをも、座中にて別るをも、離別の心ニ用也

398 御師説 かねみ 王孫也

404 御師説 あか 水の心もアリ

408 御師説 けふみるとうけて也、いつみ川、きつ川也

415 御師説 心ほそきなと貫之ニ似あはぬ也、下輩ノ人も

よまん也

416 御師説 旅の字ニあらす、度の字也

418 御師説 いひけらく いへらく也 （詞）

421 御師説 衲衣（ノウエ）は出家ノ衣の事也、あけるは十まんの心也、紅葉の結構（ケッコウ）なるに十まんの神なれは、わか袖をきりて手向ニしたりとも神のかへさん也、あける、愛する心もアリ、あけるをあくとはかり心得てはあしゝ

426 御師説 むめゥうめとあるは、むうとひゝく故也

430 御師説 雲出（クモ）テ腸中（チャウチウ）明（アキラカナル）ノ心也、やとりさためぬといはんとての序哥也

435 御師説 くたんをくたに、にはね也 （詞）

441 御師説 しをに にはね也 （詞）

442 御師説 野はなけれはやは、野かなきやらん也、花をふむ鳥を打はらはん也 したく

444 御師説 にはね （詞）

448 御師説 仏法也、人間モ此ありさまと也

451 御師説 わひしらに わひしさに也、らのかへし、さ也

453 御師説 物名ニ此哥入、ふしん也、わらひと躰ある故也

454 御師説 人にみえつゝ みえなから也、つゝとまり大事也、きのめのとは紀伊（キイ）ト云人のめのと歟

455 御師説 わか心ニわれときやうくんの心也、物からは物なから也

456 御師説 今朝からこと 別ニ也

457 私 かねみ 名也

458 私あほ 氏也 （作）

463 御師説 一鏡晴飛玉（イッキャウハレトンデタマ）ニ有（アリ）レ華（ヒカリ）、実やはなるへし

464 御師説 幾斗ト書ていくそはくトヨム、いくそはくわかうしとかは思ひつらふ也

468 私 聖宝（シャウホウ） （作）

469 御師説 鼻中（ハナノナカ）と云説いかゝ

御師説 上古は序哥也、当世はまれ也

470 御師説 暁のなからましかはの哥にもおきト書て、よし是は序哥なから当世もよむへき也、序の分やくにたつ所あれは也

471 御師説 波のさはくに心のさはくをもたせ也

474 御師説 心を置にあらす

476 御師説 北野の馬場にてはあはぬ也（詞）

478 御師説 今は中の申の日也（詞）

480 御師説 君はさてもと云心なるへし

御師説 思ひに火をもたせたるも可然歟、つくるトあれは也

486 御師説 ぬとはぬる也、妬（ネタク）

488 御師説 行かたもなきは空に思ひのみち〳〵たる故、思ひのさきへとゝかぬ心也

496 御師説 わか思ひのふかきを紅によそへて也

499 御師説 君には、君をの心也、わかことや

505 御師説 自然にあらはれん也、忍恋也、又らめやト云詞可レ吟味（ベシ ギンミス）

508 御師説 いてわれを、いてさらはなと云心也、ゆたのたゆた、たゆたふ也、ゆたはゆり也、ゆらるゝ也、たゆたはたゆたふ也

520 御師説 今の世をそのまゝ置て、末の世になれかなの心也、昔人ヲ恋たりしと思はん也、来世にあらす

529 御師説 鵜のなき事いかゝ

530 御師説 かゝり火は、かけといはん枕詞也

532 御師説 おきへにも沖のほとり也

533 御師説 しらすやは、あちかしらすや也、又じらなんたの心也

534 御師説 煙のたえぬを恋のたえぬによそへて也

540 御師説 心かへ　物にもかは哉也、かをすむ説いかゝ、我ト人トの心かへ也、かたおもひなればくるしきと也

549 御師説 ひとめもる人目をまもりて忍ふわれにてはなき程に恋ん也

550 御師説 かてには、やかて也

551 御師説 しのきは、下まてしたひてふる心也、恋ふると云事をいひてみん、人のなひく事あらん也

552 御師説 心より夢をさますましきと云説いかゝ、たゝばかなきをいはんとて歟、尚御尋(ナヲタツネ)あらん(ト)也

554 御師説 引古事面白(シ)、いとは尤の心もあり

556 御師説 しもついつも寺 (詞)

御師説 哀傷(アイシヤウ)の哥なから、其次而(ニ)小町か所への恋慕(レンボ)なるへし、みぬめはちかひめの心也、人をみぬための心也

557 御師説 法事を聞て、われは滝のことくなる涙なるに、そなたのはをろかなると也、下心、恋の心也

558 御師説 夢(ニ)六夢(ム)あり、夢の一字のさんよくあたれり

561 御師説 火をとる虫になしても相違なき也

563 御師説 しらぬひのつくしの綿はきたれ共妹としねゝはさむくそ有ける、此哥かなへり

569 御師説 仏道(ニ)いらんと思へとも、子なとあれは捨ぬ心あるへし、観念(クハンネン)也

571 御師説 たましゐあちこちへありけは、いきかひなき心也、此見やう可然也

572 御師説 涙にてもゆるをけす心也、少いひたらす

573 御師説 さはく所は氷らぬ故也

574 御師説 夢にかよはゝ露あるましきか、夢路にも露ありと也

576 御師説 しほら

577 御師説 忍恋の心也、五月雨なとゝあらはいかゝ

578 御師説 時そともなく とつけもなくなとの心也、夜たゝはよる〳〵の心也、何をうしとか夜たゝなくらんは、さはかしき心(ニ)用、是は別也

579 御師説 序哥也

581 御師説 よもすから思ひにもゆる蛍こそ鳴虫よりも哀也けれ、此心面白、後ノ哥也

584 御師説 すけてもなくて我斗の心也、ひとりしてと云詞いかゝ、二人して物おもふ事なけれは也、今ならはたゝ独とよまん也

585 御師説 初ノ説よき也

586 御師説 烋風楽の心ニ用さる可然也、但かきなす琴を烋風楽ニ引なすといはゝよかるへし、かるらんトあるは、人の事のやうにていかゝ、本来恋慕(レンボ)の心ニ今一きはさそはれて恋しき心なるへし

589 私 物のたうひ の給也 (詞)

591 御師説 冬川

592 私 根さし

593 御師説 かけてといはんとての序哥也

594 御師説 なか〳〵といはんとて中山トいへり

610 御師説 もとすゑは、ひつきやうと云心也

612 御師説 佗ぬれは常にゆゆしきの心也

614 御師説 なんは下知也

616 御師説 物らいひては、物なと也、物こしの説いかゝ (詞)

619 御師説 あかさりし袖の中にや入にけんの哥、こゝに叶へり

620 御師説 見まくほしきと思ふ心にいさなはれたる也

628 御師説 あひ見ての名さへあらんに、なき名と也、人の名をとると云は聞たるか、なき名とると云事はきかぬと也

630 御師説 無しつをいひはるけんと也

637 御師説 朗(ラウ)又廓(ホガラカ)也

638 御師説 朝臣(ホガラカ)とは四品まて書、それよりうへをは卿(クハク)と書

640 御師説 寵 女房也 (作)

641 御師説 不如帰と鳴ゆへ歟、かへらんにはしかしといさめたる心あらん也

642 御師説 此来しは帰る心也、往来に同し

645 御師説 せんかたなき也 (詞)

662 御師説 前書にもたせて也 (作)

665 御師説 水鳥の寒き池のそこをくゝるに、わか恋をよそへてなり

御師説 寄(ヨル)を夜にかねてなり

669 御師説 わか名もみなとは、湊に舟をかけたる間はあらはれぬ心也、はやうちあらはれんの心なるへし、又一説、みる事もなき間湊を引きりていつくへもゆかんなり、此説面白

674 御師説 事なしふ、両説事なし也、事なしにいふともしるしあらし也

676 御師説 ねし物を すむ也

677 御師説 らん、面白也、向後の心也

678 御師説 相と逢の字也

680 御師説 君といへはゝ、わか思ふ人の事をきけは也

681 御師説 まほにみゆるやうには夢中にはみえましき也

683 御師説 みるめといはんための序也、あくの心なれとも、それにてはいかゝ、充満の心也

684 御師説 一日見されは三月のことしの心もあるへし

685 御師説 みる物からや みぬ物故こひしきニ、見てゐるにも恋しきト也

694 御師説 風つらきもとあらの小殊、右を本哥として歟

695 御師説 若女を見ての哥なるへし

696 御師説 何事もおもはぬ也、こそととまるは跡に残る詞也、こそ思へ也

698 御師説 こひしとはたか名付たる、しぬるとはかりいはん物をと也、又一説、こひしといはすにしぬると斗いはん也

700 御師説 一目見て近まさりするゆへの哥也

701 御師説 さけられましきの心也

704 御師説 里人は国民なと云心ニ世の人と云心也

706 御師説 ありきす ありきする也 (詞)

710 御師説 おほぬさは、へいはくとちかひたり、ぬさはちいさき也、神前にたてゝをく物也

711 御師説 夜離 色ことは、別して也

713 御師説 貞心なる心也、おとこなとをよく思ひつめたる哥也

724 御師説 左大臣 ヒタリノオホイマウチキミ (作)

726 御師説 らめと　心し炑は、わか心也

727 御師説 うらみんはあまのよせ也、われはとかなき間、恨られましき也

729 御師説 心ニ色はなき故也

731 御師説 是は草なるへし、雨のふる時はいとゆふなき也

733 御師説 わたつみとあれにし　海中は波あらき故、如此つゝくる也

735 御師説 思ひ出て　別而おもひ出て也、序哥也、鳴てわたるはその人のあたりへ行ての心也

736 よるか（作）

737 御師説 名哥なれは、作者をあらはす

739 御師説 たなはし

740 御師説 あふみのすけとある故、あふ坂とをけり

743 御師説 かたみかはは、かたみにてなき物をと也

748 御師説 おもひしか　かもか也

749 御師説 わたるとなしはあわぬ心也

750 御師説 わかみをわれと思ふ人ほしき也、同腹中ならはうき事を思ひしらん也

754 御師説 同しやうなる人あれは忘れんトひけ也

756 御師説 人に逢（アヒ）たるニあるましき也、相応（サウヲウ）したる也

761 御師説 われそかすかくは、われかかきつきたる也百羽かき

764 御師説 あさきをいはんとて山の井を取出せり

768 私　けんけい（作）

769 御師説 軒のつまの事也、あそひつまなと云は草にかよふ也

770 御師説 桐の葉もふみわけは、これをとりてか

773 御師説 我ニさゝかにの頼をかけさする也、我をたのまする也

776 御師説 住よしのきしを田にほり、此哥ニ叶へり

780 御師説 とふらひきませとアレトモ、こましき間待ましき也

781 御師説 のとまりは、かみへかへるやうニよめはくる

しからすと也、人のこゝろのうつりも行歟とかへる也、又上ノ五文字へもかへる事ことによりてあり

785 御師説 雨なくてふるとはいかゝなれ共、空はむなしき也、むなしく程を経(フ)るなるへし

790 御師説 やけたるちは、たゝかれたる心也 (詞)

793 御師説 なくはこそは、とき〳〵は音信(インシン)アルト也

795 御師説 青花の事也

799 御師説 人のかるゝトモ、又花の咲ことく〻、時分ヲ以またん也

805 御師説 いとなかるらんは尤也、又いとまなきをも

808 私 いなは (作)

御師説 人〻恋らるゝ事なきに、ひものしらてとくると也

811 御師説 きかく〻はきかう〻也、くはうにかよへは也、絶(タヘ)果たる中也、そちはよく我宿を見知たる間、せめてそれをたにおほしめす事と人のきくに、な被仰そ也

815 御師説 かはうたかひ也

816 御師説 わか身こす涙とうけたり、涙を持て也

818 御師説 はしめはまさこをかそへてなりともなかくと思ひしか、今は忘(ワス)らるゝと也、わするゝは、わすらるゝ也

820 御師説 もみつる

821 御師説 秋風の吹とふきぬるは、人のわれ〻あきたる也

822 御師説 たのみに田をもたせ、みに身をもたせて也、但身の字如何、実の字歟

824 御師説 よそにそきゝしと句をきりて見へし、炁といへは炁なれとも、秋と斗と思ひしと也

827 御師説 なかれては長くなり

828 御師説 名所によする恋なとの心也、夫婦のかたらひは万物生するはしめなれは、恋のはてに此哥を置(ワキ)たる也、大海も山の一滴(イッテキ)よりおこり、夫婦のかたらひより万物おこれは也、二冊の注よし

831 御師説 これは土葬ニしたる人也、それゆへ煙たてといへり、煙を見てなくさめんニ也、一説、おもひ出るおりたく柴の心にかたみニ見度の心も有

833 御師説 うつせみの世は、天地の間の事空虚なれは也

834 御師説 空仮中すかたをあらはすはかりものなれは、仮ニあたれり、中は法生の所をさして也、本来は皆夢也、あらはれたるもの皆夢也

837 御師説 閑院 女房也 (作)

839 御師説 一冊ノ注よし

842 御師説 うき世中をはふかく心を付て見へし、人のしぬるを見て観念也

843 御師説 これはとふらひたる人の涙也、とひたる人の袖か雲やらん、わか袖雨とふると也、とふ人の心也

845 御師説 しつくはしつみうかふ也、又ひたる心も有、花の水にしつみたるやうに、たしかに君をみぬ故也

847 御師説 かうふりたまはるは叙爵の事なるへし

854 御師説 これたかのおほせにて、ちゝのある時によめる哥あらは奉れと被仰たる也 (詞)

857 御師説 いくはく 久しき也 (詞)

858 御師説 二冊ノ注よし

859 御師説 やまひにわつらふは、やまひは躰、わつらふは用也 (詞)

862 御師説 なく涙雨とは愁傷の哥也、輪廻也、是は哀傷の巻軸ニをくは、人間のありさまかりそめの行かひのことくと也、こゝは皆辞世也

863 御師説 雑哥上 主人と云は五躰のうちにても心也、一滴の露にて万物生する故、巻頭に置たる也、わかうへは、身上の事也

864 御師説 序哥也

865 御師説 袂ゆたかには、袂を大キニたゝんを也

866 御師説 限なきは賞翫の心也

869 御師説 袍は、あやをゝる時はそめぬ也、官のあかる程こき紫になる物也、そめぬとてもやかて紫にならんト也 近院

874 御師説 きこえに おろしといひける也 （詞）

876 御師説 すたれに玉をさける故也

877 御師説 かしたる人をうつり香になして也、又蟬のはのうすきよき衣なるべし

880 御師説 ある哉は、待くたひれての哉也

881 御師説 朋友の事也、そちか方〻へありく故、こちへうときと也

882 御師説 貫之哥にはいかゝ、古今のうちにも、よきはよく見、あしきをはあしくみる事、秘説也

885 御師説 みおは、歩兵の歩也 水歩

886 御師説 あやまちは、あしき事有とてうへよりたゝりあるべし 斎院（詞）

888 御師説 前書にあはせては、母は勅かんなれとも斎院はくるしからぬ事也

御師説 かれ山をから山と云心也

御師説 四河入レ海 同 一レ 甘味、唐ニ名川モあり、又にごりたる川モアレトモ、それモ海ヘ入ては同ト也

891 御師説 夜くたちも、夜の更てかたふく心也

892 御師説 おほあらきの 又すみでも

898 御師説 年は敏也、はやき心也、とし の名をとしと付たるは、とまらぬ物ゆへと也、われはつれなくなからへたるなり

901 御師説 おやのいのちをちよもとなけく人の子のためにと云心なり

902 御師説 廻ノ字ノ心也、雪をかへすと云も雪をめくらす心なり

904 御師説 うらの心、橋は人をわたす物なれは也、物の先達ニなるものは年よりてよき故也

910 御師説 わたつうみ

911 御師説 海童子

912 御師説 しは〳〵 数ノ字をも書

913 御師説 あま衣を雨とうけたると云説いかゝ、但あま衣は蓑とつゝけんため也

917 御師説 長居のはまと云あるゆへ歟

921 御師説 波のをすけては、波を緒にして也

923 御師説 詞たらぬ哥也

924 御師説 なれや 捨や也

930 御師説 女房のさふらひ たいはん所ノかみニアリ

（作）

932 御師説 音の聞えぬは絵なれは也

御師説 いねをこくと云説あれともいかゝ

936 御師説 よき事なけれはうけれとも、さありとてもそむかれぬ世ト也、事しあれは先なけかれぬ、あなう世中なれ共、そむかれぬとかへして見へし、心をかへす也、事しあれは、事わさ也

937 御師説 思ひの晴ぬ心也

939 御師説 あはれは、わか心ニあひたる愛する心也

944 御師説 閑ニ居食不レ足、官ニ居危ノ心也

949 御師説 わか心中を卯花のあらはす也

952 御師説 はかはとにこる時は下ノはゝ捨て見へし

957 御師説 ふしも世も竹のえん也

958 御師説 葉は竹にすかりて也

960 御師説 とゝめあへすむへもとしとはいはれけりの類也、うき事をは世と名付たると也、宗砌ノ秘説ニ、るらんはうたかひにも又儀定したるにも用ト也、御師説、私、るらんは、むはるニかよふ故、たゝかなしきかるの心なるへし

961 御師説 真使副使

963 御師説 とけて、官をはかるゝ事也 （詞）

966 御師説 つくはねのは、天子ニよそへて也、つくは山のかけよりもしけしの心也

967 御師説 時めきし人のおとろへたる也、友は時に一度あひしか、我はつゐによろこひもなかりしと也

（詞）

972 御師説 狩の心も少はあるへし

973 御師説 おうな おんなニ同 （左注）

975 御師説 てへのとまりの哥、大和物語にもアリ、今と句をきりてさらにと心得へし

978 御師説 雪のことくつもるノ詞は、むねをか詞也

983 御師説 しか　専也

984 御師説 なれやは捨や也、宿なれはなとの心也

985 御師説 見るなへに　みるから也、見るゆへ也、有待

無待

989 御師説 風はいき也、いきは風にも火にもなる也

990 御師説 有為転変ノ心アリ

991 御師説 わか所はあれたる間、友のもと床敷心也

992 御師説 君子ノ交ハ淡シテ如レ水ノ、小人ノ交リハ甘シテ如レ

酣

993 御師説 はう官　公家よりの遣唐は大使と云、禅家

よりノヲ真使と云、はう官は四人遣唐使ニそふなり

（詞）

994 御師説 おきつしら波は、心のさはく心ニ用歟、左書

にて注しるゝ也

995 御師説 ゆふをつけたるをも、又尾のなかきをゆふの

ことくに見ても可然也

998 御師説 かねてあけんと思ひし哥に又そへて也（詞）

御師説 つかなん　つけよ也

1000 御師説 身をはやは、昔のやうにはやくなしたき也、

はやは早也

「古今　十九　雑躰」　御師説 伊駒山とふひかくま

に、混本也、雑躰は雑の哥ニ交心アリ、長哥は、と

め所ニ五文字あらん所ニ七文字を置也

1001 「かくなわに」　御師説 かくなわ　ねぬなはのたく

ひ也

「人しりぬへみ」　御師説 へし也

「すみそめの」　御師説 すみそめの夕といへり

「せんすへなみに」　御師説 又せんかたなき心にも

用

1002 「よそにも人に」　御師説 よ所にも人にあはんと思

へはにて恋ニ成也

御師説 此哥は神ヨリはしめて、四季をよみ、次第〳〵

をわけて、古今集の部分のことく貫之よめり（詞）

「思みたれて」　御師説 またら　はん〳〵にかすみのたちたる也

「やちくさの」　御師説 やちくさ　かすをあけてさま〳〵の事也

1003 「ほこらしき」　御師説 ほこらしき　心よき也

「とのへもる身の」　御師説 とのへもる身　天子を北面にしてなれはひたりニあたれり

「おさ〳〵しくも」　御師説 おさ〳〵しくも　おとなしくはなき也、下官なれは也、わらは天上して後は外衛に成(ナリ)たれは也、それをこゝのかさねトいへり

「やよけれは」　御師説 いよ〳〵の心もあり、いつゝのむつ　宮つかへする事、卅年と心得て可然也

1006 「われらか中の」　御師説 われらか中　つかへ申人に皆時雨ふるト也、主人はてたる故也　ひと〳〵

「初鴈の」　御師説 又鴈のたつにもえんあり

1007 「旋頭歌」　御師説 旋(マハス)

御師説 われそのそこをのけてもいはるゝを、かしらにならふといへり、それをかへるといへり

「誹諧歌」　御師説 誹(ソシリ)といふは、よき人のうへもあしき人のうへも、先わろロニ云心也、真正(シンシヤウ)に物をいはぬをそしるトいへり、先ひほうして後に、よき事に成ことく、誹諧(ハイカイ)はされ事のやうニいひて、まことの道に引いるゝ也

1014 御師説 勿論(モチロン)七夕ノ事也

1018 御師説 詞は誹諧(ハイカイ)めかねと、躰はいかい也

1024 御師説 たてれをれともは、かくしてをれとも也

1027 御師説 おほしてふは、われをおほしめすといふ也、此哥の心は、中臈(チウラウ)なる者か上臈ニ思ひをかくるをうれはしく思ふことく、又そうつヨリ下らうなる者か思ひかくるを、そうつもうれはしくおもはん也

1028 御師説 ふしのねのならぬは、をよひなき心也、わか心をわれと下知したる也

1030 御師説 いかなり共あはんと思ひ置て也

1033 御師説 雖(ホロ、ウツ)

1034 御師説 なそといひてそと又ある、ふしん、なそわか恋のかひよとそは、鹿の如此なきてとをりたるトはかり見へし

1037 御師説 ことならは 如此ならは、はしめよりいやといはて、玉たすきのことくかけて置ト也

1040 御師説 我はかりを思ふとあらは、さやうニあらんを、大ぬさのことくあちこちへ人の手にふるゝト也

1044 御師説 あくをさせは花おつる也

1045 御師説 いとまなとをやりて、打捨(ステ)たる心也

1047 御師説 一間(ヒトマ)にぬる、よき也、夏は一人ねてもくるしからぬか、冬さゝのさやくにひとりねかねての哥也、やもめの哥なるへし

1050 御師説 みてこそ

1051 御師説 序にては、作(ツクル)、こゝにては、尽(ツクル)也

1052 御師説 よけくは、よくはなき也

1054 御師説 くそ(作)

1056 御師説 つえをつきて山をありくニたとへての恋哥也

1060 御師説 いひしらすは、いはれぬ心也

1062 御師説 わか事なる間、らんトはいかゝ、人の事歟

1065 私 心はきえぬは金剛ノ正躰也

1068 御師説 世上の落着(ラクチヤク)はあさきぬのことくト也、又木のもとことは終行(フハリユク)ノ心もあるへし

「大哥所御哥」 私 オホンウタ

「おほなほひのうた」 御師説 おほなほひを、うやまふ故、御ノ字入たるへし、おほなほひ(火)、神の名と心得たるよし

1075 御師説 霜(シモ)は暁の一天の陽気をうけてふる物也、きねか神徳にてさかへんとこちより云也

1077 私 遼遠(リヤウエン)は、はるかに遠き心也

1079 私 紅塵 あつきちり也

1082 御師説 悠基(ユキ)かたの哥、主紀(スキ)かたの哥とてあり、悠基は左、主紀は右也、大嘗会ノ時、国〻左ニつく右ニつくといひて、其国よりけきやうする也(左注)

1086 私 今上(イマノウヘ)(左注)

1100 御師説 賀茂は山城なれは如此歟

「墨滅哥」　私 以テレ墨ヲ　墨ニテケシタル分ヲコ、ニアツメテ書たる也

1101 御師説 時鳥の下ニアリ、空蟬のカミニアリといへるは、物名の所ニ時鳥とうつせみの哥の間ニ此哥けしてありし也、墨けしは定家の筆也

1105 私 あはたつ　あをくたつ心

付

掲出本文ノ許ニ付シタ（詞）・（作）・（左注）ハ当該歌注ノ詞書・作者・左注ノ注文ヲ示スモノデアル。